

梶子遺跡 23 次

Kajiko Site

浜松市教育委員会

2020年3月

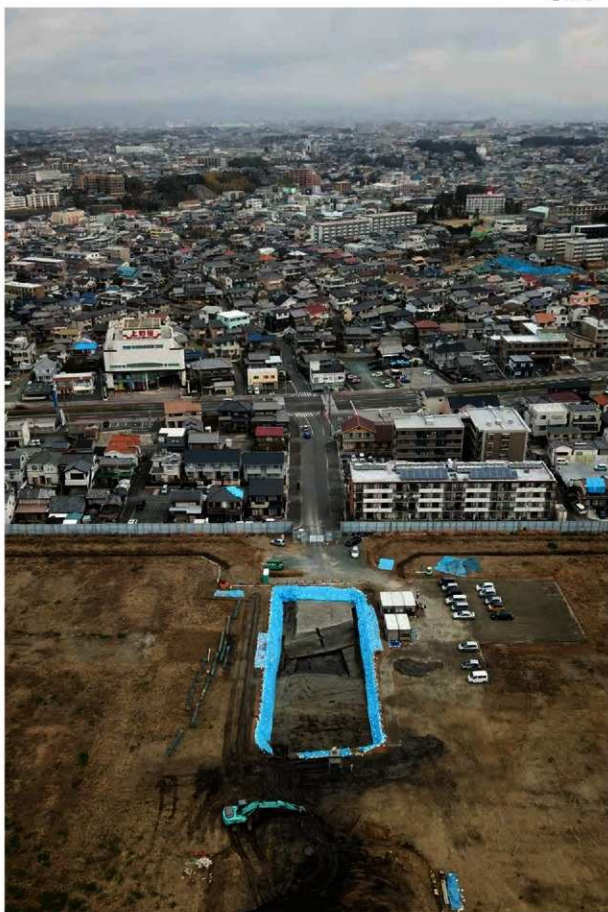
Hamamatsu Municipal Board of Education, March, 2020



梶子遺跡 23 次

2020

浜松市教育委員会



1 梶子遺跡 23 次 調査区遠景（南から）



1 調査区全景（西から）

大溝Ⅲ層完掘



2 大溝東壁（南西から）



表



裏

1 木簡「筆墨納櫃」



5 古代土器



1 弥生時代中期土器



2 弥生時代中期木製品

例 言

- 1 本書は、静岡県浜松市中区西伊場町 40-1 ほかにおける幌子遺跡 23 次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社一条工務店が実施する宅地開発工事に先立ち実施した。現地発掘調査および整理報告作業は、株式会社一条工務店と浜松市との協定により浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、実務は浜松市教育委員会の指示のもと、浜松市から委託を受けた株式会社四門が実施した。調査にかかわる費用は、全額株式会社一条工務店が負担した。
- 3 発掘調査にかかわる面積と期間は、下記の通りである。

調査面積	890 m ² （うち南拡張区 100 m ² ）
委託期間	現地発掘調査 平成 30(2018) 年 11 月 16 日～平成 31(2019) 年 3 月 29 日
	整理報告書作業 令和元年(2019) 6 月 24 日～令和 2(2020) 年 3 月 27 日
- 4 現地調査は、井口智博、鈴木敏則（浜松市文化財課）、整理報告作業は鈴木京太郎（浜松市文化財課）の指示のもと株式会社四門が実務を担当した。体制は下記のとおりである。

発掘調査	代理人兼主任調査員 平井美典
	調査補助員 小口友平
	計 測 員 山中慶太・山崎弘勝
整理作業	代理人兼主任調査員 辻 広志
	調査補助員 小口友平
	計 測 員 樋田泰之・山崎弘勝
- 5 本書の執筆は、鈴木京太郎、鈴木敏則、平井美典、小口友平、樋田泰之が行い、その分担は、目次に示した。編集は樋田が行った。

なお、木簡と墨書土器の赤外線写真等の撮影は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所が行い、釈文と所見については渡邊晃宏副所長に執筆していただいた。また木簡の樹種同定は同埋蔵文化財センター年代学研究室の星野安治室長による。その他、現地写真は平井美典、ドローンによる全景撮影は山中慶太、遺物写真は奥村要二（スタジオタイエイ）が担当した。
- 6 調査にかかわる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

凡 例

- 1 本書で用いる座標値は世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 2 土層・土器の色調は新版『標準土色帖』（農林水産庁農林水産技術会議局監修）に準拠した。
- 3 遺構の略記号は以下の通りとする。
SK：土坑 SD：溝 SP：小穴
- 4 遺構番号は、種別ごとに付した。
- 5 遺物の略記号は以下の通りとする。
W：木製品 S：石製品 M：金属器 B：墨書土器
YC：中期弥生土器 YK：後期弥生土器 K：古代土器（古墳・律令）
- 6 遺物番号は、土器、木製（W 00）、石製品（S 00）、金属器（M 00）ごとに付し、墨書土器については土器の番号と併せて別の通し番号（B 00）を付した。また土器については、大溝出土土器（古代～中世）、大溝下層～北低湿地出土土器（弥生時代後期～古墳時代）、南微高地出土土器（弥生時代～古代）、北低湿地出土土器（弥生時代中期以前）に分けてそれぞれ番号を付した。

目 次

巻頭図版
例言／凡例

第1章 序 論	1
1 調査に至る経緯（鈴木京太郎）	1
2 調査の方法と経過（小口友平）	2
3 地理的・歴史的環境（小口友平）	3
4 梶子遺跡の調査歴（小口友平）	11
5 調査成果の概要（平井美典）	13
第2章 伊場大溝の調査成果（平井美典）	15
1 大溝の基本層位	15
2 大溝Ⅷ層の調査（5～6世紀）	19
3 大溝Ⅶ層の調査（7世紀）	20
4 大溝Ⅴ層の調査（8世紀）	22
5 大溝Ⅳ層の調査（8世紀後葉～10世紀）	22
6 大溝Ⅲ層の調査（12～13世紀）	26
第3章 北低湿地の調査成果（平井美典）	29
1 北低湿地の基本層位	29
2 中世の水田遺構	29
3 D上層の調査	31
4 D下層・D最下層の調査	32
第4章 南微高地の調査成果	38
1 南微高地の基本層位（平井美典）	38
2 南微高地の遺構概要（小口友平）	38
3 弥生時代の遺構（小口友平）	39
4 古代の遺構（小口友平）	43
5 南拉張区の遺構（鈴木敏則）	48
遺構観察表	53
第5章 伊場大溝の出土遺物（鈴木敏則）	55
1 大溝Ⅶ層の出土土器（6世紀末葉～7世紀）	55
2 大溝Ⅴ層の出土土器（8世紀）	58
3 大溝Ⅳ層の出土土器（8世紀後葉～10世紀）	59
4 大溝Ⅲ層の出土土器（鎌倉時代）	61
5 弥生時代後期～古墳時代の土器	61
第6章 南微高地の出土遺物（鈴木敏則）	66
1 弥生時代の土器	66
2 古代の土器	71

第7章	北低湿地の中期弥生土器（鈴木敏則）	73
第8章	出土木製品（鈴木敏則）	89
1	大溝Ⅶ層の出土木製品（7世紀）	89
2	大溝Ⅳ・Ⅴ層の出土木製品（8世紀～9世紀初頭）	94
3	大溝Ⅲ下・Ⅳ上層の出土木製品（10～13世紀）	98
4	D層の出土木製品（弥生時代）	100
第9章	出土石製品・金属器	123
1	出土石製品（樋田泰之）	123
2	出土金属器（鈴木敏則）	126
第10章	出土墨書土器（鈴木敏則）	129
第11章	考 察	132
1	伊場大溝について（平井美典）	132
2	中期弥生土器について（鈴木敏則）	133
3	木製品について（平井美典）	136
4	伊場遺跡群の方形周溝墓（樋田泰之）	138
5	梶子遺跡23次調査出土木簡の概要—文書函とその機能—（渡邊晃宏）	141
第12章	総 括	147
1	伊場大溝（鈴木敏則）	147
2	弥生時代（鈴木敏則）	149
3	今後の課題と展望（鈴木京太郎）	151

出土遺物観察表

図 版

報告書抄録

巻頭図版目次

巻頭図版 1	1	梶子遺跡 23 次 調査区遠景 (南から)
巻頭図版 2	1	調査区全景(西から)
	2	大溝東壁(南西から)
巻頭図版 3	1	木簡「筆墨納帳」
巻頭図版 4	1	墨書土器 B1「主政川前」
	2	墨書土器 B2「山」

巻頭図版 4	3	墨書土器 B3「有」
	4	墨書土器 B5「朋方」
	5	古代土器
巻頭図版 5	1	弥生時代中期土器
	2	弥生時代中期木製品
巻頭図版 6	1	大溝以北の出土遺物垂直分布図

挿 図 目 次

図 1	梶子遺跡の位置	1
図 2	梶子遺跡 23 次調査区グリッド配置図	4
図 3	周辺遺跡分布図	6
図 4	伊場遺跡群全体図	9
図 5	梶子遺跡 23 次調査区位置図	12
図 6	大溝土層図	16
図 7	北低湿地・南微高地土層図	17
	図 6・7 の土層説明	18
図 8	大溝Ⅶ層・南区古代面(飛鳥時代) 全体図	21
図 9	大溝Ⅴ層(奈良時代)全体図	23
図 10	大溝Ⅴ層集石遺構(上)・ Ⅲ層張出遺構 SX 1(下)詳細図	24
図 11	大溝Ⅲ層(鎌倉時代)全体図	27
図 12	北低湿地D層・南微高地弥生時代面 全体図	30
図 13	杭列 SA 1 詳細図	33
図 14	大溝Ⅲ層(上)・Ⅳ層(下) 出土遺物分布図	34
図 15	大溝Ⅴ層(上)・Ⅶ層(下) 出土遺物分布図	35
図 16	北低湿地D層出土遺物分布図	36
図 17	大溝・D層出土遺物の 層別別垂直分布図	37
図 18	南微高地弥生時代遺構図(土坑・溝)	40
図 19	南微高地弥生時代遺構図(溝)	41
図 20	南微高地弥生時代遺構図(土坑)	42
図 21	南微高地古代遺構図(溝)	44
図 22	南微高地古代遺構図(土坑他)	47
図 23	南拉張区遺構全体図・土層柱状図	49
図 24	南拉張区弥生時代遺構図	50
図 25	大溝Ⅶ層出土土器(1)〈須恵器〉	56
図 26	大溝Ⅶ層出土土器(2) (土師器・Ⅶ上層)	57
図 27	大溝Ⅴ・Ⅳ層出土土器 (Ⅴ層・Ⅳ下層・Ⅳ上層)	60
図 28	大溝Ⅳ・Ⅲ層出土土器 (Ⅳ上層・Ⅲ下層・Ⅲ上層)	62
図 29	大溝以北D層出土後期弥生土器 (大溝下・北低湿地)	63
図 30	大溝Ⅶ層・D上層出土土器 (古墳時代前中期)	64
図 31	南微高地出土弥生土器	67
図 32	南拉張区 SD26 出土弥生土器	69
図 33	南拉張区 SD26・28 他出土弥生土器	70
図 34	南微高地古代面出土土器	72

図 35	D層出土中期弥生土器(1)	74
図 36	D層出土中期弥生土器(2)	75
図 37	D層出土中期弥生土器(3)	77
図 38	D層出土中期弥生土器(4)	79
図 39	D層出土中期弥生土器(5)	80
図 40	D層出土中期弥生土器(6)	82
図 41	D層出土中期弥生土器(7)	83
図 42	D層出土中期弥生土器(8)	84
図 43	D層出土中期弥生土器(9)	85
図 44	D層出土中期弥生土器(10)	87
図 45	大溝出土木製品(1)〈Ⅶ層①〉	91
図 46	大溝出土木製品(2)〈Ⅶ層②〉	93
図 47	大溝出土木製品(3)〈Ⅳ・Ⅴ層①〉	95
図 48	大溝出土木製品(4)〈Ⅳ・Ⅴ層②〉	97
図 49	大溝出土木製品(5)〈Ⅲ下・Ⅳ上層〉	99
図 50	D層出土木製品(6)〈鍔〉	101
図 51	D層出土木製品(7)〈鍔・鋤〉	103
図 52	D層出土木製品(8)〈鍔未成品〉	105
図 53	D層出土木製品(9)〈鍔未成品〉	106
図 54	D層出土木製品(10)〈農具類〉	109
図 55	D層出土木製品(11) (タモ・弓・杵・柄)	110
図 56	D層出土木製品(12)〈高杯・槽〉	111
図 57	D層出土木製品(13)〈槽〉	112
図 58	D層出土木製品(14)〈梯子〉	114
図 59	D層出土木製品(15)〈垂木・柱根〉	116
図 60	D層出土木製品(16)〈有孔板〉	117
図 61	D層出土木製品(17) (有孔板・出納板・有頭棒)	119
図 62	D層出土木製品(18)〈有頭棒〉	121
図 63	D層出土木製品(19) (垂木・先端加工棒他)	122
図 64	出土石製品(1)〈石鏃・石斧他〉	125
図 65	出土石製品(2) (砥石・台石・砥石他)	127
図 66	出土金属器 (刀子・鎌・鉄鏃・銅鏃・銅銭)	128
図 67	墨書土器集成図	131
図 68	伊場遺跡群方形周溝墓群全体図	140
図 69-1	文書面の長さ・幅の関係(外寸)	143
図 69-2	文書面の長さ・幅の関係(内法)	143
図 70	梶子 23 次調査の成果一覧図 1 (伊場大溝出土遺物)	148
図 71	梶子 23 次調査の成果一覧図 2 (弥生時代出土遺物)	150

挿 表 目 次

表 1	梶子遺跡発掘調査履歴一覧表	11	表 5	出土木製品の構成	137
表 2	基本層位対比表	15	表 6	文書函の出土事例 (墨書の有無・身・蓋別の順)	142
表 3	遺構観察表(1)	53			
表 4	遺構観察表(2)	54			

図 版 目 次

図版 1	1	大溝Ⅶ層 完掘状況(北東から)	図版 8	3	G 2 坑 完掘状況(南から)
	2	大溝Ⅶ層 東壁土層断面(北西から)		4	G 3 坑 完掘状況(西から)
図版 2	1	Ⅶ層 木製壺鍔出土状況 (北東から)(W2)	図版 9	1	南辻張区 SD26 後期弥生土器検出状況(北から)
	2	Ⅶ層 横櫓出土状況(北東から)(W1)		2	南辻張区 SD26 後期弥生土器検出状況(西から)
	3	Ⅶ層 銅鍔出土状況(北から)(M5)	図版 10	1	木簡(M19)
	4	大溝Ⅴ層 完掘状況(北東から)		2	木簡(M19) 墨書部赤外線写真
図版 3	1	V層 集石遺構検出状況(南西から)		3	墨書土器(73) 墨書部赤外線写真
	2	V層 墨書土器「主政川南」出土状況 (南から)(73)	図版 11		墨書土器(墨書部分)
	3	Ⅳ層 木簡出土状況(南から)(W19)	図版 12		古代土器(1)
	4	Ⅳ層 墨書土器「山」出土状況 (南西から)(85)	図版 13		古代土器(2)
	5	Ⅳ層 木簡出土状況(西から)(W19)	図版 14		古代土器(3)
	6	Ⅳ層 刀子出土状況(北から)(M1)	図版 15		古代土器(4)
	7	Ⅳ層 墨書土器「朋万」出土状況 (西から)(95)	図版 16		中期弥生土器(1)
図版 4	1	大溝Ⅲ層 完掘状況(北から)	図版 17		中期弥生土器(2)
	2	大溝Ⅲ層完掘状況(北東から)	図版 18		SD26 出土後期弥生土器(1)
図版 5	1	大溝Ⅲ層 張出遺構検出状況 (南東から)	図版 19		SD26 出土後期弥生土器(2)
	2	D下層完掘状況(南から)	図版 20		木製品(1)
図版 6	1	東壁北半土層断面(南西から)	図版 21		木製品(2)
	2	D下層 中期弥生土器高坏出土状況 (北から)(23)	図版 22		木製品(3)
	3	D下層 木製高杯出土状況 (北から)(W80)	図版 23		木製品(4)
	4	D下層 又鍔未成品出土状況 (南から)(W57)	図版 24		木製品(5)
	5	D下層 木鍔出土状況(東から)(W64)	図版 25		木製品(6)
図版 7	1	南微高地 古代面完掘状況(南東から)	図版 26		木製品(7)
	2	南微高地 弥生面完掘状況(南から)	図版 27		木製品(8)
図版 8	1	南辻張区 完掘状況(北東から)	図版 28		木製品(9)
	2	G 1 坑 完掘状況(南から)	図版 29		木製品(10)
			図版 30		木製品(11)
			図版 31		木製品(12)
			図版 32		木製品(13)
			図版 33		石製品
			図版 34		石製品・金属器

第1章 序 論

1 調査に至る経緯

梶子遺跡は、伊場遺跡・城山遺跡・鳥居松遺跡・梶子北遺跡・中村遺跡・三永遺跡などとともに伊場遺跡群を構成しており、弥生時代及び奈良・平安時代を主体とする遺跡である。昭和37(1962)年に旧国鉄浜松工場内の工事現場から出土した弥生土器の破片が、浜松市郷土博物館（現浜松市博物館）に持ち込まれたことによって、遺跡の存在が明らかとなった。遺跡範囲の大半が旧国鉄浜松工場（現東海旅客鉄道株式会社浜松工場）の敷地内に含まれているため、かつては国鉄浜松工場内遺跡と呼称されていたが、平成2(1990)年の8次調査以降は周辺の小字名から梶子遺跡

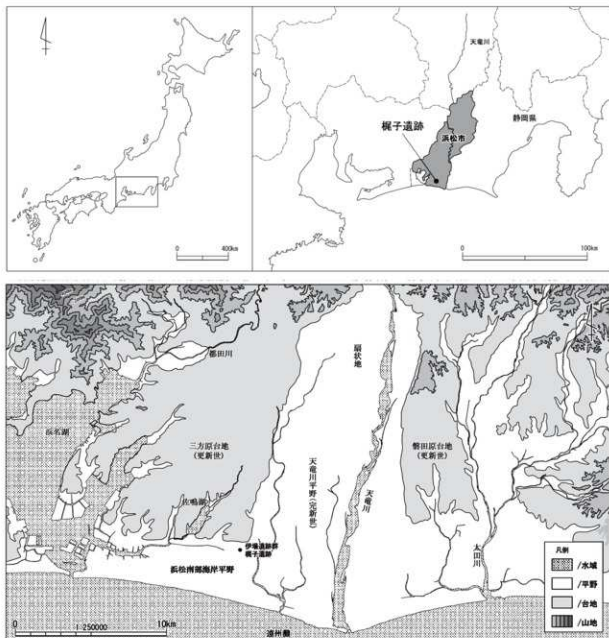


図1 梶子遺跡の位置

と改称して現在に至っている。

周辺の土地は、近代以降に水田や低湿地へ厚く盛土造成を行っているため、遺跡の詳細については不明な点が多い。しかし、1970年代以降に旧国鉄浜松工場や周辺道路等において本格的な発掘調査が行われるようになると、東西1km近くにも及ぶ広大な居住域をもつ弥生時代後期の環濠集落の存在が確認されるとともに、伊場大溝と呼称されている自然流路跡からは、木簡や墨書土器、陶硯などの古代の文字に関する資料や、銅印、祭祀具、機織具などの遺物が多数出土し、河川沿いに広がる古代数郡部家の関連施設の存在が想定されるなど、遺跡の様相が次第に明らかとなってきた。

今回の調査対象地は、東海旅客鉄道株式会社浜松工場の西側に隣接する107,000㎡の広大な土地で、梶子遺跡の西端部分にあたる。この土地は、昭和10(1935)年頃に鐘ヶ淵紡績浜松工場の用地として造成されるが工場建設には至らず、昭和23(1948)年に煙草専売局(後に日本専売公社、現日本たばこ産業株式会社)が中区浅田町にあった浜松工場を移転・建設し、平成27(2015)年まで操業していた土地である。

平成28(2016)年、この土地において煙草工場の解体撤去と跡地再利用の計画が浮上したため、日本たばこ産業株式会社(JT)と浜松市教育委員会(浜松市市民部文化財課が補助執行)との間で埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、同年6月から11月にかけて系統的に試掘・確認調査を実施した。調査は工場の解体工事と併行しながら調査溝を縦横に設定して行った。調査面積の合計は2,600㎡である。この試掘・確認調査の結果、対象地の東側から北側にかけて、伊場大溝の上流部と想定される古代の遺物を含んだ自然流路跡や、弥生時代の土坑等をはじめとする遺構が確認され、梶子遺跡の範囲が西に大きく広がることが判明した(浜松市教委2018)。

その後の平成30(2018)年には、この土地が再生可能エネルギーを活用した住宅の建設等が行われる「スマートタウン」として整備されることが決まり、土地を取得した事業主体者である株式会社一条工務店と浜松市教育委員会の間で、試掘・確認調査の成果を基に埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。その結果、公衆用道路として整備・移管されることが決定している区域のうち、伊場大溝が検出されて遺跡の保護を図ることが困難な箇所について、事業主体者側が費用を負担して本発掘調査を実施することとなった。

本発掘調査は、浜松市教育委員会(浜松市市民部文化財課)が調査主体となり、現地における実務は株式会社四門に委託した。現地調査の期間は、平成30(2018)年11月26日～平成31(2019)年3月29日である。なお、調査の途中で遺跡範囲が想定より南へ広がっている可能性が生じたため、南北方向のトレンチによる拡張区を設定した。

2 調査の方法と経過

調査地区の設定 今回の調査地は、JT浜松工場跡地内の北側中央部に位置しており、周知の埋蔵文化財包蔵地となっている箇所であるが公道に移管される部分にあたる。調査面積は790㎡であるが、南北拡張区を含めた総面積は890㎡である。

グリッドの設定 グリッドは、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅷ系に準拠し、10m間隔のグリッドを設定した。原点はグリッド北西隅(X=-144,040、Y=-72,860)とし、東西方向をアルファベット、南北方向を算用数字の表記として、各々を組み合わせと呼称するようにした(図2)。

また、自然の河川跡である伊場大溝に対しては、東西軸(X=-144,070)の直線上と大溝の中央

南北セクションラインを境界として1区～4区の調査区域を設定した(図2下)。

表土の除去 調査区の東西辺に間隔3m、深さ5mの排水用ウェルポイントを設置し、さらに調査区外周に排水溝を掘ることで、地下水と雨水による浸水の対策を行った。用地は工場が立地していたため、山砂と礫を主体とする盛土による造成が行われていた。その直下には旧表土があり、バックフォアを用いてそれらの除去作業を行った。バックフォアのバケットには平爪を装着して、調査員立会いのもと、表土・盛土を慎重に掘削した。調査で発生した排土は、バックフォアのほか大型ダンプで支障とならない場所に運搬した。

遺構の確認・精査 表土除去後は、人力にて遺物包含層や大溝の掘削、遺構検出を行った。掘削には剣形スコップと四本鋤、遺構検出には鋤簾を用いた。検出した遺構の掘削には移植ゴテと竹ベラを用いて、慎重に掘り下げた。主要な遺構は半載して掘り、覆土堆積状況を把握した後、掘り上げた。

図面の作成 遺構平面図は、基準点を起点として、トータルステーションを用いて作成した。調査区壁面の土層図や主要な遺構図は、手実測により作成した。遺物の出土状態については、必要に応じて平面と断面を図化した。

写真撮影 写真撮影には主に、6×7中判カメラを用い、35mm判カメラとともに、フィルムはカラーリバーサルを使用した。また、一眼レフデジタルカメラでの撮影(フルサイズ)も行った。作業工程の撮影に関しては、コンパクトデジタルカメラを使用した。高所からの撮影には、ローリングタワーとドローンを併用して行った。

整理作業 出土遺物の洗浄・注記などの基礎整理作業は、現地調査の期間中に現場のプレハブ事務所において実施した。本格的な整理作業と報告書作成は、2019年度の契約締結後、7月から2020年3月まで、株式会社四門の清須支店において行った。出土遺物は接合、復元、実測、トレースを行い、遺構図面と記録写真は編集を行った後、報告書用の原稿執筆を行った。

調査参加者

現地調査	伊藤均・石岡幸・影山文子・小林俊海・佐藤政治・澤木延文・鈴木育代・鈴木清・鈴木義則・須部公夫・竹内誠一・辻健治・藤原豊廣・松本兼生・山口義信
整理作業	古川登・佐々木英二(株式会社四門社員)・内山敦世・北野恵子・熊谷洋子・中村玲子・水島絵理・峯野洋子・森下朋子・長谷川房枝

3 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

静岡県西部に位置する浜松市は、おおよそ北は赤石山脈、南は遠州灘、東は天竜川、西は浜名湖に囲まれている。天竜川は長野県の諏訪湖を源流としており、赤石山脈の南縁から扇状地を形成している。扇状地の西には三方原台地、東には南北に舌状に延びる磐田原台地が広がる。梶子遺跡は、三方原台地の南縁に形成されている浜松南部海岸平野の北東部に位置する。

浜松南部海岸平野は東西約7km、南北約2～3kmの沿岸低地であり、海岸線に平行する8列の砂堤列が段階を追って形成されている。最も内陸側に位置する第1砂堤列は、約8,000～7,000年前に形成された三方原台地南端の海蝕崖の砂洲であったとされる。第2・第3砂堤列は、南に後退していく海岸線を追う形で、約5,000年前に形成されたと考えられる。砂堤列間の湿地には、植物遺

2 調査の方法と経過

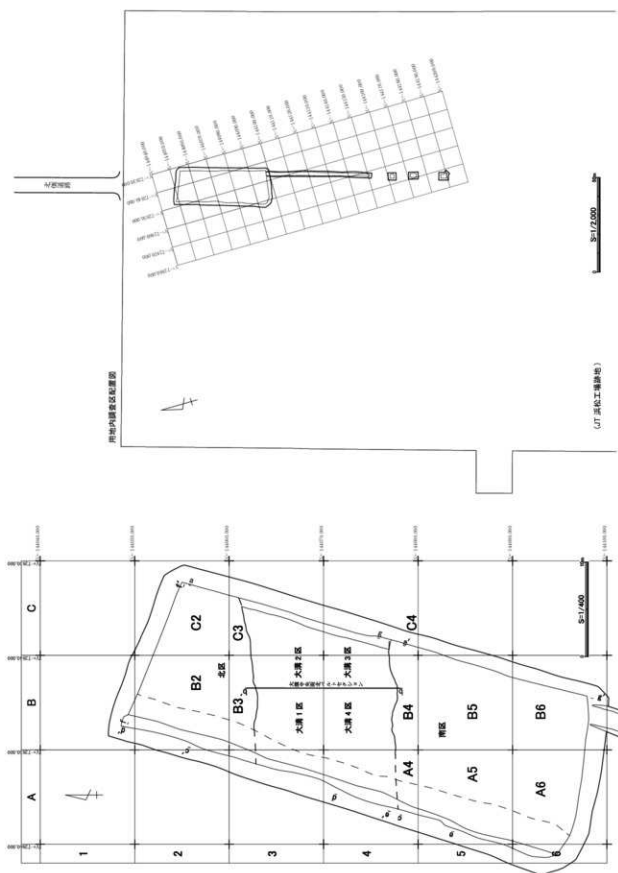


図2 梶子遺跡23次調査区グリッド配置図

体による有機質土といった低湿地性堆積物が顕著に認められる。

砂堤列は、古代～近世の東海道が第3砂浜堤列上、雄踏街道が第1砂堤列上、掛塚街道が第4砂堤上に延びており、陸上交通路としての役割も果たしていた。梶子遺跡は第1・第2砂堤列間の湿地部に位置しており、第1砂堤列上に位置する中村遺跡や三永遺跡、第2砂浜堤列上に位置する城山遺跡や伊場遺跡などとともに伊場遺跡群を形成している。

第1・第2砂堤列間の湿地には天竜川からの土砂の流入により、微高地が形成されており、そこに梶子遺跡と梶子北遺跡が立地する。梶子遺跡では弥生時代中期後半中葉から後期にかけての遺構が確認されているが、微高地上の環濠で囲まれた居住域での遺構密度は高いものの、環濠外では遺構は極端に希薄となっている。

しかし、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけては、洪水による粘土層が厚く堆積しており、微高地に広がっていた生活域は、水没することが頻発に起きたと考えられる。以降、古墳時代中期になって再び生活可能な環境となり、伊場地区では、飛鳥時代から平安時代前葉まで敷智郡家園連施設が広く営まれる。飛鳥時代以降は、土地の利用が活発に行われるものの、平安時代中頃に至ると郡家に関わる遺構だけでなく、一般の人々の活動の痕跡も、ほとんど見られなくなる。周辺の低地部においては、再び湿地化が進んだものと考えられている。その後は、近世に至るまで一帯は水田や蓮池になる。

(2) 歴史的環境

縄文時代 梶子遺跡が立地する浜松南部海岸平野において、縄文時代前期末から中期初頭にかけては、中村遺跡では竪穴状遺構と礫群、焼土面が、梶子北遺跡では礫群と焼土面が検出された。また第3砂堤列の若林町村西遺跡においても当該期の遺物が確認されている。

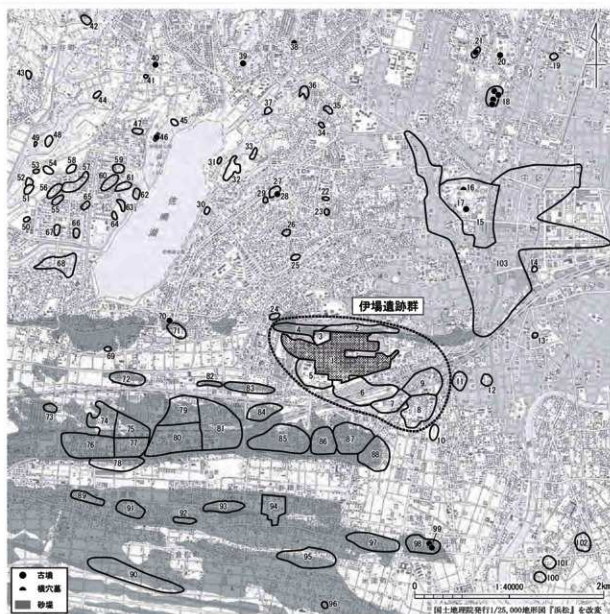
中期になると西方の高塚遺跡においても、遺物が確認される。後晩期になると大規模な集落遺跡が、三方原台地の縁辺部に立地するようになる。この時期の遺跡としては国指定史跡になっている蛸塚遺跡のほか、前山遺跡、長者平遺跡、欠下平遺跡、築地遺跡など中核的な遺跡が知られている。なお、第1・第2砂堤列間湿地にある梶子遺跡と梶子北遺跡でも、これまでの調査で後晩期の土器片が出土している。今回の23次調査でも、土器片は確認されたが、低地部での縄文時代の遺構はほとんど発見されていない。

弥生時代 伊勢湾沿岸まで、遠賀川式土器と呼ばれる弥生時代前期の土器が主体的に分布するが、それ以東では縄文土器から系譜を引く条痕土器が分布する。浜松市内でも天竜川西岸域の半田山遺跡と下流遺跡、都田川流域の沢上遺跡と前平遺跡から集落跡や墓域が発見され、条痕土器やそれに伴う石器が多く出土した。

弥生時代前期から中期前葉にかけて、海岸低地にある梶子北遺跡や角江遺跡においても、条痕土器などの遺物が散見され、土坑や溝などの遺構も検出されているものの、住居跡等は確認されていない。中期中葉になると梶子遺跡6次調査区、梶子北遺跡（梶子北大溝）、角江遺跡からは木製農耕具類も多数出土していることから、市内平野部での本格的な水田稲作は、急速に広まったと考えられる。

この時期から後葉にかけての伊場遺跡群では、中村遺跡、三永遺跡において東西約800mに及ぶ大規模な方形周溝墓群が確認されている。梶子遺跡や中村遺跡では、中期後葉の環濠が存在し、多数の遺物が出土していることから、当期には安定した集落が営まれていたと考えられる。

弥生時代後期になると、梶子遺跡や梶子北遺跡において砂堤列間の湿地で水田農耕を行った痕跡



伊場遺跡群		26 成瀬畑1遺跡	中世	52 苗引目遺跡	古代	78 高塚町村中遺跡	古墳～古代
1 梶子遺跡	弥生(中)～近世	27 梶塚遺跡	縄文	53 苗引1遺跡	古代	79 日輪遺跡	古墳～古代
2 中村遺跡	縄文(前)～中世	28 梶塚古墳群	古墳	54 苗引IV遺跡	古代	80 湯島町村中遺跡	古墳～古代
3 梶子北遺跡	縄文(前)～中世	29 梶塚西平遺跡	縄文	55 村前山遺跡	古墳(後)・平安(前)	81 湯島遺跡	古墳～古代
4 三本遺跡	弥生(中)～中世	30 赤宮神遺跡	奈良	56 村前山遺跡	平安(前)	82 湯島町村北遺跡	古代
5 城山遺跡	縄文(前)～中世	31 小倉遺跡	古代	57 前山遺跡	縄文(後)～鎌倉	83 井村遺跡	古墳(後)・奈良
6 伊場遺跡	弥生(後)～平安	32 又七遺跡	古墳～奈良	58 神ヶ谷町向山遺跡	縄文	84 東野宮遺跡	古墳～中世
7 九反田遺跡	古墳～中世	33 新古遺跡	古墳～中世	59 明善遺跡	縄文(中)	85 若林町村西遺跡	縄文・古代・中世
8 島松松遺跡	弥生(後)～平安	34 向イ平遺跡	縄文	60 作原遺跡	古墳(後)	86 東若林遺跡	古墳(後)～鎌倉
9 榎東遺跡	弥生(後)	35 龍門池遺跡	縄文	61 前田IV・V・VI遺跡	古墳(後)	87 村裏遺跡	弥生・古墳(後)～中世
10 神田遺跡	奈良	36 富坂地蔵平遺跡	古墳	62 前田VII遺跡	古墳(後)・鎌倉	88 村東遺跡	古墳(後)～中世
11 高野遺跡	古代・中世	37 柳井遺跡	古墳・中世	63 前田I・II遺跡	古墳(後)・鎌倉	89 八幡山遺跡	中世
12 浅間遺跡	平安	38 東塚遺跡	古墳	64 前田III遺跡	古墳(後)	90 小わら家遺跡	古墳～中世
13 堀之内遺跡	奈良	39 砂塚古墳	古墳	65 大平上1遺跡	縄文・古墳(後)・鎌倉	91 小沢町村中遺跡	奈良～中世
14 堀町遺跡	弥生(後)	40 狐塚古墳	古墳	66 大平上2遺跡	古墳(後)・鎌倉	92 小沢町村中東遺跡	奈良～中世
15 飯松城跡	中世～近世	41 東平遺跡	縄文	67 大平北遺跡	中世	93 新藤町村中遺跡	奈良・中世
16 作左山横穴	古墳	42 神ヶ谷町山的神遺跡	縄文(後)	68 大平遺跡	古墳(前・後)	94 旧大庭院境内遺跡	中世
17 飯松城内古墳	古墳	43 神ヶ谷町中平遺跡	奈良	69 入野町村前遺跡	中世	95 堤町村東遺跡	古墳・奈良・中世
18 鬼馬野古墳群	古墳～奈良	44 神ヶ谷町東遺跡	縄文	70 入野古墳	古墳(中)	96 末津町村中遺跡	奈良・中世
19 矢野東遺跡	古墳	45 堤川山遺跡	縄文	71 八反田遺跡	古墳・古代	97 新藤町村東遺跡	古墳～中世
20 白山神社古墳	古墳	46 堤川山古墳群	古墳	72 島崎遺跡	古墳	98 田尻遺跡	古墳・奈良・中世
21 住吉古墳群	古墳	47 堤川遺跡	縄文・古墳	73 大島遺跡	古代	99 飯民古墳群	古墳(後)
22 歌沼遺跡	縄文	48 行平遺跡	縄文	74 高塚遺跡	縄文・奈良～中世	100 飯民貝塚	中世
23 東平遺跡	弥生(後)	49 大野遺跡	弥生	75 八丁遺跡	奈良～中世	101 飯民貝塚	中世
24 下山田遺跡	弥生(中)～中世	50 天の峰遺跡	弥生(後)・鎌倉	76 高塚町村西遺跡	奈良～中世	102 飯民貝塚	中世
25 成瀬畑2遺跡	中世	51 苗引目遺跡	弥生	77 高塚町村東遺跡	奈良～中世	103 飯民城下町遺跡	奈良～近世

図3 周辺遺跡分布図

が確認される。伊場遺跡においては、後期前半の三重に環濠を巡らす集落跡が検出され、北側に隣接する梶子遺跡では、環濠の内側に多数の掘立柱建物配する空間が検出された（梶子遺跡7次調査区）。梶子遺跡には、広大な居住域が展開していたのである。この時期は、弥生時代における伊場遺跡群の範囲が最も広がった時期とされる。城山遺跡5次調査では、弥生時代後期前半と考えられるSX01から、碧玉製管玉・ガラス製管玉・ガラス小玉が合計219点以上も出土していることから、弥生時代後期には有力な指導者が現れたと考えられる。

鳥居松遺跡でも伊場遺跡や梶子遺跡からやや遅れて環濠集落が作られており、家形土器を含む多数の土器が出土している。後期後半になると梶子遺跡だけでなく伊場遺跡群全体で遺物量が極端に少なくなり、集落は厚い粘土層に覆われることが過去の発掘調査で明らかになっている。自然の環境変化に伴い、この地域での居住が困難になったと考えられる。

弥生時代後期において浜名湖北東部の都田川流域では、近畿式銅鐸・三遠式銅鐸が集中的に出土している。浜松南部海岸平野においては梶子遺跡7次調査区、天竜川平野においてはツツミドリ遺跡、木船遺跡、松東遺跡で銅鐸が出土している。このうち梶子遺跡と松東遺跡から出土した銅鐸は、近畿式銅鐸の破片である。残る2遺跡で型式が分かる3例は、いずれも三遠式銅鐸である。以上から浜松南部海岸低地を含む天竜川以西では、銅鐸祭祀が盛んに行われていたことが推察できる。

古墳時代 古墳時代前期においては、弥生時代後期後半から続く土砂堆積のため、梶子遺跡周辺は居住が困難な環境であった。梶子遺跡10次3調査区では古墳時代前期の水田が検出されているが、部分的な調査に留まった。

周辺地域では、佐鳴湖西岸の三方原台地上に立地する大平遺跡において、複数の方形区画内に大型竪穴住居や掘立柱建物が確認されており、前期前半の首長層の居住域や祭殿域、倉庫群と考えられている。また、天竜川西岸の恒武西宮遺跡においても古式土師器を多量に伴う遺構や方墳が発見されており、周辺には当期の大規模集落の存在が推定される。

中期になると梶子遺跡・城山遺跡と伊場遺跡の中に、伊場大溝（自然河川）が形成されることで、地表の乾燥化が進み、再び竪穴住居が現れるようになる。後期には中村遺跡や三永遺跡でも集落が確認されるようになり、住居跡の軒数も増加する。伊場大溝流域の南東部にあたる鳥居松遺跡では伊場大溝の河床部から6世紀後半の金銀装束頭大刀ほか耳環や玉類が出土した。特に金銀装束頭大刀は、製作技法から朝鮮半島に源流を求めることができる貴重な資料である。当時の伊場遺跡群は、浜松南部海岸平野の中心的な集落群であり、有力豪族の居住地であった可能性が高い。

古墳は、中期に入って佐鳴湖周辺の台地上に入野古墳、狐塚古墳、妙法塚古墳が築かれる。入野古墳は直径44m、高さ5.9mの大型円墳であり、天竜川以西では千人塚古墳に次ぐ規模である。

後期になると古墳の規模は小型化し、ほとんど円墳となるが、数は爆発的に増え群集墳を構成するようになる。三方原台地東縁には群集墳が集中しており、半田山古墳群、地藏平古墳群、瓦屋西古墳群などは、大規模でしかも密集型の群集墳である。佐鳴湖周辺では規塚古墳群や富塚地蔵平遺跡、佐鳴湖西岸地区の古墳群、中平古墳群が存在するが、いずれも小規模な群集墳である。また、南部海岸平野でも第4砂堤列上に田尻古墳群が確認されているが、それらの古墳群は、周辺集落の規模に反して、存在数が少ないとの指摘がある。この地域の集落では近隣に古墳を築かず、北約6kmにある根本山を墓域としたとする見解がある（向坂1983）。

奈良・平安時代 7世紀以降の律令体制における国郡里制の実施で、現在の浜松市内には敷智郡（測評）、引佐郡、浜名郡、龜玉郡、長田郡（長上郡、長下郡に分割）、周智郡（一部）、山香郡（一

部)が置かれる。過去の調査から敷智郡家は伊場遺跡群、引佐郡家は井通遺跡、浜名郡家は横枕Ⅱ遺跡、長上郡家は木船庵寺周辺の永田遺跡群と推定されている。梶子遺跡9次B区・11次調査区や城山遺跡5次調査区では、7世紀前半の掘立柱建物が検出されており、この時期の集落の中心は城山遺跡周辺にあったと推定されている。

第3砂堤列上の若林町村西遺跡や高塚遺跡、高塚町村西遺跡、高塚町村東遺跡、第4砂堤列上の小沢渡町村中遺跡、小沢渡町村東遺跡、新橋町村中遺跡、浜名湖東岸砂丘上の大山Ⅱ遺跡、北浦遺跡、浜名湖南岸の舞阪町天白遺跡など周辺地域でも7～8世紀の集落遺跡が多く確認されている。

7世紀後半から9世紀の伊場遺跡群においては伊場大溝を中心に木簡や墨書土器といった貴重な文字資料が大量に発見される。7世紀に関しては「潤評」や紀年銘の「乙卯年」と記された木簡が確認されていることから、伊場遺跡群内には潤評家の存在が考えられる。8世紀における敷智郡家の中枢部は城山遺跡に存在したと推定されており、削屑木簡のほか金銅製鈐帯金具や唐三彩陶枕が出土している。官職名を表すものとして梶子北遺跡からは郡の長官を示す「大領」と記された木簡が、伊場遺跡からは「大主帳」、「郡鑑取」と記された墨書土器が出土している。また軍団に関わるものとして城山遺跡からは「少殿殿」、伊場遺跡からは「竹田二百長」と記された墨書土器が出土しており、伊場遺跡群には併設された軍団が駐留していたと考えられる。

交通に関わる文字資料としては「栗原駅」、「駅長宅」、「馬長」と記された墨書土器や木簡が出土しており、砂堤列上を東西に古代東海道が通っており、延喜式に記載された栗原駅も伊場遺跡群内に存在していたと推定される。また、浜松の地名の語源ともなった「濱津」の文字が認められる木簡が伊場遺跡から出土しており、伊場遺跡周辺には湊としての津の存在も十分に考えられる。鳥居松遺跡5次調査においては杭を打ち込んで作られたテラス状護岸施設が検出され、これが船着場であった可能性が考えられている。鳥居松遺跡の少し南には港湾施設の存在が推定される。

9世紀には梶子北遺跡において、北西に角を有するL字形に配置された14棟の掘立柱建物群が出現する。最大で一辺10mを超す大型の掘立柱建物跡が検出されており、しかも規則的に配置されていることから、当時の郡庁もしくは館舎など官営施設の存在が考えられている。

城山遺跡では10世紀の掘立柱建物が存在するものの、10世紀後半以降は伊場遺跡群内において遺構・遺物がほとんど確認できなくなる。おそらく周辺地域の湿地化による自然環境の変化や、荘園経営が本格化したことによる官衙機能の衰退といった社会的変化に起因すると考えられる。

平安時代中期になると浜松周辺には浜松荘、川勾荘、蒲御厨、市野荘、池田荘、羽鳥荘、美濃御厨、村柳荘、刑部御厨、都田御厨、浜名御厨、尾奈御厨などの荘園が出現した。伊場遺跡群周辺は皇室領であった浜松荘に含まれる。浜松荘は東端を馬込川とし、西端を現在の浜松市西区雄略町に至る広大な範囲に及んだと推定される。

中世以降 中世の伊場遺跡群において、第1砂堤列上にある中村遺跡や三永遺跡で鎌倉時代以降の建物柱穴群、堀や溝、井戸等が検出され、遺物も豊富に発見された。戦国期の遺構としては城山遺跡や梶子遺跡11次調査において幅5～7m程の大型区画溝が検出されており、居館の周囲に巡らされた堀であったと推定される。堀の全域から内耳鍋やかかわけ、陶磁器、漆塗りの椀などが多数出土している。堀は地形に合わせて、砂堤の堀に掘られていたもので、城山遺跡5次調査で推定したような方形の堀とはならない。城山遺跡ではこの堀の廃絶後は、堀の外側に広がる低地を近世まで水田や蓮池として利用されるにとどまる。

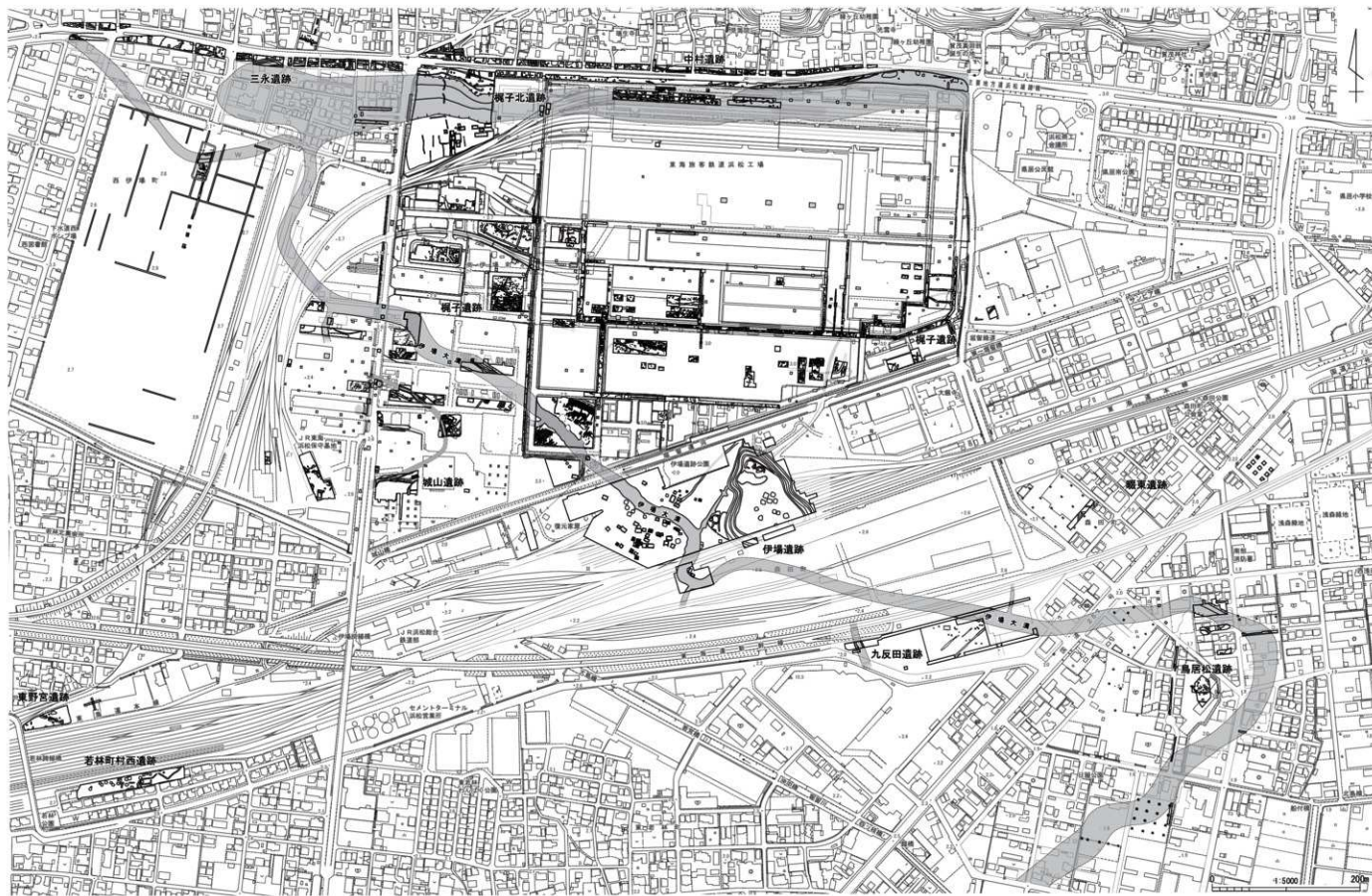


図4 伊場遺跡群全体図

4 梶子遺跡の調査歴

梶子遺跡は伊場遺跡群を構成する遺跡の一つであり、北側には三永遺跡・中村遺跡・梶子北遺跡、西側には城山遺跡、南側には伊場遺跡が広がる。かつては各々が個別の遺跡として認識されていたが、その密接な関係が明らかにされ、現在は伊場遺跡群として東西2.3km、南北1.2kmの複合遺跡とされている。

梶子遺跡の発見は、国鉄浜松工場内の工事現場から弥生土器が出土して浜松市博物館に持ち込まれたのが発端となった。1976年には浜松市教育委員会が主体で1次調査が行われた。当初は国鉄浜松工場内遺跡と呼称されていたが、国鉄民営化に伴い遺跡西部の小字名から梶子遺跡と呼称されるようになった。

これまでに行われた梶子遺跡の調査成果として、まず6次調査の出土遺物があげられる。弥生時代中期中葉に遡る土器群と木製農具の出土によって西遠江における水田稲作の定着期の様相が明らかになった。その後、梶子北遺跡でも、弥生時代中期中葉から後葉の木製農具等が出土し、三永中村遺跡ではこの時期の大規模な方形周溝墓群も調査された。

続く弥生時代後期前半においては、東西550m、南北100mに及ぶ環濠集落が確認されている。環濠内には7次調査で築行1間、桁行3間の規格に則った掘立柱建物跡群が検出されており、共同体管理の高床式倉庫群と考えられている。また、8次・17次・18次の調査では、この時期の方形周溝墓が複数確認されている。

7次調査では後期の土坑から銅鐸と銅鐸、15次調査では後期の環濠から絵画土器が出土している。銅鐸は近畿式銅鐸の飾耳片であり、絵画土器は鹿が線刻で描かれている。これらは当該期の集落における祭祀儀礼を知る上で重要な資料である。

表1 梶子遺跡発掘調査履歴一覧表

遺跡調査名	調査期間	調査面積	調査主体	主な時代	報告書	発行年
梶子1次	1976.12	40㎡	浜松市教育委員会	弥生	国鉄浜松工場内発掘調査略報（非公式刊行物）	1976
梶子2次	1977.1～1977.5	200㎡	浜松市教育委員会	弥生	国鉄浜松工場内発掘調査略報Ⅱ	1977.6
梶子3次	1978.2～1978.3	288㎡	浜松市教育委員会	弥生・古墳	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅲ	1978.3
梶子4次	1978.12～1979.2	520㎡	浜松市教育委員会	弥生	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅳ	1979.9
梶子5次	1979.10～1979.12	360㎡	浜松市遺跡調査会	弥生	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査報告書Ⅴ	1980.1
梶子6次	1982.5～1982.12	1,747㎡	浜松市遺跡調査会	弥生～平安	国鉄浜松工場内（梶子）遺跡Ⅵ次発掘調査概報	1983.5
梶子7次	1982.10～1983.3	1,401㎡	浜松市遺跡調査会	弥生～平安	国鉄浜松工場内遺跡Ⅶ次発掘調査概報	1983.12
梶子1983	1983.11～1984.2	233㎡	浜松市遺跡調査会	弥生	梶子遺跡調査概要	1984.3
梶子8次	1990.8～1990.12	2,493㎡	（財）浜松市文化協会	弥生・奈良	梶子遺跡Ⅷ	1991.12
梶子9次	1992.7～1992.12	2,000㎡	（財）浜松市文化協会	弥生～平安・戦国	梶子遺跡Ⅸ	1994.3
	1993.3～1993.4	40㎡	浜松市教育委員会		梶子遺跡Ⅸ付録	1994.5
梶子1994	1994.12～1995.1	31㎡	浜松市教育委員会	弥生～奈良	梶子遺跡（その2）	1997.5
梶子10次	2001.1～2002.8	2,252㎡	（財）浜松市文化協会	弥生～平安	梶子遺跡Ⅹ	2004.2
梶子11次	2008.6～2008.11	1,195㎡	（財）浜松市文化振興財団	弥生～戦国	梶子遺跡11次	2010.3
梶子12次	2008.5	188㎡	（財）浜松市文化振興財団	弥生～鎌倉	梶子遺跡12次	2008.9
梶子13次	2010.5～2010.11	1,606㎡	（財）浜松市文化振興財団	弥生～戦国	梶子遺跡13次	2012.3
梶子14次	2011.6～2012.3	1,871㎡	浜松市教育委員会	弥生～戦国	梶子遺跡14次	2013.3
梶子15次	2012.4～2013.3	4,399㎡	浜松市教育委員会	弥生～戦国	梶子遺跡15次	2014.3
梶子16次	2013.4～2014.3	4,754㎡	浜松市教育委員会	縄文～近世	梶子遺跡16次	2015.3
梶子17次	2014.4～2015.3	2,016㎡	浜松市教育委員会	弥生～中世	梶子遺跡17次	2016.3
梶子18次	2015.4～2016.4	1,656㎡	浜松市教育委員会	弥生～中世	梶子遺跡18次	2017.3
梶子19次	2016.3～2017.7	6,573㎡	浜松市教育委員会	弥生～平安	梶子遺跡19・20次	2019.3
梶子20次	2017.10～2018.1	70㎡	浜松市教育委員会	平安～中世	梶子遺跡19・20次	2019.3
梶子21次	2014.10～2015.1	498㎡	浜松市教育委員会	弥生・奈良・平安	梶子遺跡21次	2015.3
梶子22次	2016.6～2016.11	2,600㎡	浜松市教育委員会	弥生～鎌倉	平成28年度浜松市文化財調査報告	2017.3
梶子23次	2018.12～2019.3	890㎡	浜松市教育委員会	弥生～戦国	本報告書：梶子遺跡23次	2020.3

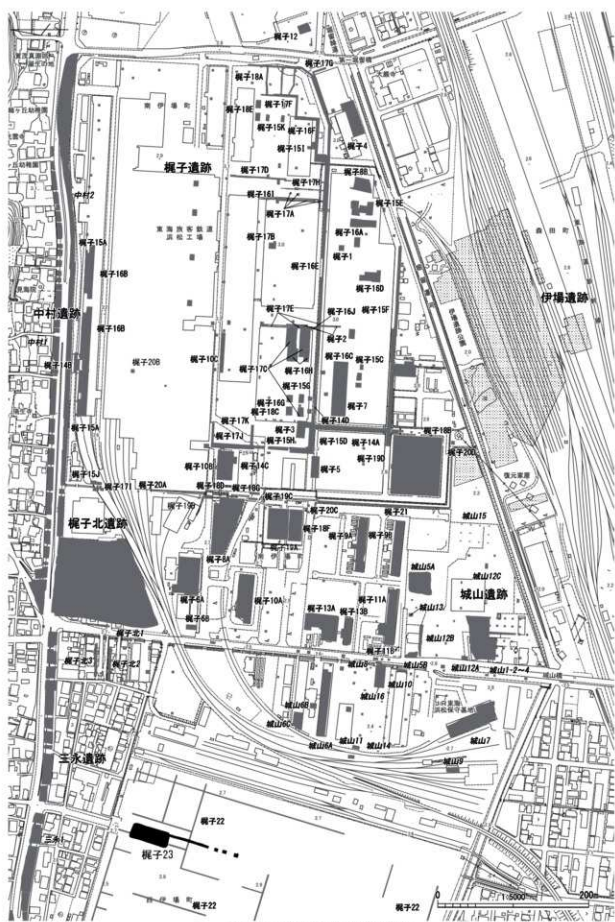


图5 橿子遺跡 23次調査区位置図

古墳時代においては9次調査で大溝Ⅶ層から6世紀代の耳環と管玉が出土しており、伊場遺跡群周辺には有力家族層の存在が考えられる。

古代では9次B区・11次・13次調査において7世紀代の掘立柱建物群が確認された。また、JR浜松工場内の大規模な建替に伴う一連の調査では、16次調査において10世紀前半の井戸、19・20次調査で伊場大溝内から6世紀後半から10世紀前半にかけての貝塚12箇所が検出された。

木簡は、6・9・13・18・19・20・21次調査で、伊場大溝を中心に7世紀から9世紀にかけてのものが多量の墨書土器とともに出土した。また、19次調査では大溝Ⅳ層から銅印が出土している。これらの遺物は、伊場遺跡周辺に所在したと推定される敷智郡家に関する貴重な資料といえる。

5 調査成果の概要

梶子遺跡23次調査区は伊場遺跡群の西寄り、梶子遺跡の西端付近に位置し、第1砂堤列と第2砂堤列の間に形成された低地に立地する。調査区は南北に45m、東西に16mの長方形で、調査面積は約790㎡である。検出した遺構は、伊場大溝（以下、大溝と言う）1条、大溝に付属する張り出し遺構1基および集石遺構1基、中世の水田痕跡2枚、溝35条、土坑28基、小穴（ピット）82基、杭列1条等である。

今回の調査区は、遺構面や遺物包含層の形成状況や重複関係が複雑であった。

調査区の中央北寄りに東西方向に延びる大溝が位置する。この大溝は既往の発掘調査で検出されている伊場大溝の西上流部にあたる可能性が高いと考えられ、さらに梶子北遺跡で検出された梶子北大溝とも下流の北東部で合流する可能性がある。

大溝は旧地形の境界にあり、大溝を挟んで南と北では地形環境が大きく異なる。大溝よりも南側は埋没小砂堤の微高地（以下、南微高地と言う）であり、大溝から北側は砂堤列間湿地の深い谷地形（以下、北低湿地と言う）となる。大溝は北低湿地の堆積が進行した段階で、南微高地の北縁に沿って西から東へと流れる自然流路として形成されている。

① 南微高地

調査区の南半は、第1・第2砂堤列間に形成された東西に延びる小砂丘の北縁部にあたり、細砂を基盤とする微高地上に弥生時代中期以降の遺構群が営まれている。

南微高地の北縁、基盤砂層が北低湿地へ向けて低くなっていく部分には、基盤砂層の上面に北低湿地の流路（湿地帯）埋土であるⅠ層が堆積し、さらにその上に灰色系の粘質土2～3層で構成される大溝南側Ⅱ層が堆積する。大溝南側Ⅱ層の上面で検出した遺構を南側1面遺構、またその下面の基盤砂面で検出した遺構を南側2面遺構とそれぞれ称した。時期は、南側1面が7世紀、南側2面は弥生時代中期後葉～後期前半の遺構面と考えられる。なお、調査区南端から北へ10m付近までは大溝南側Ⅱ層の堆積が無かったので、基盤砂層上面において南側1面と南側2面に帰属する遺構が混在した状態で検出された。この部分の遺構群については、遺構の重複関係や埋土の状況、出土遺物等を勘案して時期分類を行った。

南側1面から検出した遺構には、概ね正方位に近い溝群や土坑、小穴等がある。掘立柱建物を構成する小穴の並びは認められない。

南側2面においても溝状遺構や土坑、小穴等を検出した。南微高地の北縁部にはL字状に屈曲する溝2条（SD23・24）が位置する。掘立柱建物を構成する小穴の並びは認められなかった。

遺構および大溝南側Ⅰ・Ⅱ層から土器類が出土しているものの、大部分が小片で量も多くはない。

② 北低湿地

大溝から北側の砂堤列間湿地には縄文時代後期から晩期前半の土器を包含するE層、弥生時代中期後葉以前のD最下層、中期後葉のD下層、弥生時代後期から5世紀前半のD上層が堆積し、さらにその上に5世紀中頃の堆積層と推測されるC層が堆積する。これらの土層はレンズ状堆積を呈しており、河川埋土と解される。したがって、北低湿地は大溝Ⅷ層をはじめとする自然流路が複雑に重複した状態で埋没していると考えられる。

D下層からは弥生時代中期後葉を主体とする土器や木器、石器が多数出土しており、なかでも土器類が多い。木器には製作途中の未成品も含まれる。

遺構としては、D下層の底面に打設された弥生時代中期後葉の所産と考えられる杭列(SA1)と、北低湿地が埋没した後に営まれた平安時代後半～鎌倉時代頃の水田遺構がある。

③ 伊場大溝

大溝は西から東へ向けて流れる自然流路で、延長15mを検出した。埋土は大きく5層(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ層)に分かれる。幅はⅢ～Ⅶ層段階が14m、Ⅷ層の遺存部を含めると18mを測る。Ⅲ～Ⅶ層流路の方向は、東で北へ5°振れる。深さはⅢ層検出面からⅧ層底面までで2.4mを測る。検出面の標高は、Ⅲ～Ⅶ層が0.5m、Ⅷ層は0m前後である。流路の横断面形は北岸が急勾配で、南岸は緩やかに立ち上がっている。

大溝の形成状況および埋積状況を概観しておく。北低湿地がC層まで埋没した段階で大溝が形成され大溝Ⅷ層が堆積する。Ⅷ層の北肩は標高0m付近のC層を基盤とするが、Ⅷ層の上層堆積土は大溝の範囲を北に超えて広がり、C層の上面をさらに0.3m程度超えて水平堆積する。続いてⅧ層の上面に厚さ約0.2mで堆積した灰色粘質土を浸食してⅦ層が形成されている。Ⅶ層はⅧ層の多くを抉り取っており、Ⅷ層は大溝の北半にのみ遺存する。このため、Ⅷ層段階の川幅は不明である。Ⅶ層が堆積した後は、Ⅴ層・Ⅳ層・Ⅲ層と順次、大溝の埋積が進行する。大溝埋土の最上層であるⅢ上層が堆積した時点においても大溝部は周辺基盤面と比べて0.3～0.5m低く、浅い窪地状を呈している。

大溝に関連する遺構として、Ⅴ層段階の所産と考えられる集石遺構や、Ⅲ層で覆われる張り出し遺構が大溝北肩に設けられている。

遺物には墨書土器を含む土器類や木器類があるが、これまでの伊場大溝の既往の調査に比べるとその量は多くない。特筆されるものに、Ⅳ下層から出土した「筆墨納櫃」と記された木簡(W19)や、Ⅴ層出土の「主政川前」と墨書された須恵器坏身(図27-73)が挙げられる。

④ 基本層位

調査地の周辺地域は、近現代の盛土により地盤をかさ上げた上に、現在の市街地や工場が形成されている。調査地付近の地表面標高は2.4mである。

1層は近現代の盛土層で、厚さ1.4～1.5mを測る。2層の褐灰色土は旧表土層で、伊場遺跡Ⅰ層・A層に相当する。水平堆積で、厚さ0.15mを測る。上面の標高は調査区の南端で1.0m、北端で0.9mを測り、北へ向けてわずかに低くなる傾向が認められる。3層の褐灰色土層は伊場遺跡Ⅱ層・B層に相当する。水平堆積で厚さは0.15m前後である。上面の標高は調査区の南端で0.95m、北端で0.8mを測り、2層と同様に北へ向けてわずかに低くなる。

3層より下層の土層堆積状況は、南微高地、北低湿地、大溝部で大きく異なる。それぞれの基本層位については、調査成果の2・3・4章において記述する。

第2章 伊場大溝の調査成果

1 大溝の基本層位

3層（伊場遺跡Ⅱ層・B層）下面の標高0.5m付近が大溝Ⅲ～Ⅶ層の基盤面である。大溝の北肩部では大溝Ⅶ層の上面に堆積する灰色粘土層を、南肩では大溝南側Ⅰ層の灰色粘質土～粘土層を切り込んでⅢ～Ⅶ層段階の流路が形成されている。

現地発掘調査時には、大溝の基本土層を上位からⅢ層、Ⅲ'層、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅴ'層、Ⅶ層、Ⅶ層の7層に分けて遺物の取り上げを行った。そして、その後の整理調査で得られた各層位の年代観等を勘案すると、Ⅲ層、Ⅲ'・Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅴ'・Ⅶ層、Ⅶ層の5段階に大別するのが妥当と考えられた。ついては、現地調査時のⅢ'層をⅣ上層、Ⅳ層をⅣ下層、Ⅴ'層をⅦ上層、Ⅶ層をⅦ下層と呼び変えることとした。また、Ⅲ層については層相が明瞭に異なる上下2層に分かれるので、上層をⅢ上層、下層をⅢ下層と呼ぶことにする。

大溝形成段階のⅦ層流路が埋没した後に、Ⅶ層流路がⅦ層の多くを削り取って再び流入し、Ⅶ層・Ⅴ層・Ⅳ層・Ⅲ層と順次埋積が進行する。すなわち、大溝はⅦ層流路とⅦ～Ⅲ層流路の二時期の自然流路が重複して形成されていると考えられる。深さはⅢ層検出面からⅦ層底面までで2.4mを測る。

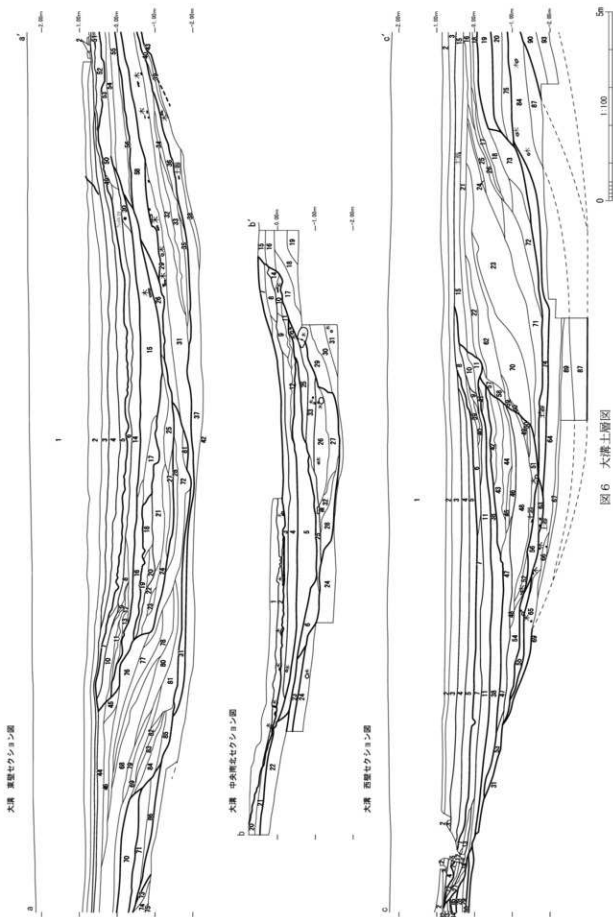
Ⅶ層は北低湿地の上層埋土であるC層を切り込む。C層上面の標高は0m前後である。Ⅶ層はC層の上面を覆って広がり、さらにその上に北低湿地の最上層となる灰色粘質土（東壁44層・西壁15層）が堆積している。Ⅲ～Ⅶ層の大溝の層は、3層（伊場遺跡Ⅱ層・B層）の下面に広がるこの灰色粘質土層上面の標高0.5m付近を切り込む。

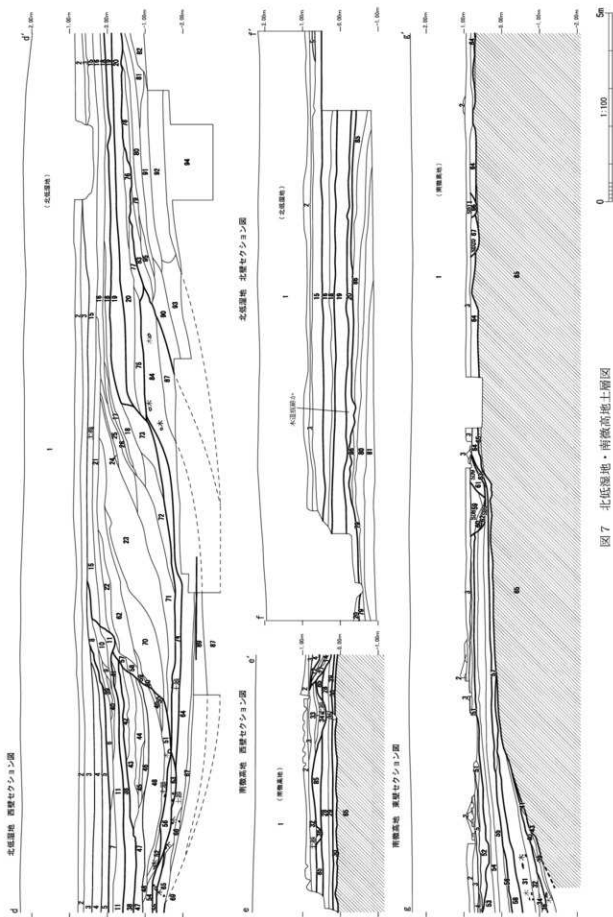
大溝埋土各層の基本土質を下層からみると、古墳時代中期から後期（5世紀後半～6世紀前半）の堆積層であるⅦ層が灰色～褐色の粘質細砂、古墳時代後期から飛鳥時代（6世紀後半～7世紀末）のⅦ層が褐色砂質土および灰色細砂、奈良時代前半（8世紀初頭～中葉）のⅤ層が黒褐色粘

表2 基本層位対比表

伊場	梶23	現地	遺物年代	層位年代	備考
Ⅱ	Ⅲ上	Ⅲ上	15c	14～15c	
Ⅲ	Ⅲ下	Ⅲ	12～13c	11～13c	
Ⅳ	Ⅳ上	Ⅲ'	10c前	10c	1文字墨書
	Ⅳ下	Ⅳ	8c後～9c前	8c後葉～9c	木簡(8c末)
Ⅴ	Ⅴ	Ⅴ	8c前	8c初頭～中葉	主政墨書
Ⅶ	Ⅶ	Ⅴ'	6c後～7c中	6c後半～7c	
		Ⅶ			木製鏝
Ⅶ	Ⅶ	Ⅶ・D間	5c後	5c後葉～6c前半	
C	(C)	(C)	なし	5c中葉	伊場C層とは異なる
D	D上	D上	弥生後期～4c前	1c～5c前葉	(銅鉄)
DD'	D下	D下	弥生中期後葉	弥生中期	多量の土器と木器
	D最下	D'	弥生中期中後葉	弥生中期	
	E	E	縄文後晩期	縄文後晩期	

1 大溝の基本層位





- [illegible]

- [illegible]

図6・7の土層説明

質土、奈良時代後半から平安時代前半（8世紀後葉～10世紀）のⅣ層が灰褐色粘土、平安時代後半から鎌倉時代（11世紀～13世紀）のⅢ下層が黒褐色ビート（泥炭・腐植土）、室町時代（14世紀～15世紀頃）のⅢ上層が褐色粘質土である。

このように堆積土層からは、Ⅷ・Ⅶ層大溝は水量が豊富で自然流路として活発に機能していたのが、Ⅴ・Ⅳ層段階になると水流が著しく衰えて減んだ状態へと変化した、Ⅲ層段階には川形状は留めるものの流路としての機能はほとんど失われ帯状の湿地であったと考えられる。

2 大溝Ⅷ層の調査（5～6世紀）

① 堆積状況

Ⅷ層は、古墳時代中期から後期（5世紀後半～6世紀前半）にかけての堆積層であると考えられる。北肩は北低湿地の上層埋土であるC層を切り込む。C層上面の標高は0m前後である。Ⅷ層の上部はC層の上面を0.3mの厚さで覆って広がり、さらにその上に北低湿地の最上層となる灰色粘質土（東壁44層・西壁15層）が堆積している。Ⅲ～Ⅶ層大溝は、3層（伊場遺跡Ⅱ層・B層）の下面に広がるこの灰色粘質土層上面の標高0.5m付近を切り込んで堆積する。

Ⅷ層流路は東西方向に直線的に延び、幅は14m前後と推定される。北肩は、西壁でⅢ層肩から北へ約5m、東壁で北へ約3mの位置で立ち上がる。つまりⅧ層流路の方向は、後続するⅢ～Ⅶ層流路に比べて東西方向に近い。南肩はⅦ層流路に削られて消失している。

層厚は2.3mを測り、上面の標高は0.35mである。最深部の標高は、西壁で-1.8m、東壁で-1.9mを測り、西から東へ向けて低くなる。底面はほぼ平坦である。北岸斜面は45°程度の勾配で立ち上がる。

埋土はレンズ状に斜行堆積するが、北側基盤土のC層を覆う部分は水平堆積に転じている。土質は灰色～褐色の粘質細砂もしくは細砂質粘質土を基調とするが、C層上面の水平堆積層は灰色の粘質土・粘土となる。砂の粒度は極細粒である。全体的にラミナ構造が顕著に観察でき、微細なビートを包含する土層もある。東・西壁ともに、Ⅷ層の堆積が相当進行した時点で新たな流れが流入している状況を確認できる。

土質や土色、また顕著なラミナ堆積が認められることなどから、Ⅷ層流路は豊富な流水がある環境下において埋積が進行したものと考えられ、大溝の他層と比べて埋没までの期間は比較的短かったとみられる。

堆積年代の一端を示す遺物として5世紀末の須恵器坏蓋（図25-1）がある。ほかに時期決定できる遺物に恵まれないものの、既往の調査成果の年代観を勘案して、Ⅷ層の堆積時期については5世紀後半～6世紀前半頃と考えておきたい。

② 遺物出土状況

遺物はⅧ層流路北半部の底面付近から出土しているが、その量は少ない。遺物の分布が流路の北半に集中するのは、南半の埋土がⅦ層流路により浸食され失われていることによる。Ⅷ層流路の最下部には土器細片を多く含む最大厚0.1mの灰白色細砂層が堆積する。

Ⅷ層の早い段階の堆積層である当該土層から前述5世紀末の須恵器坏蓋が出土している。また、本層から弥生時代後期の銅鏝（図66-5）が出土した。これについては、遺物の年代観から本来D上層に包含されていたものがⅧ層流路の浸食によりⅧ層に混入した可能性が高い。

3 大溝Ⅶ層の調査（7世紀）

① 堆積状況

Ⅶ層は、古墳時代後期から飛鳥時代（6世紀後半～7世紀末）にかけての堆積層であると考えられる。Ⅶ層の堆積後、位置を若干南側の微高地側へ移動してⅦ層大溝が再形成されている。

Ⅶ層大溝の北岸はⅦ層段階から3～3.5 m南に位置し、南岸はⅦ層大溝の南岸を完全に挟り取っている。Ⅶ層大溝は、東西方向に近いⅦ層段階の大溝とは若干変化し、東から北へ5° 振れている。Ⅶ層流路の幅は14 m前後であったとみられ、深さは検出面から2～2.15 mを測る。最深部の標高は、西壁で-1.65 m、中央セクションで-1.6 m、東壁で-1.5 mを測り、東から西へ低くなる。Ⅲ～Ⅴ・Ⅶ層段階の底面が東へ向けて低くなるのとは異なっている。底面はほぼ平坦である。流心は北岸寄りに位置し、岸の立ち上がりは北岸が急勾配となっている。このような河床形状からすれば、北岸が水流の攻撃斜面であるように見えるが、南岸の基盤土がD層の粘土と粘質土であるのに対して北岸の基盤は大溝Ⅶ層の細砂質土であり、流路の蛇行方向にかかわらず浸食されやすい土質である北岸がより大きく洗い流されたとも考えられる。

Ⅶ層は、Ⅶ上層・Ⅶ下層の上下2層に細分することが可能である。Ⅶ下層は、幅約10 mにわたって残存する。大溝北岸寄りの最深部付近に厚く堆積しており、最大厚は0.6 mを測る。下面の標高は、西壁で-1.65 m、中央セクションで-1.6 m、東壁で-1.5 mを測り、東から西へ低くなる。Ⅶ下層の構成層は、褐灰色の砂質土・粘質細砂および灰色細砂を基調とし、ビートの混入が多く観察できた。砂の粒度はⅦ層と比べるとやや粗い。流水により形成されたと考えられるラミナ堆積が顕著であることから、相当量の水が流れる環境のもと堆積が進行したと考えられる。

Ⅶ上層は、Ⅶ下層と同様に北岸寄りが厚く、最大厚は0.65 mである。西半部では幅8.5 mで広がり、東側ではⅤ層の浸食により多くが失われ、北岸寄りにのみ遺存する。下面の標高は、西壁で-1.1 m、中央セクションで-1.15 m、東壁で-1.0 mを測る。Ⅶ上層は、白色砂がラミナ状に混入した黒褐色～褐灰色砂質土と褐灰色粘質土を基調とする。ビートの混入はⅦ下層に比べると少ない。粘質土に細砂がラミナ状に混入している状況は、Ⅶ下層と後述するⅤ層の中間的な様相であり、流水状態と滞水状態が繰り返す環境下で形成されたと判断できる。また、西壁では上位堆積層ほど粘性が高くなる傾向が看取でき、本層形成時に大溝が流水環境から滞水環境へと変化した様子が窺える。

Ⅶ下層出土土器の時期は6世紀後半～7世紀中葉で、特に6世紀末～7世紀中葉のものが多くを占める。Ⅶ上層からもほぼ同時期の土器が出土している。Ⅶ層出土土器の年代観は6世紀後半～7世紀中葉であるが、堆積時期についてはⅤ層の年代観を考え合わせて6世紀後半～7世紀末に想定しておきたい。

② 遺物出土状況

Ⅶ層からは大溝各層のなかで最も多くの遺物が出土した（図15・17参照）。遺物の多くが流路南半から出土しており、特に西側に集中する。壺甕（W2）や横櫛（W1）などもここから出土している。流路北半の遺物だけが押し流されたような堆積状況は確認できないので、遺物は基本的に大溝の南岸側すなわち南微高地から大溝内へ投棄されたかもしくは流入したと考えるのが自然である。Ⅶ層大溝の水流は強かったとみられるが、今回の調査区においては遺物がさほど移動することなく岸辺に近い場所に埋没したと推測される。流心部からは刀形（W3）が出土している。

流路南半からは飛鳥時代の遺物のほかに弥生時代中期後葉の土器片が多く出土している。底面近くではむしろ弥生土器が圧倒的に多く、弥生土器に混じって古代の土器が散見するような状況で

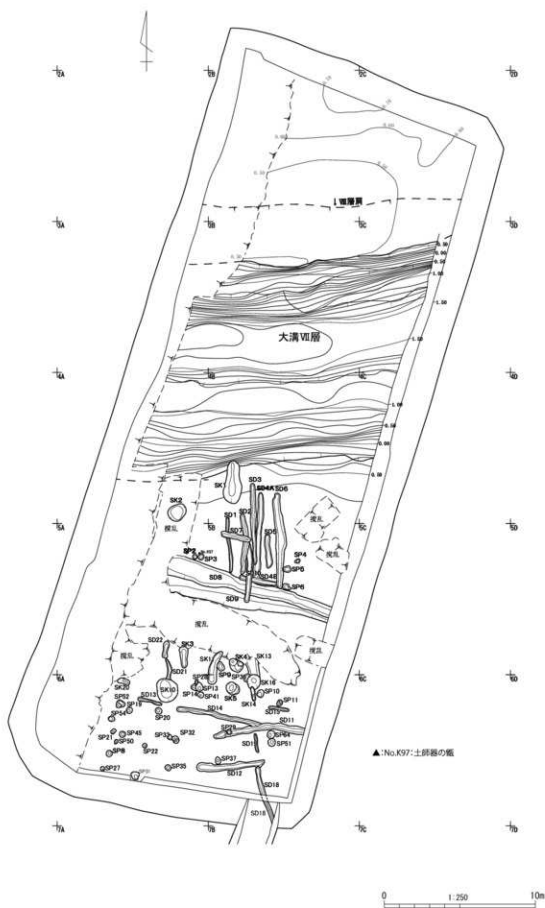


図8 大溝VII層・南区古代面（飛鳥時代）全体図

3 大溝Ⅶ層の調査（7世紀）

あった。これはⅦ層流路が下層のD下層を浸食することにより、洗い出された弥生土器がⅦ層底面に再堆積したものと考えられる。

4 大溝Ⅴ層の調査（8世紀）

① 堆積状況

Ⅴ層は、奈良時代前半（8世紀初頭～中葉）の堆積層であると考えられる。Ⅴ層大溝はⅦ層大溝と同様に東から北へ5°振れる方向をとり、幅は14 m前後であったとみられる。深さは検出面から1.2～1.6 mである。底面の形状は、流路中央へ向けてなだらかに低くなる。流路中央やや南寄りに最深部が位置し、Ⅶ層大溝と異なる。

下面の標高は西壁で-0.8 m、中央セクションで-1.05 m、東壁で-1.2 mを測り、流れの方向は西から東と判断される。Ⅴ層の最大厚は0.55 mを測り、南半がやや厚くなる。土質は白色微粒を含んだ黒褐色粘質土で、東壁では下部にビートがラミナ状に混入する状況が確認できた。本層は、多量に混入した植物遺体の分解が進行した土層と判断できる。全体に均質であることから、Ⅴ層大溝は、常には流れがほとんど無く、葭や水草が繁茂する鰐んだ流路であったと考えられる。

Ⅴ層からは7世紀中葉と8世紀前半の土器が出土している。前者は下層のⅦ層からの混入であると考えられ、Ⅴ層の堆積時期は8世紀初頭～中葉と考えられる。

② 集石遺構

Ⅴ層堆積段階の遺構として、性格不明の集石遺構がある。これは大溝北肩中央のやや東よりに位置し、斜面に10～15 cm大の礫を集めたものである。礫は40個程度検出され、その分布範囲は東西・南北とも約1.5 mで、Ⅴ層上面付近の標高0～-0.3 mに集中する。礫は北斜面直上に置かれた状況を呈し、Ⅴ層土で埋没している。一部の礫はⅦ層直上にあり、この集石遺構はⅦ層が堆積した直後、Ⅴ層堆積初期段階の所産と考えられる。礫は亜角礫の山石が多く、わずかに川原石も含まれる。石材はチャート質のものが目立つ。集石の西2 m地点において同じ高さで倒木が存在するものの、集石との関係は不明である。

③ 遺物出土状況

Ⅴ層出土遺物の量はⅦ層に比べて少ない。遺物はⅦ層と同じく流路の南岸寄りに分布する傾向が認められる（図15・17参照）。水中で移動しやすい木製品類についても南半から出土していることと、Ⅴ層大溝の水流が弱かったとみられることからすれば、南微高地から廃棄された遺物が、ほとんど流れずに岸边に近い場所に埋没したと考えられる。

本層から出土した遺物のうち特筆されるものに「主政川前」と墨書された須恵器坏身（図27-73）が挙げられる。出土地点は、大溝南肩から4.7 m北側のⅤ層最上部である。墨書がある底部外面を下にして天地正位で出土した。底部は完存し、体部と口縁は1/5程度が残存する。刀形（W27）や柱根（W34）の出土も併せて、公的施設が近在したことを示唆するものである。

5 大溝Ⅳ層の調査（8世紀後葉～10世紀）

① 堆積状況

Ⅳ層は、奈良時代後半から平安時代前半（8世紀後葉～10世紀）に堆積した層である。Ⅳ層大溝の平面規模はⅤ層段階と同様に幅約14 mで、深さは検出面から0.95～1.1 mを測る。方向は東

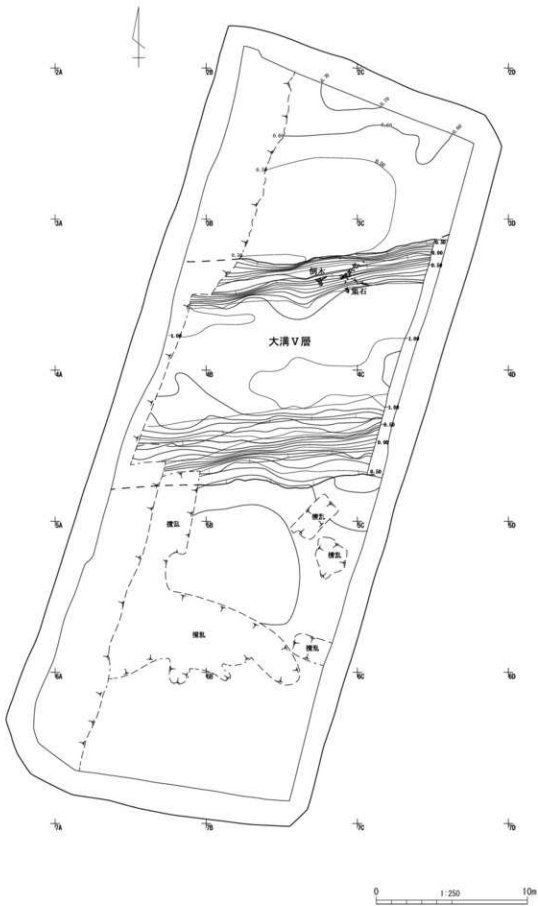


図9 大溝V層（奈良時代）全体図

圖 10 大溝 V 層集石遺構(上)・III 層張出遺構 SX1(下)詳細圖

から北へ5°振れる。底面は平坦で、最深部は流路中央に位置する。IV層はV層と土質が近似するものの、V層と比べて土色が明るく粘性が高いという特徴があり、V層との判別は比較的容易であった。下面の標高は、西壁で-0.45 m、中央セクションで-0.5 m、東壁で-0.6 mを測り、水流の方向は西から東と判断される。概して均一の厚さで堆積するが、Ⅷ層と接する北岸寄りがやや厚くなる傾向が認められる。中央部の厚さは0.4 mである。

IV層は、IV上層とIV下層の上下2層に細分した。下層のIV下層は、幅約13 mにわたって広がり、中央部での最大厚は0.25 mを測る。層厚は概ね均一で、横断面の形は緩やかな弧状を呈す。土質は、白色微粒を含んだ褐灰色～灰褐色粘土を基調とし、部分的にビートの混入が認められた。Ⅷ層と接する北壁寄りでは褐灰色～灰色の粘質土の薄層が幾重にも重なっている状況が観察された。V層に引き続いて、水流が停滞していた環境下で堆積が進行したと考えられる。粘性が高いことから、本層堆積時の大溝の流れは、V層段階よりもさらに微弱なものであったことが想像される。

IV下層出土遺物は、8世紀後半～9世紀前半のものが主体であるが、「又々」と墨書された灰釉陶器碗（図27-92）のように10世紀前半に下るものも含まれている。

IV上層は、幅約14 mで広がる。層厚は均一で、厚さ0.15 mを測る。中央部の土質は、ビートの薄層をラミナ状に含んだ褐灰色粘土で、南北両岸沿いには灰色・青灰色・褐灰色など中央部埋土と比べて色調が明るい粘質土や粘土が堆積する。土質や土色はIV下層と酷似するが、ビートがラミナ状に混入する点が特徴的である。下面の標高は、西壁で-0.2 m、中央セクションで-0.3 m、東壁で-0.35 mを測り、西から東への流れであったと判断できる。本層堆積時の大溝は、IV下層段階に引き続いてほとんど流れがない澱んだ状態であったと考えられる。

出土土器の年代観から、IV上層の堆積時期は10世紀代と考えられる。

② 遺物出土状況

IV層においても遺物が大溝の南岸寄りに集中する傾向が認められる（図14・17参照）。本層堆積段階における大溝の流れは、V層よりもさらに緩やかであったと考えられる。したがって、投棄等により大溝内へもたらされた遺物はその位置をほとんど移動することなく埋没したとみられる。

本層からは、木簡や墨書土器、刀子、畜串などの遺跡の性格を特徴付ける遺物が出土した。「筆墨納櫃」と記された木簡（W19）は、調査区の東壁下において、大溝の土層堆積状況を確認するためのサブトレンチを掘削している際に出土した。出土位置は、大溝南肩から北へ約2 m、IV下層の初期の堆積層である東壁30層の標高-0.25 m地点である。東壁30層はビートがラミナ状に混入した褐灰色粘土層である。木簡は箱蓋の表面に墨書されたもので、表面の墨書面を下にして水平に近い状態で出土した。墨書土器は4点あり、IV下層最下部から「山」と墨書された須恵器坯蓋（図27-85）、IV下層から「又々」と墨書された灰釉陶器碗（92）、IV上層最下部から「朋万」と墨書された灰釉陶器碗（95）、IV上層から「有」と墨書された灰釉陶器碗（93）が出土している。「又々」の墨書灰釉陶器碗は大溝中央付近、ほかは南岸寄りに集中する。また、Ⅲ下層最下部から出土した「朋万」と墨書された灰釉陶器碗（94）は、本来IV上層に含まれていたものと考えられ、その出土場所は「朋万」墨書土器（95）や「筆墨納櫃」木簡（W19）の近接地点である。ほかに特徴的な遺物として、IV下層から畜串（W21）や、柄付き刀子（図66-1）、鉄簾（4）などが出土している。そのほか、IV下層の南岸に近い場所から円形曲物の底板3点（W29・31・32）が集中して出土した。

本層出土遺物の傾向として、公的施設に帰属したとみられる物品の占める比率が高いことが指摘できる。またその公的施設は、大溝からさほど離れない南微高地上に展開していたと判断されよう。

6 大溝Ⅲ層の調査(12～13世紀)

① 堆積状況

Ⅲ層大溝は、幅約14mを測り、深さは検出面から0.6～0.75mである。方向は東から北へ5°振れる。Ⅲ層は大溝埋土の最上層であり、上下2層に分かれる。

下部層のⅢ下層は、平安時代後半から鎌倉時代(11世紀～13世紀)にかけての堆積層である。土質は黒褐色ビート(泥炭層、腐植土層)で、最大厚は0.25mを測る。ビート層は検出した瞬間は明褐色を呈するが、外気に触れると酸化して瞬時に黒化する。下面の標高は、西壁で-0.05m、中央セクションで-0.15m、東壁で-0.25mを測り、西から東へ向けて低くなっている。下面には踏み込みによるとみられる小規模な起伏があり、ビート層にも攪拌されたような痕跡が認められ、大溝内への人の進入が頻繁にあったことが窺われる。本層の堆積は、西壁では大溝内に収まるが、東壁では大溝の北肩を超えて薄く広がり、大溝北側の中世水田遺構基盤土(東壁44層:灰色粘質土)を覆っている。ビートは大溝やその周辺に繁茂していた葭や水草等に由来すると考えられる。ビートの分解が進んでいないことが特徴的で、他層との違いは極めて明瞭であった。Ⅲ層大溝は流れがほとんどなくなり帯状の湿地となり、周辺に植物が著しく繁茂する環境であったと考えられ、植物遺体が流し去られることなく徐々に埋積が進んだとみられる。

Ⅲ下層の堆積時期は、出土土器からすれば12世紀後半～13世紀前半であるが、Ⅳ上層の年代観を勘案して11世紀～13世紀頃と考えておきたい。

Ⅲ上層は厚さ0.25mの褐灰色粘質土で、滞水状態で堆積したとみられる。下面の標高は、西壁で0.1m、中央セクションで0m、東壁で-0.05mを測り、西から東へ向けて低くなる。本層の下面においても踏み込みによる小起伏が観察できる。Ⅲ上層が耕作土であり、大溝内が耕作地として活用されていた可能性が考えられる。

Ⅲ上層出土遺物は極めて少量であるため堆積期間の判定は困難であるが、Ⅲ下層に後続して14世紀頃から堆積が始まり、15世紀にかけて埋積が進行したと推定しておく。

② 張り出し遺構SX1

Ⅲ層大溝に伴う遺構に、張り出し遺構SX1がある。SX1は大溝北肩中央付近の大溝内に位置し、北肩から南へ張り出す。張り出しの方向は、ほぼ南北である。大溝埋土との関係は、Ⅳ上層を基盤とし、Ⅲ下層に覆われる。本遺構の構築状況は、まず大溝北肩斜面をテラス状に浅く掘りくぼめる。テラス底面の標高は-0.1mである。次に、テラス面の東西1.2m、南北1.1mの範囲に葭の葉状の植物を薄く敷き、その上に粗朶を粗く横置きする。さらに、この上に基盤土を掘削して用いたとみられる厚さ0.2mの灰色粘質土を盛っている。盛土上面の標高は0～0.2mを測り、南から北へ高くなる。盛土を囲んで東西2.0m、南北2.6mの長方形に杭を打設し、張り出し部の護岸とする。杭は、直径3～6cmの芯持ちの丸太材で、針葉樹・広葉樹ともに用いられている。なお、SX1東側の大溝北肩斜面に、肩と平行して打ち込まれている5本の小杭も、SX1と一連のものである可能性が高い。

③ 遺物出土状況

Ⅲ層出土遺物の量は、Ⅳ～Ⅶ層と比べると少ない。遺物の大部分はⅢ下層から出土している(図14・17参照)。Ⅲ下層からは13世紀前半の山茶碗(図28-103)が完形で出土しており、本層の堆積年代の一端が知れる。南岸寄りのⅢ下層最下部から灰釉陶器碗(図27-94)が出土している。この碗は底部外面と体部外面に「朋万」の墨書がある。高台を下にしてやや傾いた状態で出土した。

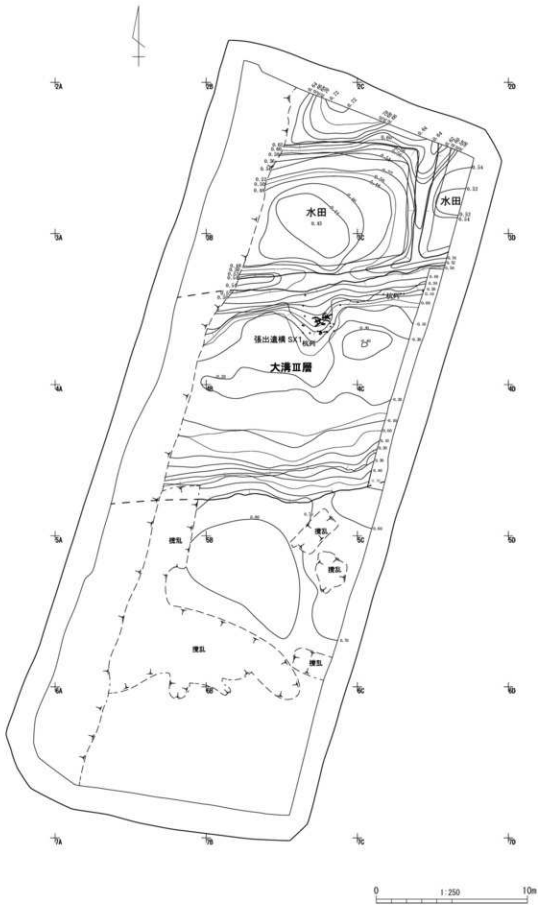


図 11 大溝Ⅲ層（鎌倉時代）全体図

高台の一部が下層のⅣ上層にめり込んだ状態であったことから、本来はⅣ上層に包含されていたものが水流により洗い出され、Ⅲ下層に再埋没した可能性が考えられる。ほかに特徴的なものとして、Ⅲ下層から出土した荷札(W36)がある。

Ⅲ層遺物の平面分布をみると、数は少ないながらも大溝内の全域に散在しており(図14参照)、Ⅶ～Ⅳ層段階において大溝の南岸寄りに遺物の集中傾向がみられたのとは様相が異なる。Ⅲ層大溝がほとんど流れのない澁んだ状態であったとみられることからすれば、水流による遺物の移動もほとんど無かったと想定される。とすれば、大溝の南北両岸から遺物の投棄や流入があったと考えるのが妥当であろう。このことは、大溝周辺の土地利用の変化を示している可能性がある。Ⅳ層以前には人々の生活基盤は大溝南側の南微高地にあったと考えられた。Ⅲ層段階においても居住生活を営む基盤地としては、地形的に安定した南微高地であったと推測される。ここで注意されるのは、Ⅲ層大溝の北側に展開する水田遺構である。大溝北側の湿地部がⅢ層段階に至って耕地として活用されはじめ、大溝を挟んでその両岸に人々の活動が拡大したことを、Ⅲ層大溝出土遺物の散布状況が示唆している可能性が考えられる。梶子遺跡を含めた伊場遺跡群の広がりの中に存在が確実視されている数智郡家や栗原駅、軍団は、10世紀代で機能を停止すると想定されている。Ⅲ層大溝は、このような古代の官衙施設の衰退期以降に機能していた流路であり、Ⅲ層出土遺物のあり方は、大溝周辺の土地が官衙や官人の居住地といった公的な場所から農地や農村集落へと変貌する過程を示していると考えられる。

第3章 北低湿地の調査成果

1 北低湿地の基本層位

南微高地の北側に展開する北低湿地は、全体が自然流路の重複により埋没している。流路の単位は、上から大溝Ⅲ～Ⅶ層、大溝Ⅷ層、D層（D上層・D下層・D最下層）、E層となる。

3層（伊場遺跡Ⅱ層・B層）下面には、厚さ20cm前後の灰色粘質土が水平に堆積する。標高は上面が0.5m前後、下面が0.3m前後である。大溝Ⅶ層は本層上面を切り込み、東壁寄りの部分では3層と本層上面の間に大溝Ⅲ下層のビート（泥炭、腐植土）が大溝の北肩を超えて薄く広がる。また、本層の上面が中世水田遺構の基盤面となる。水田遺構の耕作土は遺存しなかった。

標高0.3m～0m付近には、大溝Ⅷ層から連続する水平堆積層が位置する。この下面に堆積する厚さ0.3m前後の灰色粘土層が伊場遺跡群C層に相当するとみられる。C層上面の標高は0.1～-0.1mを測り、北から南へ緩やかに低くなる。本層を浸食して大溝Ⅷ層が形成されている。C層から遺物は出土していないが、5世紀中頃の堆積層と推測され、従来の伊場遺跡群C層の年代観が弥生時代後期後半から古墳時代中期に想定されているのに比べて年代幅が狭い。

C層の直下に弥生時代中期後葉以前から古墳時代中期前葉の流路（湿地帯）埋土と考えられるD層が位置する。D層については、上からD上層・D下層・D最下層の3層に分層した。

D上層は黒褐色粘土を基調とし、弥生時代後期から古墳時代中期（5世紀中葉頃）の堆積層と考えられる。D下層は黒褐色粘質土～粘土を基調とし、ビートが多く混入する。弥生時代中期後葉の遺物を多量に包含し、当該時期の堆積層とみてよい。D最下層はD下層に類似する黒褐色粘土を基調とする。弥生時代中期後葉の遺物を包含するが、その量は少ない。

既往の調査における伊場遺跡群基本層序と照らすと若干の年代観の齟齬はあるけれども、D上層は伊場遺跡群C～D層に、D下層およびD最下層は伊場遺跡群D～D'層に相当すると考えられる。

D層の下に堆積する褐灰色～灰褐色の粘質土～粘土層をE層と称した。調査区北端での堆積状況を見ると、南へ傾斜するレンズ状堆積を呈しており、D層に先行する自然流路（湿地帯）の埋土と考えられる。底面は未確認であるが、標高-3.1mよりも低くなる。上面から0.6m以下には細砂と粘質土がラミナ状に互層となって堆積している状況が観察でき、一定量の流水環境下で堆積したことがわかる。遺物は、西壁90層から縄文時代後期から晩期前半にかけての土器片（図44-265～267）が出土している。

2 中世の水田遺構

Ⅲ層大溝の北に中世の水田遺構が展開する。耕作土や畦畔盛土は遺存しなかったが、耕作によって形成された畦畔のわずかな高まりを検出した。畦畔はわずかな盛り上がりが確認されただけである。水田面には、耕作時の鋤・鍬の掘り込みや耕作者の踏み込みが認められた。耕作土は洪水等により完全に流失したとみられる。

3層（伊場遺跡Ⅱ層・B層）の下に位置する灰色粘質土の上面、標高0.5～0.7mが水田遺構の基盤面である。畦畔痕跡は2条検出された。Ⅲ層大溝の北肩に重複するもの（東西畦畔）と、これから北へ派生するもの（南北畦畔）である。畦畔遺構に画された、南北畦畔の東西に位置する浅い

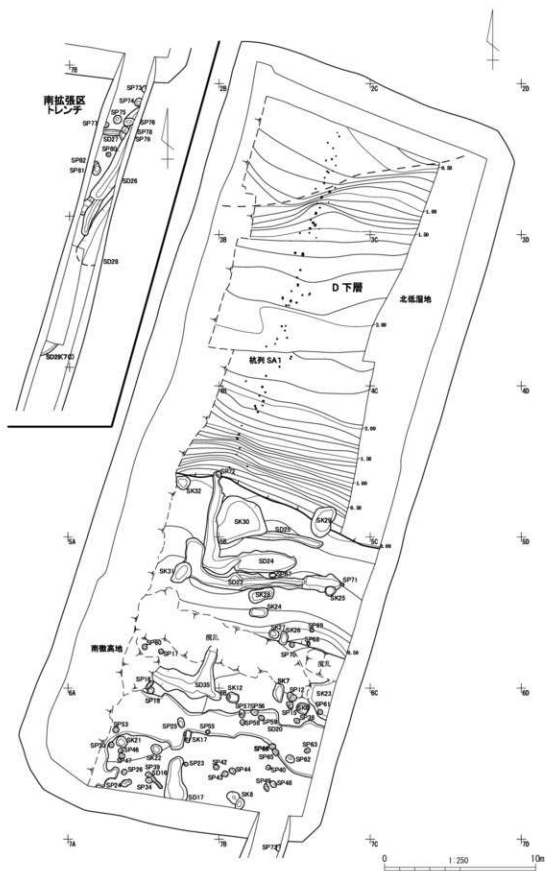


図12 北低湿地D層・南低高地弥生時代面全体図

窪地が水田基盤面にあたると考えられる。

西側水田は、南北9 m、東西15 m以上の規模で、基盤面最深部の標高は0.43 mを測る。東側水田は、南北7.5 m以上、東西2 m以上の規模で、基盤面最深部の標高は0.52 mを測る。

畦畔の高さは0.03～0.06 mを測る。調査区北端においても比高0.05 cmで南側へ低くなる緩やかな段形状を検出したが、ここでは筋状の畦畔形態は呈さない。東西畦畔は幅約1.5 m、高さ0.05 m前後を測り、延長14 mを検出した。方向は東で北へ7°振れる。Ⅲ層大溝の北肩と重複することから、Ⅲ層大溝と併存したとみてよい。中央部が幅約1 mで切れており、ここから大溝へ排水したとみられる。南北畦畔は幅1.5 m前後、高さ0.05 cmを測り、延長7.5 mを検出した。方向は北で東へ7°振れる。

東壁断面・西壁断面ともに大溝Ⅳ上層が基盤土となっていることが確認できる。また、東壁寄りの部分では、基盤土の直上に大溝Ⅲ下層（ビート層）が大溝の北肩を超えて厚さ0.05 cmで薄く広がる。したがって、本水田遺構は大溝Ⅳ上層堆積後、大溝が深さ0.7～0.8 mの流路形状を留めた時点で開田され、Ⅲ下層（ビート層）の堆積中に洪水等による耕土の流失により廃されたと考えられる。耕作土が失われているため水田遺構に伴う遺物は皆無であるが、大溝埋土との重複関係からみて、耕作時期は大溝Ⅲ下層と並行する11世紀から13世紀の間に求められる。

3 D上層の調査

① 堆積状況

D層の広がりは大溝と概ね重複する。D最下層の南端底面は南微高地から北へ落ち込み、北端底面はおおむね調査区の北端から南へ向けて低くなる。すなわち、D層は大溝に先行する自然流路（湿地帯）の埋土と考えられる。D層流路の規模は東壁で幅約25 m前後、西壁で幅約18 m、深さ約3 mで、底面の標高は西壁部で-3.1 mを測る。方向は概ね正東西である。

D層については、上からD上層、D下層、D最下層の3層に大別でき、すべて北低湿地内を流れる自然流路の堆積土と考えられる。

D上層は、南は南微高地の北縁から、北は調査区外にかけて広がり、最大厚0.4 mを測る。土質は黒褐色粘土を基調とするが、南微高地付近では基盤砂が混入し暗灰色～褐灰色の砂質土となる。本土層を切る大溝を挟んで、北側は南へ、南側は北に低くなるレンズ状堆積である。上面の標高は、調査区北壁で-0.2 m前後、南微高地を覆う南端部では0.3 mである。中央部は大溝に挟り取られて失われており、残存最深部での下面の標高は東壁で-1.1 mを測る。土色や土質から、周辺に植物が繁茂する環境下において滞水状態で堆積が進んだとみられる。

本層出土土器は弥生時代中期後葉から弥生時代後期前半にかけてのものを主体とするが、最上層からは古墳時代中期前葉の土器（図30-51）も包含する。最終堆積時期は古墳時代中期の5世紀前半頃と考えられる。本層は、C層の直下に位置することや土質からみて、伊場遺跡基本層序D層に相当すると判断したが、従来C層段階としていた3～4世紀の遺物がこの層にみられた。

② 遺物出土状況

D上層から出土した遺物は、後述するD下層に比べると少量である。遺物は南微高地寄りから北低湿地にかけて分布する（図16・17参照）。北低湿地から弥生時代後期前半の梯子（W85・86）2点や垂木（W89）等の建築部材も出土している。

4 D下層・D最下層の調査

① 堆積状況

D下層は大溝の下に重複する位置にあり、大溝の浸食により多くが失われている。東半部の南微高地寄りが良く残っており、最大厚0.8 mを測る。最深部の位置は、大溝の最深部と概ね一致する。下面は大溝最深部の大溝Ⅶ層よりも0.1 m程度低く、標高は東壁と西壁ともに-2.0 mである。土質は黒褐色粘質土～粘土を基調とし、ピートの混入が顕著である。葎や水草が繁茂するような滞水環境で堆積したと考えられる。本層からは弥生時代中期後葉の土器類・未成品を含む木器類・石器類等の遺物が多量に出土しており、この頃の堆積層とみてよい。従来の伊場遺跡D～D'層に相当すると考えられる。

D下層の下に位置するD最下層は、最大厚1.05 mを測り、最深部での下面標高は-3.1 mである。土質は黒褐色粘土を基調とし、下部には厚さ0.35 mの灰白色粘土層が介在する。滞水環境下で堆積したとみられる。土質はD下層と似る。西壁寄りの-2.0～-2.2 mに位置する黒褐色粘土層に弥生時代中期後葉の遺物が包含されていたが、全体的に遺物量は少ない。本層の最終堆積時期は弥生時代中期後葉であり、D下層と同様に伊場遺跡群D～D'層に相当すると考えられる。

② 杭列 SA1

D下層掘削中およびD最下層の上面において南北に延びる杭列 SA1を検出した。これは杭下端の深度からD最下層の上面付近から打ち込まれたとみられる。とすれば、SA1が設置され使用された時期はD下層段階と考えられる。杭は約70本検出され、D最下層上面すなわちD下層底面の等高線に直交してD下層流路を南北に横断するように打設されている。杭列の南端はD層流路の南肩、すなわち北低湿地の南肩に位置し、北端はD層流路の北肩を超えて調査区外へ延びる。杭列は延長24 mにわたって検出し、方向は北で東へ16° 振れる。南北方向の杭間距離は1 m以内で不規則である。東西幅は0.5～1 mである。杭材は直径5～20 cmの樹皮を残した芯持ち丸太で、わずかにミカン割り材が用いられている。樹種は大部分がアカガシ亜族である。実測図では杭の形状を模式的に真つすぐに表現しているが、実際には曲がっているものが多くあり、中にはへビのように曲がりくねったものもみられた。このような形状のものを打ち込むことは不可能なので、埋没後の土圧によって変形したものと考えられる。杭列が設置された時期は弥生時代中期後葉と考えられる。杭列の性格は明らかでないが、砂堤列間湿地を横断するための木道を架設するための施設、具体的には歩み板を固定するための用途を考えておきたい。また、調査区北壁断面において杭列の北延長部分にあたるE層上面が幅約1 m、深さ0.1 mの規模で少し窪んでいる状況が確認できた。この窪みが木道の設置痕跡である可能性も考えられようか。

③ 遺物出土状況

遺物の大部分はD下層から出土している。弥生時代中期後葉の土器や木器、石器が主体であり、なかでも土器が多数を占める。遺物の分布は圧倒的に南岸寄りに集中しており、南微高地から遺物の投棄等があったことは間違いないと考えられる（図16・17参照）。

土器はほとんどが小片となっており、完形に近い物はおろか大型の破片もほぼ見られなかった。木器には鎌・鋤類の未成品が含まれ、これらは南岸寄りの東壁際に集中する傾向がある。このことは、調査地付近の弥生集落で木器製作が行われていたことの証左である。また、製作途中の未成品が集中して出土していることは、この付近が未成品の水漬け保管場所として使われていた可能性を示唆する。

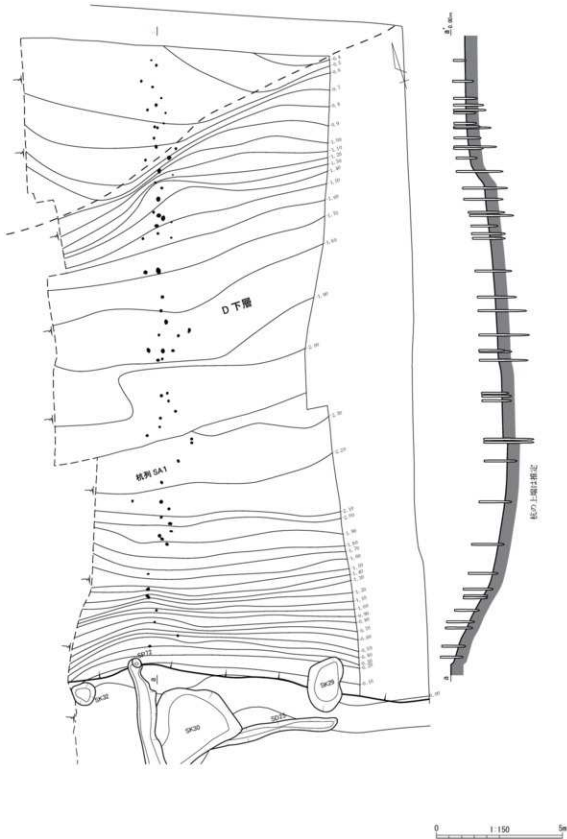


図13 杭列 SA1詳細図

4 D下層・D最下層の調査

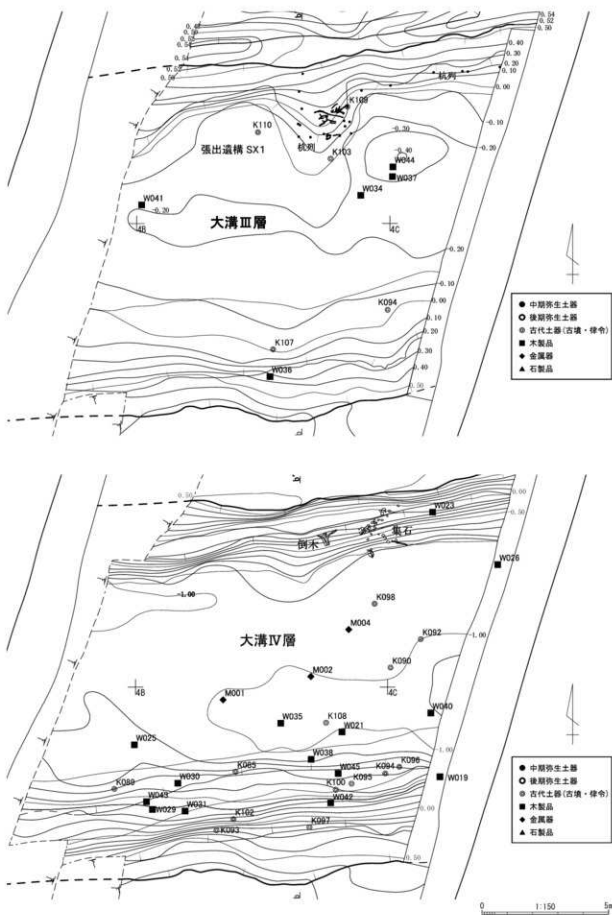


図14 大溝Ⅲ層(上)・Ⅳ層(下)出土遺物分布図

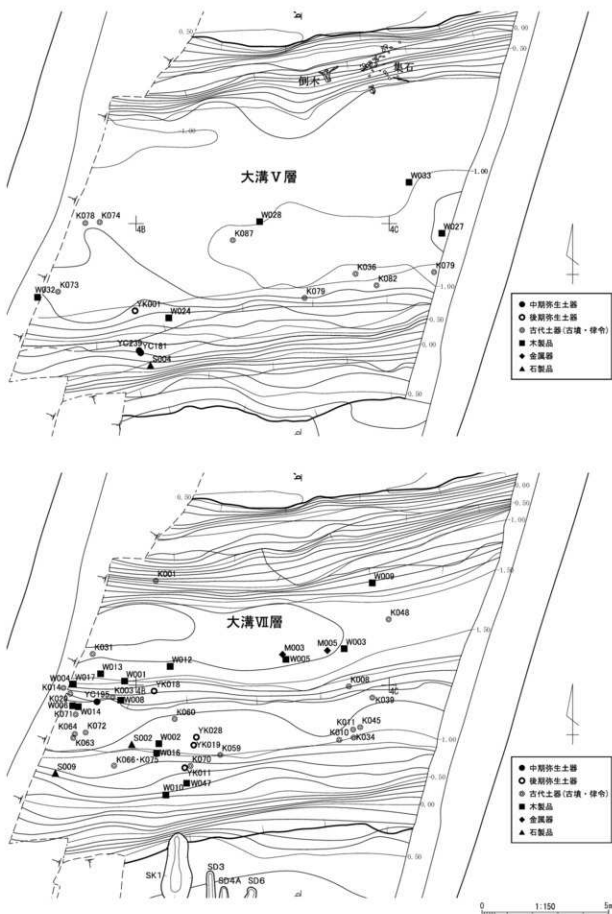


図15 大溝Ⅴ層(上)・Ⅶ層(下)出土遺物分布図

— 36 —

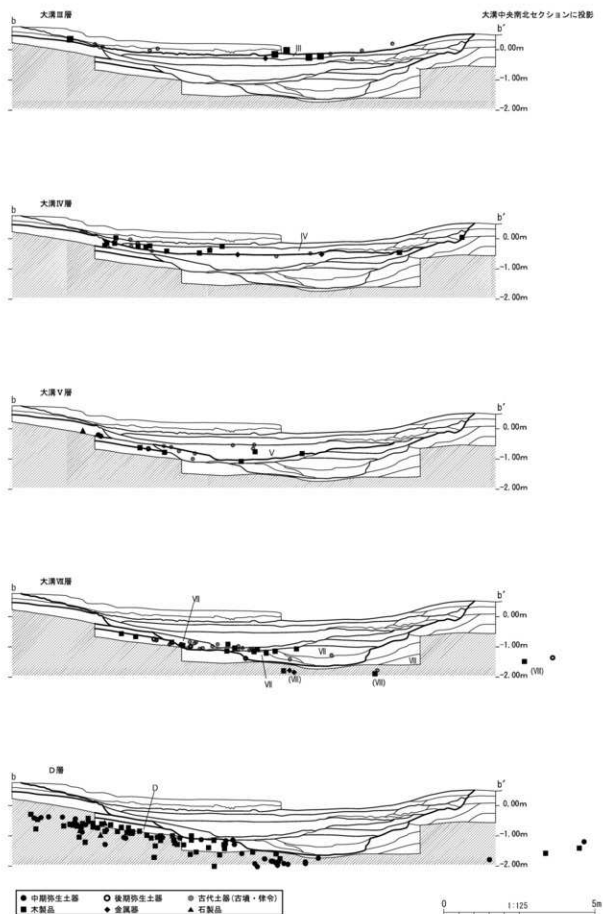


図17 大溝・D層出土遺物の層別垂直分布図

第4章 南微高地の調査成果

1 南微高地の基本層位

調査地の南端では、3層（伊場遺跡Ⅱ層・B層）の下が灰オリーブ色細砂の基盤砂となり、標高0.8 mを測る。基盤砂層は北へ向けて緩やかに低くなり、大溝の南肩付近で勾配を強め北低湿地へと移行する。北低湿地の落ち込み肩部における基盤砂の標高は0 mである。

調査地南端から北へ10 mあまりのところまでには、基盤砂の上に最大厚0.15 mの黒褐色砂質土がのる。これは基盤砂が土壌化した土層とみられる。この黒褐色砂質土が途切れる地点から北にかけて、北低湿地の上層埋土であるD上層、大溝南側Ⅱ層、同Ⅰ層の各層が基盤砂と3層との間に堆積する。これらの堆積層は北低湿地の南縁辺に堆積しており、大溝南側Ⅱ層と大溝南側Ⅰ層は北低湿地の最上層埋土でもある。

大溝南側Ⅰ層は灰色粘質土～粘土から成り、厚さ0.1～0.2 mを測る。上面の標高は0.6～0.8 mで、南から北へ緩やかに低くなる。大溝南側Ⅰ層の堆積時期は出土土器から7世紀代と考えられる。

大溝南側Ⅰ層の下に灰白色～灰色系の粘質～粘土複数層から成る大溝南側Ⅱ層が広がる。本層は最大厚0.5 m、上面の標高は0.4～0.7 mを測り北へ向けて緩やかに低くなる。大溝南側Ⅱ層からは時期決定し得る遺物は出土していないが、D上層と大溝南側Ⅰ層の年代観からすれば、5世紀中頃から6世紀代にかけての堆積層と考えられる。

大溝南側Ⅱ層の上面から7世紀の遺構面を検出しており、これを南側1面と称した。また、大溝南側Ⅱ層の下に基盤砂に形成された遺構面を南側2面とした。南側2面は弥生時代中期後葉から後期前半にかけての遺構面である。なお、南微高地の南半部には大溝南側Ⅱ層が堆積しないため、基盤砂面において南側1面および南側2面の両段階の遺構を検出している。

2 南微高地の遺構概要

南微高地で確認された弥生時代の遺構は、南微高地の北半部においてD層を除去した基盤砂層上面で、溝、土坑、小穴が確認された。検出された小穴の分布密度は低い。南微高地南半部でも黒褐色砂質土を除去した砂層上面で溝、土坑、小穴が確認されており、ここでの小穴は多く存在した。いずれも弥生時代中期後葉～後期前半の遺構である。

古代の遺構は、南微高地北半部では大溝南側Ⅱ層の上面において、7世紀代の溝、土坑、小穴群が確認された。南微高地南半部では黒褐色砂質土を除去した砂層上面で7世紀代の溝、土坑、小穴群が確認された。この検出面は弥生時代と同一面であり、埋土と出土土器によって年代を判定した。南微高地の北半部では7世紀の土坑や小穴は少ない。それに対してSD 8・SD 9より南側の南微高地南半部では検出された土坑や小穴は、北半部よりも多い傾向にある。

以下に述べる主要遺構の規模と小穴（SP）については遺構一覧表に示したので、それを参照されたい。

3 弥生時代の遺構

① 北側溝群

SD23・SD24・SD25 南微高地北半部に位置する。SD23・SD24は平面形がL字形で西側に延びたあとに北側に屈曲する。SD23・SD24ともに基盤砂層の流出により浅くなっているとみられ、断面形は皿状を呈す。両溝遺構の東端から屈曲部までの主軸はN-86°-Wであり、遺構北端から屈曲部までの主軸はSD23がN-4°-E、SD24がN-7°-Eである。SD25は断面形が皿状を呈し、主軸はN-61°-Wである。いずれも埋土は単層であり、黒褐色砂質土を主体として基盤砂層ブロックが混入する。重複関係はSD23がSD24を切り、SK31に切られる。SD24はSK30を切り、SD25はSK30に切られる。SD24が埋没した後、位置を少しずらしてSD23が掘削されたと考えられる。SD23とSD24の底面は東から西へ低くなり、さらに屈曲して北へ向けて下がる。

遺物に関してはSD23からは弥生時代後期の片口鉢（図31-6）・壺（8・9）・甕（10）・高坏（7）が、SD24からは壺（11～14）・甕（15・16）が出土している。14は弥生時代中期の壺だが、これは混入品であろう。

これらの遺構の時期は、出土遺物と遺構の重複関係から弥生時代後期前半と考えられる。SD23およびSD24に関しては北低湿地への排水機能を持った区画溝の可能性が考えられるが、何を区画したのかは不明である。

② 南側溝群

SD17・SD20・SD35 南微高地南半部に位置する。SD17・SD20は断面形が皿形を呈し、SD35はU字形を呈する。SD20・SD35の平面形はL字形でSD20は西側へ延びたあと南側へ屈曲し、SD35は東側へ延びたあと北側へ屈曲する。遺構主軸はSD17がほぼ真北を向いている。SD20は屈曲部から遺構南端へ延びる部分が現存していなかったため把握できないが、東端から屈曲部にかけての遺構主軸はN-77°-Wである。またSD35は西端から屈曲部にかけての遺構主軸はN-50°-Wであり、屈曲部から北端までの遺構主軸はN-16°-Eである。ともに埋土は単層であり、黒褐色砂質土を主とする。重複関係はSD21・SK3・SK11に切られる。

遺物はSD17・SD20から主に弥生時代後期の土器片が出土した。SD20からは壺（図31-1）・高坏（2・3）・甕（4）の他、チャート製の有茎石籬（図64-1）が出土した。有茎石籬は弥生時代中期のもので、混入品と考えられる。SD17から出土した土器は、小片のため図示はしていない。

これらの溝の遺構時期は出土遺物と重複関係から弥生時代後期前半と考えられる。遺構の性格は基盤砂層の流失や後世の削平により残存状況が良くないため、明確にできない。SD35はL字形に折れる溝であることから、方形周溝墓の可能性は否定できないが、あまりにも貧弱である。

③ 北側土坑群

SK30・SK31 南微高地北半部に位置する。SK30は平面形が不整形円で、断面形は皿状を呈する。SK31は平面形が楕円形で、断面形はU字形を呈する。これらの土坑の主軸はSK30がN-53°-Eであり、SK31がN-45°-Eである。ともに埋土は黒褐色砂質土である。重複関係はSK30がSD25を切り、SD24に切られる。SK31がSD23を切る。

遺物は弥生時代後期の土器片が出土しており、SK31からは壺（図31-17・18）・甕（19・20・21）などが出土している。

これらの遺構時期は出土遺物と重複関係から弥生時代後期と考えられる。基盤砂層の流失により遺構の残存状況が良くないため、遺構性格に関しては明確にはし得ない。

3 弥生時代の遺構

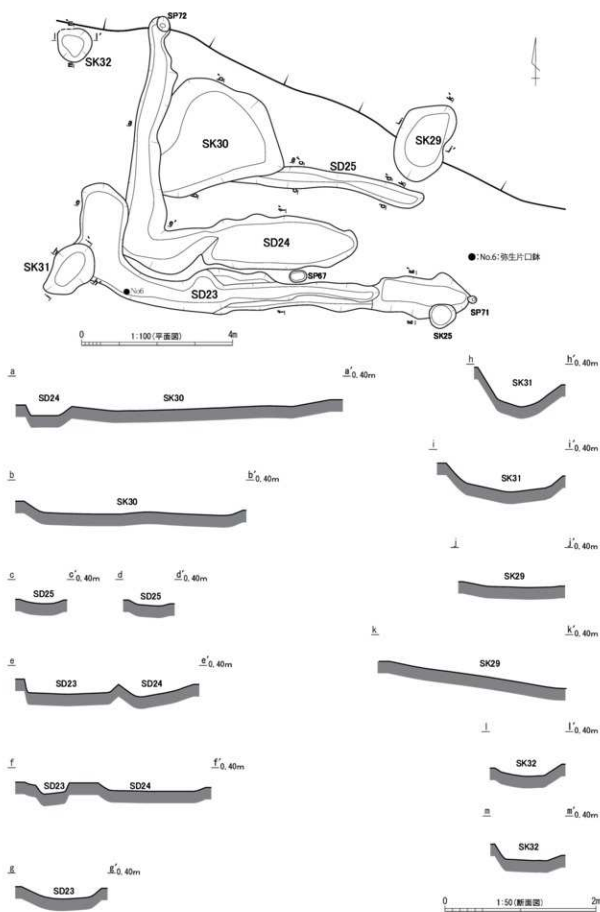


図 18 南微高地弥生時代遺構図（土坑・溝）

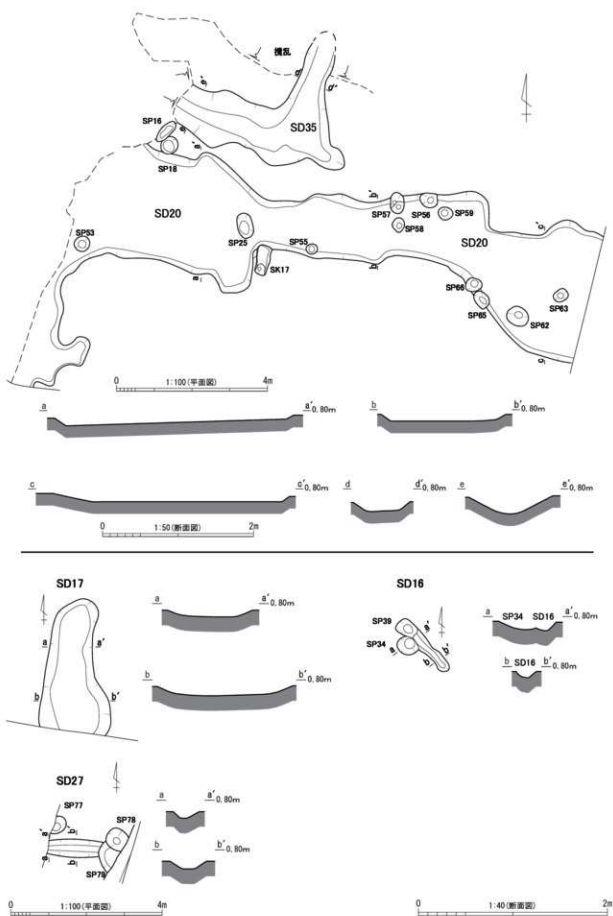


図19 南微高地弥生時代遺構図（溝）

3 弥生時代の遺構

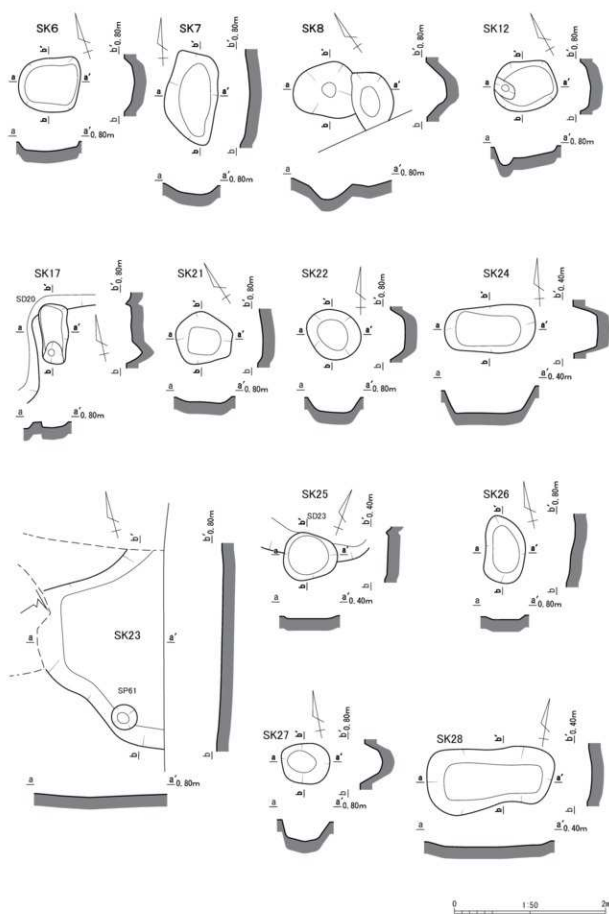


図 20 南微高地弥生時代遺構図（土坑）

SK24・SK26・SK29 南微高地北半部に位置する。SK24の平面形は隅丸長方形で、断面形は逆台形を呈する。SK26・SK29の平面形は不整楕円形で、断面形はSK26が逆台形を呈し、SK29が皿状を呈する。主軸はSK24がN-87°-E、SK26がほぼ真北、SK29がN-29°-Eである。これらの土坑の埋土は黒褐色砂質土を主体とする。

遺物は主に弥生時代中期の土器片が出土している。特にSK24からは甕（図31-22）・高坏（23）・壺底部片、SK26からは壺（24）・甕（25）、SK29からは壺（26）・甕（27）・台盤状土製品（28）が出土している。

遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。SK24の遺構形態は南側微高地において確認された弥生時代の土坑の中では明確な掘り方を有した遺構であり、墓穴の可能性があるが、やや規模が小さい。また、出土遺物からも遺構の性格を明確にするものは発見されていない。

SK27 南微高地北半部に位置する。平面形は不整楕円形で、断面形はU字形を呈する。埋土は褐灰色土の単層である。遺物は出土していない。時期については、弥生時代としたが、確証はない。

SK28 南微高地北半部に位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形は皿状を呈する。主軸はN-81°-Eである。埋土は褐灰色土の単層である。重複関係はSD8に切られる。遺物は弥生時代後期の土器片が出土している。

④ 南側土坑群

SK6・SK7・SK17・SK22 南微高地南半部に位置する。SK6は平面形が不整円形で、断面形は皿状を呈し、SK7は平面形が不整楕円形で、断面形は皿状を呈する。SK17は平面形が長楕円形で、断面形は北側が皿形を呈するが、南側はU字形に深くなる。SK22は平面形が不整円形で、断面形は逆台形を呈する。主軸はSK6がN-73°-W、SK7がほぼ真北、SK17がN-17°-Eである。SK22はN-31°-Wである。ともに遺構の埋土は単層であり、黒褐色砂質土を主体としている。重複関係はSK17がSD20を切る。

遺物は主に弥生時代後期前半の土器片が出土しており、SK22からは甕口縁・山中型高坏の破片が出土している。

これらの遺構の時期は出土遺物から弥生時代後期前半と考えられるが、遺構の性格は明確でない。

4 古代の遺構

① 幅の狭い溝群

SD1・SD2・SD3・SD5・SD6・SD10 南微高地北半部に位置する。SD1・SD2の規模は長さ3.09～3.63m、幅0.24～0.40m、検出面からの深さは約0.07～0.11mを測る。SD3・SD6の規模は長さ5.37～6.33m、幅0.37～0.70m、検出面からの深さは約0.06～0.08mを測る。SD5・SD10の規模は長さ約2.24～4.00m、幅0.18～0.40m、検出面からの深さは約0.03～0.07mを測る。これら6条の溝は主軸がほぼ真北であり、断面形は皿状を呈する。いずれも褐灰色粘質土の単層である。重複関係はSD1・SD2がSD7に切られ、SD3・SD6がSD4A・SD4Bを切る。SD10はSD2に切られ、SD4A・SD4Bを切る。

遺物はSD1からは7世紀の土師器甕小片、SD2からは6世紀末葉の須恵器坏身（図34-76）や土師器の甕、同甕の把手（77）、SD3からは7世紀の土師器の甕（78）、SD5からは7世紀の土師器の甕小片、SD6からは7世紀の土師器の甕（82・83）や須恵器坏身、同坏蓋の破片、SD10からは7世紀の須恵

4 古代の遺構

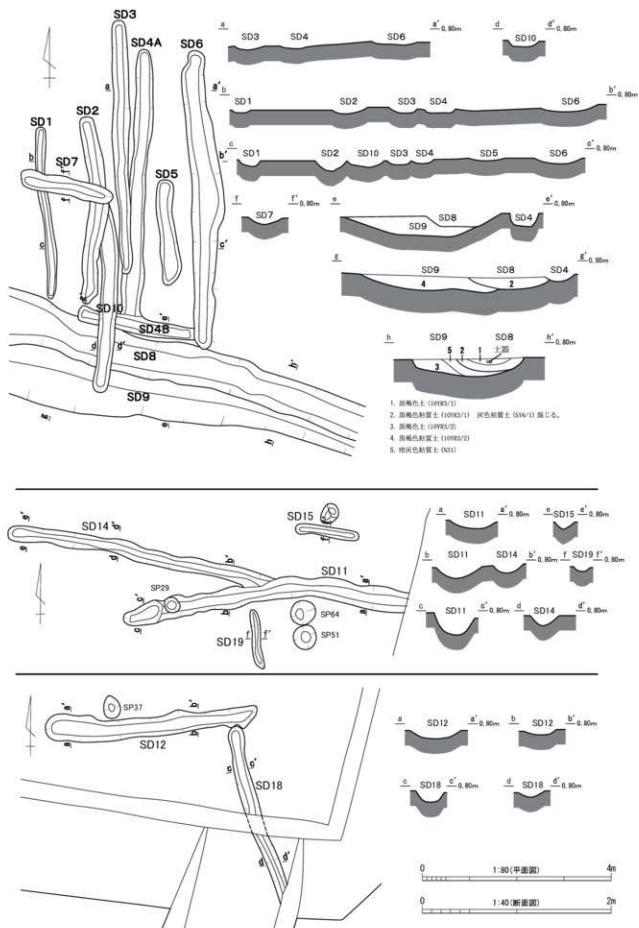


図21 南徴高地古代遺構図(溝)

器ワイングラス形高坏の口縁(89)、土師器の甕や甔の破片が出土している。

これらの遺構の時期は出土遺物から7世紀代と考えられ、遺構の性格については、畑耕作に関連する溝と推定している。

SD 4A・SD 4B 南微高地北半部に位置する。断面形は皿状～U字形を呈する。SD 4Aの規模は長さ5.64 m、幅0.47 m、検出面からの深さは0.04 mを測る。主軸は、ほぼ真北である。SD 4Bの規模は長さ2.48 m、幅0.40 m、検出面からの深さは0.04 mを測り、主軸はN-79°-Wである。これらの埋土は褐灰色粘質土の単層である。重複関係はSD 8を切り、SD 6・SD 10に切られる。2つの溝は同一時期に掘り込まれたT字形の溝であったと判断した。

遺物は6世紀末葉の須恵器の坏蓋(図34-79)、7世紀の土師器の甕、同台付甕(80)や輪羽口(81)が出土している。

時期は7世紀あるいは少し遡る段階と考えられる。遺構の性格は他の幅の狭い溝群と同様、畑耕作に関連する溝と考えられる。

SD 7 南微高地北半部に位置する。断面形はU字形を呈し、遺構主軸はN-79°-Wである。埋土は褐灰色粘質土の単層である。重複関係はSD 1・SD 2を切る。

遺物は7世紀の土師器の甕小片や須恵器の坏蓋小片が出土している。遺構の時期は埋土と出土遺物から7世紀代と考えられ、性格については畑耕作に関連する溝とみられる。

SD 11・SD 12 南微高地南半部に位置する。SD 11は南側へ緩やかに屈曲する。断面形はSD 11が皿状を呈するが、西端のみU字形に深くなる。SD 12の断面形はU字形である。これらの主軸は概ねN-86°-Eである。ともに埋土は褐灰色土の単層である。重複関係はSD 11がSD 14を切り、SD 12はSD 18に切られる。

遺物はSD 11からは7世紀の土師器の甕(90)や須恵器小片が出土している。SD 12からは弥生時代中期の土器片が検出されているが、混入品と考えられる。これらの遺構の時期は、埋土と出土遺物から7世紀代と考えられ、並行する主軸方位を有していることから、同一時期に掘り込まれた可能性がある。底面に掘削時の鋸痕が残る。遺構の性格については、畑耕作に関連する溝と考えられる。

SD 13・SD 14 南微高地南半部に位置する。ともに断面形がU字形を呈し、主軸はN-79°-Wである。埋土は褐灰色土の単層である。溝の形状と主軸から同一の溝であった可能性が高い。SD 14の底面には掘削時の鋸痕が残る。重複関係はSD 14がSD 11に切られる。

遺物はSD 13からは土師器甕小片や弥生時代後期の土器小片が、SD 14からは土師器壺と甕の破片のほかに、弥生時代後期の土器小片が出土している。弥生時代後期のものは混入品とみられる。これらの遺構の時期は出土遺物から7世紀代と考えられる。遺構の性格は畑耕作に関連する溝と考えられる。

SD 15 南微高地南半部に位置する。断面形はU字形を呈する。遺構主軸はN-83°-Wである。主軸がSD 11やSD 14とほぼ並行することから、同一時期に掘り込まれた可能性が考えられる。遺構の埋土は褐灰色土の単層である。

遺物は7世紀の土師器片の他、弥生時代後期の土器小片が存するものの、混入品と考えられる。

遺構の時期は埋土と出土遺物から7世紀代と考えられる。遺構の性格はSD 11やSD 14等と同じく畑耕作に関連するものと考えられる。

SD 18・SD 19 南微高地南半部に位置する。ともに断面形がU字形を呈し、主軸はN-16°-Wである。方向が揃い、ともに埋土が褐灰色土の単層であることから、同一の溝であった可能性が高い。重複

関係はSD18がSD12を切る。

遺物はSD18からは7世紀の須恵器の埴(93)や土師器の台付甕や甕の破片、SD19からは7世紀の須恵器と土師器の破片が出土している。弥生時代後期の土器片も出土しているが、混入品と考えられる。

遺構の時期は埋土と出土遺物から7世紀代と考えられ、遺構の性格については畑耕作に関連するものと考えられる。

② 幅の広い溝群

SD8・SD9 南微高地北半部に位置する。遺構の東側は調査区外となり未検出であり、西側も攪乱されている。規模は長さ11.1m、幅1.45～2.45m、検出面からの深さは0.4mを測り、ともに断面形は皿状を呈する。主軸はSD8がN-73°-W、SD9がN-80°-Wである。SD8の埋土は2層で構成される。1層目は黒褐色土、2層目は黒褐色粘質土で灰色粘質土が混ざるものである。調査区東壁の断面観察により、大溝南側I層を掘り込んでいる状況が確認できた。SD9の埋土は黒褐色土、黒褐色粘質土および暗灰色粘質土である。重複関係はSD8がSD9を切り、SD4B・SD10に切られる。SD9の埋没後にSD8が掘り直されたと考えられる。

遺物は、SD8から7世紀の土師器の台付甕(図34-84)と壺、須恵器の坏身破片が出土しており、SD9からは7世紀の土師器の台付甕(85・87)・甕(86)・甕・手づくね土器(88)が出土している。弥生時代後期の土器片も、少量混入していた。

これらの遺構の時期は埋土が状況と出土遺物から7世紀代と考えられる。SD8・SD9を境として南北で遺構の分布状況や溝の方向が異なるため、区画溝の可能性が考えられる。

③ その他の溝群

他にもSD21などの溝があるものの、不定形であり、出土遺物もほとんどないことから、遺構の性格は不明である。遺構の詳細については、章末の一覧表にまとめたので、それを参照されたい。

④ 北側土坑群

SK1・SK2 南微高地北半部に位置する。SK1は大溝南側II層上面で精査を行った際に遺構の輪郭が認識できたが、大溝南側I層から掘り込まれている可能性がある。SK1は平面形が不整楕円形で、断面はU字形を呈する。底面は北へ向けて低くなる。主軸はほぼ真北である。埋土は2層で構成され、褐灰色土を主調とする。遺物は、7世紀の須恵器坏身(91)や同時期の土師器小片が出土している。

SK2は平面形が不整円形で、断面形は皿状を呈する。埋土は褐灰色粘質土の単層である。

遺物は弥生時代後期の土器片も出土しているが、混入と考えられる。両土坑の時期は7世紀代と考えられる。遺構の性格として、SK1は大溝の中に昇降するための通路とも思えるが、階段状の施設などの痕跡が確認されたわけではなく、確証はない。

⑤ 南側土坑群

SK3・SK11・SK13・SK14 南微高地南半部に位置する。ともに平面形が長楕円形で、断面形はSK3・SK11・SK13が皿状で、SK14はU字形を呈する。遺構の主軸はSK3がほぼ真北を向いており、SK11はN-17°-E、SK13・SK14はN-9°-Wである。ともに遺構の埋土は単層であり、SK3は褐灰色粘質土、SK11は黒褐色砂質土、SK13・SK14は褐灰色土である。重複関係はSK3・SK11がSD35を切り、SK13がSK16に切られる。SK14はSK16・SD20を切る。

遺物はSK3・SK11から7世紀の土師器小片が出土している。SK14からは弥生時代後期の甕片が出土しているが、混入と考えられる。これらの遺構の時期は埋土と出土遺物から7世紀代と考えら

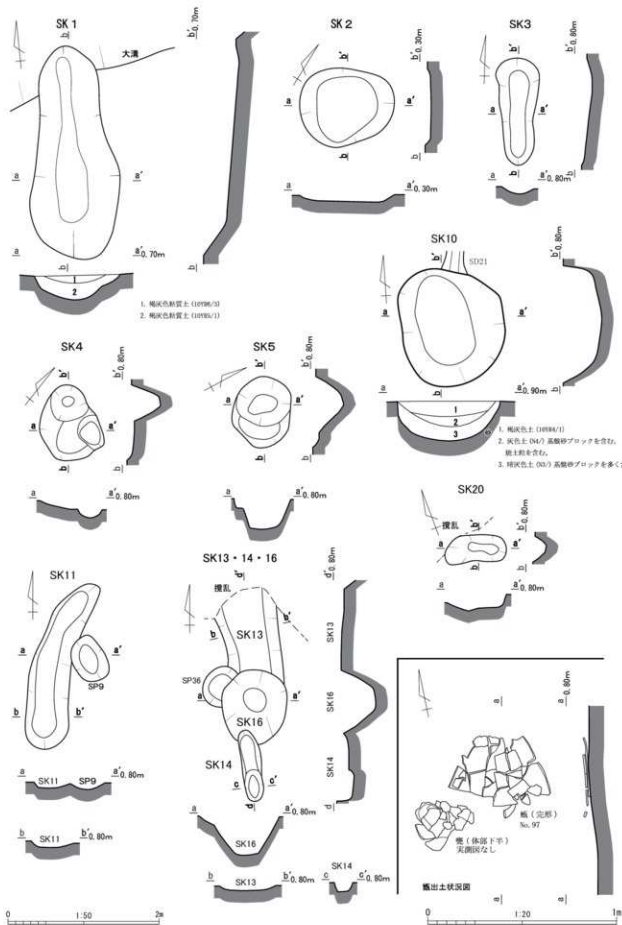


图 22 南徽高地古代遺構図(土坑他)

れるが、SK11は埋土が黒褐色砂質土であることから、時期的に少し遡る可能性がある。遺構の性格は明らかでない。

SK4・SK5・SK16 南微高地南半部に位置する。ともに平面形が不整形形で、SK4は小穴との切り合いが見られる。SK5は2段掘となっており南東側がテラス状を呈し、西側はU字形に深くなっている。SK16の断面形は逆台形を呈する。いずれも埋土は黒褐色砂質土の単層である。重複関係はSK5がSK12を切る。SK16はSK13を切り、SK14に切られる。

遺物は7世紀の土師器の破片が出土しており、SK5からは甕小片、SK16からは長胴甕胴部（図34-92）が出土した。なおSK5からは弥生時代の磨製石斧（図64-8）が出土しているが、混入したものと考えられる。これらは7世紀代の遺構と考えられるが、その性格についてははっきりしない。

SK10 南微高地南半部に位置する。平面形は不整形形で、断面形はU字形を呈する。主軸はN-16°-Wである。遺構の埋土は3層で構成され、1層は褐色土、2層は灰色土に基盤砂ブロックと焼土粒を含み、3層は暗灰色土に基盤砂ブロックを含む。重複関係はSD20を切る。本土坑の北端部から、長さ1.6m、幅1.35m、深さ0.55mの溝SD21が北へ向けて延びる。SK10とSD21は切り合いが認められず、SD21の埋土はSK10の1層と同様であることから、両者は一連の遺構である可能性が高い。

遺物は、7世紀の土師器甕小片が出土した。時期は、埋土と出土遺物から7世紀代と考えられるが、性格は明確でない。

SK20 南微高地南半部に位置する。検出面は基盤砂層上面である。平面形は楕円形で、断面形はU字形を呈する。遺構主軸はN-64°-Wである。埋土は褐色土の単層である。重複関係はSD20を切る。

遺物は7世紀の土師器甕（図34-95）と須恵器坏身の小破片が出土した。遺構の時期は埋土と出土遺物から7世紀代と考えられる。遺構の性格は不明である。

その他 A5区の北東部で確認されたSP2・SP3の周辺において、7世紀の土師器甕の完形品（97）と平底長胴甕の胴部下半が、ともに潰れて平面的に発見された（図21右下）。精査を繰り返したものの、遺構は確認できなかったが、浅い何らかの遺構の底面での遺物出土状況とみられる。

5 南拡張区の遺構

南微高地の調査を進めるなか、本調査区より南にも遺構が存在する可能性が高くなった。そこで、遺構の広がりを確認するため、溝掘り（トレンチ）を調査区の南東角から南へ50m、さらに南へ調査坑を3ヶ所設定して、調査区から100mまでの範囲における遺構の広がりを確認した。これらの調査区を南拡張区と呼ぶことにした。その結果、最南端の調査坑G3まで弥生時代後期の遺構が確認され、古代の遺構や包含層も調査坑G2までは存在することが明らかとなった。

① 土層及び包含層の広がり

図23上には南拡張区の土層柱状図を示した。地表下2mまでは山土による造成土であるが、工場解体に伴う攪乱が著しい。この攪乱は、基盤層に達する所も多く存在した。2層は水田や蓮池の耕作層と考えられる有機質の青灰色粘土層であり、3層は有機質の強い褐色粘土層の水田床土である。トレンチのP2地点から調査坑G1にかけては、その下に4、4'層とした灰褐色～暗灰色粘土層が標高0.5mあたりにあり、7世紀を中心とした古代の土器を包含している。5層は灰色粘土層で伊場遺跡でC層とする3～4世紀の層であるが、遺物は見られなかった。6層は黒褐色粘土層で伊場遺跡ではD層とした弥生時代の層であるが、南拡張区ではほとんど土器は確認されなかつ

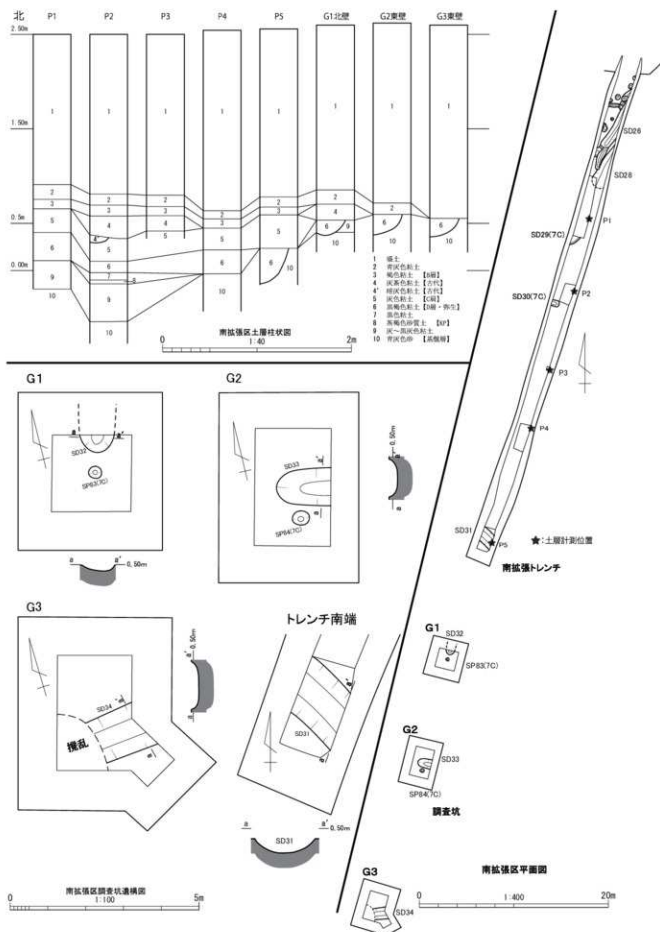
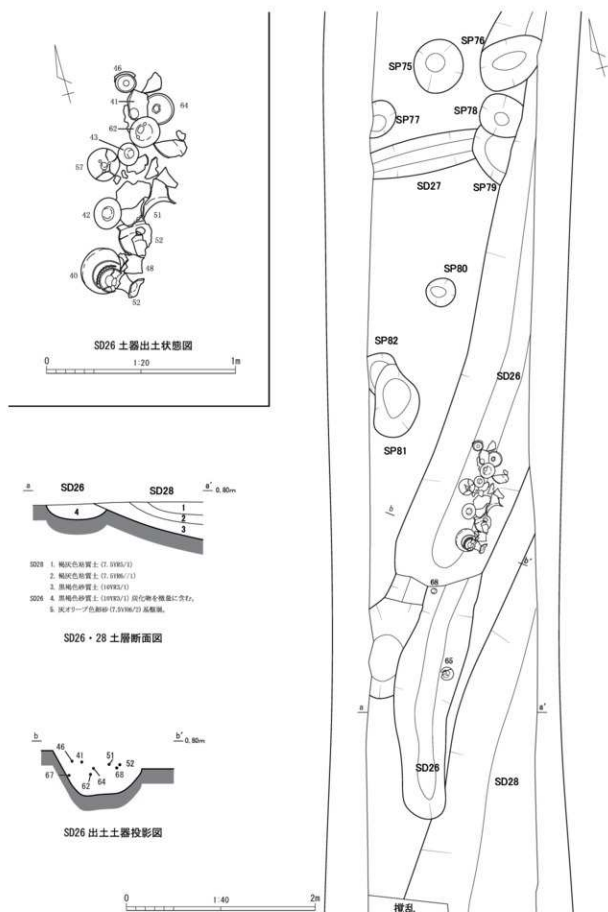


図23 南嶺強区遺構全体図・土層柱状図



た。4～6層が存在するのは、トレンチ中ほどのP1の位置から南端までで、弥生時代から古代にかけて低地となっていたところである。基盤層は10層とした青灰色砂層である。低地として最も深いのが、P2のあたりである。ここでは標高-0.1～-0.2 mに8層としたカワゴ平軽石を含む茶褐色砂質層が確認された。

基盤層はトレンチ北側で-0.2 m、最深部P2地点で-0.55 m、トレンチ南端で+0.3 m、G1～G3で+0.4～0.6 mである。トレンチの南側2/3は低地で、粘土層が堆積しているが、G2・G3では基盤層の上に直接水田や畑地の耕作層がのることから、南拡張区以南にも埋没砂丘の高位面が存在する。G1～G3ではこの基盤層に掘り込まれた弥生時代後期の溝遺構が検出され、いずれからも後期前半の弥生土器が出土した。

弥生時代の遺構は、本調査区の南微高地から続く基盤砂層が高いトレンチ北半で溝や小穴が多く検出された。トレンチ南端から3つの調査坑にかけては、前述したとおり溝遺構が確認された。

古代の遺構は、低地のトレンチP1・P2の位置でも小穴が検出され、トレンチ調査区全面において土器が確認された。特に多いのがP1～P3地点あたりである。調査坑では遺物は出土しなかったが、覆土の状況から古代と考えられる小穴がG1・G2で検出されている。

② トレンチ調査区

遺構はトレンチの北側1/4に密集して確認された(図23・24)。南微高地南半部から継続する遺構であるが、それより南側では、小さな低地帯を挟み、遺構は希薄となっている。トレンチ北側の遺構は、いずれも弥生時代後期のもので、溝と小穴がある。SD27は、SD12・18と一連の細い溝の可能性はあるが、この地区の他の遺構と同じ覆土であることから、弥生時代後期の遺構に含めた。なお、SD27からは、遺物は出土していない。小穴の多くは弥生時代後期の柱穴と考えられるが、トレンチ内では建物の柱と考えられる並びは確認できなかった。SD26・28は、遺構内覆土だけでなく、土器を出土しており、弥生時代後期前半で誤りない。とくに、SD26での土器の出土は著しい。

SD26 南南西方向の溝で、北側は調査区外に及んでいる(図24)。溝は、断面形が逆台形で、幅が約1 m、深さが検出面から下へ0.5 m弱である。SD26の南端は、段差をなし細くなって南に延びている。別遺構(溝)の可能性が高いが、平面的に遺構確認をした時点では、切合関係は認められなかった。南側の細い部分をSD26南、幅広い部分をSD26北としておく。

SD26南あたりでの遺構は複雑に切り合っている。SD28はSD26の東側にあるが、SD26を切って掘られていることが、確認されている。トレンチ調査であるため、溝幅は2.0 m以上存在すると推定されるが明確ではない。深さは、0.4 m以上存在する。土器は、後期弥生土器が少数出土している。SD26南からは、図33-69の手づくね鉢と65の高坏脚部が発見されている。

SD26北の南端では、後期弥生土器がまとまって発見された。複数個体の高坏脚部が天地逆にして、壺の口縁部のようにして検出された。また、複数の壺の口縁部も口を上にして、高坏の脚部とともに検出された。壺は、完形品が南端にあり、甕もその周辺に存在した。いずれも自然に堆積したとか、不要になった土器が投棄された状況ではなく、意図的に置いたと考えられる。壺は、完形品を含め、口縁部の数から最低6個体、甕は上部の数から4個体、高坏は脚部の数から5個体、鉢は口縁部の数から3個体が存在する(図32・33)。SD26北は、方形周溝墓の溝の可能性が高いが、本調査区に北構が確認されないことから、周溝墓の本体はトレンチの東側に想定される。そうした場合、SD28やSD26南との間には新旧関係が存在することになるが、調査区の範囲内では、明確にはできなかった。

トレンチ南端から調査坑で検出された溝 溝はトレンチ南端部ではSD31、調査坑G 1ではSD32、同G 2ではSD33、同G 3ではSD34が確認された（図23）。いずれも基盤層をなす灰青色砂層（図23の10層）に切り込んで存在する。また、どれも覆土は黒褐色粘土層で、伊場遺跡での基準層位のD層にあたる。断面形は浅いU字形を呈するが、後世の削平や攪乱が及んでおり、当初の深さは不明である。出土遺物は、SD31では確認されなかったが、ほかの溝では後期弥生土器が出土した。これらの溝は、おおよそ東西方向、あるいは南北方向にあること、幅が1.0～1.5 mであることから、方形周溝墓の溝の可能性がある。

表3 遺構観察表(1)

遺構名	グリッド	検出層	長(m)	幅(m)	厚(m)	掘土	年代	探検回数	備考・出土遺物
発生時代不明の遺構									
SP24	B5	基盤砂層	1.20	0.60	0.37	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生中層	20	発生中層土層、図31-22-23
SP25	B5	基盤砂層	0.90	0.35	0.08	黒褐色砂質土10VR3/1	発生中層	20	発生中層土層、図31-24-25
SP29	B4	基盤砂層	2.10	1.35	0.08	黒褐色砂質土10VR3/1	発生中層	18	発生中層土層、図31-28-29
SP34	A6	基盤砂層	0.45	0.40	0.09	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生中層		発生中層小片
SP46	A6	基盤砂層	0.30	0.30	0.38	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生中層		発生中層土層、図31-32
SP48	B6	基盤砂層	0.30	0.30	0.22	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生中層		発生中層小片
SP63	A6	基盤砂層	0.40	0.40	0.30	黒褐色砂質土10VR3/1	発生中層		発生中層土層、図31-33
発生時代後期の遺構									
SP68	D6	基盤砂層	0.80	0.70	0.19	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期	20	発生後期7小片
SP7	B5-B6	基盤砂層	1.20	0.70	0.14	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期	20	発生後期小片
SP8	B6	基盤砂層	1.30	0.70	0.24	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期	20	発生後期小片
SP12	B6	基盤砂層	0.70	0.70	0.14	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期	20	時代不詳・遺物なし
SP17	A6	基盤砂層	0.80	0.40	0.08	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期	20	発生後期小片
SP22	A6	基盤砂層	0.70	0.65	0.21	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期	20	発生後期山中型瓦片・遺物
SP23	B5-B6	基盤砂層	2.80	1.30	0.25	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期	20	時代不詳・遺物なし
SP25	B5	基盤砂層	0.70	0.60	0.03	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期	20	時代不詳・遺物なし
SP27	B5	基盤砂層	0.60	0.50	0.28	褐灰色土10VR4/1	発生後期	20	時代不詳・遺物なし
SP28	B5	基盤砂層	1.65	0.80	0.07	褐灰色土10VR4/1	発生後期	20	発生後期7小片
SP30	A4-A5 B4-B5	基盤砂層	3.30	2.50	0.18	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期	20	時代不詳・遺物なし
SP31	A5	基盤砂層	1.80	1.10	0.49	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期	20	発生後期、図31-17-21
SP32	A4	基盤砂層	0.80	0.85	0.20	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期	20	時代不詳・遺物なし
SP16	A6	基盤砂層	1.50	0.30	0.08	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期	18	
SP17	A6	基盤砂層	2.45	1.50	0.08	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期	18	
SP20	A4-B5	基盤砂層	13.80	3.10	0.07	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期	18	発生後期、図31-1~4、右欄、図64-1
SP23	A5-B5	基盤砂層	11.75	1.80	0.12	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期	18	発生後期、図31-8~10
SP24	A4-B5	基盤砂層	11.80	1.45	0.16	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期	18	発生後期、図31-11~16
SP25	B4-B5	基盤砂層	5.10	1.10	0.08	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期	18	時代不詳・遺物なし
SP26	南沢遺部	基盤砂層	8.30	1.00	0.16	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期	24	発生後期土器多、図32-33-40-48
SP27	南沢遺部	基盤砂層	1.10	0.40	0.03	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期	24	時代不詳・遺物なし
SP28	南沢遺部	基盤砂層	4.00	1.40	0.40	褐灰色土13VR5/1	発生後期	24	発生後期土器、図32-43~71
SP31	南沢遺部	C層直下		1.80		黒褐色砂質土13VR3/1	発生後期	23	未定
SP32	Q1E	黒色腐植土層直下	1.00	0.70	0.16	黒褐色土、O層相当	発生後期	23	確認調査 発生時代後期、図33-73-74
SP33	Q2E	灰青色土層	1.00	0.22		黒褐色土、O層相当	発生後期	23	確認調査 発生時代後期、図33-12
SP34	Q3E	黄灰色土層直上	1.20	0.20		黒褐色土層、O層相当	発生後期	23	確認調査
SP35	A5-A6 B5	基盤砂層	5.30	1.30	0.30	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期	19	時代不詳・遺物なし
SP12	D6	基盤砂層	0.70	0.30	0.48	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		発生後期小片
SP15	A6	基盤砂層	0.60	0.40	0.22	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		発生中層・発生後期小片
SP16	A6	基盤砂層	0.70	0.25	0.10	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP17	A5	基盤砂層	0.30	0.30	0.34	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP18	A5-A6	基盤砂層	0.30	0.42	0.11	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP23	A6	基盤砂層	0.30	0.25	0.08	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期		発生後期土層、図31-29~31
SP24	A6	基盤砂層	0.70	0.40	0.20	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP25	A6	基盤砂層	0.65	0.40	0.22	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期		発生後期7小片
SP26	A6	基盤砂層	0.40	0.35	0.21	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP30	A6	基盤砂層	0.40	0.35	0.47	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		発生後期小片
SP38	D6	基盤砂層	0.40	0.40	0.21	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP39	B6	基盤砂層	0.45	0.35	0.17	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP40	B6	基盤砂層	0.30	0.30	0.09	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		発生後期7小片
SP42	A6	基盤砂層	0.40	0.35	0.13	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP43	D6	基盤砂層	0.40	0.25	0.24	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP44	B6	基盤砂層	0.50	0.30	0.10	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP47	A6	基盤砂層	0.45	0.40	0.38	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		発生後期小片
SP48	B6	基盤砂層	0.45	0.40	0.44	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP55	A6	基盤砂層	0.30	0.30	0.28	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP56	A6	基盤砂層	0.45	0.40	0.27	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP67	D6	基盤砂層	0.55	0.35	0.26	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP68	D6	基盤砂層	0.45	0.30	0.26	黒褐色砂質土10VR3/1	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP69	B6	基盤砂層	0.40	0.30	0.30	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP60	A5	基盤砂層	0.40	0.35	0.33	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		発生後期小片
SP61	D6	基盤砂層	0.40	0.35	0.14	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP62	D6	基盤砂層	0.60	0.30	0.11	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP63	D6	基盤砂層	0.40	0.30	0.09	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP65	B6	基盤砂層	0.45	0.35	0.19	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP66	D6	基盤砂層	0.45	0.35	0.26	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP67	B5	基盤砂層	0.45	0.30	0.05	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP68	B5	基盤砂層	0.30	0.20	0.22	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP69	B5	基盤砂層	0.30	0.35	0.10	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP70	B5	基盤砂層	0.35	0.30	0.20	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP71	B5	基盤砂層	0.25	0.30	0.11	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP72	A4-B4	基盤砂層	0.40	0.30	0.17	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		時代不詳・遺物なし
SP73	南沢遺部	基盤砂層	0.45	0.30	0.25	黒褐色砂質土10VR3/1基盤砂ブロック層	発生後期		発生後期、図31-24
SP74	南沢遺部	基盤砂層	0.60	0.40	0.33	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		発生後期7小片
SP75	南沢遺部	基盤砂層	0.50	0.50	0.35	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		発生後期7小片
SP76	南沢遺部	基盤砂層	0.60	0.55	0.43	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		発生後期
SP77	南沢遺部	基盤砂層	0.40	0.30	0.13	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		発生後期
SP78	南沢遺部	基盤砂層	0.45	0.40	0.22	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		発生後期
SP79	南沢遺部	基盤砂層	0.50	0.40	0.24	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		発生後期
SP80	南沢遺部	基盤砂層	0.30	0.30	0.17	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		発生後期
SP81	南沢遺部	基盤砂層	0.60	0.45	0.45	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		発生後期
SP82	南沢遺部	基盤砂層	0.40	0.25	0.18	黒褐色砂質土10VR3/2	発生後期		発生後期

表4 遺構観察表(2)

遺構名	グリッド	検出箇所	長[m]	幅[m]	深さ[m]	覆土	年代	詳細観察	備考・出土遺物
古代以前の遺構									
大溝	B3-C3 A4-B4 O4	II層直下	15.00	18.00	2.40	大溝壁～河原	8～13世紀	6-7 6-9-11	
低出遺構5X1	B3	河原直下	3.00	2.20	0.15		12世紀	10	大溝Ⅱ層段層
大溝北側 溝上遺構	B3	溝壁以上	1.80	1.10	0.15		8世紀	10	大溝Ⅱ層段層
大溝北側排水	大溝2区 B3	V層上面	0.80	0.80			8世紀	10	大溝Ⅱ層段層
水田	B2-C2 B3-C3	II層直下	13.00	12.00	0.05		中世	11	水田2区、鎌倉時代
杭州SA1	B2-B3-B4	O層上面	24.00	1.60		褐色粘質土	弥生後期		
SK1	B4	南沢Ⅱ層上面	2.80	1.10	0.30	褐色粘質土	7世紀	22	大溝内への埋り口? 後奈良、国34-81
SK2	A4	南沢Ⅱ層上面	1.12	1.08	0.11	褐色粘質土10VR6/1	7世紀	22	50層上面で確認、弥生後期小片混入
SK3	A5	基層中層	1.40	0.80	0.09	褐色粘土10VR4/1	7世紀	22	土師器小片
SK4	B5	基層中層	1.00	0.75	0.11	黒褐色砂質土10VR3/1	7世紀	22	土師器小片
SK5	B5	基層中層	0.80	0.80	0.26	黒褐色砂質土10VR3/1基層砂ブロック層	7世紀	22	土師器小片
SK10	A6	基層中層	1.80	1.35	0.50	褐色粘土10VR4/1	7世紀	22	土師器小片
SK11	B5-B6	基層中層	2.30	0.80	0.08	黒褐色砂質土10VR3/1	7世紀	22	土師器小片
SK13	B5-B6	基層中層	1.10	0.70	0.12	褐色粘土10VR4/1	7世紀?	22	時代不詳(遺物なし)
SK14	B6	基層中層	0.85	0.30	0.08	褐色粘土10VR4/1	7世紀?	22	土師器?小片
SK18	B6	基層中層	0.80	0.70	0.33	黒褐色砂質土10VR3/1	7世紀	22	土師器、国34-82
SK20	A6	基層中層	1.15	0.50	0.10	褐色粘土10VR4/1	7世紀	22	土師器、国34-83、濃煮器小片
SD1	B5	南沢Ⅱ層上面	3.80	0.18	0.07	褐色粘質土10VR5/1	7世紀	21	SD1に切られる
SD2	B5	南沢Ⅱ層上面	3.80	0.40	0.11	褐色粘質土10VR5/1	7世紀	21	SD18やSD17に切られる 濃煮器・土師器、国34-79～81
SD3	B4-B5	南沢Ⅱ層上面	5.30	0.40	0.05	褐色粘質土10VR5/1	7世紀	21	SD48やSD50に切られる 土師器、国34-78
SD4	B4-B5	南沢Ⅱ層上面	5.90	0.40	0.03	褐色粘質土10VR5/1	7世紀	21	7世紀50年代のSD33-6・10に切られる
SD5	B5	南沢Ⅱ層上面	2.20	0.40	0.02	褐色粘質土10VR5/1	7世紀	21	
SD6	B4-B5	南沢Ⅱ層上面	6.30	60.00	0.10	褐色粘質土10VR5/1	7世紀	21	SD48やSD50に切られる 土師器、国34-82-83
SD7	B5	南沢Ⅱ層上面	2.80	0.40	0.01	褐色粘質土10VR5/1	7世紀	21	SD1・28に切れる
SD8	A5-B5	南沢Ⅱ層上面	11.00	0.80	0.11	黒褐色粘質土	7世紀	21	SD9やSD4-6・10に切られる 土師器、国34-84
SD9	A5-B5	南沢Ⅱ層上面	11.20	1.20	0.16	黒褐色粘質土	7世紀	21	土師器、国34-85～88
SD10	B5	南沢Ⅱ層上面	4.00	0.40	0.10	褐色粘質土10VR5/1	7世紀	21	濃煮器、国34-89
SD11	B6	基層中層	6.00	0.15	0.12	褐色粘土10VR4/1	7世紀	21	濃煮器あり 土師器、国34-90
SD12	A5-B6	基層中層	4.50	0.35	0.70	褐色粘土10VR4/1	7世紀?	21	濃煮器あり 弥生中層土器混入
SD13	A6	基層中層	1.85	0.30	0.08	褐色粘土10VR4/1	7世紀	21	SD14の砂質土 土師器小片(弥生後期小片あり)
SD14	A6-B6	基層中層	5.70	0.35	0.11	褐色粘土10VR4/1	7世紀	21	濃煮器あり 土師器小片
SD15	B6	基層中層	1.35	0.25	0.06	褐色粘土10VR4/1	7世紀	21	土師器小片
SD18	B6	基層中層	1.80	0.35	0.13	褐色粘土10VR4/1	7世紀	21	濃煮器、国34-83
SD19	B6	基層中層	1.20	0.20	0.08	褐色粘土10VR4/1	7世紀	21	土師器小片
SD21	A5-A6	基層中層	1.40	0.30	0.08	褐色粘土10VR4/1	7世紀?		弥生後期土師器入、国31-5
SD22	A5	基層中層	1.00	0.40	0.08	黒褐色砂質土10VR3/1	7世紀?		時代不詳(遺物なし)
SD23	南沢溝部	灰褐色粘土層	1.30	0.70	0.16	黒褐色砂質土10VR2/2	7世紀		
SD30	南沢溝部	灰褐色粘土層	0.80	0.70	0.14	黒褐色砂質土10VR3/1	7世紀?		
SP2	A5-B5	南沢Ⅱ層上面	0.30	0.30	0.11	褐色粘質土13VR5/1	7世紀?		時代不詳(遺物なし)
SP3	A5-B5	南沢Ⅱ層上面	0.35	0.35	0.08	褐色粘質土13VR5/1	7世紀?		時代不詳(遺物なし)
SP4	B5	南沢Ⅱ層上面	0.35	0.35	0.04	褐色粘質土10VR6/1	7世紀?		時代不詳(遺物なし)
SP5	B5	南沢Ⅱ層上面	0.50	0.35	0.05	褐色粘質土10VR6/1	7世紀以降		SD6を切る
SP6	B5	南沢Ⅱ層上面	0.60	0.35	0.03	褐色粘質土10VR5/1	7世紀?		時代不詳(遺物なし)
SP8	A6	基層中層	0.40	0.40	0.21	褐色粘土10VR4/1	7世紀?		
SP9	B5	基層中層	0.60	0.40	0.08	褐色粘土10VR4/1	7世紀		弥生後期?小片混入
SP10	B6	基層中層	0.50	0.40	0.43	褐色粘土10VR4/1	7世紀		土師器、弥生後期小片
SP11	B6	基層中層	0.40	0.30	0.30	黒褐色砂質土10VR3/1	7世紀		土師器小片
SP13	A6	基層中層	0.80	0.40	0.07	褐色粘土10VR4/1	7世紀		土師器小片
SP14	A6	基層中層	0.30	0.40	0.03	黒褐色砂質土10VR3/1基層砂ブロック層	7世紀		濃煮器・土師器小片
SP19	A6	基層中層	0.40	0.40	0.27	褐色粘土10VR4/1	7世紀		濃煮器、国34-84
SP20	A6	基層中層	0.45	0.40	0.17	褐色粘土10VR4/1	7世紀		土師器小片
SP21	A6	基層中層	0.80	0.70	0.10	褐色粘土10VR4/1	7世紀?		
SP22	A6	基層中層	0.30	0.30	0.19	黒褐色砂質土10VR3/1基層砂ブロック層	7世紀		土師器小片
SP27	A6	基層中層	0.30	0.30	0.35	黒褐色砂質土10VR3/1基層砂ブロック層	7世紀		濃煮器、黒片片断
SP28	A6	基層中層	0.40	0.20	0.06	褐色粘土10VR4/1	7世紀		
SP29	B6	基層中層	0.35	0.31	0.29	褐色粘土10VR4/1	7世紀?		
SP31	A6	基層中層	0.55	0.50	0.30	黒褐色砂質土10VR3/1基層砂ブロック層	7世紀?		土師器?小片
SP32	A6	基層中層	0.50	0.45	0.40	黒褐色砂質土10VR3/1基層砂ブロック層	7世紀		土師器小片
SP33	A6	基層中層	0.40	0.30	0.17	黒褐色砂質土10VR3/1基層砂ブロック層	7世紀		土師器小片
SP35	A6	基層中層	0.40	0.40	0.09	黒褐色砂質土10VR3/1基層砂ブロック層	7世紀		土師器小片
SP26	A6	基層中層	0.60	0.30	0.07	黒褐色砂質土10VR3/1基層砂ブロック層	7世紀?		時代不詳(遺物なし)
SP31	B6	基層中層	0.50	0.35	0.32	黒褐色砂質土10VR3/1基層砂ブロック層	7世紀?		土師器?小片
SP41	A6	基層中層	0.40	0.40	0.22	褐色粘土10VR4/1	7世紀?		時代不詳(遺物なし)
SP43	A6	基層中層	0.45	0.40	0.23	黒褐色砂質土10VR3/1基層砂ブロック層	7世紀		土師器小片
SP50	A6	基層中層	0.30	0.20	0.16	褐色粘土10VR4/1	7世紀?		時代不詳(遺物なし)
SP51	B6	基層中層	0.50	0.50	0.27	褐色粘土10VR4/1	7世紀		7世紀、国34-96
SP52	A6	基層中層	0.60	0.55	0.27	褐色粘土10VR4/1	7世紀?		時代不詳小片のみ
SP54	A6	基層中層	0.45	0.35	0.24	褐色粘土10VR4/1	7世紀?		時代不詳(遺物なし)
SP54	B6	基層中層	0.30	0.30	0.18	褐色粘土10VR4/1	7世紀?		時代不詳(遺物なし)
SP83	Q1区	黒褐色粘質土層 直下	0.35	0.30		褐色粘土層	7世紀		遺物なし、確認調査
SP84	Q2区	灰青色粘土砂層 直下	0.45	0.40		褐色粘土層	7世紀		遺物なし、確認調査
SP21-7、SK9-15-19区交差	A6	基層中層	0.75	0.70	0.08	黒褐色砂質土10VR3/1	時代不詳(遺物なし)	20	時代不詳(遺物なし)

第5章 伊場大溝の出土遺物

1 大溝Ⅶ層の出土土器（6世紀末葉～7世紀）

Ⅶ層出土土器は、現地においてⅦ層（Ⅶ下層）として取り上げたものと、Ⅴ層下部のⅤ'層（Ⅶ上層）として取り上げたものがある。実測図版もこの取り上げに従いまとめて示しているが、Ⅴ'層の出土品を見る限り、全体としてやや新しい傾向は認められるものの、Ⅶ層とほぼ同一時期幅の遺物群と認められることから、本節では一括して紹介する。

出土土器には須恵器と土師器のほか、土製品として轆の羽口と埴塙がある。須恵器では、坏身、坏蓋、高坏、高坏蓋、壺、壺蓋、甕、瓶類、埴、鉢、陶臼、甕などが出土した。土師器では坏類、壺、埴、鉢、甕などがある。以下、須恵器の編年については、鈴木2004・2005による。

本節ではⅦ層として取り上げた6世紀末葉～7世紀代の遺物を紹介する。

① 須恵器（図25・26）

坏身・坏蓋 坏身は2～12、59～64で、器径（最大径）は15.2～10.4cm、口径は13.0～8.4cm、器高は4.7～3.0cmである。2は器径が大きい割に、立ち上がりは小さい。9は器径が12.0cmと小型の部類には入るものの、最小段階の坏身ではないが、立ち上がりは極端に委縮している。10・63は器径が最小のグループで、しかも立ち上がりは受け部からわずかに上へ出るだけである。12は小振りではあるが、立ち上がりは高く、しかも口唇部内面は段状となっている。また他の坏身と比べて、受け部の下が凹んでいることから、尾張東山窯産の須恵器と考えられる。64は返蓋が伴う碗形をした坏身（坏G身）と考えられるもので、外面と口唇部内面には沈線が入れている。

坏蓋は、1・13～22である。1のみはⅦ層からの出土である。時期は6世紀初頭に遡る。口径は11.4cm、器高は4.4cmの大きさで、丸い天井と直線的な口縁部との境をなす稜は、丸みを有しシャープさを欠いている。ケズリ調整は天井部の半分強の範囲に行われている。色調からみて陶邑窯産ではないが、TK47型式に並行する製品と考えられる。

13～22の器径は14.7～10.4cm、器高は5.0～2.9cmである。天井部と口縁部の境は、稜や沈線をもつもの（13・19・22）、段をなすもの（14・16）、屈折するもの（15・18）、境を持たず弧状を呈するもの（17・20・21）がある。口唇部は、ほとんどのものは丸く仕上げられているが、17と20は内面に段を有している。

器径が13～14cm台の坏身2～4、坏蓋13～20がⅢ期中葉から後葉（6世紀末葉～7世紀初頭）、器径が12cm程の坏身5～9がⅢ期末葉（7世紀前葉）、約10～11cmの坏身10・11、坏蓋21・22がⅣ期前半の型式である（7世紀中葉）。東山窯系の12はⅢ期末葉に並行するものである。

高坏・高坏蓋 23の高坏は、脚部を欠損するものの、有蓋長脚二段透高坏である。器径は16.2cmの大きさであり、Ⅲ期中葉の可能性もある。24はボタン状の握みが付いた高坏蓋で、天井部と口縁部の境には稜があり、口唇部内面には段を有する。25は、無蓋長脚二段透高坏と考えられる坏部破片である。坏部の腰には3条の稜線がある。

26は、半球形坏部高坏の坏部であり、外面には2条の沈線が入られ、口唇部には内傾面を有する。27も同類の高坏で、全形が分かるものである。26とは異なり口縁部の上半で外反し、口唇部には広い内傾面を形成している。坏部外面には1条、ラップ上に開く脚部には2条1単位の沈線が2段に施されている。28と29は坏部を欠くが、半球形高坏の脚部と推定される。

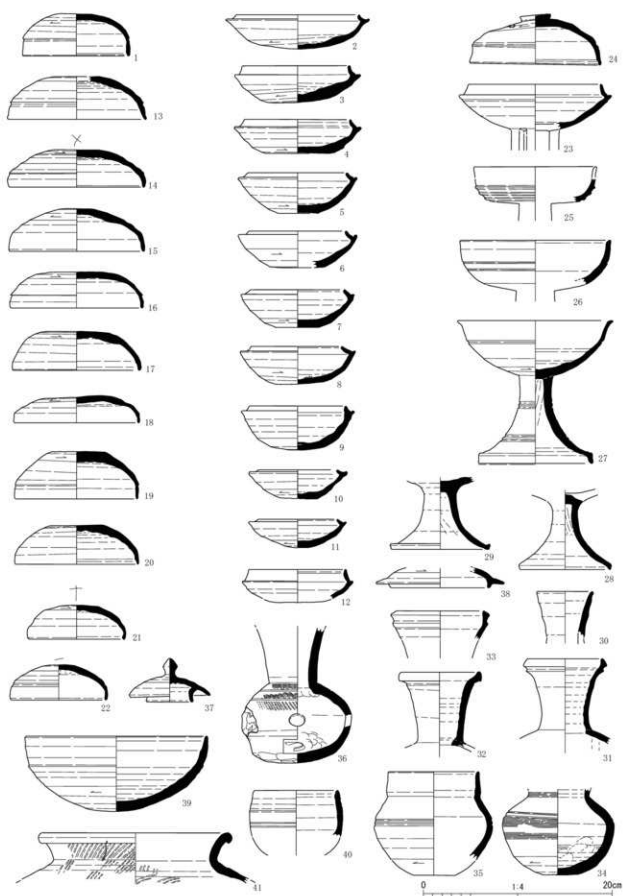


図 25 大溝Ⅶ層出土土器（1）〈須恵器〉

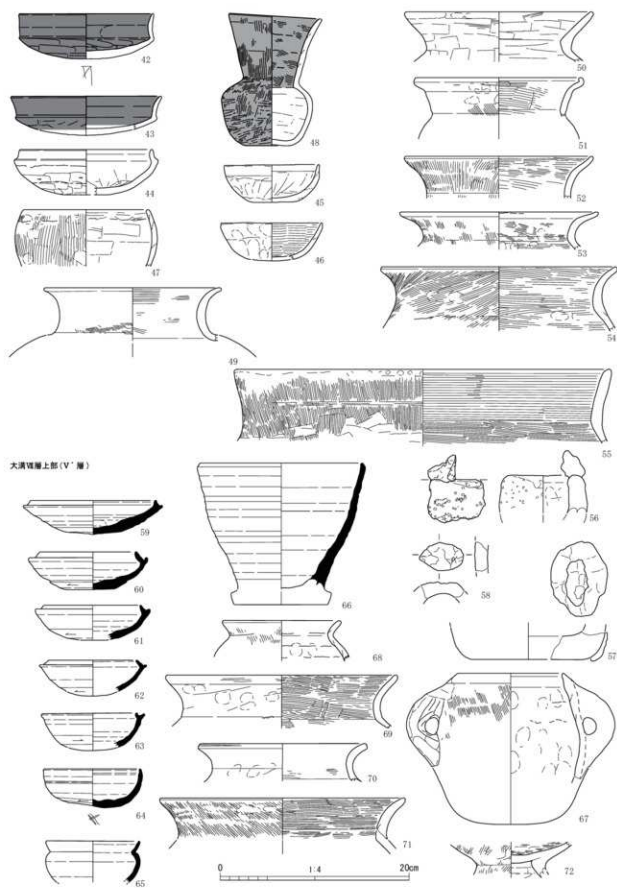


図 26 大溝Ⅶ層出土土器(2)〈土師器・Ⅶ上層〉

壺・瓶・埴・壺蓋 壺には長頸壺33、小型壺34、甕36、瓶類には平瓶30、フラスコ瓶31・32、埴には短頸埴35がある。甕は一般的な例と比べると大型であり、しかも肩部にはミミズ腫れ状の波状文2段と櫛刺突文が施されている。また焼き歪みがあり、しかも焼成に伴う別個体の破片が融着している。33は長頸壺としたが、口唇部を断面三角形に肥厚し、外面に段を有するもので、31・32と同じ作りであることから、フラスコ瓶の可能性もある。34は甕と同じ体部形態をしたもので、カキメが施されるものの、孔は穿たれていない。37と38は、長頸壺あるいは短頸壺の蓋である。37は小型の蓋で、高い宝珠形の摘みと、器径に比べて大きな返りをもつ。

鉢・鉢・陶臼・甕 39は大型の浅い鉢である。体部と口縁部の境には段があり、坏蓋の形態に近い。40を甕としたが、ワイングラス形高坏の坏部の可能性もある。外面には沈線が入れられている。65は小型鉢であるが、埴の35を扁平にした形態のものである。66は陶臼であり、逆円錐形をした体部に外側にはみ出す分厚い底部をもつが、当例はそれを欠損している。41は甕であり、外反する短い口縁部を有し、口唇部は玉縁状に肥厚している。頸部にも体部と同じ平行タタキの跡が、うっすら見られる。また、一本線のヘラ記号がある。

② 土師器（図26）

土師器には、模倣坏、鉢、壺、甕がある。模倣坏には蓋模倣の42・43、身模倣の44がある。蓋模倣の2点とも、底部は静止ヘラケズリで、全面に赤彩が施されている。身模倣はⅢ期中葉～後葉の須恵器坏身の形態に近い。鉢は、大型で深い造りの47、小型で碗形の45・46、把手付鉢の67がある。把手付鉢の類例には、壺に把手を付けた形態のものが、梶子遺跡19次調査で発見されている。

壺には直口壺48と大型の壺49・69がある。48は赤彩された完形品で、長頸埴とも呼ばれる。6世紀前半期に多い形態であり、須恵器の型式ではⅡ期～Ⅲ期前葉のものに近い。49は球形に近い体部に短く外反する口縁部をもつもので、7世紀の一般的な壺である。

甕には長胴の甕と大型の台付甕、小型甕が存在する。50～53が一般的な長胴の甕であるが、50は頸部がくの字形に折れ、直線的に開くことから、6世紀に遡るものと考えられる。54、55、70、71が台付甕の口縁部で、72がその台部である。55は特に大きく、厚い作りである。68が小型甕で、頸部でくの字形に折れ、短い口縁部をもつ。

③ 土製品（図26）

土製品としては、鍛冶関係の轆轤口と考えられる58、埴塼や取鍋の可能性が高い56・57がある。56は外径が9.0cmほどの小型品で、轆轤口の先端部の可能性もある。57は胎土に角張った花崗岩起源の鉱物が多く含まれた厚手のものであり、被熱により、赤くボソボソになっている。56・58にはガラス質になった滓が付着している。

④ 小結

VII層出土で最も古い須恵器の型式は、Ⅲ期中葉（TK43平行）であり、Ⅳ期前半までのものが認められる。土師器では長頸埴48や模倣坏42・43が、Ⅲ期前葉に遡る可能性があるものの、全体としては、VII層の年代観としては、6世紀後葉～7世紀中葉と考えられる。

2 大溝V層の出土土器（8世紀）

V層から出土した土器（図27）は、墨書土器「主政川前」が存在するものの、全体的には少ない。それに加え、VII層段階の7世紀の遺物の混入もかなり認められる。

須恵器には、有台坏身（73）、墨書土器、碗形坏身（74）、坏身・坏蓋（75・76）、半球形坏部高坏

(77)、ワイングラス形高坏(78)、広口壺(79)、陶白(80)がある。この内、有台坏身、半球形坏部高坏、広口壺、陶白がⅤ層の年代観を示すもので、それ以外はⅥ層からの混入品と見られる。

73は、高台が高く断面三角形状である。底部は丸みをもち、高台下に張り出したもので、いわゆる出尻形有台坏身である。口縁部は底部から屈折して直線的に開くものである。焼成は大変良く、部分的に銀色に発色している。湖西窯の製品で、Ⅴ期前半の型式で、8世紀前葉に位置付けられる。

碗形坏身74は同形態の64がⅥ上層から出土している。これらは、摘みがつく返蓋が伴い、古墳時代タイプの坏身・坏蓋(坏H)の最小段階に出現する。75・76は器径が11cm代とやや大きいものの、Ⅳ期前半(7世紀中葉)と考えられる。78は、沈線が施され湾曲して開くワイングラス型高坏の脚部であり、坏身坏蓋と同じ段階のものである。77の高坏は、外面の沈線や口唇部内顔面がなく、ボツリした作りとなっている。このことから形態化が進行した段階のもので、8世紀前半の製品と見られる。広口壺79は、肩部が折れていることから、8世紀前半と考えられる。

土師器には皿と甕がある。81は底部に欠く皿で、赤彩され口縁部内面には放射状暗文が施されている。暗文の存在から8世紀前葉の皿と考えられる。甕(82～84)は、明確なコの字口縁にはなっていないので、7世紀段階のものと思われる。

Ⅴ層から出土した土器にはⅥ層からの混入品が多いものの、墨書土器「主政川前」の段階、つまり、須恵器のⅤ期前半(Ⅴ-2期)であることから、実年代では8世紀前葉が、出土土器から考えられる層位の年代観である。

3 大溝Ⅳ層の出土土器(8世紀後葉～10世紀)

Ⅳ層は上下に分けられ、下層はⅣ層としたもの、上層はⅢ'層として取り上げたものである(図27・28)。Ⅳ下層は8世紀後半～9世紀前葉、Ⅳ上層は10世紀の遺物が中心である。しかし、Ⅳ下層として取り上げたものの中にも灰釉陶器(92)がある。一部の層位において、あるいは取り上げ時において混乱がある。本来のⅣ層に伴う資料は、85～91と考えられる。

須恵器には摘蓋(85・86)、箱形坏身(87)、無台碗(88～90)、土師器の坏身(91)がある。85は「山」とある墨書土器で、86とともに8世紀後半代(Ⅳ下層)の坏蓋である。87もこの段階のものと見てよい。無台碗の88・89は糸切の碗、90は底部未調整の碗であり、いずれも肌理の細かな胎土を有し、底部を厚く作るもので、尾張東山窯産と見られる。遠江でも東山窯産の須恵器が多くなる8世紀末葉～9世紀前葉の製品である。

土師器の坏身91は87の須恵器箱形坏身と同形態であり、8世紀後半の製品と考えられる。92は灰釉陶器で、低いが外面に稜を有した爪形高台をもち、底部は糸切後にケズリ調整が施されている。二川窯あるいは宮口窯産と考えられるが、猿投窯のK90窯式の新しい段階からO53窯式の古い段階(9世紀末葉～10世紀前葉)に並行するものである。底部外面に、「又々」の墨書が記されている。

Ⅳ上層は、おもにⅢ'層として、現地で取り上げたもので、灰釉陶器が目立つ。この中には墨書土器(93～95)も含まれる。認識しやすい層位ではあるが、一部にⅣ下層とした資料も見られ、混乱が認められる。灰釉陶器には93～98がある。碗がほとんどであるが、壺体部下半の98もある。93・94は三日月高台、95は形態化した三角高台をもつものである。底部調整は93がケズリ後にナデ調整、94と95は糸切未調整である。93はK90窯式新～O53窯式古、94はO53窯式、95はO53窯式～H72窯式に比定される。年代幅はあるものの、ほぼ10世紀代に収まる資料である。

3 大溝IV層の出土土器（8世紀後半～10世紀）

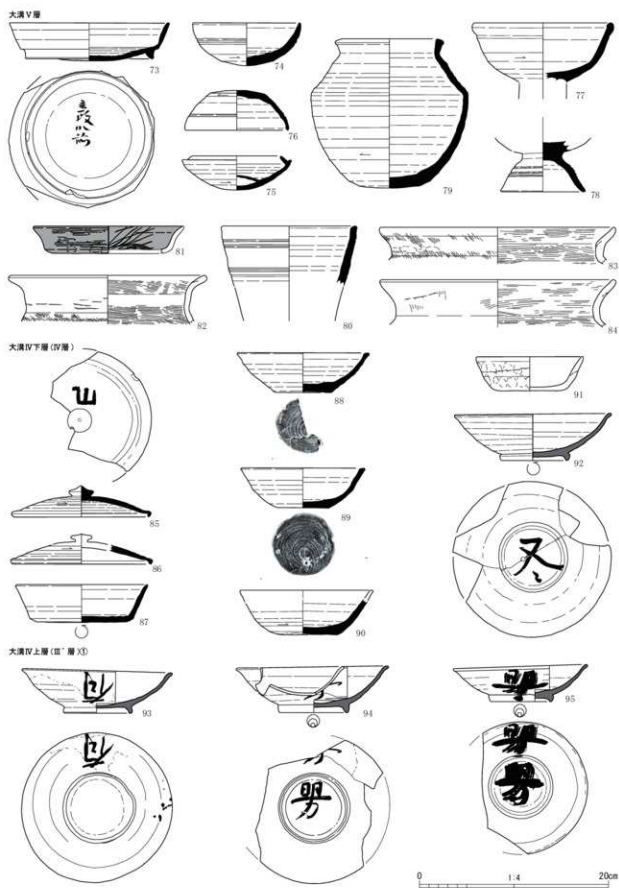


図 27 大溝V・IV層出土土器（V層・IV下層・IV上層）

口縁部を欠く96・97も10世紀前半のO53窯式と考えられる灰軸陶器碗である。99(図28)は土師器の坏身で、IV層出土の8世紀後半の坏身91と比べて底径が小さく、口縁部が外に開く形態に変化しており、9世紀末葉～10世紀前半の製品である。100は清郷型甕の定型化前の甕で9世紀後半～10世紀前半の製品である。101は8世紀後半の須恵器坏蓋(摘蓋)、102はIV層出土の糸切碗88・89と同型式で9世紀前半と考えられるものである。この2点は、混入品であろう。

IV層出土土器は、101・102を除き、9世紀末葉～10世紀の幅の中にあり、10世紀前半が中心と言える。

4 大溝Ⅲ層の出土土器(鎌倉時代)

Ⅲ層の上面からはⅢ上層として取り上げた内耳鍋(109・110)がある。これは15世紀後半の戦国期の土器である。その下層の本来のⅢ層(Ⅲ下層)からは、山茶碗(103～105)、小皿(106)、青磁碗(107)が出土した。108は須恵器の陶臼で7～8世紀のものであり、混入品である。山茶碗は12世紀後半から13世紀前半のもので、103は灯明皿に転用されていたため、全体的に煤が厚く付着している。青磁碗は、龍泉窯産と見られ、鎬蓮弁文が施されている。

Ⅲ層の年代は、山茶碗を伴うことから、12世紀後半から13世紀前半の堆積層と考えられる。従来の見解を再確認したことになる。もともとⅢ層からの出土は少なく、伊場遺跡の遺構編では無遺物層とされている。

5 弥生時代後期～古墳時代の土器

① 大溝出土の後期弥生土器(図29)

大溝の下層(Ⅶ層)から北低湿地(D上層)にかけて、弥生時代後期から古墳時代中期前半の土器が確認されている。大溝及びその下層から出土したものが、1～12・14～18、大溝北半下層から北低湿地で出土したものが13・19～22である。これらは全て後期弥生土器で、壺、甕、高坏、鉢の器種がある。1～6は壺である。1は折返口縁部壺、2は単純口縁部壺、3は内湾口縁部壺である。1の肩部には櫛描横線文が、4には同横線文と波状文が、5はそれらの文様に加えて櫛刺突列点文が施されている。6は羽状縄文が施されたもので、胎土から見ても、天竜川以東に分布する菊川式土器の搬入品である。7～9はいずれも小型の鉢で、そのうち8は装飾鉢である。甕は全て台付甕で、10はくの字口縁部で、端面下端に刻目が施されている。11・12は台部で、12の接合部には粘土帯がある。14～17が高坏の坏部で、14・15が外反口縁部のいわゆる山中型高坏、16が碗形坏部高坏、17がくの字口縁部をもつ高坏である。18～22は高坏の脚部で、19・20がラッパ状に開くもので、櫛描横線文と円孔が施されている。18・21はラッパ状に開くものの、その下半が内湾するものである。18には櫛描横線文がうっすら確認できる。22は低い脚であるが、下半でわずかに内湾する。

これらは弥生時代後期前半の伊場式土器であるが、その中では中葉の伊場Ⅱ式が中心で、後葉の伊場Ⅲ式が少し含まれる状況と見られる。

② 大溝北半下層～北湿地部の後期弥生土器(図29)

図29下半に掲載した土器は、ほとんどがⅦ層(Ⅶ・D境界層)から出土したものであるが、Ⅶ層自体は5世紀の堆積層である。この層からは図66-5の銅鏝も出土している。また、下層の中期

弥生土器も混入している。なお、この層位から出土した後期弥生土器は、前項とほとんど変わらない。

壺は23～26、甕は27～29、高坏は13・30～36であり、ほかに手づくねの37がある。

23と24は単純口縁部壺で、2点とも口縁部内面に櫛描波状文が施されている。25は折返口縁部壺で、口縁部端面と内面に櫛描波状文が施されている。26は壺肩部で、櫛描横線文と波状文、円形貼付文が施されている。甕は有刻のくの字口縁部台付甕で、27・28が体部上半、29が台部である。13・30～32が外反坏部高坏（山中型）、33・34がくの字口縁部の高坏である。31と32の口縁部外面には櫛描波状文、30の高坏脚部には櫛描横線文が施されている。35・36はラッパ状に開く高坏の脚部であり、35には櫛描横線文が施されている。手づくねの37は、口縁部が少し内湾して直立する鉢形である。

VII層として取り上げた後期弥生土器は、ほとんどが伊場Ⅱ式にあたり、銅鏃、木製品の梯子や垂木などの建築材とともに発見されている点が注目される。

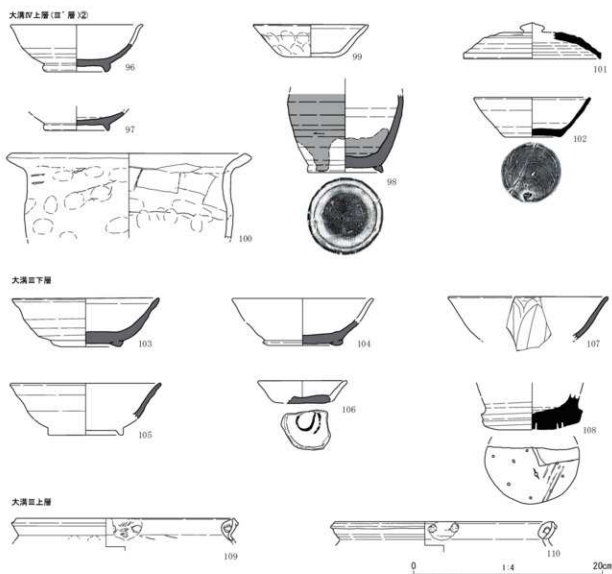


図28 大溝Ⅳ・Ⅲ層出土土器〈Ⅳ上層・Ⅲ下層・Ⅲ上層〉

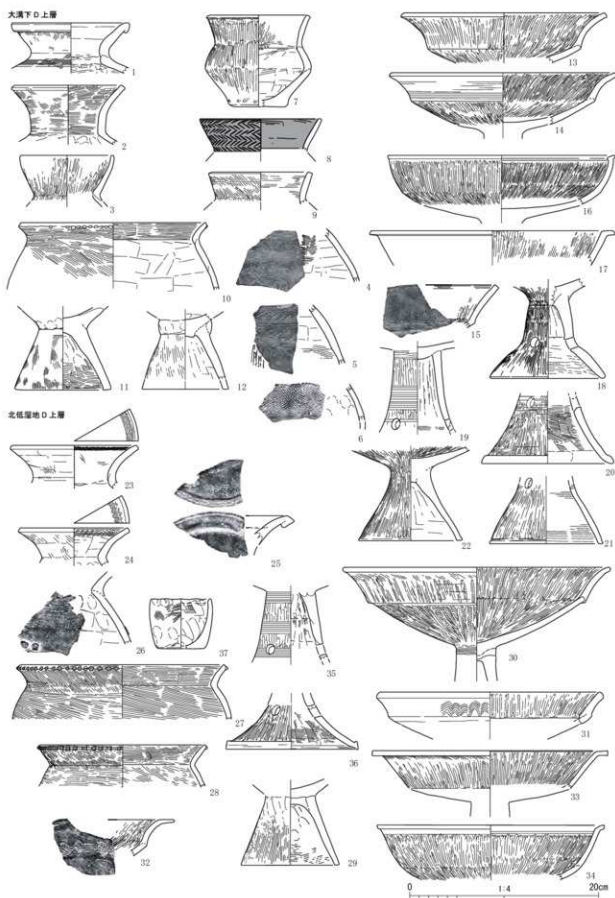


図 29 大溝以北D層出土後期弥生土器（大溝下・北低湿地）

③ 大溝以北の古墳時代前期の土器（図 30）

大溝Ⅶ層段階の北層より北側において、Ⅶ層として取り上げた土器のうち、古墳時代前期～中期の土器群がある。38 は拡張口縁部の壺であり、口縁部は一度屈折して横開きするものである。胴部は下膨れで、木葉痕が付いた輪状底が伴う。拡張された口唇部端面には擬凹線文、肩部には二枚貝刺突の羽状文と棒状工具による刺突列点文が施されている。39 は複合口縁部の壺で全面赤彩である。口縁部上端に櫛刺突羽状文が施されている。40・41 は直口壺である。40 は、球形の体部からやや外開きする直線的な口縁部が付く、全面赤彩の薄手の壺である。外面はミガキ調整ではなく、ナデや板ナデで仕上げられている。41 は口縁部の破片で、口唇部近くではわずかに内湾する。42 は小型丸底鉢であるが、底部を欠く。43 はくの字口縁部甕で、口唇部は尖り、刻目は施されていない。44 はS字状口縁部甕の体部破片であり、器壁は薄い。10 点を越える破片が存在するものの、口縁部は出土していない。45 は口縁部が屈曲する小型の甕である。46 は内湾する高杯の脚部であるが、小型である。

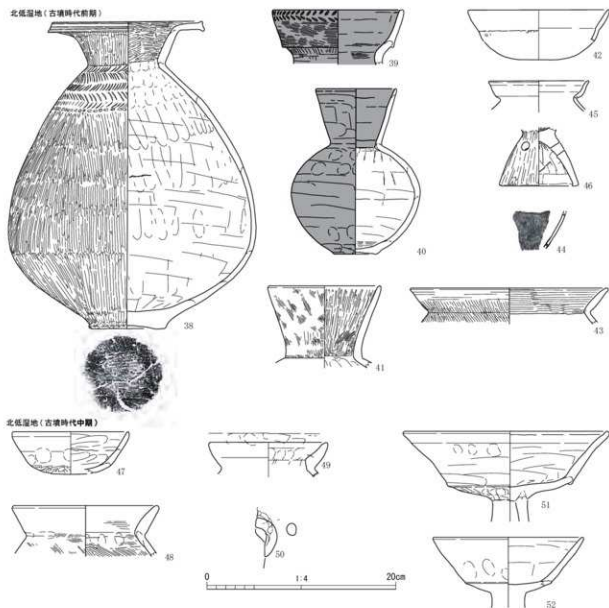


図 30 大溝Ⅶ層・D 上層出土土器（古墳時代前中期）

これらの土器群は、堤町Ⅰ～Ⅱ式（廻間Ⅱ～Ⅲ式）であるが、38は堤町Ⅰ式、42・45は堤町Ⅱ式であり、年代的には幅がある。

④ 大溝以北の古墳時代中期の土器（図30）

47～52が古墳時代中期の土器である。47は半球形をした坏身で、底部はケズリ調整が施されている。48・49はくの字口縁部甕であるが、平底あるいは丸底であったと考えられる。口縁部は厚く、先端に向かって薄くなり、端部は丸く仕上げられる。49は小型で、口縁部外面は少し内湾する。50は何らかの把手である。51と52は高坏で、51が外反口縁部の大型品、52が直線的な口縁部をもつ小型の高坏である。51は調査区の北西隅に近いところから発見されたもので、D層の直上から発見された。

これらは、山ノ花Ⅲ式に比定されるもので、5世紀中葉の土器群と見られる。

第6章 南微高地の出土遺物

1 弥生時代の土器

① 南区の弥生土器（図31）

まずは、遺構から発見された土器から紹介する。SD20では1～4が出土した。1は縄文が施された壺肩部破片である。胎土から見て、地元で作られた菊川式土器あるいはその模倣品である。2と3は高坏で、2は外反坏部、3は碗形坏部の高坏である。4はくの字口縁部台付甕の体部上半部で、刻目が施されている。これらは伊場式土器で、弥生時代後期前半に位置づけられる。

5はSD21から出土したラッパ状に開く高坏の下半部で、円孔透かしがある。後期前半の伊場式土器である。6～10はSD23から出土した。6は出土位置を図18に示している。これは片口鉢で、口縁部の一部と底部端面を欠損しているが、完形品に近いものである。7は外反坏部高坏で、櫛描波状文が施されている。8と9は櫛描横線文と波状文が施された壺の頸部から肩部にかけての破片である。10は有刻の台付甕の口縁部である。これらも伊場式土器で、弥生時代後期前半に位置づけられる。

11～16はSD24から出土したものである。11は単純口縁部壺、12は折返口縁部壺、13は壺肩部破片である。肩部や口縁部内面には櫛描横線文や波状文が施される。15と16は台付甕の口縁部と台部であり、口縁部には刻目が施されている。14は細頸壺であり、弥生時代中期後葉に遡るものである。14は混入品で、SD24は弥生時代後期前半の伊場式土器の段階の遺構である。

17～21はSK31から出土したもので、17が単純口縁部壺、18が櫛描横線文と波状文が施された壺肩部、19・20が台付甕の口縁部である。19は口唇部に刻目があり、20はナデで丸く仕上げられている。21が粘土帯を伴った甕台部である。後期前半の伊場式土器である。22・23はSK24から出土したもので、22は有刻の甕口縁部、23は鐙状口縁部高坏である。22は口唇端面を有し、面に対し刻目が施されている。また、23の口唇部は外下方に拡張され、そこに凹線文が施され、さらに櫛による縦線文が部分的に入れられている。口縁部内面には突帯があり、その外側には斜格子文が暗文として施されている。22は凹線文（畿内IV様式）系土器群の典型的な高坏の1形式である。SK24出土の2点ともに中期後葉の土器である。

24・25はSK26から出土したもので、24は拡張口縁部壺、25は甕の台部である。24の口縁部内面には櫛と思われる刺突羽状文が施されている。2点とも、中期後葉と見て矛盾はない。26～28はSK29から出土したものである。26は壺底、27は口唇部をユビ押した甕口縁部、28は台盤状土製品である。これらは中期後葉に位置づけられる。

29～31はSP23、32はSP46、33はSP53、34はSP73から出土した。29は裝飾鉢の口縁部、30は有刻のくの字口縁部台付甕、31は円孔がある高坏の脚部下半部であり、これらは後期前半の伊場式土器である。32は丸い棒の側面で口唇端面を押圧した甕口縁部、33は不安定な櫛描横線文を繰り返す施文する壺肩部であり、ともに中期後葉の土器である。34は裝飾鉢の口縁部で、後期前半の伊場式土器である。

35～39は南微高地の包含層から出土したものである。35は単純口縁部壺で、口縁部内面には櫛描波状文が施されている。36は内湾口縁部壺、37は頸が窄まる壺形状に近い裝飾鉢の口縁部である。38は外面に櫛刺突文が施された内湾口縁部の甕である。39は手づくねの鉢である。35～37は後

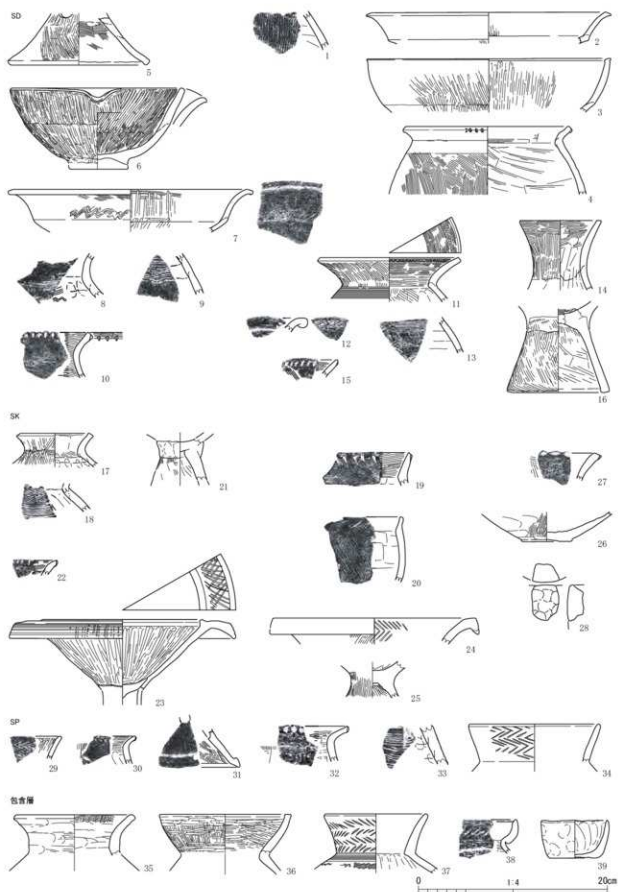


图 31 南微高地出土弥生土器

期前半では新しい段階のものである。38もこの段階の伊勢湾沿岸系の甕である。

② 南広張区と調査坑の弥生土器（図32・33）

方形周溝墓の溝と推定されるSD26において、40～69の後期弥生土器が出土した。65の内高坏脚部と69の手づくねはSD26南から、他の土器とは離れて出土した。40～50が壺、52～56が甕、57～66が高坏、51・67・68が鉢、69が手づくねの碗である。40～43は単純口縁部壺、44・45が折返口縁部壺、46は内湾口縁部壺、48が長頸壺である。40は下膨れの体部を有する完形品である。底部はほとんど突出しないもので、一般的ではないが、形成時にはすでに自重により変形したようである。肩部には櫛描横線文と波状文が施されている。41の口縁部には刻目があり、蓋装着用と考えられる焼成後の穿孔が2孔存在する。肩部にはヘラによる線が何本か存在するが、意味があるようには見えない。42は口唇部に3本1単位の棒状貼付文を施している。口縁部内面には櫛描波状文、肩部には波状文に横線文が加えられている。43の肩部には櫛描横線文が施されている。

44と45は折返口縁部で、内面には櫛描波状文が、肩部にも横線文と波状文が施されている。45の横線文は簾状文となっており、櫛刺突列点文も施されている。46の内湾口縁部壺は、口唇部に水平な端面をもち、肩部直下には低い突帯が施されている。47と49は肩部破片で、47には櫛描横線文、波状文、刺突列点文、49には櫛描横線文と扇形文が施されている。48は大型の長頸壺であるが、大半を欠損している。肩部には、櫛刺突羽状文が施された低い突帯がある。

51は頸が広いため鉢としたが、広口短頸壺と呼んでもよい形態である。口縁部は短く直立する。体部は球形胴と思われる。

52～54は有刻のくの字口縁部台付甕であり、外面はハケ仕上げ、内面はハケや板ナデで仕上げられている。台部には52や56のように、接合部に粘土帯をもつものと、53や55のようにそれがないものがある。

58・59は、外反坏部の高坏、碗形坏部の57・60の2つがある。外反坏部の口縁部外面には櫛描横線文が施されている。碗形高坏の坏部口唇端面には水平面があり、坏部下半は折れることはなく、多少屈曲する程度である。脚部はいずれもラッパ状に開くが、65のように低く、無文のものも存在する。その他の61～64は、櫛描横線文が施されている。透かしはいずれも円孔で、3方向に穿たれている。脚端部には、端面を有する61・65、肥厚する57・62～64がある。66は装飾高坏の脚部で、その脚段部に施される突帯部分と考えられる。67は一般的な小型の鉢で、全面にミガキ調整が施されている。68は口縁部に櫛刺突羽状文をもち、体部が調整された装飾鉢である。

これらの土器は全て、弥生時代後期前半の伊場式土器である。

SD28からは、70・71が出土した。70は櫛描横線文と波状文が施された壺である。実測図を掲載していないが、木葉痕のある壺底もある。71は、接合部に粘土帯が施された甕台部である。いずれも弥生時代後期前半の伊場式土器である。

南広張調査坑は、G1～G3の3坑があり、いずれからも溝状遺構が確認された。この内、G1のSD32からは壺底の73、甕台部の74、G2のSD33からは下半部が少し内湾するラッパ状の高坏脚部が発見されている。また、南広張トレンチの包含層からは、75の櫛刺突横線文が施文されたラッパ状の高坏脚部破片も確認されている。75は、装飾高坏の脚部である可能性がある。これらは、いずれも弥生時代後期前半の伊場式土器として矛盾はない。

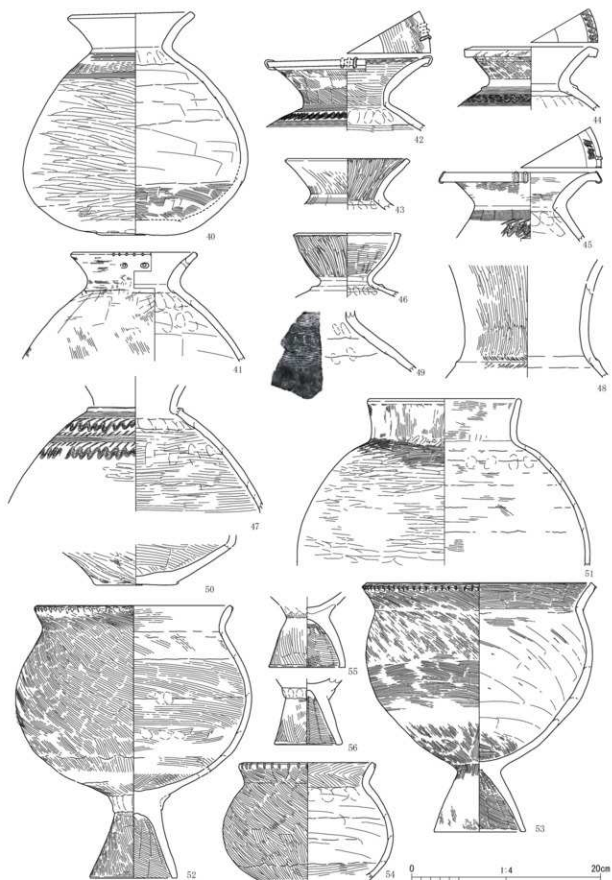


图 32 南松張區 SD26 出土弥生土器

1 弥生時代の土器

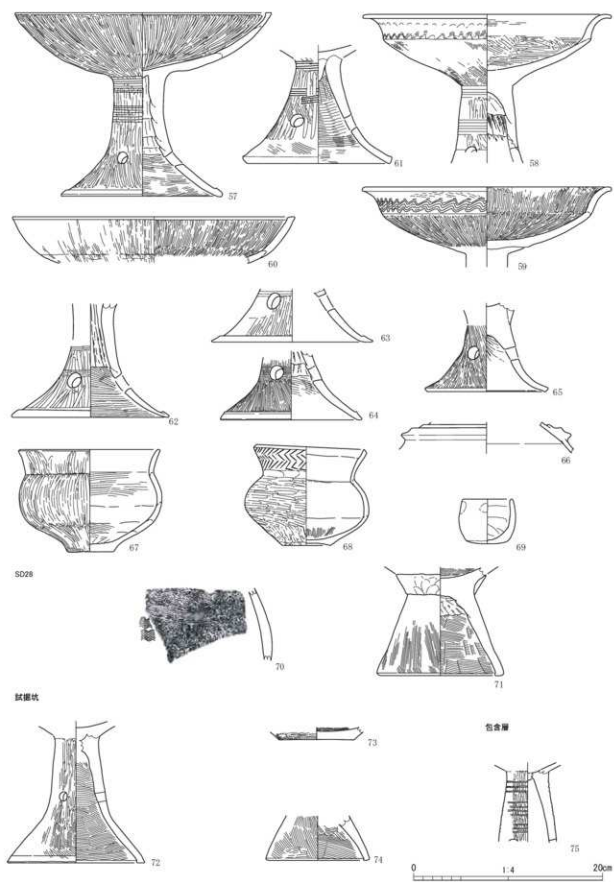


図 33 南紀張区 SD26・28 他出土弥生土器

2 古代の土器

図 34-76・77 は、SD 2 から出土したものである。76 は須恵器の坏身で、大きさからⅢ期後葉の型式（6 世紀末葉）、77 は 7 世紀を中心とした土師器の甔あるいは把手付壺の把手である。78 は SD 3 から出土した 7 世紀の土師器甔の頸部破片である。79～81 は SD 4 から出土したもので、79 はⅢ期後葉（6 世紀末葉）の須恵器坏蓋、80 は 6 世紀末葉から 7 世紀前半頃と考えられる大型の土師器台付甔の口縁部破片、81 は輪の羽口の破片である。82・83 は SD 6 から出土した土師器甔である。82 はくの字口縁で、口縁部を先細りしていることから、6 世紀に遡る可能性がある。83 はコの字状口縁部であり、7 世紀と見てよい。84 は SD 8 から出土したもので、7 世紀の台付甔の口縁部である。85～88 は SD 9 から出土したものである。85 は土師器台付甔の口縁部である。86 は土師器甔の口縁部、87 は土師器台付甔の台部、88 は土師器の手づくね鉢であり、いずれも 7 世紀代の遺物と考えられる。89 は SD 10 から出土したⅢ期末葉（7 世紀前葉）のワイングラス形高坏の坏部である。90 は SD 11 から出土した 7 世紀の土師器甔である。

91 は SK 1 から出土したⅣ期前半（7 世紀中葉）の須恵器の坏身である。92 は SK 16 から出土した 7 世紀の土師器甔（平底長胴形）である。93 はⅢ期末葉～Ⅳ期前半（7 世紀前半）の須恵器埴である。95 は SK 20 から出土した 7 世紀の土師器甔である。

94 は SP 19 から出土したⅣ期前半（7 世紀中葉）の須恵器坏身である。96 は SP 51 から出土した 7 世紀の土師器甔である。97 は 7 世紀に作られた土師器甔（完形品）であり、遺構は明確にはできなかったが、口縁部を欠損した土師器甔とともに、平面的に潰れた状況で出土した。

98～108 は南微高地および南松張区の包含層から出土したものである。98 はⅢ期末葉（7 世紀前葉）の須恵器坏蓋、99 はⅣ期前半（7 世紀中葉）の須恵器坏身、100 はⅢ期末葉（7 世紀前葉）のワイングラス形高坏の坏部、101 は 7 世紀代の須恵器フラスコ瓶の口縁部、102 はⅢ期中葉～後葉（6 世紀後葉）の須恵器甔、103 はⅢ期末葉～Ⅳ期前半（7 世紀前半）の須恵器埴、104 はⅣ期前半（7 世紀中葉）の須恵器鉢、105 は 7 世紀代の須恵器甔である。106 は 7 世紀代の土師器台付甔、107 は 7 世紀の土師器壺である。108 は須恵器質に焼きあがった無軸の灰軸陶器碗で、底部がケズリ調整で爪形高台を有することから、K 90 窯式（9 世紀後半）に位置づけられる。

南微高地における古代の土器は、最も古いのが 6 世紀末葉（湖西須恵器編年のⅢ期後葉）であり、圧倒的に多数を占めるものが、7 世紀前葉から中葉（Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半）である。7 世紀後葉以降、8 世紀代の土器は認められなかった。

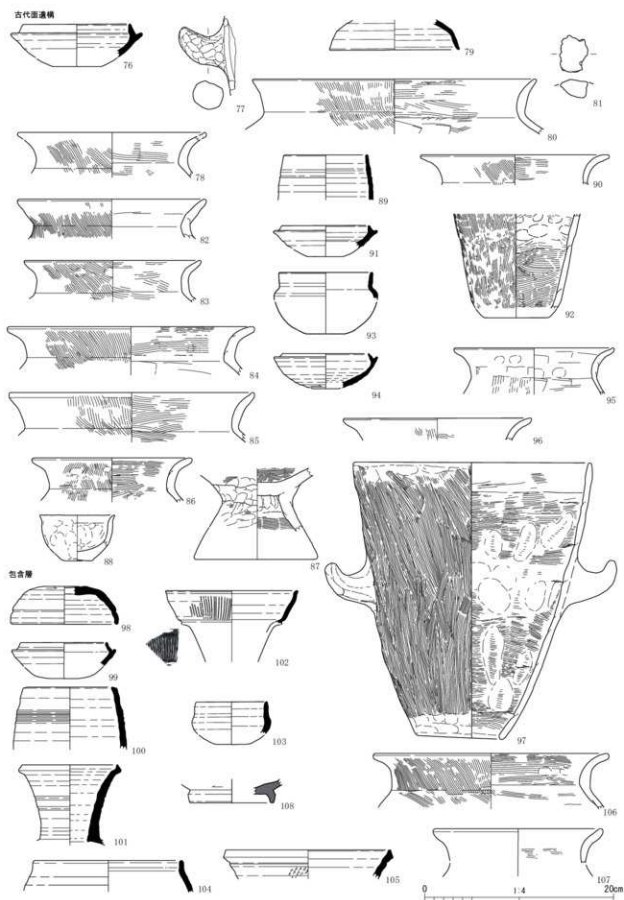


図 34 南微高地古代面出土土器

第7章 北低湿地の中期弥生土器

中期弥生土器は、中期中葉に遡るものは瓜瓠式土器の甕（図40・137）が1点あるだけで、他すべて中期後葉の角江式土器であり（図35～44）、おもにD下層から多くの木製品（図45～63）とともに出土した。その他、弥生時代中期の遺物には、石製品がある（図64・65）。土器以外のものは後の章で説明する。また、北区においてD層より下のE層からは、縄文時代後晩期の縄文土器（図44）も確認されており、これについては、本節の最後で説明する。

中期弥生土器には壺、甕、高坏、鉢が存在するものの、高坏と鉢はわずかである（図35～44）。

① 壺（図35～39）

1～52が単純口縁部の壺であり、口縁部は単純に外反するか、直線的に開く。口唇部は一般的に端面をもつが、丸く仕上げられるものも少数存在する。また、口縁部の長短、頸部の形状なども多様である。

1は区画沈線に伴ったヘラ描斜線紋を頸部に、櫛描横線文に縦位の同波状文を付加した文様を肩部に配している。区画沈線に伴うものに2、6、9がある。2は肩部下半で屈曲する細身のプロローションを有し、さらに頸部の下が盛り上がったものである。これは、角江式土器の中では古相を呈する。口縁部は直線的に開き、口唇部端面には円形竹管文が施されている。肩部文様は上から、区画沈線に伴ったヘラ描斜線文、多重の櫛描横線文に縦位の櫛描短線文を付加した文様、下端にヘラ描（沈線）連弧文が施されている。6は2条の沈線が施され、沈線間はナデによる無文帯である。9は口縁部の破片で、頸部には1条の沈線が確認される。

3は、肩部下半に屈曲を少し残すが、口縁部は緩やかに円弧を描き外反するプロローションを有している。肩部の文様は、上から櫛描による波状文、簾状文、多段の横線文と続き、下端には再び簾状文が施されている。文様は、肩部上半に集約される傾向にある。4は沈線区画を伴わないが、口縁部が短く、肩部下半でわずかに屈曲する。肩部文様は櫛描縦短線文が付加された多重の櫛描横線文である。5は肩部にわずかな屈曲を留め、櫛描短線文を付加した同横線文が間隔をあけて数条施され、下端に同連弧文を配している。

7は、口縁部が長く円弧状に外反する。体部は最大径の位置で強く張る、いわゆる算盤玉に近い体部である。文様は、間隔をあけて6条の櫛描横線文を施している。8は縦位の櫛描短線文を付加した同横線文、10は同横線文だけを多重に施している。

11は、やや細頸で大きく外反して開く口縁部をもち、肩部には櫛描横線文と同斜線文の組合文を施すもので、白岩式土器である。

12～20は、外反するやや大型の口縁部である。12～15は肩部に櫛描横線文が施され、12には頸部に棒刺突列点文、15には櫛描縦短線文が加えられている。20の口唇端面の下端には刻目がある。

21～29は、少し小振りやや頸部が細く開きも小さな外反口縁部を有するものである。21と24は、口縁部上端部が、少し内湾気味となっている。26は逆に外に開いている。28の肩部には櫛描横線文が施されているが、一部簾状となっている。

30～32は細長くあまり開かない口縁部であり、鶴頸と呼ばれるもので、体部が下膨れになれば、白岩式土器である。口唇部は端面を有するものと丸いものがある。33もこの仲間になる可能性はある。口唇部内外面に竹管刺突文が施文されている。

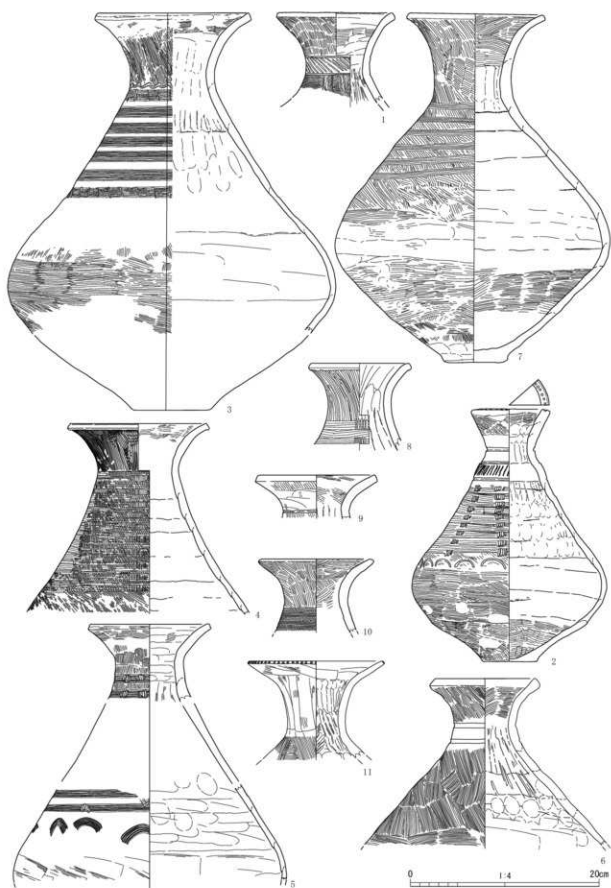


图 35 D 层出土中期弥生土器 (1)

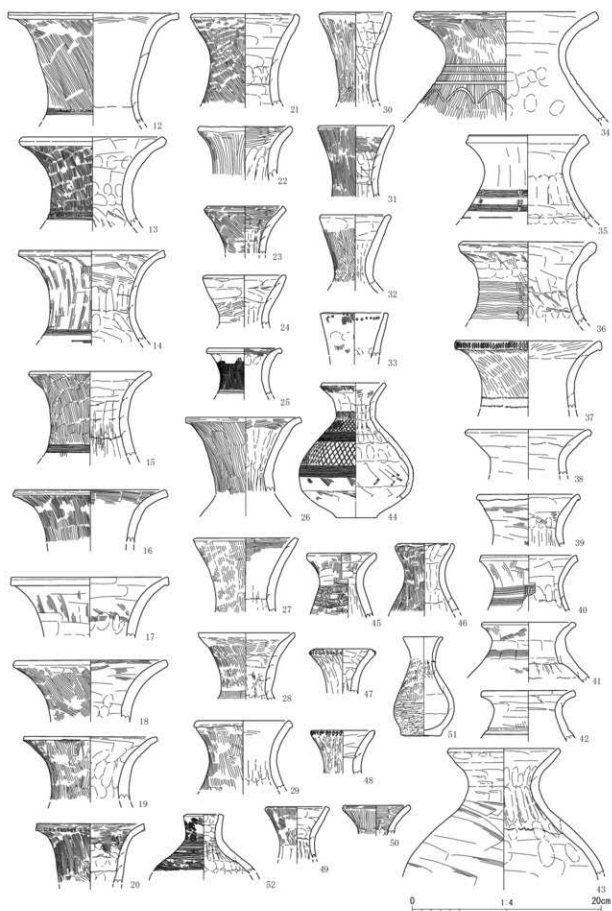


図 36 D層出土中期弥生土器 (2)

34～42は、太頭壺である。頭の太さの割に、口縁部が短く外反するものである。34の肩部には3条のヘラ描沈線と同連弧文、35と40は櫛描縦短線文を付加した同横線文、36は櫛描縦波状文を付加した同多重横線文が施文されている。37は口唇部に刻目、肩部に2段の棒刺突列点文が施されている。41は櫛描連弧文、42は横位の沈線文が施されている。43はこの仲間とするには、やや口縁部が長く、頭が細い。文様は施されていない。

44～52は、小型壺である。44は底部を欠いているが、ほぼ全形が分かるものである。口縁部は外反し、肩部は丸みをもち、胴部下半に最大径をもつ形態である。肩部には、区画沈線があり、その下にヘラ描斜格子文と櫛描横線文がくり返し施されている。45は2や4を小型化したもので、櫛描縦短線文を付加した多状横線文が施されている。47と48の口縁部外面には刻目があり、47の口唇部には棒刺突列点文が施されている。51は一輪差しの花瓶の形をした壺と推定されるが、口縁部を欠いている。30のような鶏頭であれば、白岩式土器である。52は直立する短い口縁部をもつ壺で、体部は球形胴に近いものと推定される。肩部には、櫛描横線文が施されている。

53～57は受口細頸壺である。53は胴部下半が屈折し、肩部が直線的な形態で、中期中葉の貝田町式土器の系譜を引く壺と考えられる。口縁部外面にヘラ描縦線文、肩部に櫛描横線文、その下に櫛描（3本棒？）縦波状文が施されている。54の頸部には円錐形の貼付文が施される。55は受口部の屈曲が強く、口縁部には円形竹管文、肩部には櫛描横線文が施されている。58～60は口縁部が大きく外反して、上部がくの字に折れて受口となるものである。58と59は無文であり、口唇部に端面をもつ。60は大型の壺で、受口部の立ち上がり短いものの、ヘラ描斜格子文と棒状貼付文が施されている。また、受口部の上下端に刻目が入られている。

61と62は受口太頭壺で、瓜瓢式土器の系譜を引く壺と考えられる。61は口縁部外面に2条沈線の連弧文、肩部には区画沈線を伴ったヘラ描斜格子文と棒刺突列点文、その下には、櫛描縦波状文を付加した同多重横線文が施されている。62は口縁部にヘラ描斜格子文、肩部に区画沈線と櫛描横線文が施されている。

63～65は袋状口縁部壺であるが、凹線文系の袋状口縁部ではなく、在地模倣品で、形態的に規格性が低い。63は内湾の弱いもの、64は扁平な袋状で厚い作りのもの、65はヘラ描斜格子文が施された緩やかに湾曲するものである。64の口唇部は幅広い内傾面となり、そこにはハケメが残る。肩部には櫛描横線文が施されている。

66～69は口縁部が少し内湾している細頸壺であるが、30～32の仲間とすべきかもしれない。下膨れの体部であれば、白岩式土器となろう。66の頸部には横位の沈線文が施されている。68の口縁部上端には、沈線文と櫛押圧沈線文が施されている。

70は外反口縁部で、口唇部が上下に拡張され、棒状貼付文が5か所に施されている。肩部には櫛描横線文が施されている。71も外反口縁部で口唇部は斜め下方に少し拡張されており、そこにヘラ描斜格子文が施されている。

72～82は凹線文（畿内IV様式）系土器群の壺である。これらは、回転台を使用した凹線文系の櫛描波状文、簾状文、横線文が施文され、橙色をした焼きの良い土器である。72～76は外下方に口唇部が拡張された広口壺で、端面には凹線文が施文されている。77も同類であるが、端面には2重円の円形竹管文が施されている。78は口唇部が拡張されないものの、やや広い端面を有し、そこに櫛描波状文、口縁部内面には櫛描扇状文が施されている。

79と80は袋状に内湾する口縁部の壺、81と82はくの字に屈折して受口状を呈する壺で、81を除き、細頸である。79と80は、凹線文、櫛刺突列点文あるいは同羽状文、櫛描横線文が施されて

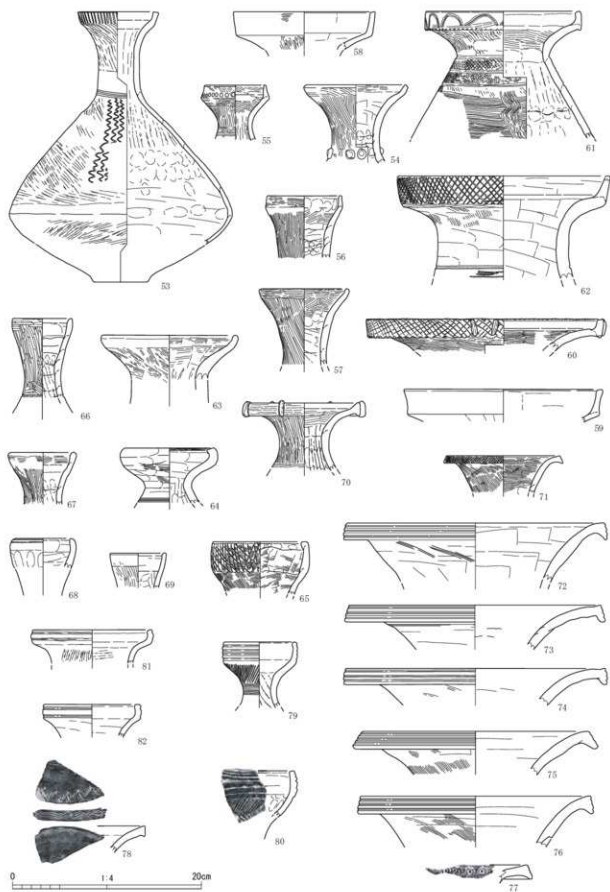


図 37 D層出土中期弥生土器(3)

いる。81と82の口縁部には2条の凹線文がある。

83～95は壺の肩部文様を実測したものである。83は、79・80・82などの細頸壺の体部である。櫛描横線文を多重に施し、最下段には同波状文を加えている。84と85は胴部中位が張る中型壺で、櫛描横線文が施されている。84は文様帯の下端に同横短線文が加えられている。86は櫛描横線文、ヘラ描斜格子文を繰返し施し、最下段に大きな櫛描波状文を施文している。87は櫛描横線文の間に短い縦波状文を繰返し施し、少し変わった文様をもつものである。88は頸部が折れて、口縁部が直立する細頸壺で、肩部には突帯がある。突帯の上端には櫛刺突文、下には櫛描横線文が施されている。89は肩部が盛り上がった形態で、櫛刺突文と櫛描波状文、同横線文と波状文（2段）が、間隔をあけて施文されている。90は櫛描縦短線文を付加した多重の櫛描横線文、91は短線文の代りに櫛描縦線文を付加したものである。92と93は、肩部の上と下で屈曲する角江式土器の大型壺である。92は区画沈線とヘラ描斜格子文があり、3条沈線の連弧文が最下段に施文されている。93は櫛描縦短線文が付加された多段の櫛描横線文があり、最下段には櫛描波状文が2段施されている。94は棒束あるいは先割れの棒のようなもので横羽状文と連弧文が施されたものである。95は、沈線による重コの字形文が施文されたやや頸の太い小型の壺である。96～102は壺底で、96～100は底面が無文の平底、101と102は輪状をした上底である。97には木葉痕があり、98の底面は削られている。

103～136は、壺の頸部から肩部にかけての文様である。103～110は、凹線文土器群壺の肩部文様である。109は細頸壺で、櫛描横線文と櫛刺突羽状文が施されている。103～108は大型のものは広口壺、小型は袋状あるいは受口状口縁部の細頸壺となる。回転台を用いた整った櫛描横線文、波状文、扇形文が施されている。110は頸部に櫛刺突列点文が施された帯状突帯があり、その上に櫛描横線文、下に多重の櫛描簾状文、波状文が施文されている。111はユビ押圧文、櫛による簾状文風の押し引き文が施された頸部である。112は区画沈線、櫛描縦線文を付加した多条櫛描横線文が施されている。内面には平織りの布目跡と縁がかりあるいは綴じ合わせ部の圧痕が認められる。113と114は流水文で、多重の櫛描横線文に向い合う弧線（X字状）をヘラで描き、弧線間の横線文を消すことで、流水文を表現している。115は櫛描波状文であるが、振幅の大きな波形を呈し、波頂部は櫛をコンパス状に回転させて描いたもの（コンパス波状文）で、3段以上にわたって施文されている。116は縦位のコンパス波状文と横位の短い櫛描波状文あるいはU字形文が施されている。117～121は櫛描縦短線文、縦線文、縦波状文が付加された多重あるいは多段の櫛描横線文を主要文様としたものである。117は肩部上半にヘラ描斜格子文、119は頸部に2条の区画沈線、同じく120は区画沈線を伴ったヘラ描斜線文、121は頸部に2条の沈線が加えられている。117と118の文様帯最下段には櫛描あるいは沈線で連弧文が施されている。

122は、2条の沈線で区画されたヘラ描斜格子文が施文されているが、縦位の区画沈線も加えられている。123は多重の櫛描横線文、124は2条沈線による連弧文と櫛描横線文、125は櫛描横線文と簾状文、126は櫛描横線文と波状文、127は縦短線文が付加された2条沈線による2段の横線文と櫛描波状文、128は櫛描波状文が施されたものである。

129は櫛描縦線文と同波状文が施されたもので、体部下半は条痕仕上げである。130は櫛描横線文の下に円形竹管文が施されている。131は無文帯を挟み上下に円形竹管文があり、その下に櫛描横線文が施されている。132は櫛描横線文の間に同山形文が施されている。133は数条の沈線を単位に縦横に組み合わせた文様をもつもので、95の仲間と考えられる。134は縦位の矢羽根状の沈線文であるが、縦位の沈線が加えられている部分がある。135は区画沈線を伴った交互の斜線文（綾

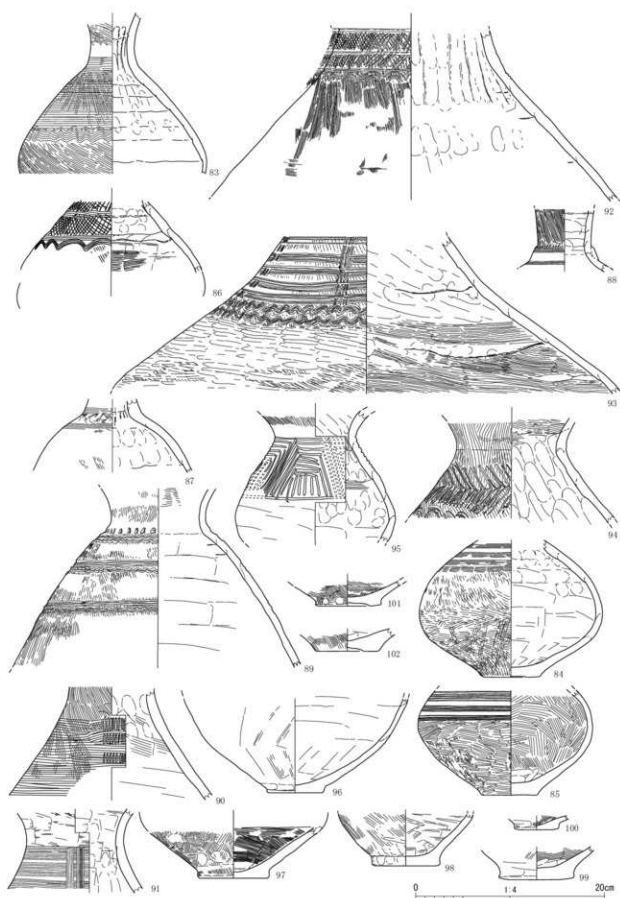


図 38 D層出土中期弥生土器(4)

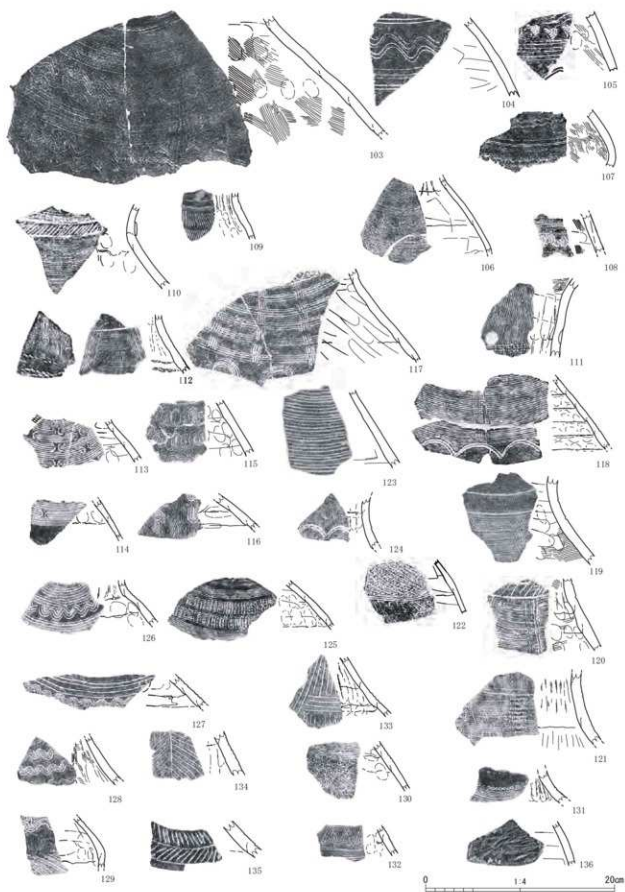


图 39 D 层出土中期弥生土器 (5)

杉文)と細かな櫛描縐状文(押し状)が施されている。136は、ハケ状工具の刺突による擬縄文が施文されている。

② 甕(図40～44)

137は、口縁部内面に櫛描横線文を配し、外面が条痕仕上げの瓜郷式土器甕である。中期中葉の瓜郷式土器は壺甕を含めても、これが唯一である。

138～152は、深鉢形をしたハケあるいは条痕仕上げの平底の甕と考えられる。138と146は条痕仕上げで、口唇部に端面を有するが拡張されるものではなく、ユビや棒による押圧や刻目が施されている。

139は口唇部が引き出され突帯状をなし、ハケ工具による刻目とユビ押圧による単独圧痕が施されている。140は口唇部が下方に少し拡張され、刻目が施されている。141は口唇部下が突帯状をなし、刻目が施されている。142は、胴部中位が屈曲する形態で、口唇部にはハケ工具の刻目が2個1単位で、間をあけて施されている。刻目の位置が波頂部となり、細かな波状口縁を呈している。

143は胴部上半部が脹るもので、口唇部端面は斜位のハケ仕上げで、下端に刻目を有している。144・145・147・148・151・152は胴部が砲弾形で、口唇部端面を有し下端に刻目が施された甕であり、角江式土器の主体的な甕である。149は全体形が、浅鉢形を呈するものである。150は端面を有するが、刻目は施されていない。

153～159はハケ目が目立たない、あるいは板ナデにより器面調整された甕である。口唇部は154のように突帯状のものが存在するものの、多くは下端刻目の端面を有している。155のような深鉢形、153・158・159のような浅鉢形のもののほか、153・157のように台付甕となりそうなものも存在する。

160～170は、口唇部に端面をもち刻目が施された台付甕である。160～167はハケ甕である。160は口唇部上端に刻目を有するもので、中期中葉からの系譜を引くものかもしれないが、類例はこれだけである。161～165は、頸部が明瞭に屈曲し丸い胴部を有した、後期的な台付甕の体部である。160も刻目を除けば、これらの仲間である。166と167は胴部上半が直線のなもので、これは中期的と言えるものである。

168～170は板ナデやナデで仕上げられた台付甕で、三河型のナデ甕と呼ばれる。いずれも、口唇部端面を有し下端に刻目が施される。168と169は長胴、170は丸胴である。これらの甕には、179や180のような接合部が中実で、下半が内湾気味の独特な台部を伴うものが多い。

171～173はハケ仕上げの小型甕であるが、台が付くか否かは不明である。いずれも口唇部に端面を有し、下端に刻目が施されている。171は丸胴、172と173は深鉢形の胴部を有する。172は、口唇部端面にハケメを残し、刻目は部分的にしか施されていない。

184と185はくの字形口縁部、下端刻目のあるハケ仕上げの口唇部、丸みを有した胴部など、後期の台付甕とほとんど差のないものである。

186～190は凹線文系土器群の甕であり、平底と台付甕の2者がある。口縁部は頸部で明確に屈折して外へ延びるもので、弥生時代前期の如意状口縁からの系譜と考えられる。190のようにヨコハケのものもあるが、タテハケが一般的である。188と189には、平行のタタキメが施された後に、ハケ調整が行われている。

174～178は深鉢形の甕底部で、174のようなわずかに輪状底のものはあるが、ほとんどは平底あるいは少し凹面をもつ無文のものである。174には、焼成後の穿孔が認められる。179～183・191～209は台付甕の台部である。台部の数も多く、平底甕と台付甕は甕のほぼ半数ずつを占める。

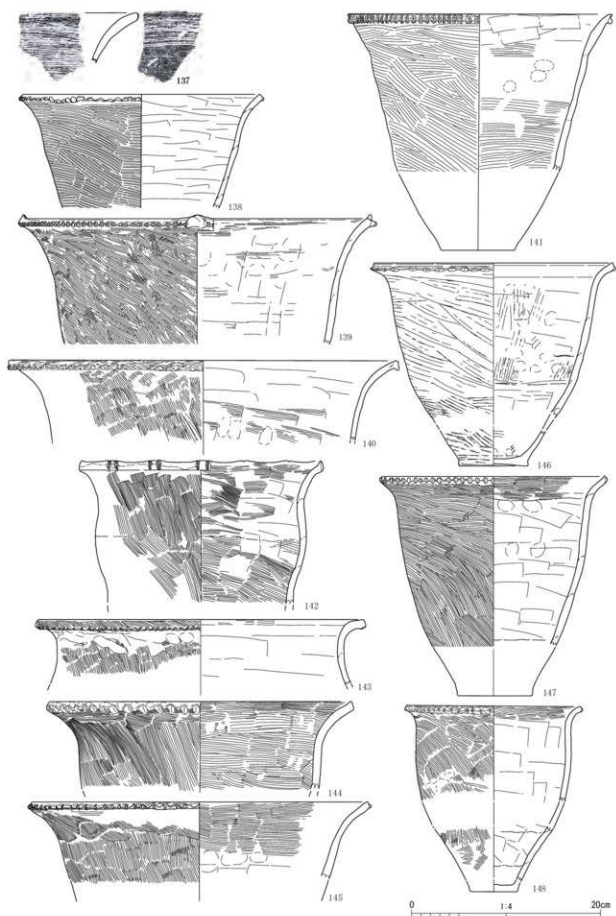


图 40 D 层出土中期弥生土器 (6)

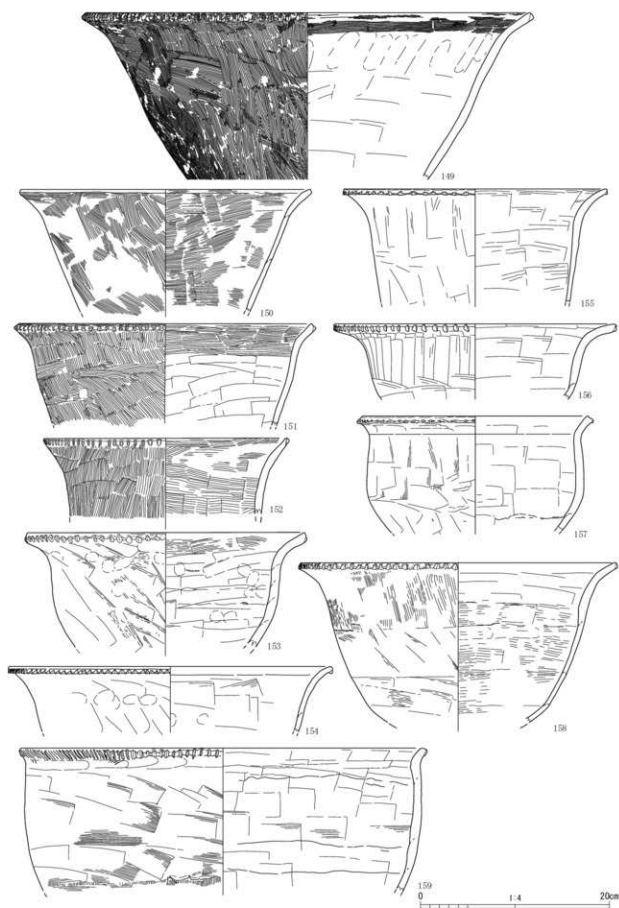


図 41 D層出土中期弥生土器(7)

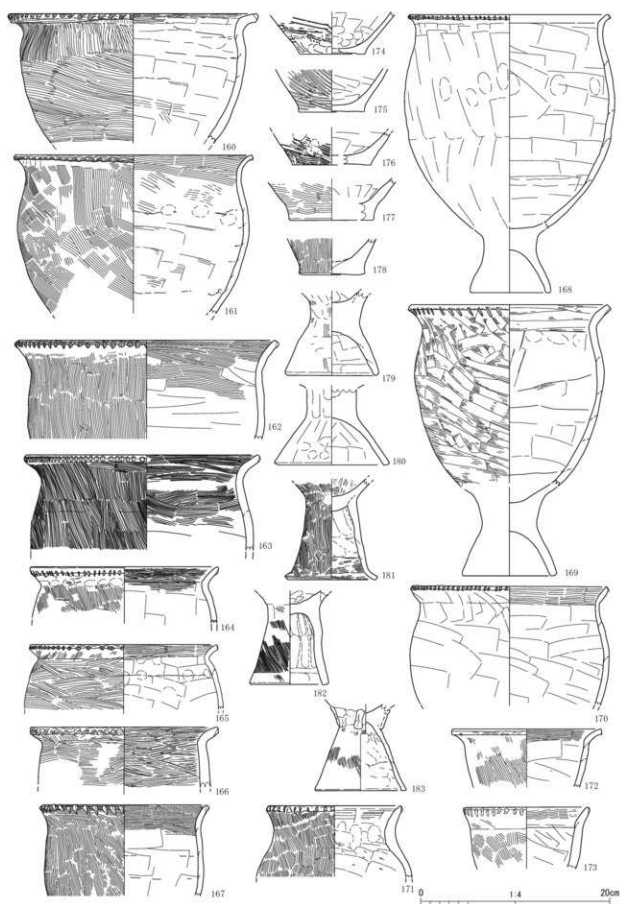


图 42 D 层出土中期弥生土器 (8)

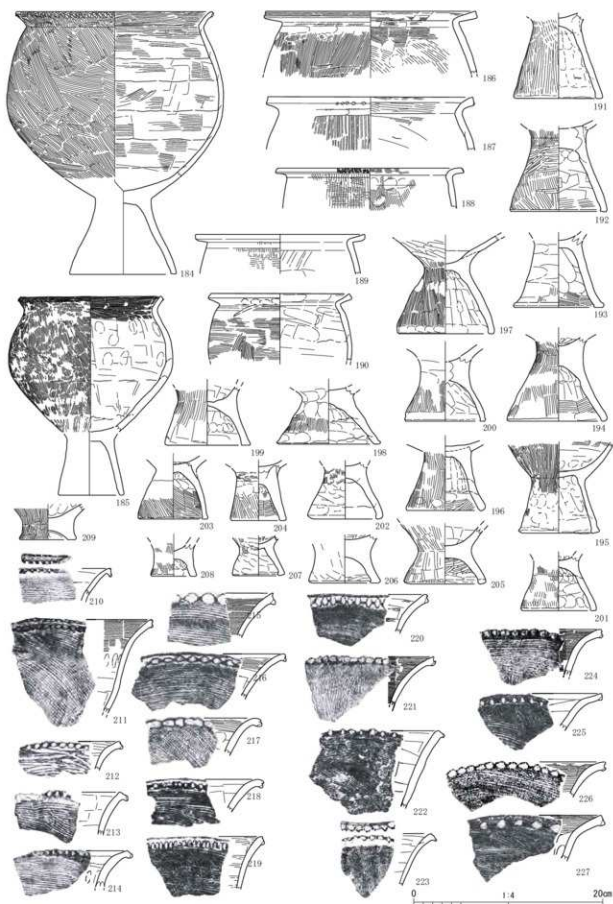


図 43 D層出土中期弥生土器 (9)

179と180は前述した三河型甕の台部である。181と182は筒状の長い台部で、高坏脚部の可能性はある。183は幾分高い台部で、接合部に縦位の棒状貼付文を施したものである。191～196は通常の台部であるが、後期のものと比べると幾分高い。やや内湾する192と197には、部分的ではあるもののミガキ調整が見られることから、高坏もしくは台付鉢の台部（脚部）であった可能性もある。193はナデ仕上げであり、168や169のような三河型ナデ甕の台部なのかもしれない。

198は、低いが大きく開いた台部である。200～203はやや小型で、内湾して開く台部である。199・205・206は断面形が逆台形の低い台部であり、209はさらに低く、台の立ち上がりが極めて小さいものである。204は小型の台部であるが、底径の割に高いもの、207と208は最も小型のものである。

210～235は、甕口縁部の拓本である。

210～218は口唇部直下が突帯状になったもので、そこに刻目が施されている。210と211は口唇部の上下両端に刻目が施されている。216～218は、口唇部を上下に割き、下半を突帯化したものである。215と217の刻目はユビ押圧による。212の外表面は粗い条痕仕上げ、他のものは細条痕仕上げである。219～227は口唇部に端面をもち、下端が少なからず突帯状のものである。刻目はハケ工具のもの、丸棒側面によるものなどがある。外面調整は、細条痕とハケのものがある。

228は明瞭な端面をもたないが、そこに刻目が施され、外面は横位の条痕が施されている。229は折返し状の口縁部となっており、刻目は施されていない。内外面にハケ調整が認められることから、甕としたが、鉢の可能性はある。いずれにせよ、一般的な形態ではない。

230は口唇端面に2本1単位の刻目を間隔をあけて施されたもので、142と同一個体の可能性はある。

231～233は口唇部端面下端に刻目をもったハケ仕上げの甕である。234と235は口唇端面をもつが、刻目がなくて、234は細条痕、235は細かな条痕が付いた板ナデで調整されたものである。

③ 高坏（図44）

236～242が高坏である。236は小型の高坏の坏部で、口縁部内面に突帯を有し、口唇部に刻目が施されている。237と238は形態が異なるものの、凹線文系土器の主要2形態の高坏である。237は碗形の浅鉢形坏部で、口縁部外面に凹線文が施されている。内外面ともミガキ調整が施されている。238は漏斗状の坏部に鐙状に水平に開く口縁部が付いたものである。口縁部内面には突帯があり、口唇部は拡張され、凹線文が施されている。内外面ともにミガキ調整されているが、下地にはケズリ調整の跡が観察される。同様な高坏は、南畿高地SK24からの出土品(23)にある。

239と240は脚端部が屈折して受口状になった高坏の脚部であるが、坏部と脚部の成形に円盤充填技法が用いられていないことから、凹線文系の237や238などの脚部ではない。239の脚端部にはヘラ描斜格子文が施されている。在地系の236などの脚部と考えられる。241は下端部が肥厚した高坏もしくは台付鉢の脚台部で、ヘラ描による横線文が施されている。

242は高坏の脚部であるが、受口口縁部壺と見間違えてしまうほど、装飾されている。下に向かってラッパ状に外反して開き、底部で屈折して受口状をなしている。受口状の脚端部外面には、沈線による円形文と弧文が描かれ、円文の中心には円孔が開けられている。屈折部には刻目が施されている。坏部との接合部より少し下には断面三角形の細い突帯があり、その直下に並行する1条の沈線がある。そこから屈折部にむけて、5方向から沈線が垂下されている。屈折部と突帯との間は粗いハケののち縦ミガキが施されている。全体的に煤けており、煮沸された可能性が高い。胎土には石英や雲母のほかチャートや砂岩などが含まれており、色調はにがい黄橙色～茶褐色を呈する。遠

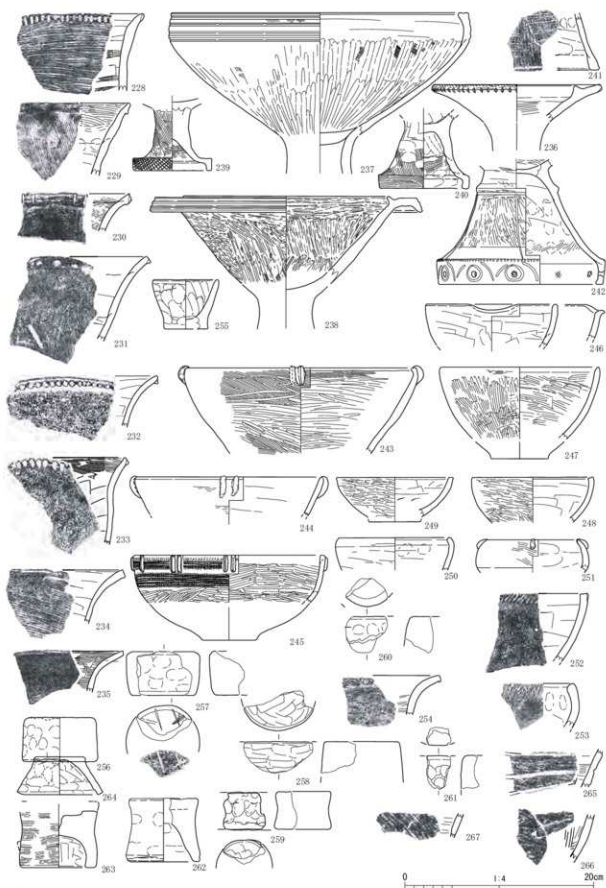


図44 D層出土中期弥生土器(10)

江や三河には類例はなく、搬入品と考えられる。

④ 鉢（図 44）

243～253は碗形の浅い鉢である。243と244はやや大型で、口縁部外面に2個1単の貼付文が付けられている。245は同様の貼付文とともに櫛による細かな刺突列点文が2段にわたって施文されている。246は半球形の体部に、片口がつけられている。247～249は半球形の無文の鉢で、247はやや深くて大きいもの、248と249は小型で浅いものである。250は小型であるが、243と同じように、口唇部近くで大きく内湾する。251は全体形が大きく内湾するもので、口縁部に貼付文が施されている。252は口唇部に端面があり、その外側にヘラ刺突列点文を2段に施している。253は内湾口縁部の外面に櫛描波状文が施文されている。

254は、甕形（深鉢形）の全面赤彩された鉢で、外面はハケののちナデで仕上げられている。255は手づくねの鉢で、断面形が逆台形をしたものである。

⑤ 台盤状土製品（図 44）

256～261は円筒形あるいは断面台形をした中実の土製品である。256は直径が8.0cm、高さ4.7cmの大きさで、ほぼ円筒形に近いものである。257と258も直径8cmと推定される。257の高さは5cm前後である。259は一回り小さく、直径6cm、高さ4cmの大きさと推定される。これは、中央部が少しくびれる形態である。

262～263は台状土製品ともされるものである。262は上端も残存しており、低い甕台部に近いものである。外形は円筒形に近いが、中位が少しくびれる。大きさは直径8cm、高さ6.7cmで、上記の台盤状土製品よりも高い。263も同様のものであるが、上面は欠損している。264は断面形が逆台形をしたもので、台盤状土製品と同じように、上面が平滑であることから、この仲間とした。内外面とも押えとナデで調整されている。

⑥ 縄文土器（図 44）

265～267の3点が縄文土器である。265は横位の条痕をナデ消した後に、3条の沈線を施文したもので、後期後葉の宮滝式土器あるいは関東の安行式土器に並行する段階（蜷塚7型式）と考えられる。266と267は巻貝条痕で調整された、晩期前葉の寺津式～元刈谷式土器あるいは関東の安行Ⅲ式土器に並行する段階（蜷塚9型式）と考えられる。

第8章 出土木製品

木製品は、大溝ではⅦ層（古墳時代後期～飛鳥時代：6世紀後半～7世紀）、Ⅴ層（奈良時代前半：8世紀前半）、Ⅳ下層（奈良時代後半～平安時代前期：8世紀後半～9世紀）、Ⅳ上層（平安時代中期：10世紀）、Ⅲ層（鎌倉時代：12世紀～13世紀）から出土している。また、大溝の下層から北低湿地にかけて広く連なる層では、Ⅷ層（Ⅶ・Ⅳ中間層：5世紀）、Ⅳ下層（弥生時代中期後葉：前1世紀）、Ⅳ上層（弥生時代後期前半から古墳時代前期：1世紀～4世紀）から出土している。ここでは、伊場大溝からの出土品を先に紹介し、つづいて弥生時代以降の出土品を説明するが、伊場大溝のうち、便宜的に古い順にⅦ層の群、Ⅴ・Ⅳ下層の群、Ⅳ上層の群、Ⅲ層の群の3つに分けて説明する。

木製品の分類については、伊場遺跡遺物編Ⅰに従い、生産（労働）用具、生活用具、建築部材、武器武具・馬具、祭祀用具などおもに機能別に大別した上で、個々の説明をする。なお、生産用具には農具・漁具・運搬具・編具・機織具・工具が、生活用具には厨房具・容器類・横櫓などの日常的な道具や用具が含まれる。その他、上記の分類に含めることができないものは、有頭棒、有孔板など形態でまとめている。

1 大溝Ⅶ層の出土木製品（7世紀）

Ⅶ層からの出土木製品には、農具としてナスビ形鋳・鎌柄、横槌、工具として斧柄、運搬具として背負子、編具・機織具として木鎌、生活用具として櫛、容器の槽・曲物、馬具として鍔、祭祀用具として刀形がある。その他には有孔板、有頭棒、先端加工板、加工角棒がある。以下、図版順に説明する（図45・46）。

横櫓（生活用具） 1は幅は8.8cm、高さが4.8cmの横櫓である。背が円弧を描き、側面は少し下に開くが、全体形は半円形に近い。丸い背と直線的な側面の境は稜をなす。側面は下端近くでも稜をなして、先細りするように仕上げられている。棟の断面形は平坦であり、歯は58本である。歯を作り出す前に、付根に外周線を彫り、それを目印に歯を切り出している。歯は割れて落ちているものもあるが、ほぼ完形品である。材はヒサカキの柾目材が使用されている。

壺鍔（馬具） 2は下膨れのイチジク形をしているが、外周のかなりの部分が欠損している。また上部の吊紐孔（鍔孔）の部分の残りは悪い。図は一部復元的に作図している。半截材を用い、イチジク形に成形している。踏込み部の挟りは縁辺の大半を欠損しているため、深さは明確ではない。半截材であるためそれほど深くはならないかもしれない。内側の挟りは粗く、調整加工はされていない。踏込みとは逆の胸部外面には稜があり先端のつま先部は丸く仕上げられている。形態は金属製鍔に近い。鍔孔の部分も内面が挟られており断面形はV字形をしている。上端は隆帯が作り出され厚くなっている。鍔孔は側面から入れられているようであるが、1孔は完全に欠損している。大きさは縦25.0cm、推定幅は18cm～19cmである。材はケヤキで縦位の木目である。なお、伊場遺跡には忠持材を用いた6世紀の類例がある。また、田原市山崎遺跡では古墳時代後期あるいは奈良時代の木製壺鍔が1組出土している。

刀形？（祭祀用具） 3は先端が鋭く圭頭に加工された長い薄板材であり、刀形としたが破片資料であり確証はない。材はヒノキと思われる板目材であり、律令期の木製祭祀遺物に用いられる材

と同じである。なお伊場遺跡群では、律令期の刀形木製品の確実な例は認められていない。

鎌（農具・ナスビ形） 4はナスビ形鎌身の上半部であり、柄（曲柄）との装着部分にあたる。断面形は全体的に蒲鉾形で、片面に丸みを持ち、もう一面は平坦である。上端部は突起があり10cmほど下には左右側面に三角形の張り出しを作り出している。柄を結束する紐の緩みやズレを防止するための工夫である。裏面上端にも段が作られており、使用時の柄との間の縦ズレを防止する構造と考えられる。段の位置が当品では頂部に近い位置にあり、形骸化したものかもしれない。先行する5世紀の山ノ花遺跡には類例はあるが、同時期の伊場遺跡群内での類例は認められていない。材はクスギで柾目材である。

鎌柄（農具） 5は下端部にかかりが作り出されていること、柄の大きさからみて、鎌柄と考えられる。作りは丁寧で加工の痕を残していない。材はクスギの柾目（ミカン割）材が用いられている。色調は白っぽくアカガシとは異なる。

背負子（運搬具） 6は伊場遺跡の報告書において背負子あるいはY字形木製品とされているもので、その下端部の破片である。材は不明であるが、年輪は幅広く粗い。下端部は斜めにカットされ、2段に挟りを入れている。裏は平坦面が作り出されている。樹皮を剥いで夏目の軟質部が出ているため、表面は風化による荒れが著しい。本来は上部がY字形になっており、その部分に紐ずれ痕を残すものが多い。伊場遺跡群では相当数の出土が知られているものの、何の部材なのか明確になっていない。背負子のほか船の帆あるいは櫓、または機織に関わるものなど様々な意見がある。

木錘（編具・ダンベル形） 7は直径約4.5cmの小枝を長さ約12cmに切断して、樹皮を剥いだ後に、ダンベル状に中央を細く削った木錘である。鋭い加工痕跡が残るもので、鉄刀による加工と考えられる。材は広葉樹の芯材材である。

木錘（編具・有孔） 8は小木を半截した長さ12.0cm、幅8.0cm、厚さ3.8cmの材に、小孔を開けて木錘としたものである。表面は樹皮を除去しただけの蒲鉾状であり、全体的に磨滅している。紐を通す孔のまわりの加工の状況は明確ではない。材はヒノキの幼木のようなものである。

横槌（農具） 9は全長が34.6cm、身の直径が6.6cmの、カラマツを用いた横槌である。身の裏面は剥がれて欠損している。握りは直径約3.0cmと細く、身よりも長い。下端は直径約3.5cmと少し帯状に太くなっている。身の中央あたりは少し窪んでおり、使用に伴い潰れたためと考えられる。また身の下端部から握りに至る所は、使用に伴う擦れが観察される。年代は、出土層位がⅦ層であり飛鳥時代と弥生時代後期の土器を含むが、この地点での弥生時代後期の木製品は見られないことから、7世紀と考えられる。

斧柄（工具・鉄斧用） 10は幹から枝が分枝する部分を用いた斧柄と考えられるもので、柄を枝の部分から、装着部を幹から作り出している。装着部は扁平な作りで上下両端ともに欠損している。外側面（図平面の右側、柄とは逆側）には狭いながら平坦面が作り出されている。横斧の斧柄としたが、やや小振りであり、しかも鉄斧装着用の細工や痕跡は残存する範囲では認められない。材はクスギである。

桶（容器） 11は方形木槽の隅部破片である。方形と言っても正確には隅が丸くされていることから、隅丸方形である。内外面ともに細かく削り、丁寧に仕上げている。内底には側面との境目に鋭い刃物痕があり、鉄製刃物を使用して調整されていたことがわかる。材はヒノキと思われる柾目材で、木目が細く整った良質の材が用いられている。色調も生木のように黄褐色を呈している。年代は出土層位から弥生時代後期あるいは7世紀と考えられるが、槍鉋あるいは刀子状の刃物の普及や木製品の出土量から察して、7世紀の可能性が高い。

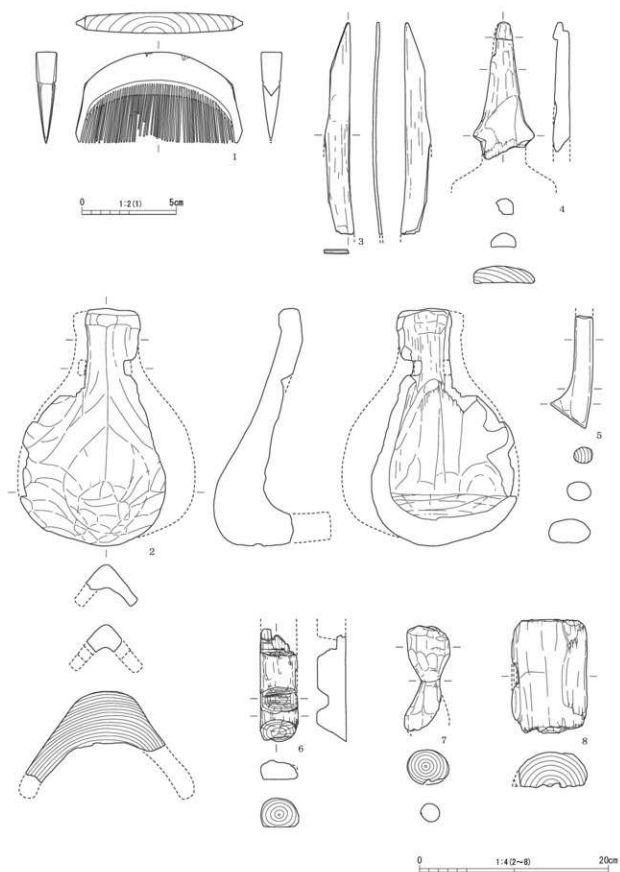


图 45 大溝出土木製品(1) (Ⅶ層①)

曲物（容器・曲物底板） 12は現状は、長さ33.2cm、幅3.8cm、厚さ1.2cmの細長い板材で、両端には小円孔が一つずつ認められる。小口の端部にはカキイレソコの痕跡が認められることから、もともとは曲物の底板であったと考えられる。図示した面は曲物底板の下面にあたるが、刃物による切傷も少し認められる。年代は、大溝Ⅶ層であり、7世紀に遡る。伊場遺跡群では律令期の曲物としては最古の部類に属する。

有孔板 13は長さ20.0cm、幅13.5cm、厚さ1.3cmの、長方形に加工されたマツ科ツガ属製の板材である。2つの角近くには一辺1.5cmの四角形の孔が開けられている。図示した状態の上端は刃物で切った様子が観察される。下端は平坦で、左右側の端面は丸く仕上げられている。加工は全体的に丁寧であるが、残念ながら用途不明品である。

14は全長69.5cmの有孔板で、小型の方形孔が2か所に粗く彫られている。現状の幅は11.4cmである。小口の両端は残存するが、側面は全て割れている。片方（図では下）の小口面は方形に切り欠かれている。用途については不明で、大型板材であることから、建築部材の一部と思われる。手斧痕は見られるが、全体的に加工は粗い。材はやや粗い木目であるが、ヒノキなどの針葉樹の板目材と思われる。

有頭棒 15は枝材の先端を加工した有頭棒である。枝材の樹皮を剥ぎ、細かな枝を切断して加工されている。頭部先端は丸く、その下端に切目を入れて下から削り込んでいく。頭部とは逆の端部は粗く削られ、しかも折れており、再加工あるいは廃棄に伴う破損と見られる。

16は角棒を加工して作られた有頭棒である。上端から4cmあたりに幅約1.5cmの溝を彫ることによって頭部を作り出している。何らかの部材であるが、用途不明品である。

先端加工板 17はヒノキと思われる柾目材を用いた薄い板材であり、先端が加工されているものの、片側半分は欠損している。ヒノキとしたが木目がやや粗く、スギの可能性もある。先端を尖るように加工されていることから斎串の可能性もあるが、確証はない。斎串とすると最古の部類に属する。

加工角棒 18は長さ18.4cm、幅3.0cm、厚さ1.9cmの小型の角棒である。全体形は背の高い台形で、両端とも四面から斜位に削られ、先端（図では下端）は斧の刃部状に尖る。また本体の断面形は四角形であるが、隅切加工が施されている。調整用の削りは細かく丁寧である。削り面に刃こぼれ痕があるなど、鉄刃を使った可能性が高い。材はヒノキと思われる板目材で、木目は細かく良材である。出土層位はD層上部と認識して取り上げたが、年代は7世紀の可能性が高い。

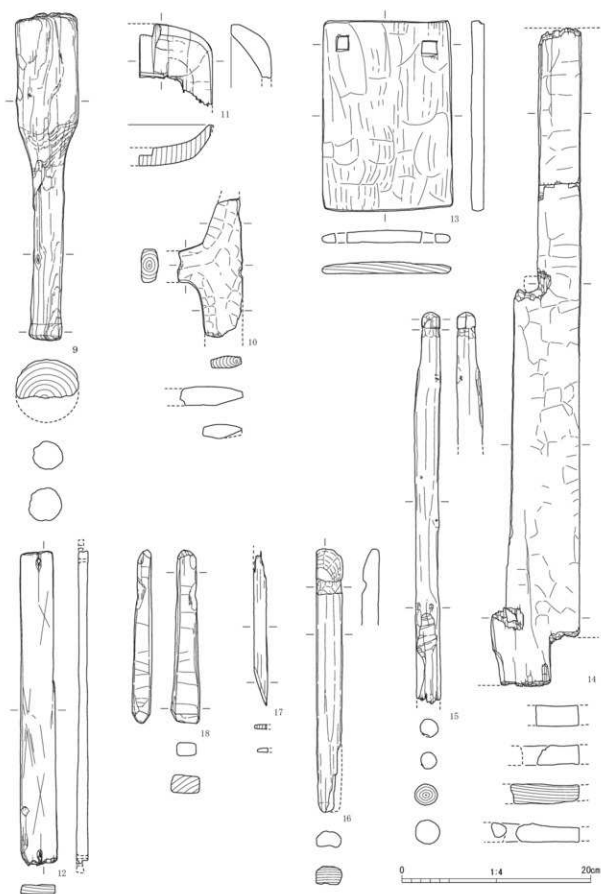


图46 大溝出土木製品(2) (Ⅶ層②)

2 大溝Ⅳ・Ⅴ層の出土木製品（8世紀～9世紀初頭）

Ⅴ・Ⅳ層出土の木製品（図47・48）をここで紹介するが、出土層位及び年代観、法量、樹種は巻末の出土遺物観察表を参照されたい。出土木製品には、木簡のほか、農具として狭鋨（つるはし状）・横槌、容器として曲物、建築部材として柱根、祭祀用具として畜串・舟形・刀形、その他に有頭棒・有孔板・加工小棒がある。

木簡 19は蓋の外側に「筆墨納櫃」と墨書された、長さ33.9cm、幅6.5cm、厚さ1.5cmの箱蓋である。外面は僅かに甲丸ではあるが、ほぼ平坦に作られている。内面は平坦に作られているが、箱本体を受け取るための段が作られており、その段の幅は短辺で1.5cm、長辺0.8～0.9cmである。作りは丁寧である。箱本体は出土しなかったが、蓋の受部から、箱の内法は長さ約31cm、幅4.7cmほどと推定される。文字は外面上端に「筆墨納櫃」とある他に浮字として中央より少し下に2文字の存在が推定される。浮字の上の文字が「歳」の可能性もあるものの確定はできない。なお「筆墨納櫃」についても、墨の流失が進んでいて浮字状態になった部分がある。材は、ヒノキの板目材が用いられている。年代は出土層位からⅣ下層下部で、8世紀末葉と考えられる。出土した深さは、8世紀後半の須恵器坏蓋（Ⅳ下層）に「山」と記した墨書土器（図27-85）より浅く、「朋方」とある10世紀前半の灰軸陶器碗（Ⅳ上層）（図27-95）より深い位置にある。

舟形（祭祀用具） 20は長さ21.2cm、幅3.3cm、厚1.1cmの大きさの舟形木製品である。正方形に加工された板材の上面を紡錘形に彫り窪めて船底を作っている。彫り込みは全体の加工に比べてやや粗い。図示した平面では端の小口部は軸先であるが尖っていない。しかし縦断面においては軸先から船底にかけては鋭角に表現されている。これに対し船尾の角度は鈍角に作られている。材はヒノキの板目材で、きれいに加工された板材が用いられている。

畜串（祭祀用具） 21は薄板を使用した畜串であるが、人形のような頭が作り出されている。長さは13.4cm、幅は2.1cm、厚さは0.5cmである。頭部は主頭で肩部は両側から切り欠いて、いかり肩となっている。切り掛けは両側に上から1ヶ所ずつある。先端は、通常の畜串と同様に尖らせている。切り掛けは先端を欠損し、下端も発掘過程で傷付けてササラ状になっているが、ほぼ完形品である。材は、アスナロである。

鋨（農具・狭鋨） 22はつるはし状の狭鋨と考えられる木製品である。図示した上部は幅が広く、下方ほど細くなるが、途中で折れて欠損している。上端近くには円孔が斜位に穿たれており、柄が挿入されていたと考えられる。円形の柄孔の周辺は特に厚く作られているわけではない。材はアカガシ亜属の柾目材である。出土層位はⅤ層として取り上げているが、中期弥生土器が多く存在している所であり、弥生時代中期に遡る可能性が高い。

横槌（農具） 23は全長40.9cm、直径6.0cm弱の芯持材を加工して作られた横槌である。身は樹皮を剥いだままで、上端は粗いが丸く加工されている。把手は細くなっているが、下端にはかかりが作り出されていない。

身の部分は22cmほどであり、身の中央部には潰れた部分があり、使用痕と考えられる。部分的に表面が剥がれて欠損している部分がある。上端は裂けているが、ほぼ原形を留める。材はヒノキの芯持材である。

有孔板 24は長さ38.0cm、幅14.0cm、高さ1.5cmの長方形をした有孔板である。一角は、隅切り加工されている。方形の孔が3ヶ所、円形の孔が1ヶ所あけられている。方形孔は粗く削られたものであり、円孔のところは表面が焦げている。用途不明の板材である。

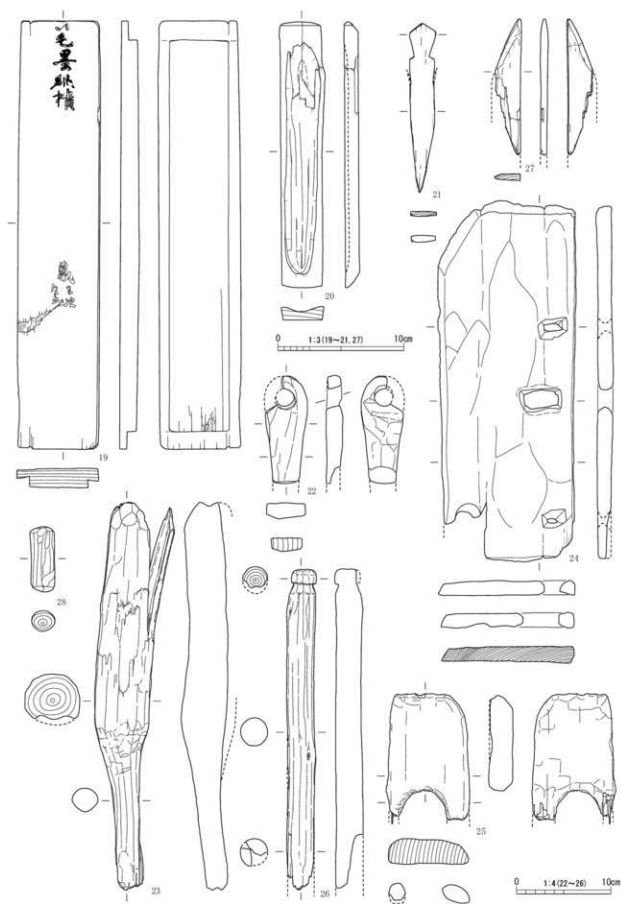


図47 大溝出土木製品(3) (Ⅳ・Ⅴ層①)

25は直径約5cmの円形の孔が開けられた板材で、全体的に焼け焦げている。何の製品だったかは分からないが、目の細い良質なヒノキと思われる柾目材が用いられている。深い位置での出土であることから、Ⅷ層あるいはⅧ層であったものを、登録に際してⅣ層と誤記している可能性がある。

有頭棒 26は直径約3cmの板材（芯持材）を用いて、頭を作り出した有頭棒である。片端は折れており、両頭なのか片方だけなのかは不明である。樹皮を剥きただけで、枝の切除痕が見られる。頭部は、撫肩状に外周から削り込んでおり、作りは丁寧である。

刀形？（祭祀用具？） 27は薄いヒノキ材と思われる板材を加工したものである。刀形とした場合、鋒は明瞭に刃部状に加工されているが、その大半は欠損している。小片であり、しかも伊場遺跡群では明確な刀形が発見されていないことから、刀形と断定することはできない。やや黒ずんでいるが、残存状態は良い。

加工棒 28は小木の表皮を除去し、両端を調整加工した長さ6.9cm、直径2.2～2.5cmの加工棒である。用途は不明であるが編物用の木錘として使用することはできよう。材は広葉樹の芯持材である。

曲物（容器） 29は直径19.4cmの円形曲物の底板で、一部を欠損するが7～8割ほどが残存する。外周は、カキイレゾコとなっていて、そこに側板を置き樫紐で綴じる構造である。底板は外見上、側板から外にはみ出す。樫紐を通す2孔1単位の小孔が3ヶ所で確認された。2ヶ所には樫紐が残存している。欠損部にも1ヶ所の存在が推定されることから、本来は4ヶ所で紐留されていたと見られる。外底面には刃物による切傷が多くあるが、内面には少しだけ認められる。外底面には少し焦げた痕跡がある。33までの曲物の材は、ヒノキと思われる柾目材が用いられている。

30は丁寧に仕上げられたカキイレゾコの曲物底板である。外周には段差（カキイレ）があり、この段部を挟んで側板を留めるための2孔1対の孔が2ヶ所に認められる。完形品であれば全体で4ヶ所存在したと考えられる。底面（裏面）には刃物による切傷が認められることから、組板としても使用されたと考えられる。

31は直径約15.5cmの円形の曲物底板である。側板をはめる外周は、カキイレゾコとなっている。側板を樫紐で結束していた所が1ヶ所認められることから完形品の底板であれば3ヶ所で留められていたと考えられる。中央に小孔が穿たれている。底面には刃物による切傷が多く残る。内面中央部は、火を受けたため焦げている。また、外周にも一部焦げた部分（右側図の左上）が認められる。焼け方から火を受けてから割れ、そして投棄されたと推定される。

32は大型の円形曲物底板である。全長が48.7cm、推定幅21cmであり、2～3枚の板材を綴じ合わせて底板にしたものである。合せ目には直線的に小孔が3つある（図では右側）。それに対してカキイレゾコとなる外周には2孔1単位の穿孔が3ヶ所にある。これは側板を結束するための紐を通す孔であり、実際に樫紐が残るところもある。底面には刃物による切傷が多く存在するが、内面にも少し確認される。底板の半分（図の左側）が被打つように変形しているのは、材の変形あるいは土圧の影響と考えられる。

33は厚さ0.3cmの薄板で作られた曲物の側板である。図示した状態での上端は残存するが、下端は欠損している。高さは現存状態でも10cmを超えている。内側には縦位と斜位のケビキが入られている。

目釘孔や結束された樫紐が残っていることから、側板の重ね合わせの部分、あるいはまわしの側板を留めていた部分と思われる。湾曲が少ないことから、大型の曲物であったと推測される。

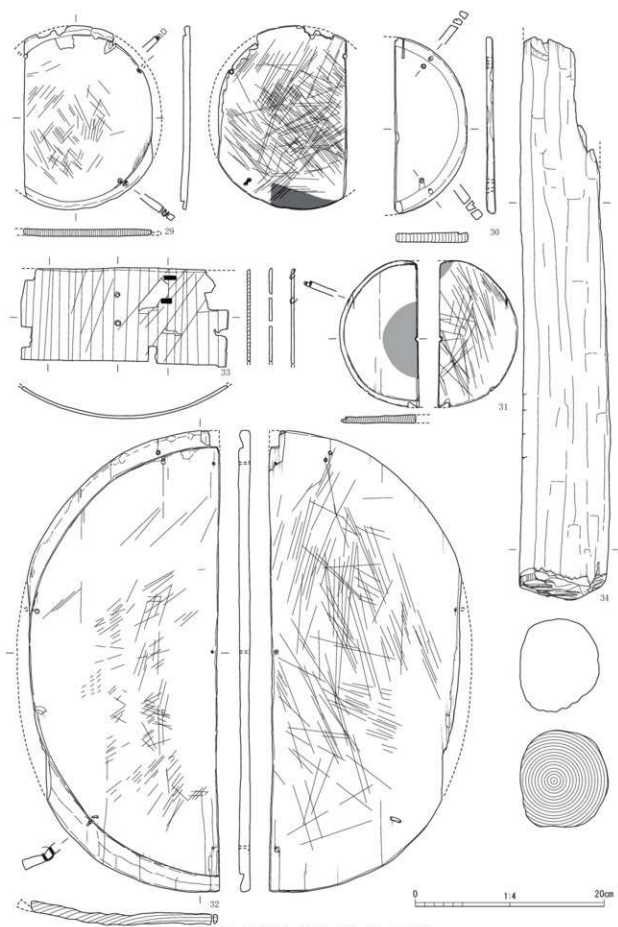


图48 大溝出土木製品(4) (Ⅳ・Ⅴ層②)

柱根（建築部材） 34は現存長89.4cm、直径14～15cmほどの丸太材であり、柱根と推定される。表面は樹皮を剥がし、一部に手斧掛けを施したただけのものである。底端部は鉄斧と考えられる鋭い刃物で削られている。上端は立ち腐れしており、中心部は芯まで腐っている。

3 大溝Ⅲ下・Ⅳ上層の出土木製品（10～13世紀）

平安時代中期から鎌倉時代の木製品（図49）には、農具の横樋、漁労具の四手網、武器の小刀鞘、容器の曲物・折敷・箱物・槽があり、その他に荷札状木製品がある。

横樋（農具） 35は大きさは長さ22.6cm、直径4.0cm前後で、ツツジ科スノキ属シャシヤンボの芯持材を用いた小型の横樋である。頭は粗く加工したままで、身も樹皮を剥いだ状態である。柄は下端に向けて細く加工され、端部は突起（かかり）が作り出されている。全体的に細かい調整加工が行われていないため、未製品かもしれない。また、使用痕跡も認められない。なお、横樋ではなく編物用の木鍾の可能性もある。

荷札 36は材は、ヒノキの柁目材である。長22.2cm、幅1.9cm、厚0.8cmの荷札状木製品である。頭部には両側から三角形の挟りが入れている。上端はやや斜めであるが、下端は平らである。

側面及び表面の一部に直径2～3mmの未貫通の浅い穴が認められる。墨書の痕跡は認められない。年代は出土層位から鎌倉時代と考えられる。

四手網（漁労具） 37は枝材（芯持材）を半截し、端部に隆帯状の頭を作り出したものである。同様の材を合わせて、紐で結束する構造と考えられる。内面の割った面には極を彫っている。やや長い四手網の把手の破片ではないかと考えられる。外側の側面には切傷が付いており、再加工されている可能性がある。

鞘 38は目の粗い針葉樹の板材で作られた何らかの鞘と考えられるもので、断面形は蒲葺形をしている。外面の片端は幅1.5cmほどで帯状の隆帯が作り出されている。ここには小孔があり、錆びた鉄釘が残っていた。もう一方の端部近くには幅約1.5cmの溝が彫られ、下端にも小孔がある。同様の材を2枚合わせにして紐で結束し、しかも鉄釘で留める構造である。内側の彫り込みから、刃渡り15～16cmの小刀の鞘と推定される。

曲物（容器） 39は厚さ2～3cmの薄い板材を加工した曲物側板の破片である。内面には縦にケビキが認められ、両側面の割れはケビキ線に沿うものである。

折敷（容器） 40は厚さ0.8cmほどの板材を加工した折敷底板で、現存長は30cm強である。長方形の折敷に分類されると思われるが、長辺側は円弧を描き、また隅切となっている。長辺には側板を留めるための2孔1対の榫紐孔が3ヶ所ある。隅（図では下）にある2孔のうち1孔はどう言うわけか未貫通である。

折敷（容器） 41は0.2～0.3cmの薄いヒノキと思われる柁目材で作られた折敷の側板の一部である。小孔が長辺に2ヶ所あり、一方は2孔1対であった可能性が高い。湾曲がほとんど認められない側板片である。

42は材は、ヒノキと思われる柁目材である。長19.0cm、幅3.5cm、厚0.5cmの大きさの折敷側板である。底板とは木釘で留められていたため、下端3ヶ所には木釘が残る。側板の加工は、外側が平滑であるのに対し、内側はケズリ調整痕を残すなど少々粗い作りをしている。ただし外側は風化が進んでおり、さらに煤けた部分がある。

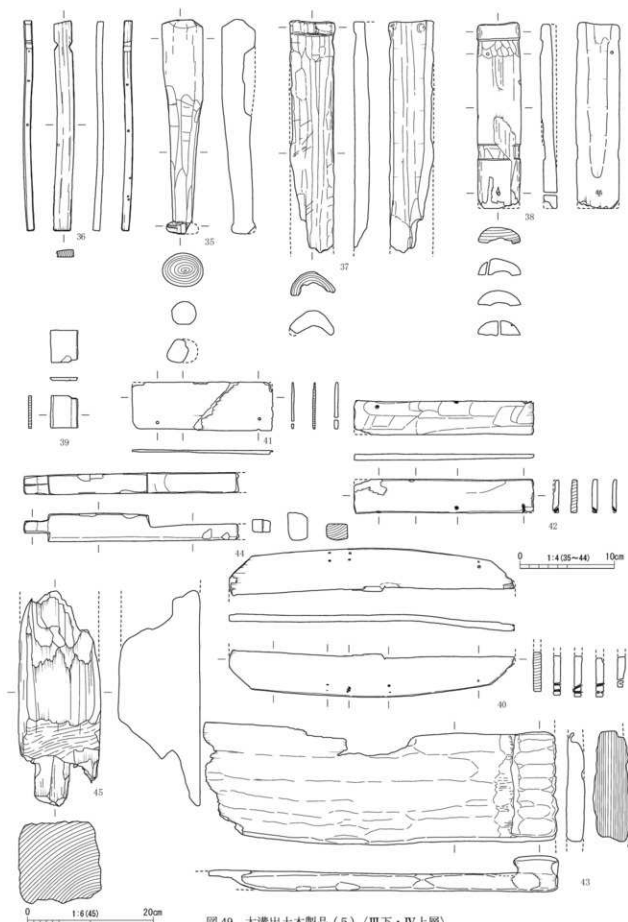


図49 大溝出土木製品(5)〈Ⅲ下・Ⅳ上層〉

槽(容器) 43は大型の剣物槽と考えられる板材で、現存長は37cmを超えている。片方の小口にある帯状の突帯は、木槽側部の立ち上がりである。側部は本来もっと高く、深い木槽であったと考えられる。この小口部の周辺だけは立ち上がりが残存しているものの、それ以外の外周は全て割れて欠損している。器表面も風化が進んでおり、残りは良くない。

箱物(容器類・差物) 44は一辺2.0～2.5cmの角材の小口に凸字状の出柄を作り、側面に挟りを入れたものである。出柄の先端部は裂けており、楔が打たれていた可能性が高い。挟り部分が中央とすると長さ36cmほどとなる指物の箱物であった可能性はあるが、これだけでは何とも言えない。1面を除いては角を丸くするなど丁寧な作りである。

柱根(建築材) 45は一辺13cmほどの角材で、柱根と考えられる。下端は斜位にカットされている。カット面は凹凸が少なく鉄斧による可能性が高い。下端の一部が腐っているのは根腐れと考えられる。上部は全て腐っているが、これは立ち腐れによるものと思われる。材はヒノキのようで、四分割材(ミカン割)を加工とした角柱である。

4 D層の出土木製品(弥生時代)

D層から出土した弥生時代中期後葉から後期前半の木製品(図50～63)である。大半がD下層からの出土で、年代は弥生時代中期後葉である。北区のD上層から出土した梯子85・86と垂木89だけが弥生時代後期である。種類には、農具として鍬(未製品含)、鋤(未製品含)、木鎌、田下駄、竪杵、横植、工具として斧柄、刀子、漁具としてタモ、武器あるいは狩猟具として丸木弓、容器食器類として高坏、槽、建築材として梯子、垂木、柱根、その他には有孔板、有頭棒、柄材他がある。

鍬(農具) 46は全長37.2cm、幅14.8cmの長方形をした、ほぼ完形の平鍬で、中央より少し上に隅丸方形の柄孔が開けられている。突起はないが柄孔周辺が最も厚くなるように作られている。正面には中央縦位に稜線をもつが、柄孔から下が顕著である。断面形は菱形に近いが、裏面では稜はなく丸味を持つ程度である。裏面全体も真平ではなく柄孔を中心に膨らみを持っている。土圧により窪んで変形した部分があり、木本体の残りは良くないが、表面には手斧の調整痕も少し観察できる。材はコナラである。

47は全体形が長台形をした全長19.0cmの平鍬である。材は、アカガシ亜属を用いた柾目材である。隅丸方形を呈する柄孔の周囲は厚く作られ、突出する。刃部は平らであり、幅は10.5cmである。柄との装着角度から推定して柄孔突出部は内側に付き、後面が平坦となるが、柄の装着角度と形態との関係はやや不自然である。内側(柄側)の面に丸みを少しもつ。年代は、柄穴部を厚くするなど弥生時代中期と考えられるが、Ⅶ層と認識して掘り上げてしまったものである。

48は平面形が長方形をした平鍬で、ほぼ中央で縦割れしている。上端は一部が残存しており、平坦であったと考えられる。刃部側も厚みから見てそれほど大きく欠損していないようで、刃部が平坦に作られた平鍬であったと推定される。柄孔はほぼ円形で、周囲が厚く作られている。柄孔から外周に向かって徐々に薄くなる。内面(図示していない裏面)はおおよそ平坦と言えるが、やや柄孔付近を中心に丸味をもつ。

49は平面形が隅丸方形をした柄孔があることから、直柄鍬の身上半部破片と考えられる。材は、アカガシ亜属の柾目材である。柄孔周辺は厚く作られており、柄の装着角度から考えて柄側に凸面をなす。後面は、平坦に作られている。鍬身の上端部は三角形に尖る。年代は、出土層位はⅦ層であるが、形態的には弥生時代中期の可能性が大きい。下層のものを誤認して掘り上げてしまった

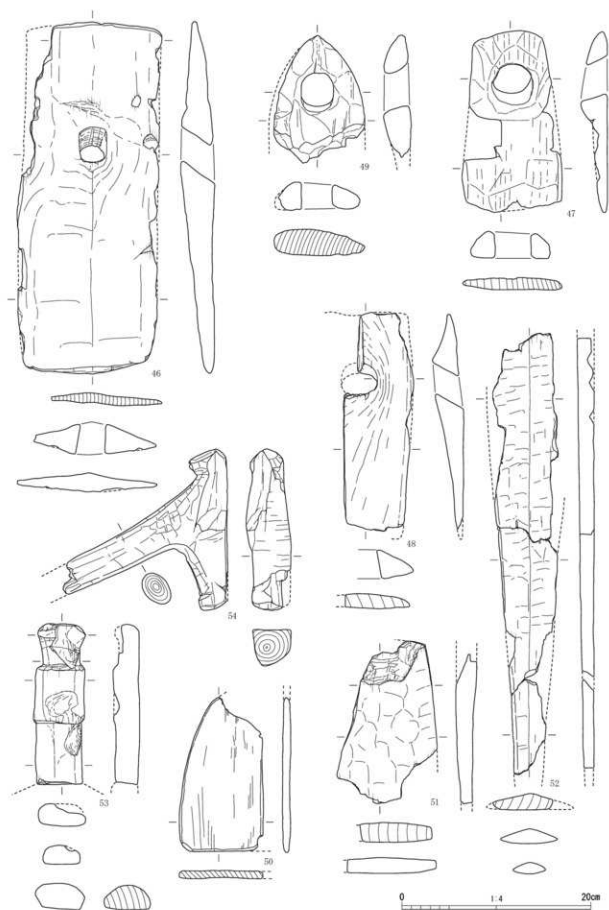


図50 D層出土木製品(6) (鉄)

ようだ。

50は厚さ0.8cmほどの板材で、平鋳の一部と考えられる。図示した状態で、下辺は少し尖り、左側は湾曲した面をなしている。上と右側は割れている。下辺が刃部で、割れた上辺には柄の装着部が存在したと考えられる。

51はカシ類の柾目材を用いて作られた鋳身の破片である。肩部と側面の一部が残存するだけで、大半の面は欠損している。現状の残存状況から見て、舟形突起をもたない平鋳の可能性が高い。

52はカシ類の柾目材を用いて作られた狭鋳である。上の方は断面形が三角形に近いが、先端に近づくにつれて菱形となっている。しかし中央縦位に稜があるのは背面（外側）だけである。柄を装着する部分は完全に欠損している。現状では長さ46.7cmが残存していることから、大変長身の狭鋳であったと推定される。表面は平滑であるが、よく見ると細かな手斧による調整痕が観察される。

53は現存長17.0cm、幅5.4cm、厚さ2.7cmの、クヌギ製の鋳身上半部で、柄との装着部にあたる。断面形は蒲鉾形で、裏面は平坦に作られている。図示した面では頂部側と鋳身本体側に紐を結束するための溝が彫られている。上部の溝は幅3.0cm、下部は幅6.0cmと、下部の方が広く作られている。紐ずれ痕は、確認できない。年代は、弥生時代中期であり、類例には梶子遺跡6次調査で出土した平鋳（完形品）がある。

54はサカキの枝が分岐する部分を加工した曲柄（膝柄）の鋳柄である。枝部が柄（握り）、幹部が台部に加工されている。台部は平坦になっており、鋳身との接地面となる。台部の上端と下端ともに、柄側に紐掛用の突起が作り出されている。欠けている部分はあるものの、台部はほぼ原形を留めている。柄は、下半部（先端側）が欠損している。

鋳（農具） 55は組合式鋳である。平面形は縦約30cm、幅16cmほどの長方形であり、上端には長さ4.0cm、幅約3.0cmほどの張出がつく。張出は柄を装着するための紐掛けであり、梶子遺跡6次調査出土品のように本来は張出の先端には紐が脱落しないようにするための突起がついていたと思われる。張出は中心が少しずれており、また鋳身に開けられた装着用の孔の位置も同様に中心からずれている。上端の張出との間が広いほうに足（右足）を掛けたと考えられる。装着用の孔は、外面（図の左）では四角で、内面（図の右）では張出のある上に向かって溝が彫られている。その溝からすれば、柄の装着角度はかなり鈍角となる。内側は平坦に作られており、外側は中央が高く作られている。刃部は欠損しているが、残存状況からは平坦であったと推定される。材は、クヌギである。

56は一木造の鋳で、柄はほとんど欠損している。現存長40.8cm、幅20.8cm、厚さ2.8cmの、アカガシ亜属製の鋳である。柄は肩部の中心から少しずれて付けられている。柄の断面形は割れた所では四角形である。身の先端部の欠損は、調査時のものである。角肩の上辺は平坦で、明確な端面を有する。側面は左側上半部が鋭角に作られているが、それ以外の所では少なからず端面を有している。身の前面の縦中央には弱い稜があり、断面形は三角形（山形）となっている。当遺跡においては鋳身の未製品が多く出土していることから、本品も未製品の可能性はあるものの、使用に耐えるものと判断し、柄の折れた鋳とした。

又鋳未製品（農具） 57はアカガシ亜属製の、5本歯をもつ又鋳の未製品である。歯は、外側（図の右端）にある1本が欠損している。装着用の四角形の孔は、穿孔途中で終わっている。上部には方形の軸部があり、肩部は撫肩である。左側の歯は外側では先端まで面を有するが、右側（内側の面）では途中で面がなくなり、断面を図示したところでは内側に稜を有している。それ以外の歯の

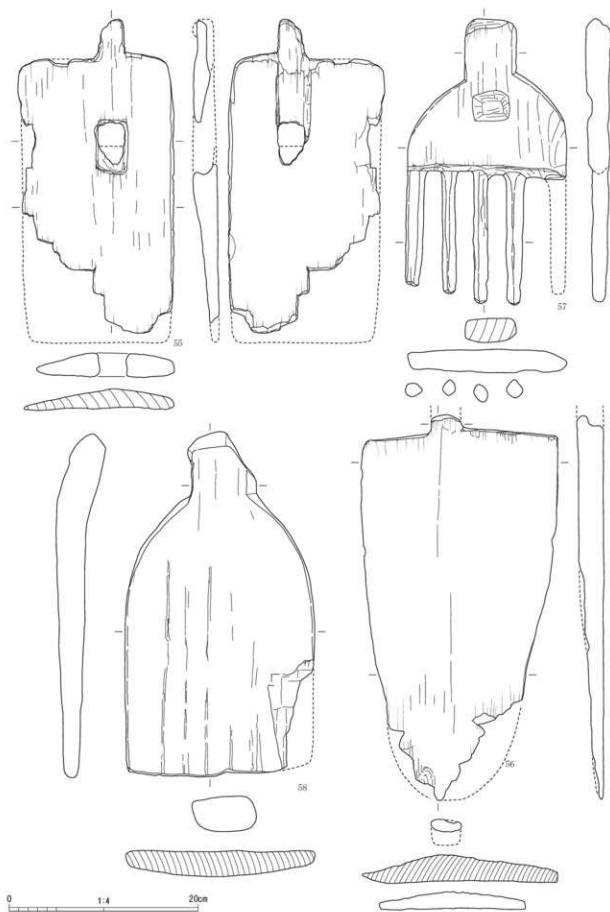


図51 D層出土木製品(7) (銀・銅)

断面形は菱形である。身本体と歯部との境には、段差があるものの、裏面ではほとんど認められない。歯の幅は1.5～1.8 cmほどである。鋤の大きさは長さ30.2 cm、幅16.8 cm、厚さ2.6 cmであり、歯の長さは13.5 cmほどである。

鋤末成品（農具） 58は平面形は釣鐘形を呈し、上部には柄着装用の軸がある。この装着軸は表面に屈曲していることから、組合式の鋤身と考えられる。大きさは全長が36.5 cm、幅が20.1 cmである。鋤身であれば柄を固定するために、鋤身本体の中央に柄の先端を受ける孔がなければならぬが、それはまだ穿たれていない。肩は撫肩であり、足を踏み込んで土を耕起するには適さない。材は、ケヤキである。

鋤末製品（農具） 59は刃部を両端に、柄装着部を中央部に配した2本分の直柄平鋤末製品であり、大きさは全長約86 cm、幅約26 cmである。舟形突起は、すでに作り出されており、中央で切断すれば二つの直柄平鋤の素形ができる。ただし、まだ厚さはかなりあり、刃部も薄くされていない。また、柄孔も開けられていない。

60はアカガシ亜属を用いた直柄平鋤の鋤身上半部と下半部の破片であり、2点は舟形突起のところで接点をもつ。上半部は柄との装着部であるが柄孔は開けられていない。舟形突起は、明瞭に作り出されている。裏面と側面は、ともに平滑に作られ、上半部は下に向かい撥状に開く。下半部の側面は垂直であることから、肩部は図示したように撫肩に復元される。下半部の破片は刃部までは残っていないが、幅広であることから平鋤と見て間違いない。

61は全長約44.0 cm、推定幅22.0 cmの、アカガシ亜属製の直柄平鋤末製品である。鋤上部に本来開けられるべき柄孔はなく、刃部も鋭利には加工がされていない。舟形突起は、上端から下に向けて幅を狭めて下端（刃先部）まで存在する。鋤身上半部の最小幅は約8.5 cmで、撫肩をなして下半部に至っている。鋤身の側面は垂直で、刃部は水平であったと考えられる。刃部の両隅部は欠損している。上端部も下端側の刃部も切断されたままで、調整加工はされていない。裏面はほぼ平坦であるが、縦軸を中心に外へ少し丸味をもって湾曲している。

62は長さ32.8 cm、幅18.6 cm、厚さ6.5 cm大のカシ類の板材である。図示した上半部は古くに欠損している。断面形はみかん割をした痕跡を留めている。表面（図左側）は少し加工され、裏面（図右側）は割面のままで加工されていないように見える。下端の平面形は隅切で逆台形状になっている。材質と大きさから鋤もしくは鋤末製品と考えたが、確たる根拠があるわけではない。

63は長さ26.5 cm、幅23.0 cm、厚さ4.5 cmの正方形に近い板材である。図の下端は少し鋭角（断面V字形）に尖られ、片面中央には低いものの、縦長の突起状の高まりが認められる。裏面（図の右側）は平坦で手斧による削り痕が残る。上端は、切断したままの状態である。突起があることから、平鋤の末製品と推定される。本来ならば、この後に成形、調整加工を加え、柄孔が開けられて製品化されるが、本品は成形途上の末製品である。材はカシ類の柾目材が用いられている。

木鎌（農具） 64は木製の鎌身基部が、装着孔にはまったく土出した鎌柄である。柄の下端は欠損しており、かかり（下端の突起）の形状は不明である。鎌身も基部の端が残存するだけで、刃部側は欠損している。有東遺跡から出土した木鎌を参考にとすると、柄上半部の張り出す側が鎌身の刃部側になることから、着柄角度は鈍角であったと考えられる。鎌身は刃部側とした右側が幾分幅広く、左側が細くなっている。柄の上半部の断面形は、刃部となる側が丸味を持ち、左側は面をもつように作られている。身は柄頭部に関けられたスリット状の装着孔に入れられるが、孔は長方形で、幅は身の厚さの2倍以上ある。また、トンネル状になっている部分は1/3～1/4で、大半は溝状（オープンカット）をなしている。身は、現状ねじれた状態で嵌っている。材は、身がアカガ

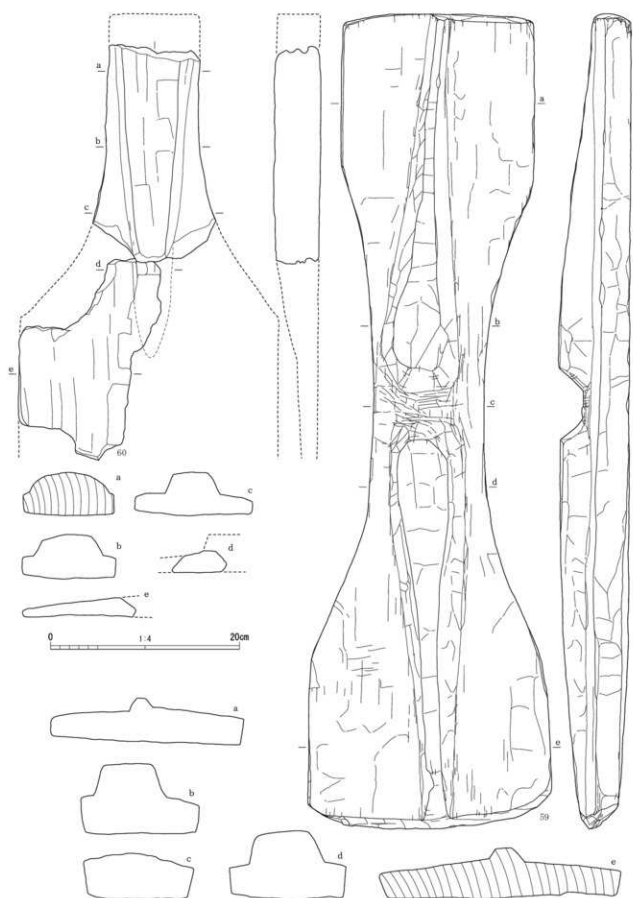


图 52 D層出土木製品(8) (缺未成品)

4 D層の出土木製品（弥生時代）

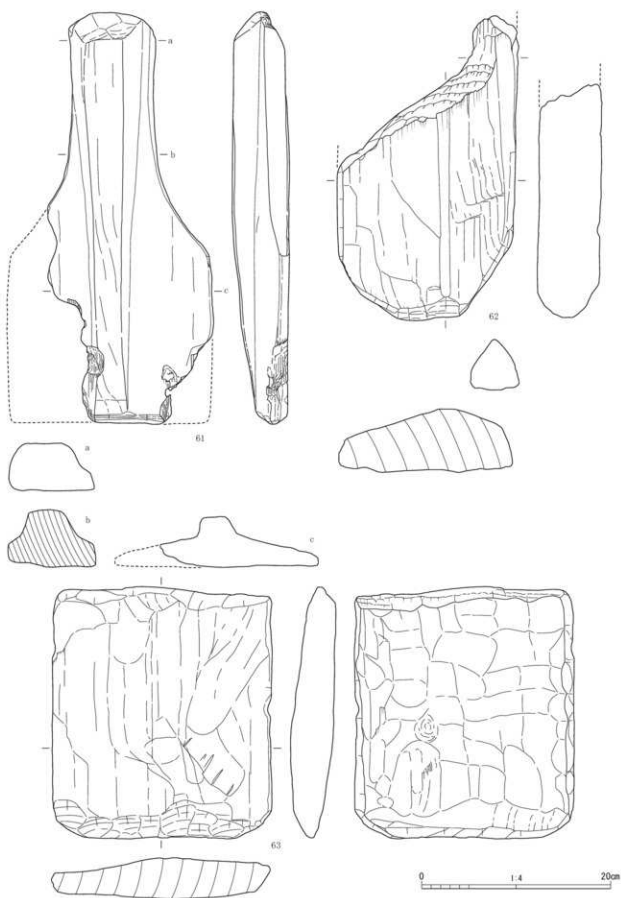


図 53 D層出土木製品（9）（缺未成品）

シ亜属、柄がクヌギで、ともに柾目材である。県内における木鐸の類例は、有東遺跡で出土した弥生時代後期の例と、梶子遺跡6次調査で出土した同中期中葉の例の2例だけである。

田下駄（農具） 65は長さ24.4cm、幅13.0cm、厚さ2.5cmの長方形の板材を用い、4つの孔を開けて田下駄としたものである。孔の一つは隅に寄りすぎたため、開け直されているように見える。足を置く面は全体が四角形に彫り下げられている。土に接する裏面は、甲丸とまでは言えないが、少し丸味をもつ。両小口面は粗割りした状態を残している。紐ずれや足指の痕跡は、はっきりしない。材はスギの板目材で、木目の細かな良質な材である。金属器を使って加工した痕跡はなく、出土層位からも弥生時代中期と考えられる。

堅杵（農具） 66はアカガシ亜属の割材を加工した堅杵である。握り部の節帯を中央とすると、本来は全長80cm、最大厚は7.4cmの大きさであったと考えられるが、片方を欠く。握り部と端部は磨減が認められることから、実際に使われていたものである。

横槌（農具） 67は断面四角形の身に短めの把手がつく横槌である。身は断面形が幅5.0cm、厚さ3.0cmの長方形である。全長は20.3cmであるが、四角い身の部分は長さ約8.0cmである。把手は、丸く直径2.2～2.5cmと細い。下端のかかりの部分は少し太くなっていて、直径は約3.0cmである。材はヒノキの芯持材で木目の細かな良質な材が用いられている。ただし、使用された痕跡は、明確ではない。

68はエノキの芯持材を加工した小型の横槌である。全長15.3cmであるが、握りの下端を欠損していることから、本来は20cm近く存在したものと考えられる。身の部分の直径は4.5cm、握り部は2.4cmである。使用痕は表面が荒れている部分もあって、積極的に認めることはできない。

斧柄（工具） 69はコナラの幹が枝と分岐部分を使用して作られた扁平片刃石斧用の柄である。台部の装着側は、樹皮が剥がされた後に大きく加工されている。台部は縦21.4cm、幅6.5cmの長方形で、下半部は段をなして平坦に作られている。平坦面としたが、石斧の形状に合わせたためか、少し凹面をなして平滑に仕上げられている。段となった石斧本体の基部にあたる部分も、少し丸味をつけている。台部の側面は、両側とも平坦に切られている。台部の形状から、大型の扁平片刃石斧用の斧柄と考えられる。柄（握り）は根元で折れているが、加工されている範囲から察すると、かなり細い柄と考えられる。装着溝の形状から、柱状片刃石斧の斧柄と考えられる。

70はサカキの枝が分岐する部分を加工して作られた柱状片刃石斧用の柄である。枝部を把手、幹の部分を台部に加工している。石斧の装着部は、装着溝の付根のあたりは観察されるが、ほとんどが欠損している。

タモ（漁労具） 71は柄は幹部を加工し、網杵は左右に出た枝部を湾曲させて作られたものである。柄は完存し、長さは66.5cmである。結束部分は古くに欠損している。網杵部の直径は76cmほどと推定され、その約1/3が残存する。柄は、両側に張り出す枝（網杵）の直上で幹を切断し、その下部を加工したものである。柄は幹部全体を削り込んで、下端に行くに従い細くしている。網杵は曲げやすくなるため、丸木弓と同じように内側を削いでいる。少ししか残っていない網杵の一方から、柄の付け根までは焦げており、その先端は完全に炭化している。材は、マツである。

丸木弓（武器・狩猟具） 72は現存長80.9cmの丸木弓で、片方のゆはず部分を欠損する。現状でも弧状を呈している。糸を掛けるゆはずは、両側から切れ目を入れることで、頭部を作り出したものである。ゆはずから20cmほどは、内外両面を削いでいるが、それ以外（図では下方）では内側だけを削ぐ。外側は、樹皮を削り取ったままである。ゆはずから、5.0cmあたりの側面には線状の刻みが数本存在するが、何の刻目かは不明である。材は、イヌマキである。

杵（機織具） 73は現存長57.0cmであるが、孔を中央とすれば全長約86.5cmの杵であったと推定される。孔の所は幅広く作られ、断面形も楕円形を呈する。孔から離れると次第に幅が狭くなり、断面形も円形になる。孔の所での幅は3.5cm、厚さ1.9cm、先端は直径約1.5cmである。孔の所を幅広くして強度を高めており、杵組がなされていたと考えられる。大型の杵の可能性があり、作りは比較的丁寧である。材は、ヒノキである。

木柄 74は現存長16.7cm、幅3.9cm、厚さ2.8cmで、断面楕円形に加工された木柄の基部である。基部はやや幅が広くなり、かかりとなっていたと考えられるが、厚さは薄くなっている。握りは幅が狭くなるが断面形は正円形に近い。サイズの、直柄鎌の柄の可能性はある。

75は現存長25.6cm、最大幅4.2cm、厚さ2.3cmで、断面楕円形に加工された木柄である。全体的に丁寧に加工されている。サイズの鎌柄の可能性はある。中央下半部が最も細く、しかも薄く作られており（3.0×1.6cm）、この部分が実際に握る部分と考えられる。

76は下端部に突起を作りかかりとしていることから、何らかの木柄と考えられる。広葉樹材の芯持材を加工したものである。断面形は握り部、下端部ともに楕円形を呈している。表面は劣化が進んでおり加工痕は認められない。

77はミカン割材を加工して作られた木柄で、その握り部の端部と考えられる破片である。縦割れて裏面に欠損している。握り部分は細く、端部は幅広くくなっている。劣化が進んでおり、残存状況は極めて悪い。

78はカシ類の柾目材を用いて作られた木柄の握り基部（かかり）である。縦割れて片面に欠損している。握り部は中央の幅が約3.5cmで、もともとは、2.0cmほどの厚みがあったと推定される。かかり部は片方にずれて幅を増し、5.4cmほどとなっている。表面は平滑で加工痕は観察できない。鎌などの木柄と考えられる。

79は断面形が2.1～2.3cm×1.6～1.8cmの楕円形をした、残存長23.5cmの木柄である。カシ類と思われる板目材を用いて作られている。やや細いが鎌柄になる可能性がある。

高杯（食器） 80は直径39cm前後の木製高杯の坏部であるが、現状はその3/4が残存している。口を下にして出土したが土圧により口縁部は楕円形に変形し、上を向いて検出された軸部（脚部接合部）は中心軸からずれて傾いた状態に変形していた。図では上に坏部内面を、下に坏部外面を、中間には側断面図（土器と同じ実測方式）を示した。中間の図は現状が歪んでいるため、口縁部と坏底部付近は現況をもとに作図したが、坏部の全体形状と深さについては推定復元した。この高杯は、逆円錐形の坏部に、鐙状の水平に開口縁部がついたものである。口唇部は端面をもち、坏部の内面は口縁部との境に突帯を有する。坏底部は小さく平坦で、坏体部との境界は屈折する。坏部と脚部の境には段差がある。畿内地方や東海地方西部の弥生時代中期後葉の土器高杯に良く似る。内面は突帯より下部は黒ずんでおり、内底部は真黒に黒光りする。墨が塗られている可能性がある。なお、表面が荒れているわけではないが、加工痕は不明である。材は、ケヤキの横木材を用いて製作されている。

槽（容器） 81は現存長50.3cm、幅6.9cmの割材を断面半円形に加工し、内側を彫り抜いて槽（容器）としたものである。全体的に掘じれており、片方の小口は欠損し、削られた内面は揚げている。小口部は8.0cmほど彫り残しており、上面は平坦となっている。この辺りの断面形は底部中央に稜をもつ逆三角形状で、彫り窪めがある部分では僅かに稜をもつものの半円形に近い。しかし欠損している側の小口に近い部分では、内側は底が平坦で逆台形状に近く、内底面も稜をもたず湾曲するだけである。外底面には5～7cm幅で深さ数mmの凹帯が3帯あるものの、何のための加工かは不明

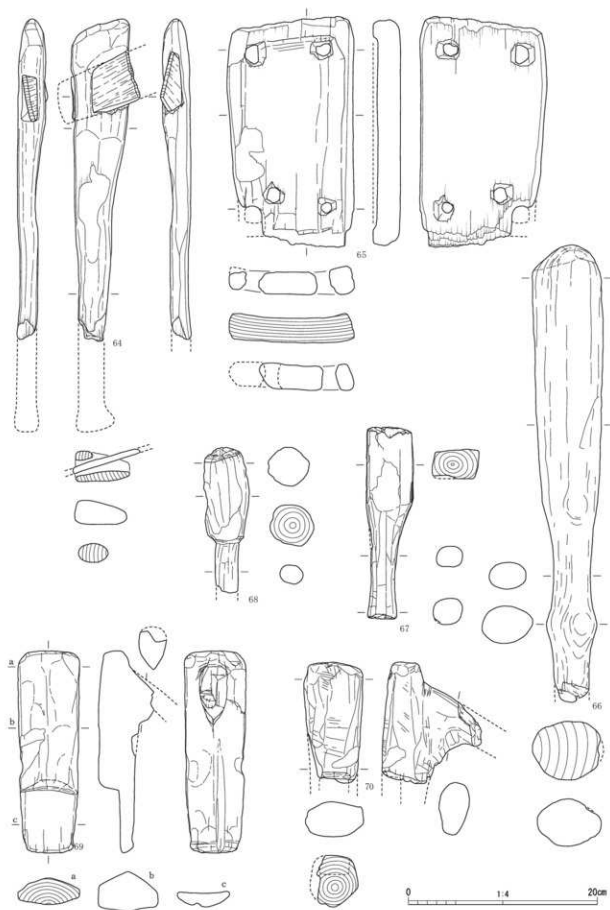


图 54 D層出土木製品 (10) (農工具類)

4 D層の出土木製品（弥生時代）

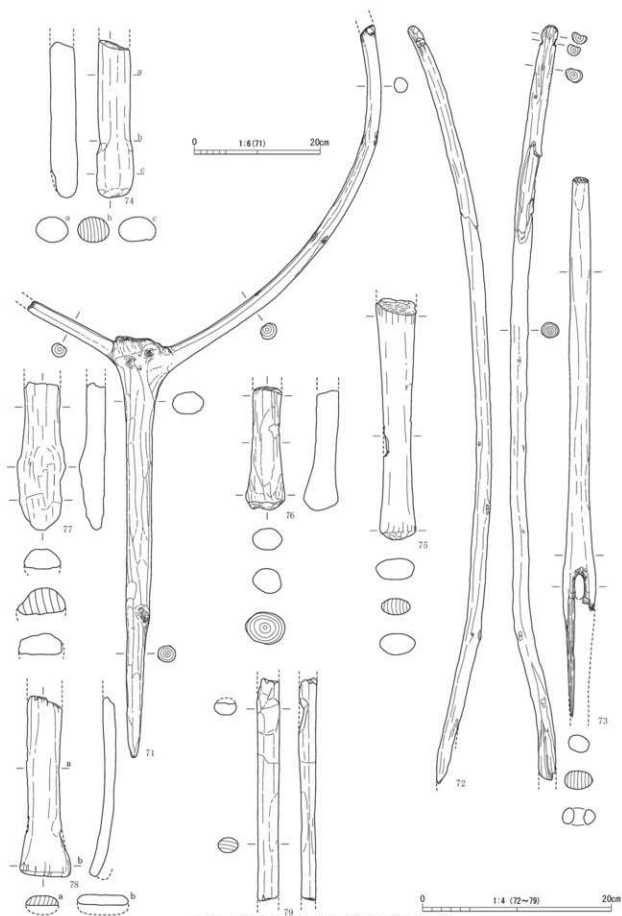


図 55 D層出土木製品 (11) 〈タモ・弓・棒・柄〉

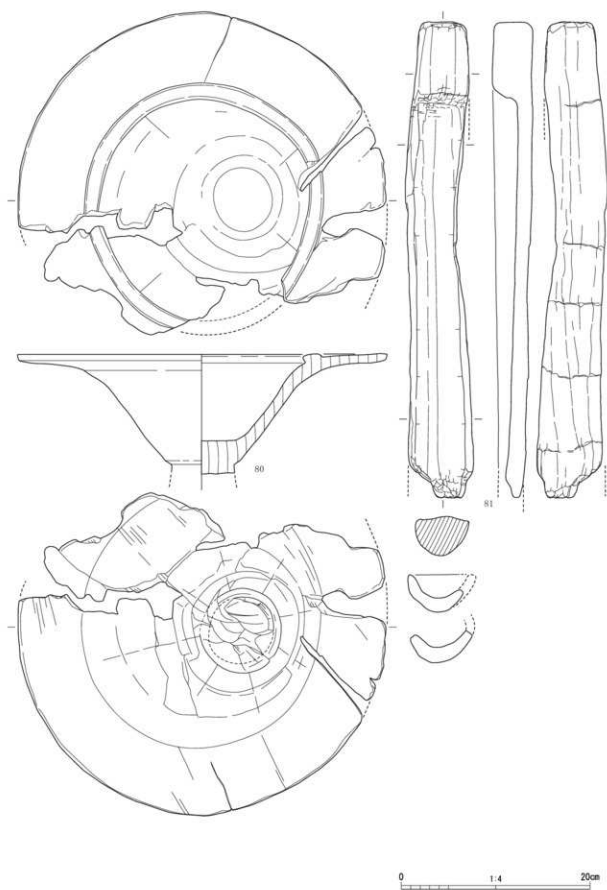


图 56 D層出土木製品 (12) 〈高杯・槽〉

4 D層の出土木製品（弥生時代）

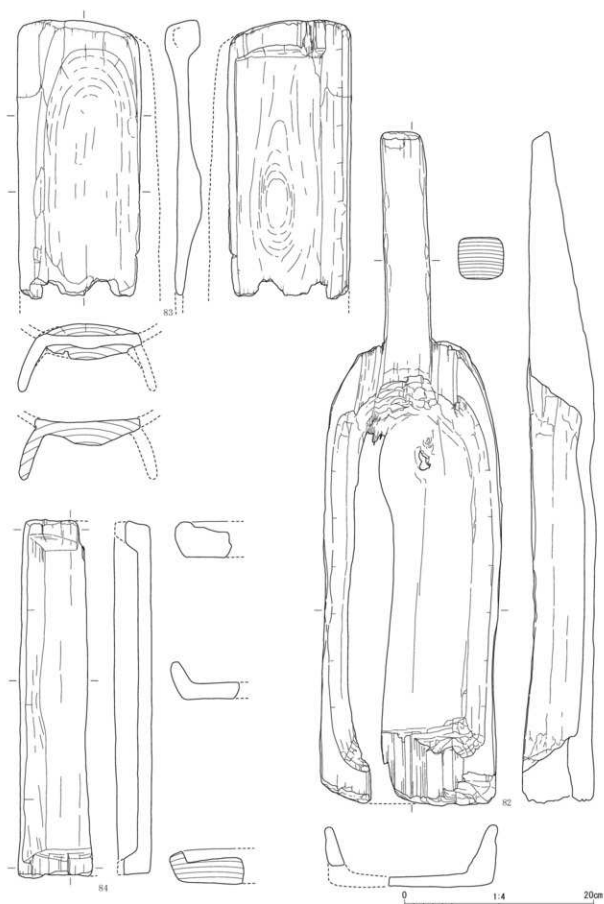


図 57 D層出土木製品 (13) 〈槽〉

である。内面は薄っすらと、外面は小口周辺でしっかりと焦げており、端面あたりでは完全に炭化している。

82は全長は71.3cm、本体は49.0cm、幅は18.8cmで、長さ22.3cmの把手が付いたヒノキ製の槽である。把手は槽本体の片方小口部に付くが、把手が付く側の槽本体は撫肩となっている。一方把手が付かない側は、隅丸のコの字形となっている。内面の挟りも、槽本体の平面形に合わせて、影り窪められている。把手は、幅が4.6～5.0cmであるが、縦断面を見ると、槽本体の底部から把手先端に向けて厚さを減じている。全体的に割れがひどく、欠損部分があるものの、全体形が分かる大型の把手付槽の出土例は貴重である。

83は剣物の脚付槽（脚付盤）と考えられるもので、クスノキ製である。全体形は長方形で長辺側に脚部が作られている。上面は浅く凹面となっている。下面は、中央部に舟底状の膨らみを有する。上面においては、長辺側が最も外へ張り出し、盤状（坏部）の凹面となっていたようである。しかし、坏部の縁辺は、ほとんど欠損している。また、小口面は突帯状に下にも張り出しているが、側面についた脚部の高さとは著しく低い。このことから天地を逆にして木槽と考えることはできない。もともとの大きさは、長さ38～39cm、幅15cm、高さ6.5～7.0cmと推定される。腰掛の可能性もある。

84はヒノキの板目材を用いた剣物の槽である。長さは約40cmであるが、縦割れして欠損部分があるため、幅は不明である。深さは4.0cmで、底部の厚さは1.5cmほどである。底面は平坦であるが、長辺の外側断面は丸味をもつ。また、内側の底部とその側面は平坦に作られている。小口部分は、内外面とも、やや粗い削り痕を残している。

梯子（建築材） 85は全長175.6cm、幅14.7cmの丸太材を加工して作られた梯子である。4つの足掛けが作られており、ほぼ原形を留めたものである。地面に接する下端は、杭で固定したためか挟りがある。上端は高床式倉庫の床に掛けるためか、ズレ防止用に下向きの突帯が作り出されている。下の3段の足掛けはしっかりしたもので、深さは5cmほど存在したと考えられる。しかし、最上段のものは僅かな足掛けでしかない。この足掛けは欠損したのではなく、もともとの状態であったように観察される。節孔が何カ所かにあり、また表面も朽ちた部分も多いが、全形を知ることのできる貴重な梯子である。材はクリの芯持材で、中央部では丸太の状況をそのままとし、下部は裏面を平坦に削り、上部は表裏両面を平坦に削って薄くしている。

86は現存長53.9cm、幅14.3cmの半截材を用いて作られた梯子である。足掛けは上下が欠損し、1つが残るだけである。広葉樹を半割りして、割った面に足掛けを作り出している。裏面には大きな加工は見られず、丸味をもつ。表面は腐朽しており、手斧加工などは観察できない。年代は、北区（B3グリッド）のD層上部からの出土であり、周辺から出土した土器から弥生時代後期と考えられる。

87は現存長139.1cm、幅9.0cmの半截材を用いて作られた梯子である。残存状況から見て、足掛けが3つ以上は存在したと考えられる。上端部はササクレとなっているものの、ほぼ梯子の上端にあたると思われる。左側は半分以上が縦割れし、また、右側の下部も大きく割れて欠損している。下部の足掛けもほとんど失われており、段の上端が僅かに認められる程度である。材は木目が粗いことから、スギと思われる。半截材の樹皮側（表）に足掛けを作り、割面である裏面は手斧がけによる調整の痕がある。

加工板 88は全長120cm、幅20cm、厚さ約4.0cmの板材である。図示した上の面は、割れたり剥がれたり欠損部分が多いものの、廃棄前の状況を残している可能性がある。下端は粗割のまま

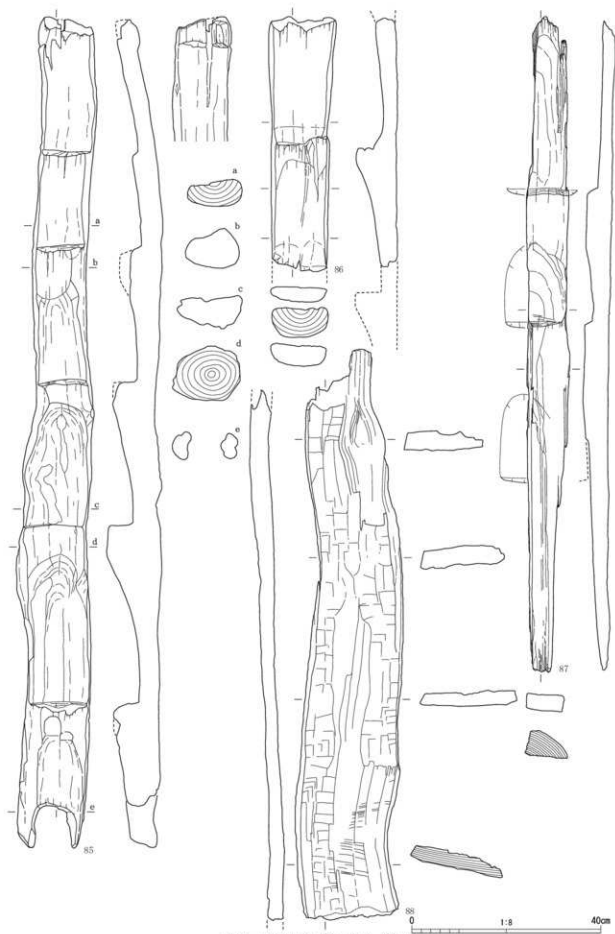


図 58 D層出土木製品 (14) (梯子)

の状況を残している。全体的に手斧掛けは行われているが、木目に沿って剥がれ落ちている部分も多い。また、剥がれたところには、鋭い刃物の痕があり、鉄斧の使用が考えられる。加工された板材であるが、具体的な用途は不明である。

垂木（建築材） 89は全長450cmの有頭棒である。頭部は表皮を剥いだままの丸太の状態で、その先端は円錐形に削られている。頭部の根元は4方向から削り込まれているが、1辺からの削りは浅い。図示した面は比較的焼けていない面であるが、他の3面は表面が完全に炭化している。下端はやや細くなっていたようであるが、炭化が激しいため、もともとの形状は不明である。頭部の付根の首にあたる所はやや細くなっていたようである。頭部も焼けているが、比較的原形を留めている。本体は1辺約6.5cmの四角形に加工されている。頭部以外では角材に加工されており、垂木とするには丁寧であることから、別部位の建築部材の可能性もある。

柱根（建築材） 90は直径約20cmの丸太材であり、もともとは柱材であったと考えられる。下端は削り出されているが、腐朽が進んで丸くなっている。外面は樹皮を剥いだけで、加工痕は認められない。把手を作り、掛矢に再加工しようとしていた可能性がある。なお把手状の部分の加工は丁寧ではないし、使用痕跡もない。掛矢ではないとすると、天地を逆に見て、高床式倉庫の床面を支える部分の柱材とも考えられる。そう見ると、下端の削りは再加工に伴うものとなる。材は広葉樹の芯持材で、土圧により楕円形になっている。

91は直径18cmほどの樹皮を剥いだだけの広葉樹の丸太材である。先端は大きく円錐形に削っているだけで、切出しのままである。大きさから柱根としたが、それ以上の根拠はない。

有孔板 92は全長105.5cm、幅10.8cmの板材を加工した木製品である。長辺は、1辺に段があり、もう1辺には平坦面（端面）がある。平坦に作られている側は、角がとられ、丸くなっている。段がある側には、それに沿って孔が一定間隔で4つ穿たれている。段のある側は少し凹面をなし、逆の面は少し甲丸となっている。これは板目材であり、それが影響しているのかもしれない。小口部は切断面であるが、比較的丁寧に切られている。段は継ぎ合わせのための細工で、孔は結束用の紐を通す孔と見られる。船の玄側板とするには小型すぎる。また、槽作りの琴の共鳴槽の側板とすると、底板がなく共鳴の機能がはたせるのが問題となろう。材は、スギやヒノキなどの針葉樹の板目材である。

93は全長99.3cm、現存幅14.3cmの板材であり、大小の孔が開けられた有孔板である。大きさから建築部材と考えられる。両端は現存するが、長辺のうち1辺は、割れて欠落している。長方形の板材ではなく、片方の小口は幅が狭くされている。孔は方形を意識したようであるが、楕円形に近い。やや大きな孔が両端近くに1つずつあり、幅が狭くなる手前に2孔がおおよそ並置して開けられている。小孔は7つ確認されたが、規則性はない。図示していない未貫通の孔は無数あり、貫通している孔の一部も植物の根によるものかもしれない。材は、ヒノキなどの針葉樹の板目材である。

94は全長80.0cmの板材で、片方は細くなり、先端は尖る。長辺の側面は一方が割れて欠損し、残る一方の断面形は丸くなっている。表裏とも表面は加工されているようであるが、手斧痕などは認められない。尖る側に円形小孔2つと、大型の方形小孔1つが縦一列にあり、もう一方にも小孔1つがある。大きい方形小孔は斜位に開けられている。

95は長さ約30cm、幅約10cmの板材に、方形の孔が2孔穿たれている。図示した状態で、上部と端部が欠損している。右側の長辺は断面図に示したように丸味をおびているが、左側は面を作り出している。右側の丸味は、使用に伴う可能性がある。逆に左側は古い時期の割れ面かもしれない。

4 D層の出土木製品（弥生時代）

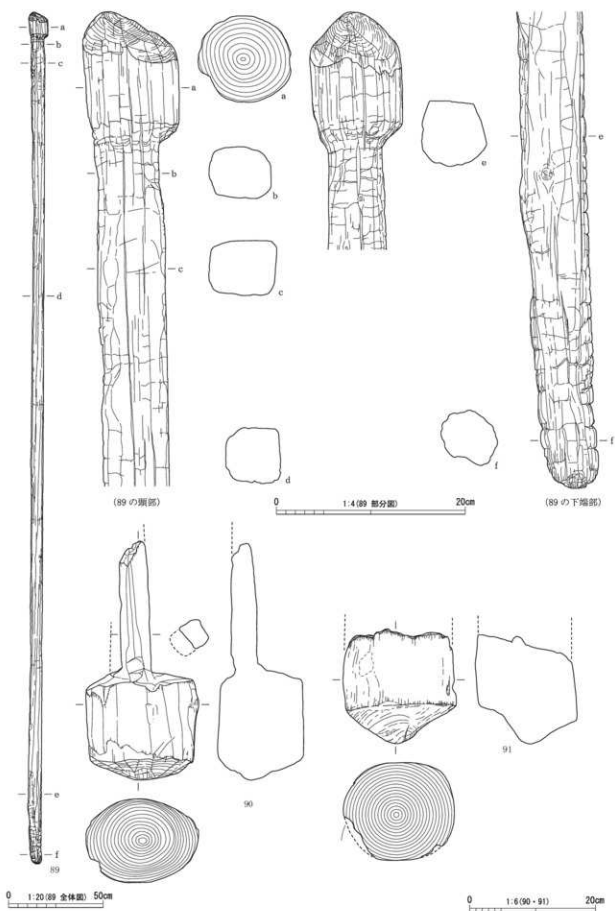


図 59 D層出土木製品 (15) (垂木・柱根)

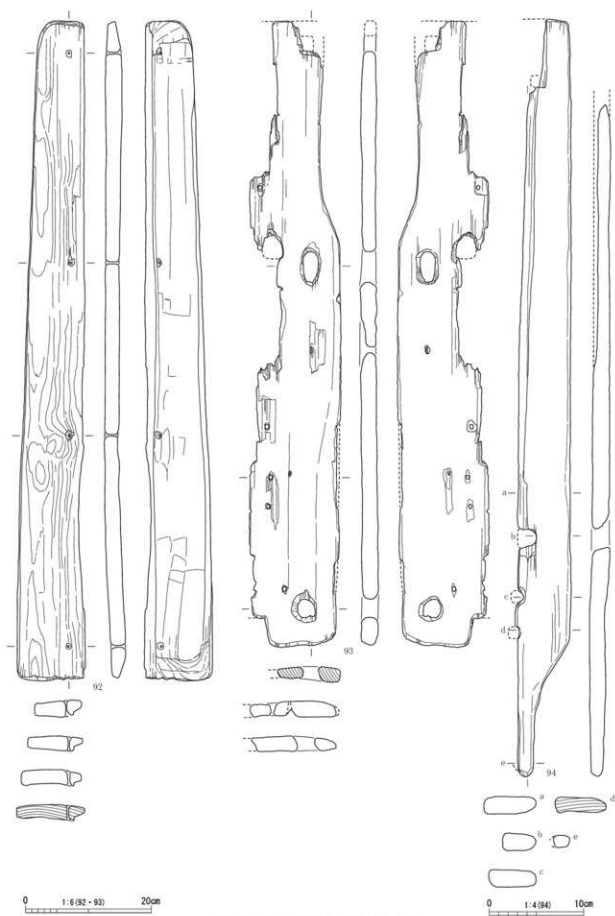


图60 D層出土木製品(16)〈有孔板〉

96は残存長54.5cm、幅5.0cm、厚さ2.2cmの板材に、小さな方形孔が2箇所に開けられている。両端とも折れており、一方（図では下方）には段差がついている。側面は、図示した状態で右側が丸く、左側が平坦に加工されている。丸味をもつ側では、中央で少し幅が狭くなっている。全面に手斧がけによる調整加工が観察される。用途については不明である。材は針葉樹材であるが、芯持である。

97は現存長34.2cm、幅18.0cm、厚さ3.0cmの板材に、内径3.5cmほどの円孔が穿たれている。孔が存在する長辺側は、発掘時に割れて欠損している。また、上辺側も同様である。孔の上（図示した右上の角）にももう1つ孔が存在した可能性はあるものの、焼け焦げていてはっきりしない。裏面には中央の孔から横に切断を試みたためか、石斧と思われる刃の打撃痕がある。孔を含めて下半部は焼け焦げているが、裏面での焦げはさらに著しく、下半部は完全に炭化している。

98は針葉樹の板材に四角い孔を開けた有孔板であるが、用途不明品である。裏面には手斧による削りの痕が認められる。

出納板 99は長さ約19cm、幅10.6cm、厚さ1.3cmの長方形の板材である。短辺には約1.0cm、幅0.9cmの突起が作り出されているが、もう一方の短辺は焼けて欠損しているため、このような突起があるか否かは不明である。この突起を出納としたが小さくしかも断面形は丸みを帯びている。組合式の箱物の可能性はある。

有頭棒 100は現存長58.6cmの有頭棒であるが、先端も加工されて尖っている。裏面は、縦位に割れて剥がれている。端部は撫肩状に削り込まれて頭部が作り出されている。何に使用されたものかは、不明である。

101は針葉樹の芯持材を用いて作られた有頭棒である。頭部以外は樹皮を剥ぎ取っただけで、頭部は直径2.0cmほどの球形に作られている。比較的丁寧な作りであるが、片方（図の下半）が折れて欠損している。もし両頭であっても内湾する内側を削っていないことから、丸木弓とは考えられない。

102は現存長20.8cm、最大幅2.9cmの板目材を用いて作られた有頭棒であるが、一端は焼け損じている。割材であるが、すべて丸く加工されている。頭部の下はくびれ、本体へは緩やかに接続している。

103は全長85.2cm、幅4.0cmの板材を加工して作られた有頭棒である。全体的に作りは粗い。断面形が丸い所もあるが、粗削りのままで、細かな加工は施されていない。両端は端部から5.5～7.0cmあたりに切込みを入れることで、頭部を作り出している。紐を縛るための工作であろうが、何の部材なのかは不明である。

104は全長72.5cm、幅3.0cm、厚さ2.6cmの角棒の両端に頭を作り出した両頭棒である。一方の頭は四辺から挟り、もう一方は短辺側の2辺から挟って頭を作っている。作りは丁寧ではなく、用途についても不明である。材は、やや目の粗いヒノキと思われる板目材である。

105は残存長が59.3cmの有頭棒である。幅5.4cmの粗削りした板材の端部に、頭を作り出したものである。頭は、撫肩状に切り込みを入れて作られているが、雑な作りである。もう一方の端部は、欠損しているため不明である。

106は長さ57.0cm、幅3.6cm、厚さ1.4cmの細長い板材を加工して作られた両頭棒である。側面は丸味をもつが、丁寧に加工されたものではない。両端には頭が作り出されているが下（図示した状態）は古くに割れているようである。機織具の布巻具あるいは綜統棒かもしれないが、作りは全体的に大雑把である。

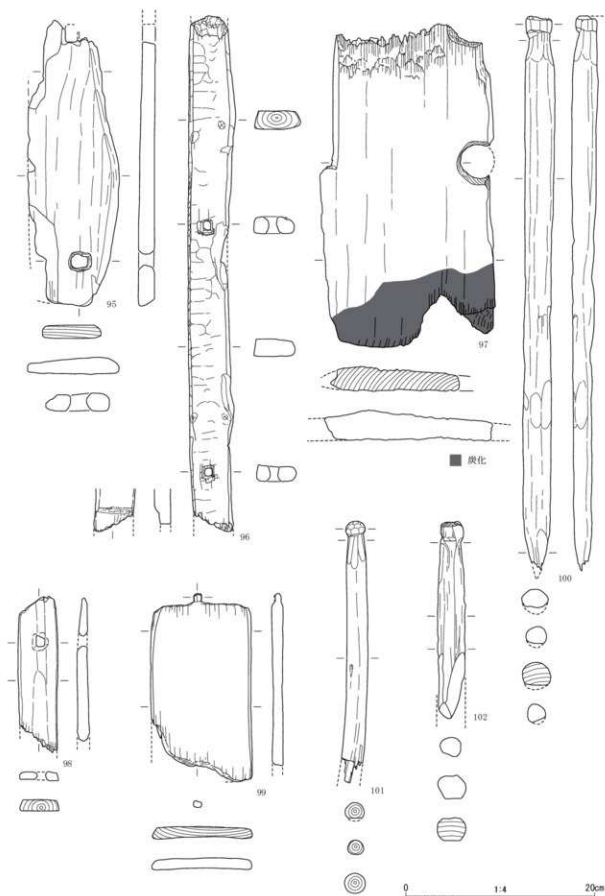


図 61 D層出土木製品 (17) 〈有孔板・出納板・有頭棒〉

107 は現存長 68.5 cm、直径 2.5 cm の枝材を利用して作られた有頭棒である。樹皮を剥し、細い枝を払っただけであるが表面は滑らかになっている。頭は、端部から 2.0 ～ 3.5 cm あたりを少し彫り込むことで作り出している。もう一方の端部は、折れて欠損している。用途不明品であり、使用痕跡もない。

108 は針葉樹の枝材を加工した有頭棒である。樹皮を削り取った後、片面から削り込んで頭部を作り出している。端部の削りは粗いが、それ以外の頭部の削り出しは丁寧である。頭部の外周は樹皮を剥いだ後、それほど加工をしていない。下半は切れ目を入れ、折られている。用途は不明である。

鎌（農具） 109 は鎌身の軸頭部（装着部）の破片である。裏面は平坦に作られており、表面上端には突起が作り出されている。鎌身と柄を結束する紐が脱落するのを防止するためのものである。しかし本品においては、使用痕跡は観察されなかった。材はカシ類のようで、芯持の柾目材である。

先端加工棒 110 は現存長 76.8 cm の先端加工棒であるが、もう一方の端部は欠損している。針葉樹の芯持材（板材）が用いられており、樹皮を剥いだ後、扁平（断面四角あるいは楕円形）に削っている。先端は鋭く尖らせている。比較的加工は丁寧で、細かな手斧痕を残す部分もあるが、用途不明品である。

111 は 3 分割にミカン割りした材の先端を尖らせたものである。加工痕は表面の劣化が進んでいて観察できない。用途については不明である。

112 は先端部を尖らせた角材である。作りは雑であり、杭であった可能性が高い。現状の長さは 12.6 cm である。

加工角材 113 は現存長 28.8 cm、幅 4.4 ～ 6.3 cm、厚さ 2.6 ～ 3.6 cm の角材である。幅は図示した状態で上が広く、しかも厚いのに対し、下は幅が狭く、幾分薄く作られている。断面形はほぼ長方形であるが、隅切り加工がなされている。頂部は多面的に削られているが、使用痕跡は認められない。出土当初は堅杵と考えたが、角材であることも考慮すると、何らかの木柄の未製品なのかもしれない。材はカシ類と思われる柾目材である。

垂木（建築材） 114 は直径 6 cm 前後の丸太の端部に頭を作り、途中に挟りを入れた垂木材であるが、下端は焼けて完全に炭化している。また、全体に振れがある。樹皮を剥いだままの細いヒノキと思われる針葉樹の丸太材で、頭は全周から撫肩状に削り込むことで作り出されている。途中の挟りは段状で、2 方向から挟まっているため、挟り部の中央に縦位の稜が認められる（断面参照）。

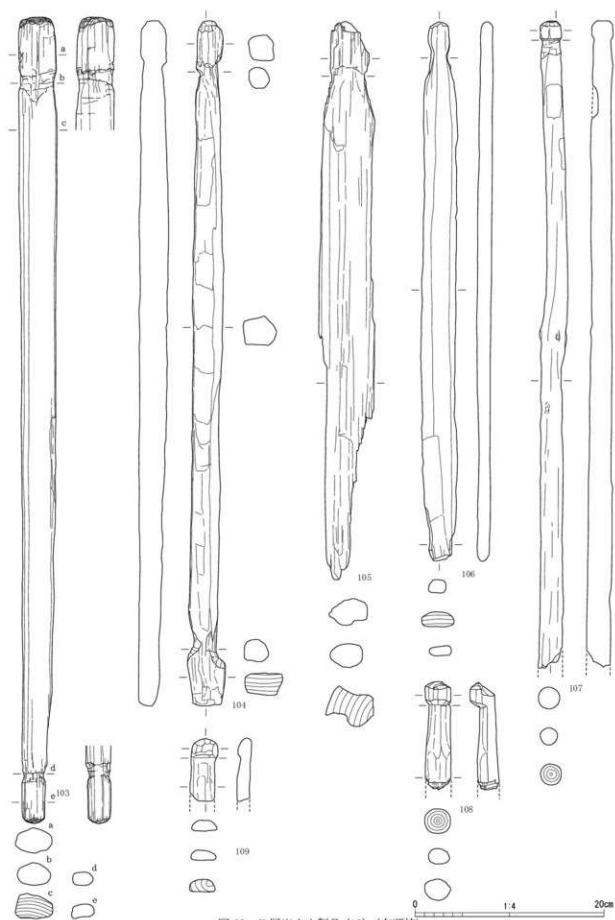


図62 D層出土木製品(18)〈有頭棒〉

4 D層の出土木製品（弥生時代）

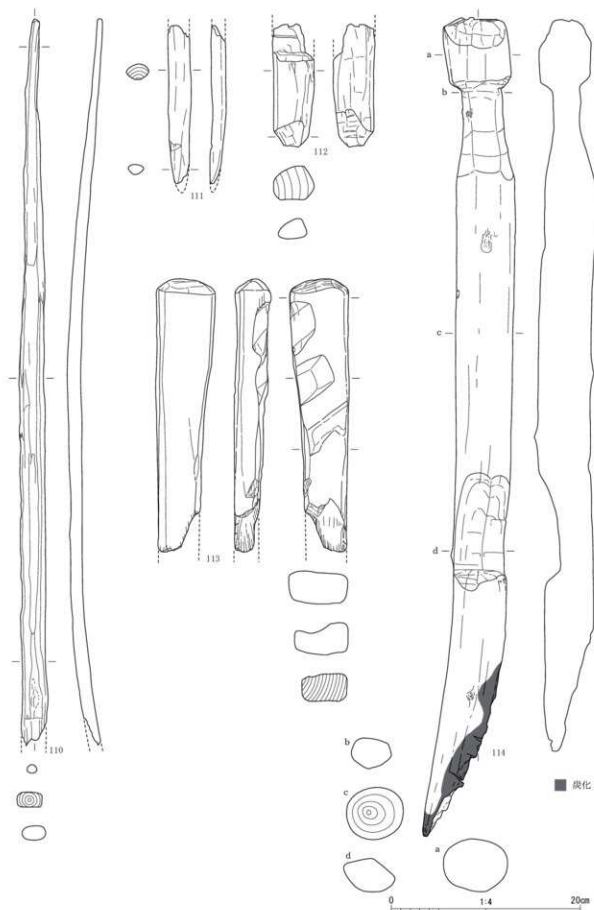


図 63 D層出土木製品 (19) (垂木・先端加工棒他)

第9章 出土石製品・金属器

1 出土石製品

石器の大半は弥生時代中期後葉で、打製石鏃、磨製石斧（太型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧）、石皿、台石、敲石があり、その他には刃器、礫器、石核がある。大半はD下層からの出土であるが、V・Ⅶ層に混入して発見されたものもある。7世紀の石器もあるが、砥石2点と敲石1点が発見されただけである。（図64・65）

なお、石製品の全般について、とこなめ陶の森資料館の小栗康寛氏から、助言を得た。

① 弥生時代中期後葉の石製品

石鏃 1はチャート製の不定形な剥片を素材とする有茎石鏃であるが、茎部は破損している。先端部付近で角度が鈍角となり、先端角は約87°となる。全体的に細身であるが、体部は厚く作られている。表側は押圧剥離で稜状（山状）に剥離が展開しているが、裏面は素材を生かして平坦な押圧剥離が展開する。尖頭部右側縁が少し摩耗しており、使用痕と考えられる。南微高地にある溝SD20から弥生時代後期の土器とともに出土したが、この石鏃は弥生時代中期に遡る型式であり、混入品と考えられる。

磨製石斧 2は太型蛤刃石斧の刃部片である。石材は塩基性岩もしくは輝緑岩である。平面形態が棒状の断面楕円形の円礫を素材とする。敲打調整によって形を整えたのちに刃部装着部周囲を研磨加工によって完成させている。器体上半部が大きく破損しており、使用に伴い装着部で折れた可能性がある。蛤刃としてはそれほど刃部は厚いものではないが、86°の刃部角がある。

3はほぼ全形を留めた磨製石斧である。石材は塩基性岩、平面形態が棒状に近い断面楕円形の円礫を素材とする。敲打調整によって器体上半部の側面を中心に出来るだけ真直ぐに形を整え、その後全体を丁寧に研磨しており、非常に合理的な加工となっている。刃部角は55°である。

4は太型蛤刃石斧の刃部片である。石材は輝緑岩もしくは塩基性岩、最大幅が中央より下にあるため、ややぼつりした印象を受ける。破損しているため不明な部分が多いものの、蛤状の刃部が作り出されていたとみられる。刃部の折損が著しいのは、破損後もしばらく使用したためと観察される。器体上半部は、上方向からの加撃で破損している。

5は長さ3.4cm、幅3.7cm、厚さ2.5cmの太型蛤刃石斧の刃部片である。石材は輝緑岩もしくは塩基性岩である。被熱により非常に脆くなっており、全体的に摩滅している。

6は全形を留めた柱状片刃石斧である。石材は塩基性岩、断面は四角形である。裏面上端部付近を除いては研磨がいき届き、刃部は片刃状に磨かれている。装着痕と思われる摩滅痕が裏面の中央よりやや上に、長軸に対して直交方向にみられる。刃部角は70°である。

7はほぼ全形を留めた柱状片刃石斧である。石材は塩基性岩、断面は四角形である。長さが短いのは使用や破損によるもので、本来は柱状でもっと長かったと考えられる。装着痕と思われる摩滅痕が裏面中央に、長軸に対して直行方向にみられる。刃部角は50°である。

8は磨製石斧の刃部片である。石材は緑色片岩である。細身のタイプで使用に伴い大きく破損したとみられる。刃部角は53°である。南微高地にある土坑SK5から土師器小片とともに出土したが、混入品と考えられる。

9はほぼ全形を留めた磨製石斧で、石材は塩基性岩である。断面は四角形である。敲打は部分的

に見られるが、再生を繰り返して小さくなっており、その痕跡は少ない。両側縁からの直接打撃による剥離が多く見受けられるが、整形の際に生じたものと考えられる。その後側面・上面も含めて、入念な研磨加工が施され、刃部も作り出されたと考えられる。装着痕は認められない。刃部角は 46° である。なお、再生加工を繰り返した結果、定角式に近い形態となっているが、本来は扁平片刃石斧であったと思われる。

10はほぼ全形を留めた扁平片刃石斧である。石材は塩基性岩である。両面とも研磨加工が入念に施されており、片面は角度をもって刃部が作りだされ、片刃となる。上端及び両側面からの直接打撃による剥離は、消しきれず、部分的に残っている。刃部角は 50° である。

利器 11はほぼ全形を留めた利器である。石材は砂岩である。両面ともに、板状に剥離を施して器体を整形した後に、研磨加工され、刃部も作り出されている。刃部角は 24° である。石包丁として使用された可能性がある。

敲石 12は上半部は折損した敲石である。石材は砂岩である。平面形態が棒状をした断面台形の円礫を素材とする。下端部および長軸の後上部に、敲打による潰れがみられる。裏面の下部に、研磨による線条痕がみられるものの、石斧としての利用は不明である。

礫器（礫斧） 13は礫器もしくは礫斧である。石材は砂岩である。平面形態が棒状をした円礫を素材とし、表面を中心に敲打調整を施した後に、全体の形状を整えている。この過程は、磨製石斧に通じるものがある。その後、上下端を加撃するような使用痕があり、楔状の破損が見られる。このことから、楔形礫器や礫器の名称が想定される。あるいは敲打と簡単な刃部の作り出しとみて礫石斧か礫斧とすべきかもしれない。

敲石（礫器） 14は敲石あるいは礫器である。石材はチャートである。拳大の球状に近い円礫を素材としている。上下端には敲打痕が認められるが、石核として剥片を採取したとは考えにくく、楔としての機能を想定する必要がある。右側縁に加工（使用による刃こぼれ？）が、見受けられる。縄などを切るための利器とするには、刃部が粗雑なため礫器とした。

石皿 15は凝灰質砂岩製の石皿である。使用によって両面とも弱く弧を描くように凹んでいる。20 cm以上の石皿が想定されるものの、両面ともに被熱しており、かなり脆くなっている。同一個体とみられる破片もあり、これらにも被熱が認められる。

台石 16は砂岩製の台石である。厚みのある楕円形の円礫がもともとの素材であったと考えられる。器体の左半部が、使用面と見られる。ザラつとした面が展開していることから、本来は石皿であった可能性がある。その後、使用によって破損したものの平坦な面ができたことから、台石として再利用され、大きく2ヶ所の凹みが表面中央部に形成されたとみられる。下半部には弱く線条痕がみられる。裏面下半部に若干の被熱痕が認められる。

台石 17は凝灰岩製の台石である。平たい円礫を素材として両面ともに研磨を施し、両側縁から敲打することで器面および器形を整形したと考えられる。しかし、両面の研磨はすでに風化しており、明瞭ではない。表面にはアバタ状の凹みがみられるのに対し、裏面中央部には細かな敲打が見られる。これらは、堅いものが固定されて生じた加工痕である。このことから、敲石というよりも台石という器種名を優先した。

石核 18は頁岩または泥岩製の石核である。円礫の上半部を半割して打面を作り出し、打面を調整しながら剥片をとっている。本石器は残核と思われるが、既往の調査では、積極的に石器を製作した遺構・遺物は確認されていない。縄文時代では石鏃や石錐などに用いられる石材ではなく、スクレイパー類に用いられる。弥生時代であればスクレイパー、磨製石鏃、磨製石剣などに適して

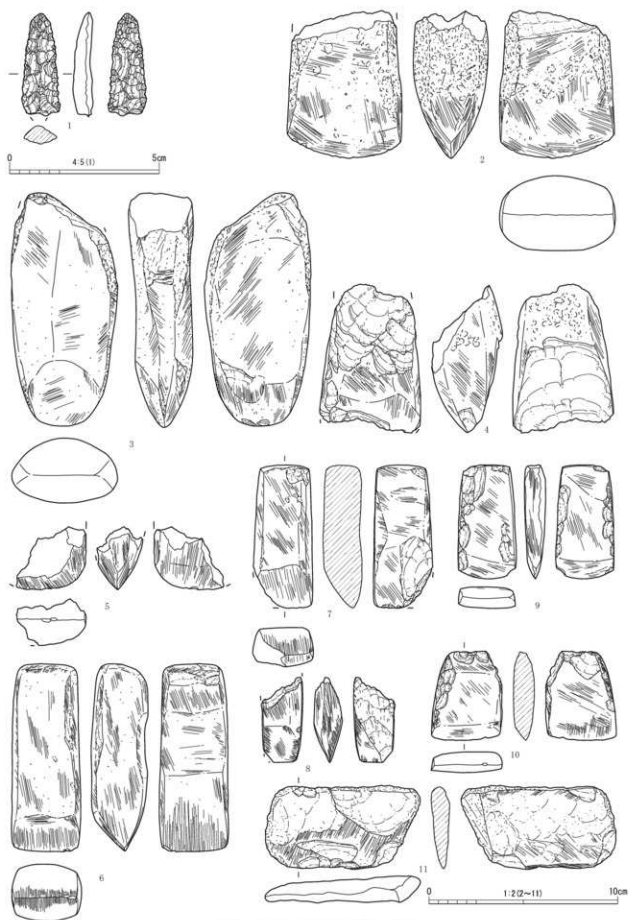


図 64 出土石製品 (1) 〈石鏃・石斧他〉

いると考えられる。

② 7世紀の石製品

砥石

19は凝灰岩製の砥石である。不安定な扁平円礫を素材とするもので、裏面に平坦面が存在し、右下がりの線条痕が確認できる。下半部を折損している。砥石だとすると中砥にあたる。

20は砂岩製の砥石である。扁平な円礫を素材とし、平面形態は長円形を呈する。両面ともに使用面（作業面）がみられ、上下（長軸）方向に弱い線条痕がみられる。顕著な使用痕が確認できる部分は、黒色を呈する。なお、調査時に付けた傷は図化していない。

敲石 21は砂岩製の敲石である。棒状の転石（円礫）を素材とする。上下端に敲打面がみられるが、下端を顕著に利用している。石器製作用とするには軽く、何のための敲石だったのかは、明確ではない。

2 出土金属器

金属器は、古代においては刀子1点、鎌2点、鉄鏃1点があり、弥生時代後期においては銅鏃1点がある。他は、旧表土層から出土した銅銭1点が存在するのみである。（図66）

刀子 1は木柄が装着されたまま出土した完形品の刀子である。柄を含めた刀子の全長は20.6cmで、柄を除いた長は19.4cm、刃部長は10.6cm、茎長は8.8cmである。刃部はよく砥がれており、鏃は進行し刃こぼれはしているものの、薄く尖る。刃部が少し内反りしているのは、しばらく使用されていたことを示すが、それほど使い減りしたものではない。背は直線的で、平背である。刃部と茎の境は両面造りとなっている。茎は断面四角形であるが、茎尻に向かって細くなっている。茎はほとんどが木柄の中に入っているため詳細には観察できない。木柄はツツジ科ネジキ属ネジキの芯材で、収縮により刃部側が裂けており、そこに茎が露出している状況である。楕円形に加工され木柄の背側には小さいながら端面をもつ。もともと合わせ目はなく、茎を差し込むための孔が予め彫り込まれていたと推定される。鏃は、使用されていない。

年代は、IV層からの出土であり、8世紀後半から9世紀前葉と推定される。木簡と同一層で、ほぼ同じ年代である。

鎌 2は鋒と基部の一部を欠損した鉄鎌の身である。現状では約12.5cm、幅2.2cmのほぼ直線的な鉄片ではあるが、基部の折返から見て、鋒は鳥の嘴状に湾曲した曲刃と考えられる。基部折返の周辺は欠損しており、誤差はあるものの鎌の装着角度は極めて鈍角であったと思われる。そのため鋒側の湾曲も大きいものであったと推測される。身の厚さは0.2cmと薄く、刃部側は不自然に湾曲しているが、これは砥ぎ減りによるものである。なお木柄の装着痕跡は観察されなかった。年代は、出土層位がIV上層（Ⅲ層）であり、同一層の出土土器から10世紀前半と推定される。

3は残存長8.5cm、幅3.8cmの鉄鎌刃部破片であり、鋒も基部も全て欠損している。刃部は4cm前後の幅が存在したと見られることから、大型の鎌身であったと推定される。厚さは0.3cmであり、鋒側では少し薄くなっている。刃は全て落ちているが、薄くよく砥がれているようである。年代は出土層位がⅦ下層であることから、7世紀と考えられる。

鉄鏃 4は鋒から鏃身の一部を欠損した鉄鏃である。現存長は15.6cmであり、完存すれば16.1cmと推定される。鏃身は腸挟三角形式で箆被を有することから、箆被腸挟三角形式と呼ぶべき形式である。鏃身は側面が直線的であり腸挟（逆刺）も鋭角で深い。鋒側（先端側）は断面三角形の片

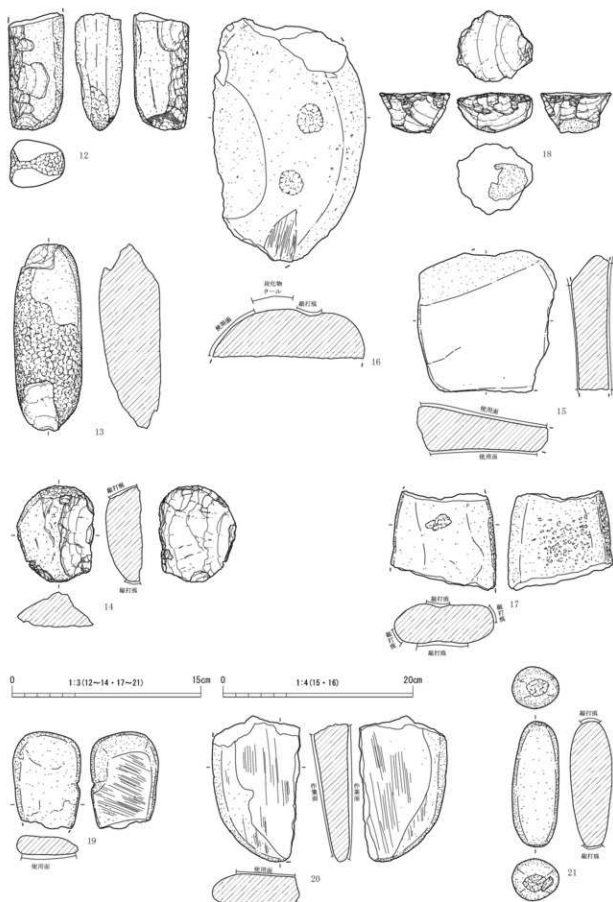


図 65 出土石製品 (2) (敲石・台石・砥石他)

鋳造であるが、筧側は断面台形となっている。筧は上半部が断面四角形で、下半部は隅切加工が施されているために、断面形は八角形となっている。筧の太さは、八角形になる中位から下に向かって徐々に太くなり、茎との接合部（筧被）は開造となっている。茎は断面四角形で、鋭く尖った茎尻まで至っている。鐵身長は推定2.8 cm、幅2.1 cm、厚さ0.3 cmである。筧の長さは6.9 cm、茎長は7.0 cmである。重さは現状で14.0 gである。なお矢柄や口巻の痕跡は認められない。年代は、IV下層の出土土器から、8世紀後半から9世紀前葉と考えられる。

銅鐵 5は長さ4.1 cm、幅1.35 cm、重さ4.9 gの有茎の銅鐵である。銅色をした完形品で、残存状態は良好である。鐵身はふくらが少し発達しているものの、三角形形式で、腸扶（逆刺）は小さいながら存在する。有茎腸扶三角形形式の仲間と見られる。鐵身長は2.7 cmで、茎長は1.4 cmである。鐵身には中央に鋳があり、断面菱形であるが、鋒では鋳が不明瞭となる。茎では鋳ずれでできたバリはとられているが、鋳型の合わせ目が横方向にずれているため、断面形は正円形ではない。鐵身は綺麗に砥がれているようであるが、茎はほとんど砥がれていない。ただし現状では鐵身を砥いだ痕跡は残っていないことから、表面が銅色ではあるものの、風化は進んでいると考えられる。腸扶部は図示しなかった裏面には、縦位方向の鋳ずれ跡が明瞭に残っている。茎尻は折れているが、事前に折りやすくなるための刻目は入れられていない。年代は、出土層位がⅦ層（Ⅶ・D中間層）であり、混入品ではあるが、いっしょに出ている土器から弥生時代後期前半と考えられる。

銅錢 6は直径2.45 cm、厚さ0.1 cm、重さ2.2 gの寛永通寶である。中央には正方形の孔が開けられている。

江戸時代を通じて広く使用された銅錢である。寶の字のウ冠が不明瞭となっている。裏面は全く無文である。現状でも銅色を呈し、残存状況は良い。盛土造成前の旧表土層からの出土である。

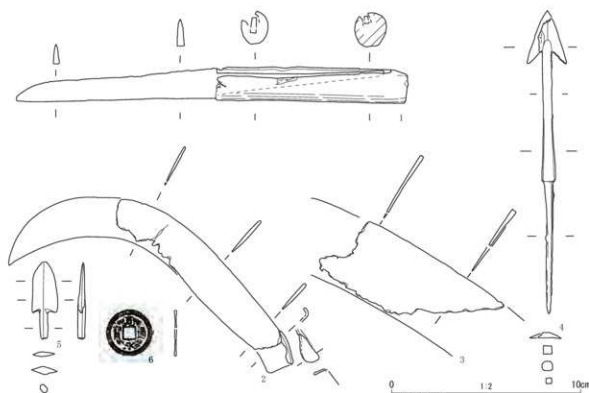


図 66 出土金属器（刀子・鎌・鉄鐵・銅鐵・銅錢）

第10章 出土墨書土器

墨書土器は、いずれも大溝から出土したもので、奈良時代の須恵器が2点、平安時代の灰釉陶器が4点、鎌倉時代の山茶碗が1点、計7点である。(図67)

① 「主政川前」

口径16.7cm、底径13.3cm、器高4.1cmの湖西産須恵器で、器種は有台坏身である。色調は灰色、焼成は良好で、外側の一部には銀～青色の光沢がある。口縁部は3/4を欠損するが底部はすべて残存している。底部は丸みを持ち、断面三角形に近い高台より下に出る、いわゆる出尻形の形態である。底部のケズリ調整は全面ではなく、中心部の半分ほどである。高台がつく所は、成形時にナデにより調整された部分である。ケズリは粘土塊から切り離された部分のみに行われたもので、無台碗の作り方に近い。口縁部は、底部との間で屈折して直線的に立上る。内面には使用に伴う磨減が少し認められる。墨書は底部外面にあり「主政川前」と明瞭に見える。湖西窯須恵器編年のⅤ2期にあたり8世紀前葉に位置づけられる。郡司の四等官のうち三番目の「主政」であり、伊場遺跡群では初出である。木簡に「大領」(梶子北1号)、「少領」(梶子24号)があり、墨書土器に「大主帳」(伊場遺跡)が確認されている。伊場遺跡群(敷智郡)出土の文字資料において郡司の四等官名が揃ったことになる。

② 「山」

器径14.8cm、器高3.3cm、口径2.6cm、筒高1.1cmの湖西産須恵器で、器種は筒蓋である。天井部の形状はきれいな弓状をなし、端部近くで少し外反する。擬宝珠形の筒蓋は少し小型化しているが、高さは1cmを超えて高い。また、筒蓋はケズリ調整後に付けられている。端部は折り返され、断面形は三角形に近い。焼成は良く、色調は灰色であるが、内面天井部と外面縁部は灰黒色の瓦質になっている。これは重焼により生じたものである。製作技法や色調、ザラついた手触り感からしても湖西窯の製品である。筒蓋は完存するが、天井部の約2/3を欠損している。湖西窯須恵器編年のⅥ期にあたり、8世紀後半に位置づけられる。墨書はやや筆使いの不自然さはあるが、天井部外面に「山」と書かれている。「山」の類例には梶子北遺跡19次調査で出土したNa1104(浜松市教委2019)、伊場遺跡出土のNa24・210(浜松市教委2008)、東若林遺跡の出土品((財)浜松市文化振興財団2005)などがある。Na1104は「山」とともに「栗原駅」が記されている。Na24は「山邊足人」、東若林遺跡は「山守」であり、部制の人名、Na210は「賀」とともに「山」が記されたものである。前の3例は8世紀後半の須恵器箱環に記されたもので、当例もこれらに近い。なお、Na210は9世紀末～10世紀初頭の灰釉陶器に書かれたものである。

③ 「有」

口径15.9cm、底径6.9cm、器高4.7cmの灰釉陶器碗で、完形品である。「有」の字は、口縁部を下にして碗の側面に大きな字で一文字だけ書かれている。また、90°左方向の口縁部には墨痕が認められるが、文字ではない。底部はケズリ調整が行われ、腰部は丸みを持ち、口縁部は口唇部近くで外反する。口唇部内面に沈線状の凹面があり、内面底には重焼痕がある。内外面ともに有機物による褐色の汚れがあり、内面では著しい。また、口唇部や高台端部は使用による磨減が認められる。器壁の色は、少し青みがかった灰色である。O53窯式並行期の宮口窯産で、10世紀前半の製品と考えられる。

④ 「又々」

口径 16.4 cm、底径 6.7 cm、器高 4.9 cm の灰軸陶器碗の底部外面に「又々」と記された墨書土器である。字は高台の内に納めているが、大きな字で二文字を一字風に書いている。高台は外面に稜をもつ爪形高台ではあるが、高さ 7mm ～ 8mm とそれほど高くない。底面は糸切痕が観察されるものの、全体はケズリ調整されている。腰部は丸みをもち、口縁部はわずかに外反するだけである。胎土には 2mm ～ 3mm 大の白色砂粒が見えるものの、素地の粘土は良質で灰色を呈する。内面に重焼痕があり、それより外側には自然釉が斑状についている。全体的に有機物による汚れがあり、表面は暗灰色を呈している。二川窯産の K 90 窯式の新しい段階もしくは O 53 窯式と考えられる。実年代は 9 世紀末～10 世紀前葉と推定される。

⑤ 「朋万」

口径 15.5 cm、底径 7.0 cm、器高 4.7 cm の灰軸陶器碗であり、色調はにぶい灰色で、やや須恵器質に焼きあがっている。焼成は良好で、胎土は 1mm ～ 2mm 大の白色粒を多く含む。底部は糸切で、高台は断面形がやや高い三角形で、腰部は丸みをもち、口唇部は少し外側に引き出されている。内面は底部に重焼痕を残し、その外側には自然釉が斑状につく。作りは良い。底部は完存するが、口縁部はほぼ半分を欠損している。高台形と底部に糸切痕を残すことから、O 53 窯式に並行する 10 世紀前半の二川窯産の灰軸陶器と思われる。墨書は外部底面と腰側面にあり、ともに「朋万」の合成文字で大きく一字書きされている。側面の文字は「万」の一部を残し欠損している。なお、「朋」の字は「明」と見えるが、他例から釈文を「朋」とした。吉祥句を記した、いわゆる一字墨書の仲間である。類例は多く、伊場大溝や梶子北大溝からは各地点で出土する。

⑥ 「朋万」

口径 14.0 cm、器高 3.7 cm、底径 6.1 cm の灰軸陶器碗である。底部は糸切りで、断面三角形の高台がつく。腰は丸みをもち、口縁部は、少し外反している。口縁部の一部には、白色の灰釉が縮状あるいは斑状についている。底部外面は灰黒色を呈するが、他は黄橙色である。底部は完存するが口縁部は約 1/2 を欠損している。猿投窯の O 53 ～ H 72 窯式に並行する 10 世紀の宮口窯産の灰軸陶器である。

文字は一字表記の「朋万」であり、外面側部と底部に大きな字で書かれている。字は太いだけでなく、筆割れも著しい。「朋万」は、吉祥句の一字墨書の中でも多い部類であり、良く似た筆致のものも相当数存在する。

⑦ 「の」

山皿と呼ばれる無高台の小皿底部に、平仮名の「の」と書かれた墨書土器である。口縁部は全て欠損しており、底部も全てが残っているわけではない。底面には糸切痕が認められ、そこに「の」の文字が書かれている。内面は有機物による汚れが認められる。山茶碗の II c ～ III a 期に比定されるもので、12 世紀末～13 世紀前葉の渥美・湖西窯産と考えられる。

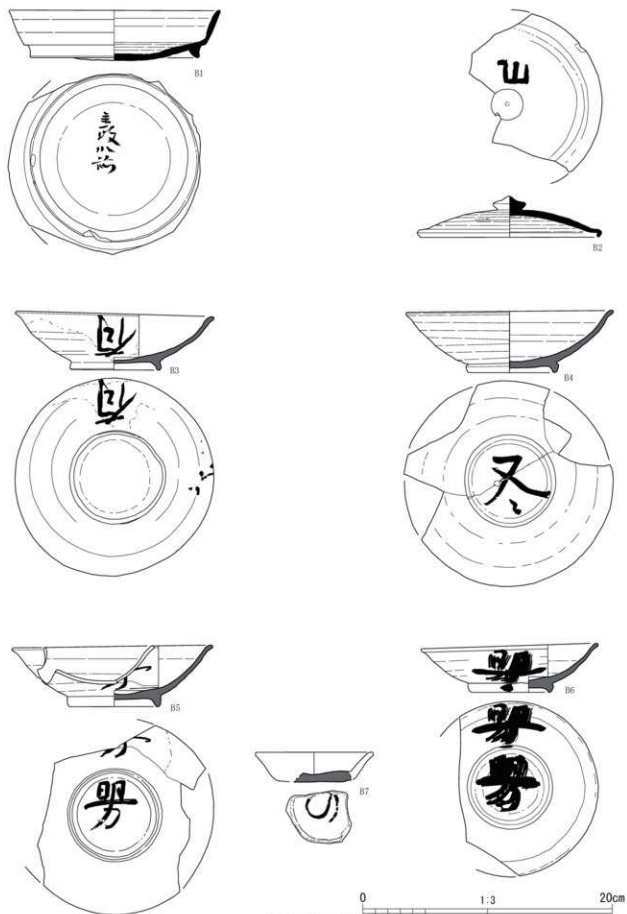


图 67 墨書土器集成图

第11章 考察

1 伊場大溝について

まず確認しておかなければならないのは、今回の梶子遺跡 23 次調査で検出した大溝（自然流路）遺構が果たして伊場大溝の一部なのかということである。23 次大溝の規模は、Ⅶ層段階で幅約 14 m、深さ 2.15 m である。大溝内の堆積土は、下からⅧ層、Ⅶ下層、Ⅶ上層、Ⅴ層、Ⅳ下層、Ⅳ上層、Ⅲ下層、Ⅲ上層の 8 層に分層でき、大きくはⅧ・Ⅶ・Ⅴ・Ⅳ・Ⅲ層の 5 層に大別される。層ごとの基本土質は、Ⅷ層が灰色～褐灰色の粘質細砂、Ⅶ層が褐灰色砂質土および灰色細砂、Ⅴ層が黒褐色粘質土、Ⅳ層が灰褐色粘土、Ⅲ層は下層が黒褐色ビート（泥炭・腐植土）、上層が褐灰色粘質土である。また、各層の堆積年代は、Ⅷ層が 5 世紀後半～6 世紀前半、Ⅶ層が 6 世紀後半～7 世紀末、Ⅴ層が 8 世紀初頭～中葉、Ⅳ層が 8 世紀後葉～10 世紀、Ⅲ下層が 11 世紀～13 世紀、Ⅲ上層が 14～15 世紀頃と考えられた。規模や基本層序、各層の土質、堆積年代のいずれもが既往の伊場大溝の調査所見と齟齬はない。したがって、23 次大溝は伊場大溝と同一の流路遺構とみなして問題ないであろう。

伊場大溝は、梶子遺跡、伊場遺跡、九反田遺跡、鳥居松遺跡で確認されており、検出地点をつないで延長は 1,700 m におよぶ。川筋は梶子遺跡から若干蛇行しながら南東方向へ流下し、鳥居松遺跡の東側で大きく湾曲して南西方向へ方向を変えると想定されている。今回の大溝検出地点は、これまで大溝検出地の西限であった梶子遺跡 13 次調査（浜松市 2012）地点から約 350 m 北西側である。伊場大溝が北西から南東へ流れていることからすると、これまでに確認されていた最上流部よりもさらに 350 m 以上上流部で大溝の存在が確認できたことになる。

23 次大溝は延長 17 m の検出ではあるが、水流の方向を考える上で重要な各堆積層の底面勾配は明瞭な傾向を示した。各層底面の東西壁面での標高を比べると、Ⅶ層は西が低くなっているものの、Ⅷ・Ⅴ・Ⅳ・Ⅲ層の底面は西から東へ向けて低くなる。Ⅷ・Ⅴ・Ⅳ・Ⅲ層のあり方は、23 次大溝が西から東へ向けて流れ、下流側でこれまでに検出されている大溝へとつながるとの想定と整合する。一方、Ⅶ層は底面の勾配が他層とは逆転している。堆積土の状況からⅦ層大溝の水流には相当な勢いがあったとみられ、流水の浸食作用によってⅦ層大溝の底面は平坦ではなく、部分的な起伏が各所に形成されたと思われる。Ⅶ層大溝においては局所的に見ると底面の勾配が逆転することもありえたと考えられ、水流の方向はⅦ層段階にも西から東であったとみるのが穏当であろう。

図 4 では、23 次大溝の東西延長部の川筋を推定復元してみた。ここでは北西から南東へ流下してきた大溝が今回の調査地付近で屈曲し北東方向に川筋を変え、J R 東海浜松工場敷地の北西隅付近で梶子北大溝と合流するや南から南東方向へと向きを変えて 13 次大溝へつながると想定している。調査地が位置する J T 浜松工場跡地内で建物の解体に並行して実施された、跡地の再利用の計画に先立つ試掘確認調査（22 次調査）において、工場敷地の北西隅と北東隅、そして今回の調査地にあたる中央北寄りに設定された試掘坑から大溝とみられる流路状の落ち込み地形が確認された。このことが、北西から延びてきた川筋が調査地付近において屈曲し、北東方向へ向きを変えて蛇行すると想定した根拠である。

梶子北大溝は、伊場大溝の支流の一つと考えられている幅 50 m におよぶ埋没河川である（浜松市教委 1997）。現在の雄踏街道と重複する第 1 砂堤の南裾を東から西へ流れ、部分的な検出を含め

ると東西に600 m以上延びることが確認されている。今回の調査地から東北東へ約300 m隔てた地点で実施された梶子北1次調査では、大溝（自然流路）の層序と年代が良く把握されている。それによれば、梶子北大溝の形成は推定縄文時代晩期頃に通り、鎌倉時代頃までの長期にわたり湿地状の流路形態を保っていた。伊場大溝のⅢ層、Ⅳ・Ⅴ層、Ⅴ・Ⅵ層に相当する堆積土層が確認されているが、Ⅶ層とⅧ層に当たる層位は確認されていない。また、伊場大溝の調査では大溝の基盤土として認識されてきたⅥ層やⅦ層、Ⅶ層が大溝内の下層埋土として存在する。梶子北大溝のⅥ層・Ⅶ層・Ⅶ層のあり方からすれば、今回の23次調査におけるⅥ層・Ⅶ層（Ⅶ層相当）・Ⅶ下層（Ⅶ層相当）は、大溝Ⅶ層～Ⅲ層に先行する流路埋土と捉えられるものの、巨視的には梶子北大溝と同一の流路ともみなしうる。

23次調査区に最も近い1次調査区西壁での大溝各堆積層の標高をみると、Ⅲ層下面が約0 m、Ⅳ・Ⅴ層下面が約-0.4 m、Ⅴ・Ⅵ層下面が約-0.55 m、Ⅶ層下面が約-0.7 m、Ⅶ層下面が約-0.8 mである。いずれも23次大溝よりも高く、東西の川筋をとることからも、23次大溝の東側で合流すると想定するのが妥当であろう。

23次大溝は、従前の伊場遺跡群の範囲外で見つかったものであるが、伊場大溝は自然流路（河川）なのだから、これまでに大溝が検出されている範囲の上流側と下流側にその続きが延びるのは当然のことである。

23次大溝の堆積層から出土した遺物は既往の調査に比べて多いとは言えないものの、特徴的な物品が出土した。特にⅣ層出土の「筆墨納櫃」木簡、Ⅴ層出土の「主政川前」墨書土器などをはじめとして、伊場遺跡群の範囲内に想定される官衙施設との強い関連が窺われるものが含まれている。堆積土や遺物の状況からみて、それらの遺物は遠方から流されてきたものではなく、23次調査区の南側に位置する砂丘微高地に存在したと推測される施設に由来するとみられた。したがって、伊場遺跡群における古代の官衙施設群は、東西1,500 m以上、南北800 m以上の範囲に展開することが確実とみられ、このような官衙施設の分布範囲は郡レベルの官衙遺跡の規模としては破格な広さと言ってよい。これは、数智郡家や郡司を務めた豪族が造営した寺院、栗原駅、軍団、さらにはこうした施設に勤務する官人の居宅など複数の官衙関連施設が集中することによるのであろう。また当地は、砂堤列や埋没小砂堤が幾条も東西に延び、それらの間に砂堤間湿地が連なるといった独特の地勢である。伊場遺跡群において官衙施設群は、砂堤列の微高地に東西に細長く分散して配置せざるを得なかったであろうことが容易に想像でき、このことも官衙施設の広大な広がりやの成因の一つと推測されるのである。

2 中期弥生土器について

① 角江式土器の研究史

大溝の下層から北低湿地のⅦ層・Ⅶ層にかけて出土した土器のほとんどが、弥生時代中期後葉の角江式土器と呼ばれる土器群である。角江式土器は、角江遺跡に因んで命名された土器様式である。角江遺跡は、浜松市西部の西区入野町に所在する遺跡である。1991～1994年の河川拡幅改修事業に先立ち実施された発掘調査により、大量の弥生土器が発見された。特に多いのが、中期中葉から中期後葉で、中期後葉の土器群が角江式土器にあたる。報告書では、これらの土器を中期中葉の瓜郷式土器と後期の伊場式土器（山中様式西遠江型）の間で、三河の下長山式土器と長床式土器に相当する段階と位置付けたが、角江式土器と命名することはなかった。これは、当遺跡での土器

は、河川堆積内の資料が多く層位的に前後関係が把握しづらいこと、また方形周溝墓や土墳墓においては残りの良い土器は出土するものの、単独出土のものが多く、器種が限られ、良好な一括資料とはならないことからである。また、河川内堆積資料では瓜郷式土器と中期後葉の土器が混在すること、伊場式土器との間にはまだ開きが大きく、前後様式との系譜関係が明確にできないこと、そして、様式を構成するする在地土器型式も明確に抽出できなかったことからあえて様式名を付けなかったようだ（（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996）。

梶子北遺跡は、梶子遺跡6次調査区の北側にある遺跡で、自然の埋没河川である梶子北大溝から北側の第一砂堤にかけて、当期の包含層と方形周溝墓が検出された。角江遺跡とよく似た遺構と遺物の出土状況であった。しかし、梶子北遺跡の報告書を作成する過程で、角江遺跡出土土器についても見直す必要があると考え、残りの良い土器だけを層位別に並べてみたところ、土器相の変化をある程度認めることができた。その結果、中期中葉と後葉との間、そして、中期後葉とされた土器群の中でも、ある程度は2分して認識することが可能と考えるに至った（（財）浜松市文化協会 1998）。しかし、一括資料が不足していることには変わりないことから、報告書では角江式土器とは呼ばず、角江Ⅰ・Ⅱ群土器として報告した。なお、筆者は2004年に東遠江の白岩式土器と親密な土器様式として、角江式土器を紹介したことがある（鈴木 2006）。

舞阪町天白遺跡の報告書では、梶子北遺跡の成果を踏まえ、湖西市新居町の一里田遺跡溝出土土器を最も新しい段階とし、角江式土器（角江様式）をⅠ～Ⅲの時間的小様式に分ける見通しを示したが、型式分類と一括性の検証を行わず、名称が先行し実態を伴うものではなかった（（財）浜松市文化振興財団 2009）。

その後、中期後葉の土器は三永・中村遺跡、将監名遺跡、東前遺跡などからも発見され、将監名遺跡や三永・中村遺跡では、堅穴住居跡、土壇、環壕、方形周溝墓などからの一括資料も発見されるに至り、資料も充実してきた。

轟直行は、将監名遺跡の一括資料を中心に上記遺跡資料を加えて、土器の形態と文様の分類を行い、器種や型式の組合せをもとに、角江式土器を本格的に3分類した（轟 2016・17）。壺の型式分類により、1式は瓜郷式土器を継承し変化させた段階、2式はそれを脱した段階、3式は凹線文土器の壺やその影響を受けた在地系の壺、丸胴の台付壺の出現した段階とした。

萩野谷正宏は、『弥生土器の様式と編年－東海編－』（萩野谷 2002）で、凹線文土器が見られない瓜郷式土器から継続するⅢ－4・5様式と、凹線文土器が一定量認められるⅣ様式に分割した。凹線文土器の出現を大画期と捉えるが、瓜郷式土器から角江土器の間は連続的で大画期を認めないようだ。

② 角江式土器とは

轟は、角江式土器を瓜郷式土器とは異なる様式とし、在地の壺の変化を重視して細分を行ったもので、新段階には凹線文土器とその影響を受けた土器により構成されるとした。これに対し、萩野谷は、凹線文土器の出現を画期ととらえ、異なる2つの土器様式とする。

まず、瓜郷式土器と角江式土器の画期をどう考えるかである。壺においては、プロポーションや文様において継続する要素はあるものの、様式を構成する壺においては、瓜郷型壺の消滅、台付深鉢や台付壺の出現など大きな画期が認められる。また、高坏も、定型化はみられず数量的にはわずかなものであるものの、確実に認められるようになる。このように器種や主要型式の出現や消滅が認められることから、瓜郷式土器の壺の系譜だけを重視する萩野谷の考えには賛同できない。

萩野谷も轟も角江式土器の段階を、凹線文土器の出現をメルクマールに細分する。萩野谷は凹線

文土器の出現で小様式を分け、凹線文出現以降をさらに2つ以上に細分することが可能とした（萩野谷 2002）。これに対し轟は、凹線文土器の出現を、角江式土器の最新段階の3式からとしている。

筆者は、角江遺跡出土土器を層位別に角江Ⅰ・Ⅱ群に分けることが可能とし、一里田遺跡の溝出土土器を後続する最新段階と考えた（鈴木 1998）。その後、これらを角江Ⅰ～Ⅲ様式と呼ぶこととした（鈴木 2009）。一里田遺跡を最後にすることは轟と同じであるが、筆者は凹線文土器の出現をⅡ式の段階と考える。

轟の2式は、角江Ⅱ群（Ⅱ式）にあたるが、轟が角江2式の一括資料とする将監名 SK518 には凹線文を直接施した壺や高坏は認められないものの、凹線文の壺（静岡県埋蔵文化財センター 2012 の第163図 217・274）が確実に存在する。ただし、萩野谷のように凹線文土器の出現を画期とすると、凹線文土器はほとんどが三河からの搬入品で、その数には限りがあり、指標とするには適さない。凹線文土器の出現をメルクマールに、西遠江の土器様式を時間的な大様式レベルで画することはむづかしい。西遠江以東は、基本的に凹線文土器を作らない、言い換えれば土器様式に凹線文土器が組成していない、と考えている（鈴木 2006）。しかし、凹線文土器の影響を受けないわけではなく、逆に、影響を強く受けて、在地系譜の土器は大きく変化したと考えている。

次に、後期弥生土器の伊場式土器との間には、山中型高坏やワイングラス型高坏の出現があり、壺では折返口縁部壺、鉢では裝飾鉢の出現など、大きな画期が認められ、大様式レベルで土器様式を異にする。そこで、瓜郷式土器から伊場式土器の間の時間的大様式として、角江式土器を明確な形式をもとに一言で定義すれば、瓜郷型壺の消滅から、山中型高坏の出現までとなる。もう少し詳しく器種ごとに特徴を説明しておく必要がある。

壺では、瓜郷式壺形態から凹線文土器の壺（算盤玉形）の影響を受けて下膨れ丸胴形態へと変化する。文様は、瓜郷式で盛行した太い区画沈線と研磨無文帯がほぼ消失し、引き継がれた沈線文や縦位櫛描文も次第に減少・消失する。凹線文系の櫛描横線文、波状文、扇形文が在地土器においても盛行するが、回転手法は顕著ではない。

甕では、台付深鉢と台付甕が出現し、平底深鉢と共存するが、台付甕が主体化し、これとは逆に深鉢形態は減少・消失する。調整は、貝殻条痕はすでになく、棒束条痕や櫛条痕からハケ調整へと変化する。台盤状土製品も存在するが、次第に減少・消失する。

高坏は、少数存在するが、定型化していない。凹線文土器の鏝状口縁部高坏や碗形高坏はほとんどが搬入品で、次第にその数は多くなる。

③ 梶子遺跡 23 次調査で出土した中期弥生土器の評価

今回出土した中期弥生土器はほぼ角江式土器といってよいが、集中して出土しているものの、湿地内の包含層であり、同一時期の遺物群と見てよいか迷うところである。図 35 の 1～5 は瓜郷式土器壺の系譜上にあるプロポーショナルなもので、肩部が間延びした形態をとる。肩部文様も 1・2・4・5 は櫛描横線文を多重、多段に施し櫛描縦線文や縦波状文を付加する文様構成をとる。1 と 2 に加え 6 も頸部に区画沈線をもち、古相と言える。2 は肩部が張り出すこと、文様帯下端に連弧文を施すなど古い要素を留める。これらに対し、3 は櫛描簾状文が施文されており、プロポーショナルとは別に文様においては、凹線文土器の影響が考えられる。一方 7 のプロポーショナルは、胴部が算盤玉状に張り出すことから、また、櫛描直線文だけを多段に施すなど凹線文土器の影響が表直に考えられる。44 の小型壺は、下膨れ形の胴部を有し、斜格子文と櫛描横線文を繰り返し施すもので、一里田遺跡で多く認められるなど、新しい属性をもつものと言える。

甕では、図 40 の 139～141、図 43 の 210～218 は口唇部が突帯状をしたもので、210 と 211 は

口唇部の上下両端に刻目が施されるなど古層を呈するものである。しかし、一方で後期的な台付甕も見られる。

これに対し、凹線文土器の高坪では、図44の237と238はともに、D下層からの出土としたが、その出土位置は上部にあたる。また、凹線文土器の甕では190はD下層として取り上げられているが、186～188は弥生時代後期のD上層～7世紀のⅦ層から出土しており、D下層の上部にあったものが水流により洗われるなどして混入したとみられる。また、壺においても、図33・34の75～77は、D下層として取り上げられているが、73・74・80～82は弥生時代後期のD上層～7世紀のⅦ層から出土しており、D下層でもその上部にあったものが混入したとみられる。凹線文土器は極力小片のものまで掲載しているため、実際の出土量はわずかで、しかも、D層の中でもその上部を中心に散見する。

今回の出土資料には古い属性を留めるものは多いものの、逆に新しい属性が見られるものもある。資料全体を見渡した場合、角江Ⅱ式（角江Ⅱ群：（財）浜松市文化協会1998）が主体的であり、凹線文土器の共伴や影響が出始めた段階と考えるのが無難なところである。

3 木製品について

今回の調査で出土した木製品は、北低湿地のD層および大溝から出土したものである。掲載した木製品の総数は刀子を含め115点を数える。そのうち、D層出土品が68点と全体の6割を占め、残り4割の47点（うち3点はD層の混入品）が大溝から出土したものである。

D下層から出土したものは、共伴した土器から弥生時代中期後葉の所産と判断できる。D上層出土品は、弥生時代中期後葉から弥生時代後期前半の幅の中に収まると考えられる。大溝出土品は、基本的に大溝各層の堆積年代の所産と考えられるが、本来は下層のD層に包含されていたのが洗い出されて大溝内に混入し再埋没したものが含まれている可能性がある。

出土木製品は、木簡、生産用具、生活用具、武具・馬具、祭祀具、建築材、その他に大別した。生産用具には、農具、工具、漁具、運搬具、機織・編具がある。生活用具は容器類と横櫛や荷札などの「その他の生活用具」に分けた。祭祀具には、斎串と刀形、舟形などの形代類がある。建築材としては、柱根、梯子、垂木がある。そのほか、上記の分類に含めることができない板や棒、角材などについては、有孔、出柄、有頭などの形態をもとに分類し、大別分類の「その他」の木製品とした。以下、層位ごとに木製品の出土傾向について検討を加え、伊場遺跡群の動態を窺ううえでの一助としたい。

D下層からは、祭祀具を除いて各大別分類に帰属する木製品が出土している。生産用具が7割以上存在し、農具の各種や工具の斧柄、漁具のタモ網杵、機織具の杵などがみられる。なかでも鉾や鋤をはじめとする農具が61.1%（「その他」の木製品を除く。以下同様）と高比率を占める。さらに鉾・鋤の半数近くが未成品であり、集落内で木器の製作が活発に行われていたことがわかる。ほか、生活用具として槽や高杯などの容器類が13.9%、武具の丸木弓が2.8%、建築材の柱根が11.1%である。このような木製品のあり方は、南微高地に展開した弥生時代中期後葉の集落が、農耕をおもな生業としつつ低湿地での漁労なども行っていた一般的な集落像を示している。

D上層からは建築材が出土している。比較的近くから出土した土器の年代観からすれば、弥生時代後期前半のものである可能性が高い。当期には南微高地において方形周溝墓の可能性のある溝SD26が営まれているのに加えて、中期に引き続いて集落も近在したと判断できる。ただし遺物の

出土量は中期後葉段階に比べて激減しており、集落は中心部の位置を移動したか、もしくは規模が縮小したとみられる。

弥生時代後期後半から古墳時代中期前半までの明確な木製品はみられない。当該時期の土器についてはD上層の上部堆積層から少量が、また大溝Ⅶ層に混入した状態で出土した程度である。当期には周辺環境の変化によってであろうか、集落は退転した様子である。

大溝の最初期の5世紀後半～6世紀前半に堆積した大溝Ⅶ層からは、横樋と槽が出土しているのみで、土器と同様に木製品の量は少ない。

Ⅶ層大溝の形成によって水はけが良くなり周辺一帯の居住環境が整ったためであろうか、6世紀後半～7世紀末の堆積層である大溝Ⅷ層段階になると出土量が増し、17点（うち2点はD層の混入品）の木製品が出土している。種類ごとの出土比率は、生産用具60%、生活用具20%、馬具10%、祭祀具？10%で、生産用具が傑出し生活用具がこれに次ぐ。生産用具には、鎌や鎌柄などの農具、斧柄、背負子、編簀などがある。種類ごとの出土傾向はD層段階と似ており、一般集落でのあり方を呈している。注意されるのは、壺甕や横樋といった特定の有力者が使用したとみられる優品の存在で、調査地周辺における豪族層の存在が垣間見える。

8世紀初頭～中葉段階の大溝Ⅸ層からは、5点（うち5点はD層の混入品）の木製品が出土した。祭祀具と建築材が1点ずつで、出土総数が少ないため出土傾向を検討するには無理がある。

8世紀後葉～10世紀段階のⅣ層からは、大溝の堆積層では最も多く17点の木製品が出土している。種類ごとの出土比率は、生産用具20%、生活用具53.3%、祭祀具13.3%で、ほかに木簡と建築材が1点ずつではあるが6.7%となる。数量的には生活用具が傑出しており、内容はすべて容器類である。木簡として分類したがこれも墨書にあるとおり筆・墨を納める筆箱の蓋であり、機能としては容器に含まれる。刀子および畜串や舟形などの祭祀具の存在も特徴的で、木簡（文房具箱）の存在と合わせて官衙的な色彩が極めて強いと言える。

11世紀～13世紀の堆積層であるⅢ下層からは、6点が出土した。種類ごとの出土比率は、生産

表5 出土木製品の構成

大分類	小分類	Ⅱ下層			Ⅱ上層			Ⅲ層			Ⅳ層			Ⅴ層			Ⅵ層			Ⅶ層		
		数	割合	%	数	割合	%	数	割合	%	数	割合	%	数	割合	%	数	割合	%	数	割合	%
生産用具	鎌・鎌柄	24	32	34.1	65.1			1	100.0	100.0	0	0	0.0	0	0	0.0	0	0	0.0	0	0	0.0
	鎌・鎌柄	0	0	0.0	0.0																	
	背負子	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
生活用具	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
祭祀具	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
その他	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	
	猪鬃	0	0	0.0	0.0																	

(数値不明のものも含む)

用具 16.7%、生活用具 66.7%、武具 16.7%である。生産用具には四手網の把手がある。生活用具は曲物や箱物などの容器類である。その他の生活用具として荷札が、武具には小刀の鞘がそれぞれ 1 点出土している。本層からは荷札が出土しているものの、前代のⅣ層でみられた斎串・形代などの祭祀具や刀子など明瞭に公的な性格を帯びた物品は出土していない。これは、本層が伊場官衙遺跡群廃絶後の堆積層であることによるのであろう。

最後に、各層から出土木製品からみた時期ごとの遺跡の特徴をまとめておく。まず、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけては一般集落的な様相を呈している。古代の大溝は伊場官衙遺跡群と密接に関わる遺構である。官衙施設の成立前夜から創建期にかけての大溝Ⅶ層から出土した壺鏡は、敷智郡司を務めたであろう在地有力氏族の存在を示唆するものである。Ⅴ層は出土量が少ないため不明瞭であるが、Ⅳ層出土木製品の様相は公的施設の存在を色濃く反映したものと見えよう。Ⅲ層段階には律令官衙的な遺物が認められなくなり、一般集落的な様相へと復す。

4 伊場遺跡群の方形周溝墓

① 既往の調査

伊場遺跡群における弥生時代中期の墓域は、遺跡群北側の第 1 砂堤列上に位置する梶子北・中村・三永遺跡に存在する。ここでは東西約 800 m に亘って合計 50 基ほどの方形周溝墓が確認された。1 基あたりの方台部の規模は 5 m ～ 10 m ほどとまちまちであるが、特に大型のものは見られない。

梶子遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓は確認されていないが、弥生時代後期の方形周溝墓が 6 次調査で 3 基、8 次・17 次各 1 基、18 次調査で 2 基が報告された。しかし、6 次調査の 3 基は伊場遺跡の総括編で、伊場遺跡の環濠内および西別区の例を含め、周堤平地式住居跡の可能性が高いとされた。8 次・17 次と 18 次 A 区の例は、溝形状、規模、遺物の出土状況や穿孔土器などの供献土器の存在から、方形周溝墓と見てよさそうである。だが、18 次 F 区の例は、居住域に接し環濠とも切り合っていること、また、溝は浅く供献土器もないことから、周堤式平地式住居に伴う溝と見た方がよい。この F 区には平地式住居跡 2 軒～3 軒が存在する。梶子遺跡の方形周溝墓は今回の 23 次調査を含め 4 基の存在を認めるが、いずれも全形が分かったものではない。しかし、4 基共環濠外に造られ、J R 浜松工場内にある 2 基は環濠に近い位置にある。

梶子遺跡の各調査で検出された方形周溝墓はいずれも部分的な遺構の検出に留まっているため、平面形態は判然としませんが、遺跡群北側で検出された中期の方形周溝墓は正方形、もしくは長方形のものが多く、周溝形態は四隅に陸橋をもつタイプがほとんどである。後期の方形周溝墓は、山の神遺跡、将監名遺跡、大山本村遺跡などの例から、陸橋を 1 つもつ、あるいは全周する正方形であったと推定される。

② 今回の調査

今回の調査で検出された SD26 についても既往の調査同様、遺構の全体像は確認出来なかった。溝内での出土遺物は、完形品に近い壺・鉢・高坏が多く、検出状況は、坏部を取り去った高坏の脚部を逆さに置くなど、意図的に並べたと考えられるものがあつた。このことから、墓前でマツリに伴う土器の可能性が高いと推定した。SD26 の北側で東西方向の溝が確認されなかったことから、この遺構は主体部を調査区外東側に持つ西側の周溝である可能性が高い。溝の規模は、確認出来た範囲で幅 1.0 m、長さ 9.3 m 以上であることから、過去の調査で確認された方形周溝墓と同様に方台部の規模は 10 m 前後と推定される。また、主軸方向は N-37.5°-E と 8 次・17 次・18 次調査と似

た方向をとる。なお、出土した土器には、過去の調査で一部見られたような壺や鉢、高坏の底部等への穿孔は見られなかった。

③ 伊場遺跡群の居住域と墓域

遺跡群北側で調査された中期の方形周溝墓群は、環濠らしい溝と1、2軒の住居跡が存在したものの、周溝墓は東西に長く群を構成していた。居住域は明確ではないが、基本的には墓域と居住域は区別されていたとみられる。

後期の集落と墓域の関係は、山の神遺跡や大山本村遺跡の例が参考になる。山の神遺跡では環濠集落に接して南東側に方形周溝墓群が形成されていた。大山本村遺跡は環濠を有さない台地上の集落で、小さな谷を挟んで北側に周溝墓群が存在した。

伊場遺跡群における後期の方形周溝墓は、梶子遺跡の環濠外縁辺で検出されているが、現状では散在的である。本格的な墓域は、まだ調査されていない梶子遺跡の周辺にあるのか、それとも三方原台地の縁辺にあるのか、今後とも注視していかなければならない。

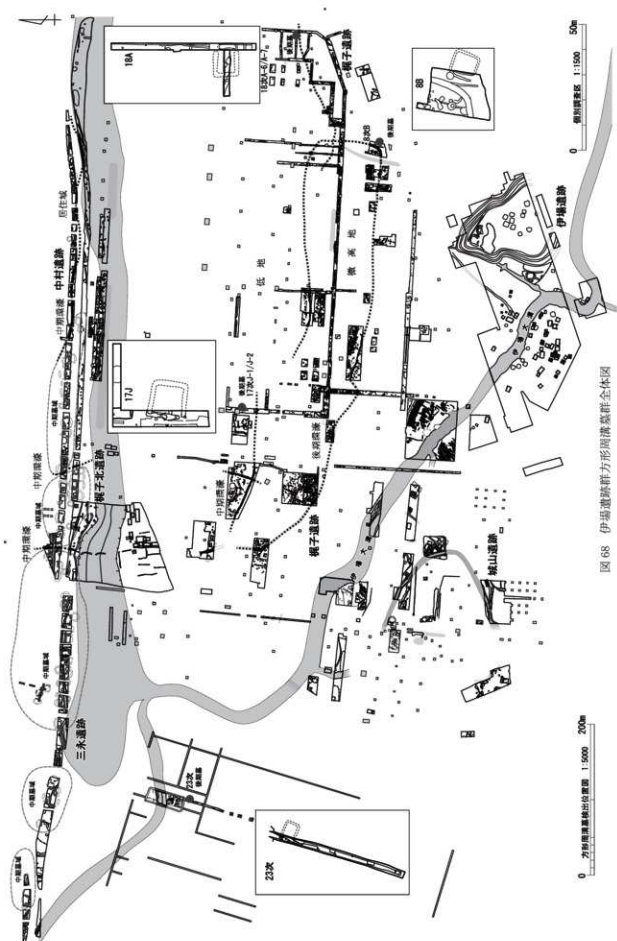


図 68 伊場遺跡群方形周溝墓群全体図

5 梶子遺跡 23 次調査出土木簡の概要—文書函とその機能—

① 木簡の釈文・内容

今回出土した木簡は、削り抜き文書函の蓋の表面に墨書がある資料である。まず、釈文は次の通りである（木簡学会の記載方式で示す）。

「筆墨納櫃  歳 

339 × 58 × 14 061

墨痕は、上部の「筆墨納櫃」の部分は明瞭に判読できるが、「櫃」よりも下の部分には、墨痕は認められない。しかし、ここにも断片的に文字の痕跡が白く抜ける状態で続いており、「歳」の文字の判読が可能である。これ以外は墨が全て流れており、文字の判読は難しいものの、元は墨書が連続していた可能性が高い。また、墨痕の遺存している「筆墨納櫃」の部分についても、実は筆画は浮き上がりの状態にある。こうした遺存状況は、全体として長時間紫外線に当たる環境にあったことの影響とみられる。

「筆」は竹冠に「毛」、「櫃」は木偏に「貴」を記す異体字でそれぞれ書かれている。「櫃」と「歳」の間は断片的に文字の痕跡があり、スペースからみて6、7文字分程度の文字が書かれていた可能性がある。また、「歳」の下には2、3文字程度の文字の痕跡が認められるが、2行に分かれる可能性があり、その場合、遺存状況からみて「筆墨納櫃」から続く行の左にもう1行記しているものとみられる。

「筆墨納櫃」に続く記載がどのような内容だったかは推測するしかない。「筆墨納櫃」と一連だった場合には、「筆墨納櫃」の帰属や用途など、それを補足する内容が想定できる。「歳」が木簡に登場する文脈として最も想定しやすいのは、年齢か暦関係である。「筆墨納櫃」との関連でいえば、年齢は考えにくく、可能性の高いのは後者であろう。例えば、「歳次」と干支を2行割書で書いた可能性がある^①。しかし、遺存状況から続く文字を「次」とみるのは困難で、また上述のように、右行が上部と連続する割り付けであるから割書としても不自然である。もう一つの可能性としては、天平勝宝年間(749-756)末期に「年」の代わりに用いられた「歳」である。唐で「年」の代わりに「載」を用いた^②のをまねて天平勝宝八歳(756年)、天平勝宝九歳(=天平宝字元年。757年)の2年にのみ用いられた特殊な用例である。この想定があたっているとすれば、「筆墨納櫃」としての使用開始年などの記載の可能性が考えられ、また木簡の時期を決める有力な手がかりにもなり得る。文字の遺存状況はこれを否定する状況ではないけれども、積極的に読み取るのもまた困難といわざるを得ない。

「筆墨納櫃」と一連ではない可能性も当然充分にある。その場合には、余白を使って行われた習書ということになろう。「筆墨納櫃」に比べて文字の残りが悪いのも、元々の墨色・墨質が異なっていたからという説明が可能である。ことに不自然な割り付けの割書になる可能性がある「歳」より下の部分については、「歳」までが「筆墨納櫃」と一連の墨書である場合にも、後時的に記された習書の可能性がより高いとみることができよう。

もし、習書説に弱点があるとすれば、記載が部分的なことである。文書函は書記スペースが広く、習書に用いられる場合は、後掲表6の4や13のように、習書、時には墨画が余白を埋め尽くするような場合もある。それに比べると今回出土した木簡の文字は、木簡の中央部に均整の取れた状態で遺存しており、これは一連の記載とみるのに有利である。いずれにせよ臆測に臆測を重ねるに過ぎ

地方官衙においても広く利用されていたとみてよからう。

出土事例の多くは、使用後に広大な余白部分に習書を施したもので、中には帳簿木簡として二次利用されているものもある（奈良国立文化財研究所（以下、奈文研）『平城京木簡3』5005 表6-6）。また、蓋には、「伊勢国少目大倭生羽進上」（『同』5003 表6-4）・「和泉監」（同5002 表6-3）・「資人等上目根」（奈文研『平城宮発掘調査出土木簡概報20』（以下、平城木簡概報20）7頁下段⁷⁾。表6-2)などのように、本来のウツ書きが遺存するものもあるから、使用の際には宛先や差し出しなどのウツ書きを記するのが一般的だったと思われる。

文書函の木簡が注目されるようになったのは、1988年から1989年にかけて、長屋王家木簡や二条大路木簡として、上に述べたものを含む多数の類例が出土したのが契機である⁶⁾。文字が記され木簡として認識された資料に加え、長屋王家木簡が出土した溝状土坑SD4750や、二条大路木簡が出土した二条大路南濠状遺構SD5100・二条大路北濠状遺構SD5300からは、文字のない木製品としての文書函の遺存例も多数報告されている⁷⁾。すなわち、長屋王家木簡が出土した溝状土坑SD4750からは、蓋5点（表6-16～20）、身7点（表6-28～34）の計12点が出土している。また、二条大路木簡が出土した二条大路南側の濠状遺構SD5100からは蓋3点（表6-21～23）、二条大路北側の濠状遺構SD5300からは身2点（表6-35・36）、計5点が出土している。なお、実はこれらの出土よりも前に、平城宮跡からも文字のない文書函5点が出土していた（東大溝SD2700から蓋2点 表6-24・25、身1点 表6-37。中央大溝SD3715から蓋 表6-26・身 表6-38 各1点）。また、浜松市の大蒲村東1遺跡のような地方官衙の遺跡においても、出土事例が報告されている（蓋1点 表6-27、身1点 表6-39）⁶⁾。結局、文字の有無を問わず、文書函としての出土事例としては、蓋よりは身の方がやや多いが、計38点に及ぶ事例があったことになる。今回これに梶子遺跡第23次調査の事例1点が加わったことになる。地方官衙遺跡の出土事例としては6例め、郡家関連では八幡林遺跡、大蒲村東1遺跡に次いで4例めとなる。

これらのうち、法量が不完全な12点（表6で網掛けした10・12・16・18・20・23・25・28・29・30・31・35）を除いた、完形品及び法量を推定できる27点の法量（長さ・幅）をグラフ化すると、図69-1・2のようになる。函の機能としては内法の比較も重要なので、外寸・内法の両者を示した。外寸で長さ339mm、幅64mm、内法で長さ310mm、幅47mmの梶子遺跡の事例は、やや幅広ではあるが、ほぼ標準的な大きさの文書函の事例といえよう。厚さ14mmも蓋としてはほぼ標準的である。

③ 文書函の用途

文書函の用途については、二条大路木簡に棒軸とセットになるとみられる事例があること（「伊勢国少目大倭生羽進上」の文書函『平城京木簡3』5003 表6-4）と、「伊勢国天平八年封戸庸帳」の棒軸（奈文研『平城木簡概報30』6頁下段〈28〉）からみて、上申文書の巻物を収納する

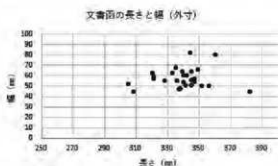


図 69-1 文書函の長さとの関係（外寸）

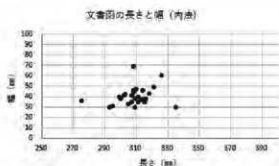


図 69-2 文書函の長さとの関係（内法）

容器として用いられたことが知られる。内法の長さが、30 cm から 32 cm 程度までに収斂するのも紙の高さと軸の長さを考えると整合的であろう。しかし、用途はそれのみに留まるものではないようである。すなわち、多賀城跡出土の事例（表 6-9）では、「府符口〔諸カ〕郡司口」のウツ書きが確認でき、鎮守府から発せられた陸奥国内の各郡の郡司宛ての文書の容器としての使用事例とみられる。この事例で重要なのは、地方官衙でしかも下達文書の容器としても利用されたことがわかるだけでなく、鎮守府符が棒軸を用いるような長大な巻物であるとは考えにくいから、堅紙の文書の収納にも用いられた可能性を示唆することである。

このことは、文書函の身の事例に、深さと幅が同寸ではなく、深さよりも幅がかなり広い事例が多いこととも対応している。文書函の用途について、これまでは漠然と軸に巻いた文書を想定することが多かったが、そうであれば深さと幅は同寸に近い方が、中で転がることなく収めやすい。そこで、内法の幅と深さがわかる 9 例の身（表 6-12 ～ 15・32・33・37 ～ 39）について、幅と深さの関係を調べると、いずれも深さよりも幅の方が広く、深さと幅の比率が 1：2 の事例が最も標準的で 3 例（表 6-13・14・38）あり、これより幅が広い 1：3 も 2 例（表 6-15・37）ある。つまり、棒軸が横に 2 本並ぶ幅広の事例が半数を超える。これに対し、軸を収めるとしたら 1 本しか入らないであろう幅が深さの 2 倍に満たないものは、2：3 が 2 例（表 6-12・33）で、1：1 に近いものは 2 例（表 6-32・39）で、半数に満たないものである。

幅が深さの 2 倍以上ある場合、もちろん軸を 2 本並べてもよいわけだが、堅紙の文書の料紙を重ね、縦に折りたたんで封を施した上で収めるのには、平たい形状が適しているのは明らかだろう。しかも、平たい形状であれば、一定の深ささえ確保しておけば、用途に応じてどちらにも使用することができ、汎用性の高さという点でも便利なのではなかろうか。

さて、都での出土事例でこれまで確認できているのは地方からの上申文書だけである。これは、宮城内部の官司間の日常的な文書のやりとりで文書函を用いることはなかったからであろう。つまり、文書函は一定の格式を整えた文書・帳簿の送付に使用するアイテムであり、それは上申、下達を問わずに用いられたと理解することができよう。平行文書に使用した事例は未確認だが、両者の関係次第では、それも有り得たであろう。さらに、長屋王の家政機関の職員に関わるとみられる「資人等上日報」のウツ書きをもつ平城京東二坊坊間路西侧溝の出土事例（表 6-2）は、式部省への上申用とも捉え得るが、長屋王の資人であることの明記がないことからすれば、家政機関内での保管用との解釈も可能である。そうであれば、文書函が送付と並んで保管にも用いられた可能性を考えてよいであろう。要するに、文書函の用途として一定の格式をもつ文書の送付や保管に使用するという、至極当然の結論が導かれたことになる。

④ 梶子遺跡出土文書函の用途

それでは、今回梶子遺跡第 23 次調査で出土した文書函（蓋）の用途はどのように考えられるだろうか、上記を踏まえて考えてみたい。

墨書は一部遺存状況が悪いため全貌の判断は難しいが、冒頭の「筆墨納櫃」で一応内容的には完結しているとみられる。この四文字は、蓋の上部中央に整った字形で単独で書かれている。この記載状況は、これら四文字が習書ではなく、文書函としての機能に伴うウツ書きである可能性を強く示唆する。少なくともこれらを習書とみる根拠はない。その後続く墨書については、一般的な可能性としては、①「筆墨納櫃」を補足説明する内容、あるいは②「筆墨納櫃」とは無関係な習書、の両様の可能性が考えられるが、文意を取ることが難しいため、ここでは取り敢えず考察の対象から外して論を進める。

それでは、「筆墨納櫃」とは何か。文書函の蓋のウツ書きには、通常そこに収められる文書の宛先や差し出し、あるいは内容など、文書の属性が摘記されることが多い。しかし、「筆墨納櫃」は、内容から考えて文書の属性とは考えがたく、櫃に収められている物品の種類を明記したものと解するのが自然であろう。すなわち、筆・墨—いわゆる文房四宝のうち、紙・硯を除く文房具。紙・硯がないのはこれに収まる大きさではないからであろう—を収める「櫃」の謂いとみられる。

そうであれば「櫃」とはなにか。一般的「櫃」といって思い浮かべるのは、大型のカギの付いた木製収納具であろう。正倉院文書にも、辛櫃、明櫃などとして多数登場する⁽⁹⁾。それに比べると、「筆墨納櫃」と書かれた文書函ははるかに小型であり、「櫃」のイメージとは程遠いと言えなくもない。実際、正倉院文書に登場する「櫃」には、文書函のような小型のハコに該当するものは一つもない。

しかしながら、僅か一例ではあるが、文書函を「櫃」と称した事例が存在するのである。正倉院中倉に収められている東大寺封戸処分勅書（中倉14）を収めた、「沢栗木箱」と呼ばれる木製の箱（中倉28）である⁽¹⁰⁾。その蓋の外部中央に、「施入五千戸封 御書勅書櫃」と読める墨書が確認されているのである。沢栗はヤチダモまたはシオジのことと考えられ、その同一材を蓋と身に分けて割り抜いており、蓋面を甲盛りにし、蓋の裏面の周縁を一段かき取って身との懸かりにしている形状は、古代の文書函の形態とよく一致している。「沢栗木箱」が、遺物として出土する文書函の数少ない伝来事例の一つであろうことは、長屋王家木簡・二条大路木簡の出土で文書函が注目を集めるようになった当初段階から既に注目されていた⁽¹¹⁾。

「沢栗木箱」が、東大寺封戸処分勅書を収めるための箱であるのは、記載内容からみて疑いようがない。その木箱が「勅書櫃」を自称しているわけである。それを収めた木箱を「櫃」と称しているのは明らかであろう。つまり、「沢栗木箱」の事例は、木簡や木製品として出土する古代の文書函が、「櫃」と呼ばれたことの有力な根拠となる。もちろん、「沢栗木箱」が東大寺封戸処分勅書作成当初から付属していた確証はなく、東大寺における後世の保管過程で用意され墨書が記された可能性も否定は出来ない。しかし、少なくとも古代の文書函の形状の容器を「櫃」と称する場合があった証拠となるのは確実で、それが古代に遡る可能性は高いとみて差し支えないであろう。

そうとすれば、「筆墨納櫃」は、筆・墨を収める容器としての当該文書函の用途を明記したものと見え、いわば文房具函、現代風に言えば「筆箱」であることを示す墨書として理解できることになる。これまでに知られる古代の文書函の用途にはなかった事例である。元々文房具入れとして用意したのか、文書函として利用できない何らかの事情があって、文房具入れに転用したのかはわからない。あるいは日常的に用いる筆・墨ではなく、何らかの特別の用途に用いる文房具だったのであろうか。「筆墨納櫃」のあとに続く文字は現在充分に判読できないが、この部分がそうした用途に関わる記載だった可能性は充分考えられるだろう。ただ、現状で資料としては完形品であるものの、表面から見て左端がかき込みにそって縦に細く割れている。これがいつの時点のものかは定かでないが、あるいはこうした割れを生むような傷が、文房具入れに転用した理由だった可能性も考えられるかも知れない。

【註】

- (1) 「歳次」＋干支の記載のある古代の木簡としては、例えば、「(表) o 伊賀国阿拝郡油ノ見栖鷹鼠、(裏) o 天平九年歳次丁丑」(奈文研『平城宮発掘調査出土木簡概報 30』7 頁上段 (30)) などがある。
- (2) 唐では、744 年(玄宗の天宝 3 載)から 758 年(肅宗の至徳 3 載=乾元元年)まで、「年」の代わりに「載」を用いていた。
- (3) 古代の文書面に関する先駆的、かつ総合的な専論としては、小池伸彦「木箱と文書」(木簡学会編『木簡研究』11、1989)がある。本稿で論じられなかった『延喜式』に見える函についても論じているので、合わせて参照されたい。
- (4) 但し、『平城宮木簡 3』の解説では槽形木製品とされており、文書面とは認識されていなかったようである。
- (5) 熊の作遺跡の資料は、裏面に明瞭な段があるので蓋材であるのは確かだが、左右が割れているため文書面以外の資料の可能性も皆無ではない。しかし、遺存状況は文書面とみて矛盾はないので、取り上げておくこととする。この資料については、宮城県教育委員会の吉野武氏のご教示を受けた。
- (6) 「左京三条二坊一・二・七・八坪の調査—第 186 次・190 次・193 次・195 次・197 次・200 次」(奈文研『昭和 63 年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1989)。
- (7) 奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』Tab. 38 割り抜き箱法量表。
- (8) (財)浜松市文化協会『大蒲村東 I・II 遺跡』2004。この資料の存在については、鈴木敏則氏のご教示を得た。なお、この他にも文字のない文書面の出土事例は多数あるかも知れないが、今回は類例確認には至らなかった。今後の調査を期したい。
- (9) 正倉院の櫃については、関根真隆「正倉院古櫃考」(関根真隆『正倉院への道—天平美術への招待—』1989、吉川弘文館)に詳しい。
- (10) 沢栗木箱については、宮内庁正倉院事務所『正倉院宝物 4 中倉 I』毎日新聞社、1994 年)のほか、2001 年の正倉院展に出陳された際の展示図録(奈良国立博物館『第 53 回正倉院展』2001)に解説がある。
- (11) 註 (6) 前掲報告、73 頁。

第12章 総括

梶子遺跡23次調査の成果は、大きくは2つある。1つ目は伊場大溝が発見され律令期の郡家関連遺物が出土したことであり、2つ目は大溝形成以前の北湿地部で弥生時代中期後葉の遺物が発見されるとともに、南微高地で弥生時代の遺跡が広く確認されたことである。最後に、それぞれについて、詳述することで総括としたい。

1 伊場大溝

今回の調査区で発見された伊場大溝は、これまでの調査のなかでも西に位置し、最上流部にあたる。大溝の総延長は1,600 mを超えることになったが、最下流の鳥居松遺跡まで、堆積層序と出土遺物相は、ほとんど変化しないことが明らかとなった。

① 古墳時代後期（大溝Ⅷ層）

律令期の大溝の形成前の堆積層で、北低湿地の溝肩は不明瞭である。出土遺物は少なく、5世紀から6世紀前半の土器がわずかに存在する。今回の調査では、5世紀前半以前の土器も散見し、大溝Ⅷ層の形成、つまり大溝の成立については、今後も検討していく必要がある。

出土遺物では、TK47 並行期（Ⅰ期末葉）の在地産と考えられる須恵器坏蓋（図25-1）の出土が注目される。近い年代のものとして、Ⅶ層として取り上げた赤彩のある模倣坏（図26-42）や長頸埴（48）は、5世紀末葉～6世紀前葉のものである。西遠江は、6世紀後半に下る模倣坏（44）も含め、模倣坏の分布圏の西限にあたる。

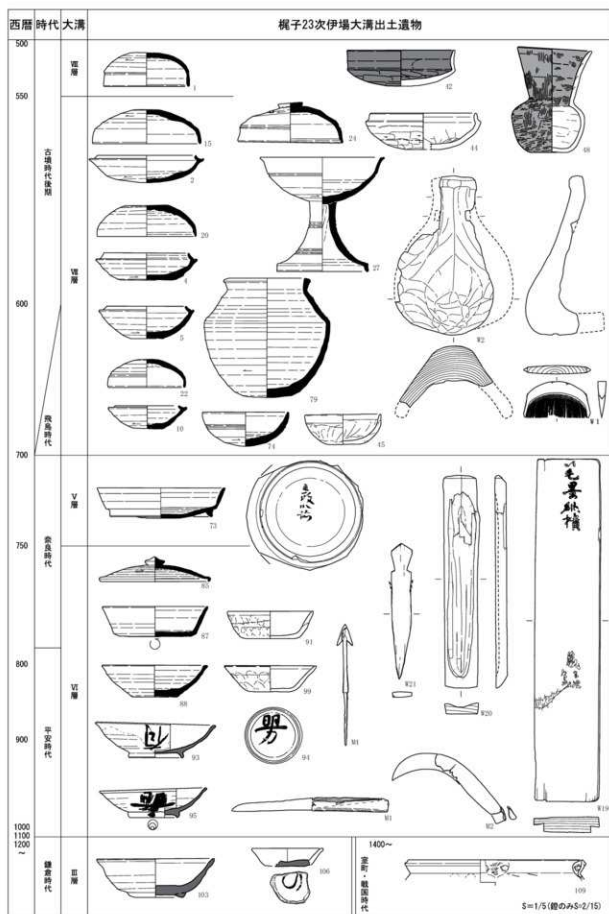
② 古墳時代後期後半から飛鳥時代（大溝Ⅶ層）

大溝は溝形状が明確になり、Ⅶ層からは6世紀後半～7世紀の遺物が出土した。層位別の出土土器の数はⅦ層が最も多く、その中でも7世紀前葉のものが主体を占める。木製品も10数点あり、鍔と横櫛が注目される。木製鍔は7世紀と推定され、伊場遺跡群内においては、6世紀に遡る伊場遺跡に次いで2例目となる。今回の鍔は、伊場遺跡や城山遺跡で発見された「小穀殿」や「二百長」などの墨書土器の存在から、軍団との関係を考えたいが、少し遡る時期の可能性もある。しかし、木製鍔を使用して乗馬することのできる地域の有力者層が、当地域にもいたことは、指摘できよう。

櫛も7世紀代のものであり、平面形が半円、棟が平坦なものは、伊場遺跡の例でも7世紀とされており（浜松市教委2002）、整合的である。有力者層において横櫛が普及する初期の段階のものとして、貴重である。

③ 奈良時代前半（大溝Ⅴ層）

全体的に遺物は少ないが、「主政川前」と記された須恵器の有台坏身が発見された。伊場遺跡群から発見された木簡や墨書土器などの文字資料において、大領・小領・主政・主帳といった郡司の四等官名がそろったことは、意義深い。奈良時代およびそれを遡る7世紀の郡（評）家の中枢にかかわる遺構は、伊場遺跡群において未だ発見されていないが、遺跡群内にあることは確実に、それを直接裏付ける資料となる。さらに、梶子遺跡23次調査での墨書土器や木簡の発見は、J T浜松工場跡地周辺まで含めた範囲に、郡家城が広がっていたことを示すことになった。



④ 奈良時代後半～平安時代（大溝IV層）

飛鳥時代（VII層）から奈良時代（V・IV層）にかけては、大溝は、堆積土により川底を浅くしながら、ほぼ同じ幅で同じ場所を流れていた。IV層は、8世紀後半から10世紀の遺物を包蔵するが、その下層から出土したものが、須恵器の箱形坏身(87)と摘みをもつ坏蓋(85)、土師器坏身(91)などであり、坏蓋には「山」と墨書がある。「筆墨納櫃」と表書きにある文書箱の蓋(W19)も面白く重要な資料である。筆と墨を納めた櫃（箱と同義語）という意味で、当時の人が筆箱として使用したとみられる。しかし、本来は文書を入れて移動するため、あるいは保管するための箱であり、それを転用したものとして推定される。文字行政の末端を担う役人の存在を示すとともに、地方郡家でも大切な文書は箱に入れて持ち運ぶ、あるいは保管していたことを示しており、郡家の中枢部が近くにあることを物語る貴重な資料でもある。

その他、役人にとって必需品の刀子、兵士が携行した鉄鍬や、郡家で行われた祭祀に伴う人形に近い斎串(21)、舟形(W20)などの木製品も発見された。

IV上層を中心に、10世紀の灰釉陶器碗が発見された。墨書がある土器は、欠損部分が少なく、完形品のものも存在した。文字には吉祥句と考えられる「有」・「朋万」・「又々」があり、近くで祭祀に伴い使用され、投棄されたと推定される。朋万も又々も1文字に合成されていて、平安時代に流行した一文字墨書のグループとなろう。一文字墨書は、伊場遺跡で「主」、城山遺跡で「太」、梶子遺跡19次で「得」・「足」が集中して出土した。平安時代になると祭祀遺物の種類が変わり、それまでの祭祀とは変化が想定される。それでは遺物だけでなく、具体的に祭祀の何がどう変化したのか、律令期全体を通した官による祭祀の在り方を再検討する必要がある。その他、全形が分かる鉄鎌の身の出土も注目される。

⑤ 鎌倉時代（大溝III層）

III層は茶褐色の植物遺体層で、大溝はこの段階でほぼ埋没するが、その後も帯状に滞水する湿地として残る。そこに戦国期の遺物(109)がわずかに認められた。III層からはおもに山茶碗(103)や小皿(106)、中国青磁碗が発見されたが、これまでの伊場大溝の調査でも、多くはない。中世以降は北低湿地の上層で検出された水田のように、梶子遺跡全体として、居住域は認められず、広く水田として利用されていたようである。

2 弥生時代

① 弥生中期後葉以前

弥生時代を遡るものは、縄文時代後晩期の土器が3片確認されただけである。しかし、これまでの各地における縄文土器の発見から、集落の存在は認められないものの、南部海岸平野での縄文人の積極的な活動を裏付けるものと考えられる。

つづく遺物には、弥生時代中期中葉の瓜部式土器の甕が1片ある。中期中葉には今回の調査区の北側にある三永遺跡や北東にある中村遺跡、東にある梶子北遺跡や梶子遺跡6次調査区などにおいて、当期の集落や墓域が調査され、周辺には水田域が推定されている。西遼江における本格的な水田稲作の拠点的作用を担った地域であったとみられる。

② 弥生時代中期後葉

弥生時代中期後葉の遺物の発見は、今回の発掘調査における大きな成果の1つである。三永遺跡と中村遺跡において大規模な方形周溝墓群が確認されたものの、集落の所在は明らかではなかつ

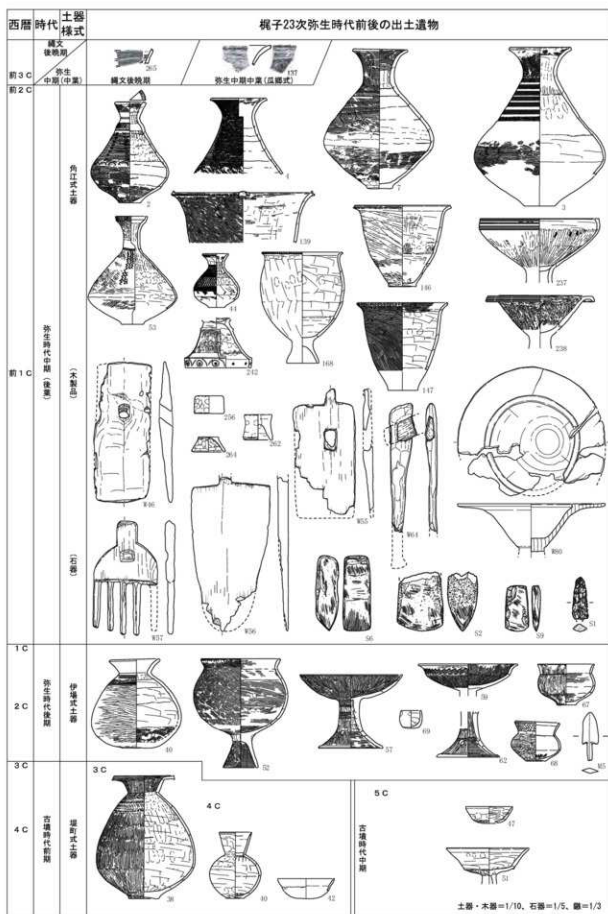


図71 縄子23次調査の成果一覧図2(弥生時代出土遺物)

た。今回の調査でも住居跡などは発見されなかったが、南微高地には土坑や小穴などの遺構が確認でき、湿地での遺物の出土状況からしても、南微高地のどこかに集落の存在を考えなければならない。

出土した土器は角江式土器で、凹線文土器が普及する前後段階の西遠江に分布する土器様式である。今回の資料は一括資料とはいえないが、器種のセット関係は良好で、出土状況からも比較的短期間に投棄されたと考えられる。今後、角江式土器を考えるうえで欠かせない資料の1つとなる。

これらの土器に伴出して木製品と石器がある。木製品は、農具の鍬、鋤、木鎌、田下駄、横槌、工具の斧柄、漁具の多網、狩猟具の丸木弓、機織具の棧、生活用具の高杯、槽、縦杵、建築部材の梯子、垂木など、中期後葉に限定できるさまざまな種類が出土した。その中でも、木製高杯や木鎌は珍しい。さらに、鍬と鋤の未成品がまとまって発見されたことは、加工用の石器の存在を考え合わせると、この場所で製作していた可能性が高いことを示す。また、大量の土器の存在とともに、周辺に当該期の集落域が展開していたとみるべきだろう。

③ 弥生時代後期前半

後期の出土資料は、その前半期の伊場式土器であり、後半期の堤町式（欠山式）土器はほとんど認められなかった。弥生時代の段階で、伊場遺跡群が最も栄えるのは後期前半で、南微高地で検出された方形周溝墓と考えられるSD26も、この時期の遺構である。大溝のⅦ・Ⅷや北低湿地D上層からも原位置を留めていないが、相当数の破片が確認された。その中には、銅鏃や木製品の梯子などもある。南微高地にはSD26だけでなく、さらに南においても溝状の遺構が確認されていることから、広く方形周溝墓群が存在した可能性が高い。

④ 古墳時代前中期

大溝Ⅷ層や北低湿地のC層からは古墳時代前中期の土器もわずかに確認された。この時期は伊場遺跡群全体で遺構や遺物が少なく、人々の営みが低調になっていたと考えられている。その原因をC層とした粘土層や微砂層の堆積から、度重なる洪水と湿地化などによる自然環境の変化によるものと推定される。大溝の形成は5世紀にあり、6世紀には排水機能が十分に果たされることになって、再び生活可能な環境が作り出されたと考えられる。6世紀後半以降には、南微高地で遺物が散見するようになり、今回の調査区周辺でも集落の形成が始まったとみられる。

3 今後の課題と展望

今回の掘子遺跡23次調査では、これまで確認された中で最上流部にあたる伊場大溝を検出し、「筆墨納櫃」と墨書された函の蓋や、「主政川前」と記された墨書土器、木製壺蓋など古墳時代中期から鎌倉時代までの多彩な遺物が出土した。また、伊場大溝の下層からは、弥生時代中期後葉及び後期前半の土器をはじめ、鍬・鋤・鎌・タモ・弓・高杯・梯子等多種にわたる木製品や、銅鏃等が出土した。

こうした豊富な遺物が確認された一方で、伊場大溝以外の遺構については、その性格を明確に位置付けられるものは少なかった。古代の遺構については検出数そのものが少なく、大半が7世紀代に位置付けられ、数智郡家に関連するような建物跡等は確認されなかった。弥生時代の遺構については、伊場遺跡群北部の中期方形周溝墓群（三永遺跡・中村遺跡）に対応する居住域の状況や、1基確認された後期の方形周溝墓周辺の墓域の広がりについて、調査範囲の制約もあり十分には把握することができなかった。

今回の調査では、梶子遺跡の範囲は大きく西側に広がることが判明したが、西端が確認されたわけではない。また、南拡張区の調査成果を踏まえると、若干遺構・遺物の密度は希薄ではあるものの、南側への遺跡範囲の広がりも想定される。今後、梶子遺跡及び伊場遺跡群の全体像を把握していくためには、上記の点に留意しながら、周辺地域の調査を積み重ね、遺跡の範囲や性格について不断の検討を行っていくことが必要である。

【参考文献】 ※表1に所収の梶子遺跡報告書及び執筆者が文中にて直接引用した文献は割愛した。

静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996『角江遺跡Ⅱ遺物編』

静岡県埋蔵文化財センター 2012『将監名遺跡』

森 直行 2016「角江式土器の変遷と各地の並行関係」『古代』第139号 早稲田大学考古学会

森 直行 2017「角江式土器の変遷と地域間交流」『三遠南信周辺における中期弥生土器と交流』地域と考古学の会

萩野谷正宏 2002「遠江・駿河地域（西遠江Ⅲ-4）」

浜松市県居公民館 2000『わが町文化誌 学びの里 祈りの丘』

財浜松市文化協会 1997『梶子北遺跡遺物編（本文）』

財浜松市文化協会 1998『梶子北遺跡遺物編（本文）』

財浜松市文化協会 2002『東前遺跡』

財浜松市文化協会 2005『梶子北（三永）・中村遺跡遺物編-弥生時代編-』

財浜松市文化振興財団 2008『東前遺跡Ⅱ』

財浜松市文化振興財団 2009『舞阪町天白遺跡』

浜松市教育委員会 2002『伊場遺跡遺物編8』

浜松市教育委員会 1978『伊場遺跡遺物編1』

浜松市教育委員会 2008『伊場遺跡総括編』

向坂鋼二「トホツアフミ」国と浜松『浜松の歴史』第1巻東洋書院

鈴木敏則 1998「中期弥生土器」『梶子北遺跡遺物編（本文）』

鈴木敏則 2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会

鈴木敏則 2005「出土須恵器について」『東若林遺跡』財浜松市文化振興財団

鈴木敏則 2006「東海の土器と青銅器の地域性」『2004年度共同研究成果報告』財大阪府文化財センター

鈴木敏則 2009「弥生土器」『舞阪町天白遺跡』

出土遺物観察表

凡 例

- ・ 遺物の残存率は％表示、10％単位での切り上げ
- ・ 口径・底径は外径を計測
- ・ 大きさの単位はcm
- ・ 回転体以外の大きさ表示は、器径：幅、器高：長さ、口径：厚み、
- ・ 色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

土器

図 No.	No.	品名	グランド	遺構	層位	用途	形状	特徴	厚 み cm	口 径 cm	口 縁 高 cm	底 径 cm	底 厚 cm	色 澤	胎 土	焼 成	備考	
23	1	818	1区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	50	114	112	4.4		褐色	密	良		
23	2	367	4区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	50	152	132	3.6		暗赤灰	やや粗	良		
23	3	341	4区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	80	136	113	3.8		灰	密	良		
23	4	367	1区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	40	133	113	3.8		褐色	密	良		
23	5	361/278	1-4区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	60	125	104	4.3		灰	密	良		
23	6	408	3区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	20	126	108	3.8		灰	粗	良		
23	7	367	1区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	40	12	100	4.0		灰	密	良		
23	8	375	3区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	100	122	88	4.0	4.7	灰	密	良		
23	9	378	4区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	60	120	102	4.3		褐色	密	不良	微割	
23	10	318	3区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	100	104	80	3.0		灰	密	良		
23	11	180	3区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	100	103	83	3.0		灰	密	良		
23	12	408	3区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	10	104				灰白	密	良	黒山灰産	
23	13	379	1区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	50	148	148	4.5		灰	密	良		
23	14	290	4区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	30	146	144	3.8		青灰	密	良		
23	15	400	3区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	30	144	144	4.5	4.6	青灰	密	良		
23	16	367	1区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	20	142	142	3.8	5.6	褐色	密	良		
23	17	378	4区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	70	136	135	4.1		灰	密	良		
23	18	367	1区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	30	134	134	2.8		赤灰	密	やや不良		
23	19	367	1区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	80	132	128	5.1		灰	密	良		
23	20	367	1区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	80	132	132	4.1	5.5	灰	密	良		
23	21	408	3区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	50	104	100	3.8	5.6	灰	密	良		
23	22	185	3区	大溝	底層	溝敷部	円筒	円筒	30	124	124	2.7	3.3	灰	密	良		
23	23	384	3区	大溝	底層	溝敷部	高坪	高坪	20	156	137			灰	密	良	黒山二溝遺	
23	24	367	4区	大溝	底層	溝敷部	高坪	高坪	14	140	5.4			灰	密	良	溝係3.7m、溝遺、微割	
23	25	367	1区	大溝	底層	溝敷部	高坪	高坪	10	160				灰	密	良	溝係	
23	26	378	4区	大溝	底層	溝敷部	高坪	高坪	10	160	15.8			灰	密	やや不良	溝係、微割	
23	27	364	3区	大溝	底層	溝敷部	高坪	高坪	60	133				灰白	密	良	中々粗部	
23	28	378	4区	大溝	底層	溝敷部	高坪	高坪	20	8.8				灰白	粗	不良		
23	29	328	1区	大溝	底層	溝敷部	高坪	高坪	50	108				10.6	青灰	密	良	黒部総合部係3.7m
23	30	378	4区	大溝	底層	溝敷部	平皿	平皿	10	6.0				2.8	灰	密	良	
23	31	378	4区	大溝	底層	溝敷部	平皿	平皿	20	6.0					灰白	粗	不良	
23	32	253	4区	大溝	底層	溝敷部	フラスコ	フラスコ	30	4.3				4.8	灰	密	良	
23	33	367	1区	大溝	底層	溝敷部	長筒壺	長筒壺	10	9.2					褐色	密	良	
23	34	182	3区	大溝	底層	溝敷部	小笠壺	小笠壺	90	11.8				2.8	灰白	粗	良	
23	35	378	4区	大溝	底層	溝敷部	笠壺	笠壺	40	123	8.8	11.0		6.5	灰	密	良	
23	36	178	3区	大溝	底層	溝敷部	壺	壺	40	11.8					灰	密	不良	灰白
23	37	349	2区	大溝	底層	溝敷部	壺	壺	100	8.8	5.0	4.5			灰	密	良	溝係2.5m
23	38	367	1区	大溝	底層	溝敷部	壺	壺	10	13.8	10.2				灰	密	良	
23	39	178/384	3区	大溝	底層	溝敷部	大笠鉢	大笠鉢	80	182	7.8	18.5	5.8		褐色	密	良	溝係、全蓋赤影(溝係前)
23	40	378	4区	大溝	底層	溝敷部	壺	壺	10	10.0	3.7				灰	粗	不良	溝係、全蓋赤影(溝係前)
23	41	384	3区	大溝	底層	溝敷部	壺	壺	10	10.8	5.3				青灰	密	やや粗	
23	42	386	2区	大溝	底層	土師器	円筒	円筒	90	143	143	4.8			赤褐色	密	良	溝係、全蓋赤影(溝係前)
23	43	404	1区	大溝	底層	土師器	円筒	円筒	10	150	150				赤褐色	密	良	溝係、全蓋赤影(溝係前)
23	44	384	2区	大溝	底層	土師器	円筒	円筒	40	152	138	4.8	4.6		灰白	粗	不良	身割
23	45	571	84	大溝	底層	土師器	碗	碗	80	101	4.0	13.0			灰白	粗	良	
23	46	185	3区	大溝	底層	土師器	碗	碗	10	15.8					灰	粗	良	
23	47	368	4区	大溝	底層	土師器	鉢	鉢	10	15.2					暗赤灰	密	良	
23	48	401	2区	大溝	底層	土師器	鉢口蓋	鉢口蓋	100	8.8	9.9	12.0	4.8	6.0	赤褐色	密	良	
23	49	408	3区	大溝	底層	土師器	壺	壺	10	18.8					灰白	粗	不良	
23	50	400	1区	大溝	底層	土師器	壺	壺	10	18.8					灰白	粗	不良	
23	51	800	A2区	大溝	底層	土師器	壺	壺	10	18.8					灰白	粗	不良	中々粗(砂質)
23	52	381	4区	大溝	底層	土師器	壺	壺	10	18.8					灰白	粗	良	
23	53	378	4区	大溝	底層	土師器	壺	壺	10	18.8					灰白	粗	良	
23	54	382	4区	大溝	底層	土師器	付付壺	付付壺	30	18.8					灰白	粗	良	
23	55	741	1区	大溝	底層	土師器	付付壺	付付壺	10	40.0					灰	密	良	
23	56	378	4区	大溝	底層	土師器	短筒	短筒	10	9.8					褐色	密	良	
23	57	367	1区	大溝	底層	土師器	短筒口	短筒口	10	18.8					赤褐色	粗	良	石見典典多
23	58	253	4区	大溝	底層	土師器	短筒口	短筒口	10	4.7	3.8	1.3			灰白	粗	良	
23	59	280	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	40	147	132	3.8			灰	密	良	
23	60	277	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	30	14.8	102	4.0	5.3		灰白	密	良	
23	61	300	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	30	122	108	3.8			灰	密	やや不良	
23	62	311	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	30	113	9.8				灰	密	良	
23	63	304	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	20	11	9.4	4.0			灰	密	良	
23	64	305	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	60	103	102	4.1			灰	密	良	短筒短筒
23	65	418	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	10	10.0					灰	密	良	短筒短筒
23	66	282	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	20	112					灰	密	良	
23	67	314	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	10	18.0					灰	密	良	
23	68	311	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	10	12.8					赤褐色	密	良	
23	69	315	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	10	18.0					灰白	粗	良	
23	70	287	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	10	24.8					灰	密	良	
23	71	309	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	10	25.0					灰	密	良	
23	72	310	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	10	25.0					灰白	粗	良	
23	73	233	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	30	18.9	18.7	4.1	13.3		灰	密	良	全蓋(主灰白)、黒山灰産
23	74	237	1区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	30	114	11.8	4.8	5.8		灰	密	良	全蓋(主灰白)、黒山灰産
23	75	252	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	20	11.8	9.7	3.4	3.0		灰	密	良	全蓋(主灰白)、黒山灰産
23	76	319	3区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	40	11.0	10.8	4.2			灰	密	良	
23	77	212	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	30	14.3					灰	密	良	全蓋短筒
23	78	238	1区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	40	14.3					灰	密	良	全蓋短筒
23	79	150/174	4区	大溝	V	短筒	短筒	短筒	60	18.6	11.3	15.8	6.5	10.3	灰	密	良	全蓋短筒、全蓋赤影
23	80	208	2区	大溝	V	短筒	土師器	壺	10	14.4	14.2				灰	密	良	
23	81	184	3区	大溝	V	短筒	土師器	壺	30	18	16.0	2.8			褐色	密	良	内蓋短筒、全蓋赤影
23	82	175	2区	大溝	V	短筒	土師器	壺	10	18	21.0				灰白	粗	良	
23	83	209	4区	大溝	V	短筒	土師器	付付壺	10	25.0					灰	密	良	
23	84	256	4区	大溝	V	短筒	土師器	付付壺	10	25.0					灰白	粗	良	
23	85	240	4区	大溝	V	短筒	土師器	付付壺	50	14.8	14.2	2.3			灰	密	良	溝係2.6m、黒山(山)、黒山灰産
23	86	231	4区	大溝	V	短筒	土師器	付付壺	30	10.0	14.2				灰白	密	良	
23	87	241	4区	大溝	V	短筒	土師器	付付壺	30	14.0	13.8	4.0	5.5		灰	密	良	
23	88	231	4区	大溝	V	短筒	土師器	付付壺	30	14	14.0	4.2	6.0		灰白	密	不良	赤影、微割
23	89	218	4区	大溝	V	短筒	土師器	付付壺	30	13.1	13.1	4.2	5.4		褐色	密	良	赤影、微割
23	90	189	3区	大溝	V	短筒	土師器	付付壺	30	12.1								

土器

器名	No.	出土No.	グロブ	遺構	層位	検出	器種	器作 年代	検出 長さ cm	口部 径 cm	器高 cm	器底 径 cm	器口 径 cm	色図	胎土	焼成	備考	
27	91	231	4区	大溝	IV層	土師器	杯身	30	灰	11.2	3.8			にがい黄緑	紺	良	作部口、全面赤彩	
27	92	188	3区	大溝	IV層	灰被陶器	碗	80	灰	16.4	16.0	4.9	6.7	灰白	紺	良	漆器「文々」、二川黒底	
27	93	214	4区	大溝	III層	灰被陶器	碗	100	灰	15.9	15.5	4.7	6.9	青灰	紺小紋	良	漆器「有」、首口黒底	
27	94	114	3区	大溝	III層	灰被陶器	碗	70	灰	15.9	15.5	4.8	7.0	にがい黄緑	紺	良	漆器「有方」、二川黒底	
27	95	166	3区	大溝	III層	灰被陶器	碗	80	灰	14.0	13.7	3.7	6.1	灰白	紺	良	漆器「有方」、首口黒底	
28	96	113	3区	大溝	III層	灰被陶器	碗	30	灰		6.3			褐灰	紺	良	さらさら、白色粒、二川黒底	
28	97	138	3区	大溝	III層	灰被陶器	碗	30	灰		7.0			灰白	紺	良		
28	98	120	7区	大溝	III層	灰被陶器	盥	30	灰		8.0			灰白	中や紺	中や不良		
28	99	228	4区	大溝	IV層	土師器	杯身	80	灰	12.0	3.5	5.0		にがい黄緑	紺	良	表面赤彩(褐色化)	
28	100	135	3区	大溝	III層	土師器	深鉢	30	灰	14.4				灰黄緑	紺	良	埋入品	
28	101	188	3区	大溝	III層	漆器	杯身	30	灰	14.6				灰	紺	良	埋入品	
28	102	140/211	4区	大溝	III層	漆器	解台碗	40	灰	12.4	10.7	4.2	3.0	赤灰	紺	良	灰切リ、埋入品	
28	103	140	3区	大溝	III層	山菜碗	碗	80	灰	15.6	15.8	5.2	7.2	黄灰	紺	良		
28	104	87	3区	大溝	III層	山菜碗	碗	40	灰			6.5		褐灰	紺	良		
28	105	137	1区	大溝	III層	山菜碗	碗	10	灰		16.0			赤灰	紺	良		
28	106	49	8区	大溝	III層	山菜碗	盥	20	灰					灰白	紺	良	漆器「の」跡、灰、西黒底	
28	107	144	4区	大溝	III層	磁器	青磁碗	10	灰		17.0			靑黄緑灰	紺	良		
28	108	161	3区	大溝	III層	漆器	陶口	10	灰				10.0	灰	紺	良	埋入品	
28	109	44	8区	大溝	III層	土師器	内耳皿	10	灰	24.0				にがい黄緑	紺	良		
28	110	142	1区	大溝	IV層	土師器	内耳皿	10	灰	23.8				黄緑	紺	良		
28	111	264	4区	大溝	V層	赤生土器	盥	20	灰	12.0				にがい黄緑	紺	良		
28	112	367	1区	大溝	V層	赤生土器	盥	20	灰	12.0				にがい黄緑	紺	良		
28	113	380	4区	大溝	V層	赤生土器	盥	10	灰	10.0				にがい黄緑	紺	良		
28	114	532	8区	大溝	V層	赤生土器	盥	10	灰					黄緑	紺	良		
28	115	380	1区	大溝	V層	赤生土器	盥	10	灰					灰	紺	良		
28	116	526	8区	大溝	V層	赤生土器	盥	10	灰					灰	紺	良		
28	117	614	4区	大溝	V層	赤生土器	鉢	10	灰	17.4				にがい黄緑	紺	良	菊川式	
28	8	368	1区	大溝	V層	赤生土器	鉢	5	灰	12.8				黄緑	紺	良		
28	9	255	4区	大溝	V層	赤生土器	鉢	10	灰	11.0				黄緑	紺	良		
28	10	317	4区	大溝	V層	赤生土器	鉢	10	灰	20.0				灰	紺	良		
28	11	285	4区	大溝	V層	赤生土器	盥	10	灰			10.2		にがい黄緑	紺	良		
28	12	256	4区	大溝	V層	赤生土器	盥	10	灰					にがい黄緑	紺	良		
28	13	786	北沢(9区)	大溝	IV層	赤生土器	高杯	10	灰	21.8				にがい黄緑	紺	良	外耳杯部	
28	14	732	8区	大溝	V層	赤生土器	高杯	10	灰	24.0				黄緑	紺	良	外耳杯部	
28	15	580	3区	大溝	V層	赤生土器	高杯	10	灰					にがい黄緑	紺	良	外耳杯部	
28	16	748	A3	大溝	V層	赤生土器	高杯	10	灰	24.0				にがい黄緑	紺	良	外耳杯部	
28	17	551	8区	大溝	V層	赤生土器	高杯	10	灰	26.0				にがい黄緑	紺	良	くの字口縁	
28	18	385	1区	大溝	V層	赤生土器	高杯	30	灰			11.8		にがい黄緑	紺	良		
28	19	788	4区	大溝	V層	赤生土器	高杯	10	灰					にがい黄緑	紺	良		
28	20	255	4区	大溝	V層	赤生土器	高杯	10	灰			14.0		にがい黄緑	紺	良		
28	21	742	G4	大溝	V層	赤生土器	高杯	10	灰			12.0		褐灰	紺	良		
28	22	313	4区	大溝	V層	赤生土器	高杯	30	灰			11.0		黄緑	紺	良		
28	23	610	北沢	大溝	V層	赤生土器	盥	10	灰	13.8				にがい黄緑	紺	良	外耳杯部	
28	24	610	北沢	大溝	V層	赤生土器	盥	10	灰	11.8				にがい黄緑	紺	良		
28	25	861	北沢	大溝	V層	赤生土器	盥	10	灰					にがい黄緑	紺	良		
28	26	814	北沢(9区)	大溝	V層	赤生土器	盥	10	灰					にがい黄緑	紺	良		
28	27	788	北沢	大溝	V層	赤生土器	盥	10	灰	22.4				にがい黄緑	中や紺	中や不良		
28	28	261	4区	大溝	V層	赤生土器	盥	20	灰	10.2	5.3			にがい黄緑	紺	良		
28	29	804	北沢	大溝	V層	赤生土器	盥	10	灰		10.4			にがい黄緑	紺	良	台部	
28	30	781	北沢	大溝	V層	赤生土器	盥	30	灰	24.0				黄緑	紺	良	外耳杯部	
28	31	609	北沢	大溝	V層	赤生土器	盥	10	灰					にがい黄緑	紺	良	外耳杯部	
28	32	814	北沢(9区)	大溝	V層	赤生土器	高杯	10	灰					にがい黄緑	紺	良	外耳杯部	
28	33	813	北沢(9区)	大溝	V層	赤生土器	高杯	10	灰	25.0				黄緑	紺	良	くの字口縁	
28	34	805	北沢	大溝	V層	赤生土器	高杯	10	灰	24.0				にがい黄緑	紺	良	くの字口縁	
28	35	609	北沢	大溝	V層	赤生土器	高杯	10	灰					にがい黄緑	紺	良		
28	36	788	北沢	大溝	V層	赤生土器	高杯	10	灰			14.2		にがい黄緑	紺	良		
28	37	819	北沢	大溝	V層	赤生土器	平口鉢	20	灰	6.8		5.0		黄緑	紺	良		
28	38	786	北沢(9区)	大溝	V層	赤生土器	盥	60	灰	26.2	16.0	32.9	6.1	6.2	赤灰	紺	良	片羽多、チャート角縁
28	39	809	北沢(9区)	大溝	V層	赤生土器	盥	30	灰	14.0				中や紺	中や不良			
28	40	788	北沢(9区)	大溝	V層	赤生土器	盥口盥	30	灰	13.8	6.8	17.5	4.4	5.4	黄緑	紺	良	赤彩、文々
41	389	4区	大溝	Ⅴ層	赤生土器	盥口盥	10	灰	12.0					8	黄緑	紺	良	
42	78	A2	大溝	Ⅴ層	赤生土器	鉢	10	灰	16.0						赤灰	紺	良	小形丸鉢
42	722	8区	大溝	Ⅴ層	赤生土器	鉢	10	灰	21.0						にがい黄緑	紺	良	
42	788	北沢(9区)	大溝	Ⅴ層	赤生土器	盥	10	灰							にがい黄緑	紺	良	
43	28	北沢(A2)	大溝	Ⅴ層	赤生土器	盥	10	灰	15.8						赤灰	紺	良	小型受口
43	48	810	北沢	大溝	Ⅴ層	赤生土器	盥	10	灰	12.8				黄緑	紺	良	小型	
47	804	北沢	大溝	Ⅴ層	赤生土器	盥	10	灰	12.4						にがい黄緑	紺	良	
48	788	北沢	大溝	Ⅴ層	赤生土器	盥	10	灰							にがい黄緑	紺	良	
48	300	3区	大溝	Ⅴ層	赤生土器	盥	10	灰	12.6						黄緑	紺	良	小型
50	820	北沢(A3)	大溝	Ⅴ層	赤生土器	不明	10	灰							灰黄緑	紺	良	赤彩、把手
51	40	北沢(A2)	大溝	Ⅴ層	赤生土器	盥	5	灰	21.8						にがい黄緑	中や紺	中や不良	
51	60	北沢(A2)	大溝	Ⅴ層	赤生土器	高杯	20	灰	15.7						にがい黄緑	中や紺	中や不良	
31	2	690	南沢	5020	赤生土器	盥	10	灰							にがい黄緑	紺	良	在地産、菊川式
31	2	690	南沢	5020	赤生土器	高杯	10	灰	26.0						にがい黄緑	紺	良	外耳杯部
31	2	690	南沢	5020	赤生土器	高杯	10	灰	26.0						にがい黄緑	紺	良	外耳杯部
31	4	690	南沢	5020	赤生土器	盥	10	灰	18.0						にがい黄緑	中や紺	中や不良	
31	5	718	南沢	5021	赤生土器	高杯	10	灰			14.4				にがい黄緑	紺	良	チャート多、在地産
31	8	468	南沢	5022	赤生土器	片羽鉢	80	灰	17.8						にがい黄緑	紺	良	外耳杯部
31	7	728	南沢	5023	赤生土器	高杯	10	灰	26.0						にがい黄緑	中や中や不良	中や不良	
31	8	728	南沢	5023	赤生土器	盥	10	灰							にがい黄緑	紺	良	
31	9	728	南沢	5023	赤生土器	盥	10	灰							にがい黄緑	紺	良	
31	10	728	南沢	5023	赤生土器	盥	10	灰							にがい黄緑	紺	良	
31	11	721	南沢	5024	赤生土器	盥	10	灰	15.2						にがい黄緑	紺	良	
31	12	725	南沢	5024	赤生土器	盥	10	灰							にがい黄緑	紺	良	
31	13	725	南沢	5024	赤生土器	盥	10	灰							にがい黄緑	紺	良	
31	14	725	南沢	5024	赤生土器	盥	10	灰	8.8		5.8				灰黄緑	中や紺	中や不良	赤生土器、埋入品
31	15	725	南沢	5024	赤生土器	盥	10	灰							灰	紺	良	
31	16	721	南沢	5024	赤生土器	盥	10	灰			10.8				にがい黄緑	紺	良	台部
31	17	729	南沢	5K31	赤生土器	盥	10	灰	8.1						にがい黄緑	紺	良	
31	18	729	南沢	5K31	赤生土器	盥	10	灰							にがい黄緑	紺	良	

土器

器名 No.	出土No.	グロブ	遺構	層位	種類	器形 No.	器 高 cm	口 径 cm	口 縁 厚 cm	底 径 cm	色 調	胎土	焼成	備考			
31	18	739	南区	SK31	粘土土器	甕	10				にがみ	黒	良				
31	20	739	南区	SK31	粘土土器	甕	10				にがみ	黒	良				
31	21	729	南区	SK31	粘土土器	甕	10	反			にがみ	黒	良	全部			
31	22	722	南区	SK24	粘土土器	甕	10				黒	黒	中や不良				
31	23	722	南区	SK24	粘土土器	高坪	30	反	24.0		褐色	黒	良	赤土中調、凹線系			
31	24	723	南区	SK26	粘土土器	甕	10	反	22.0		にがみ	黒	良				
31	25	723	南区	SK26	粘土土器	甕	10	反			にがみ	中や	良	全部接合部厚4.5cm			
31	26	724	南区	SK29	粘土土器	甕	39	反			にがみ	中や	良				
31	27	724	南区	SK29	粘土土器	甕	10				にがみ	黒	良	粘土中調、在地産			
31	28	724	南区	SK29	粘土土器	自然状土製品	10	反			にがみ	黒	良				
31	29	683	南区	SP23	粘土土器	鉢	10				にがみ	黒	良				
31	30	683	南区	SP23	粘土土器	甕	10	反			にがみ	黒	良	石炭夾結			
31	31	683	南区	SP23	粘土土器	高坪	10	反			にがみ	黒	良				
31	32	686	南区	SP46	粘土土器	甕	10	反			赤褐色	黒	良				
31	33	711	南区	SP53	粘土土器	甕	10	反			灰黄褐色	黒	良				
31	34	622	南区	SP73	粘土土器	鉢	10	反	14.0		にがみ	黒	中や不良				
31	35	488	南区(旧)		ひ懸土器	甕	10	反	13.0	9.7	灰褐色	黒	良				
31	36	487	南区(旧)		ひ懸土器	甕	10	反	14.0	8.7	にがみ	黒	良				
31	37	484	南区	南土層	粘土土器	鉢	10	反	11.0	8.7	にがみ	黒	中や不良				
31	38	457	南区		粘土土器						褐色	黒					
31	39	78	南区(旧)	表土直下	粘土土器	手づくね鉢	70		3.2	4.0	4.5	にがみ	黒	良			
32	40	829	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	100	23.0	12.6	23.5	7.0	灰黄褐色	黒	良			
32	41	835	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	30	反	12.8	9.8		褐色	黒	良	横溝線算子、算子2×1方向		
32	42	830	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	30	反	12.3	8.0		褐色	黒	良			
32	43	832	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	10	反	12.8	7.8		灰黄褐色	黒	良			
32	44	824	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	30	反	12.6	8.5		にがみ	黒	良			
32	45	825-826	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	10	反	16.0	9.8		灰黄褐色	黒	良			
32	46	824	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	10	反	10.2	5.8		褐色	黒	良			
32	47	826	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	20	反		10.0		灰黄褐色	黒	良			
32	48	871	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	30	反			13.1	にがみ	黒	良			
32	49	825	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	10					にがみ	黒	良			
32	50	823-825	南区(旧)	SO26	粘土土器	鉢	30	反		8.1		にがみ	黒	良			
32	51	838-839	南区(旧)	SO26	粘土土器	鉢	40	反	31	15.8		にがみ	黒	良			
32	52	827-828	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	60	25		9.0		にがみ	黒	良	全部接合部厚4.3cm、チャート多		
32	53	823-824	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	60	24.8	23.8	8.7		にがみ	黒	良	全部接合部厚4.6cm		
32	54	874	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	60			13.2		にがみ	黒	良			
32	55	824	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	30	反		7.8		褐色	黒	良	全部接合部厚4.5cm		
32	56	823	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	30	反		8.4		灰黄褐色	黒	良	全部接合部厚4.5cm		
32	57	821-826	南区(旧)	SO26	粘土土器	高坪	70		27.0	17.0		にがみ	黒	良	全部接合部厚5.6cm		
32	58	827	南区(旧)	SO26	粘土土器	高坪	50	28.0	25.0			にがみ	黒	良	全部接合部厚5.6cm		
32	59	823-825	南区(旧)	SO26	粘土土器	高坪	40	反	25.8			灰黄褐色	黒	良			
32	60	824	南区(旧)	SO26	粘土土器	高坪	30	反	20.0	29.8		褐色	黒	良			
32	61	825	南区(旧)	SO26	粘土土器	高坪	30	反			16.0	にがみ	黒	良	全部接合部厚4.7cm		
32	62	823	南区(旧)	SO26	粘土土器	高坪	30	反			16.0	にがみ	黒	良			
32	63	826	南区(旧)	SO26	粘土土器	高坪	10	反			17.0	灰黄褐色	黒	良			
32	64	824	南区(旧)	SO26	粘土土器	高坪	40	反				にがみ	黒	良			
32	65	873	南区(旧)	SO26	粘土土器	高坪	30	反			12.4	にがみ	黒	良			
32	66	227	南区(旧)	SO26	粘土土器	鉢	50					にがみ	黒	良			
32	67	872	南区(旧)	SO26	粘土土器	鉢	80	15.0	14.4	10.8	5.0	13.8	にがみ	黒	良		
32	68	826-827	南区(旧)	SO26	粘土土器	鉢	80	13.2	12.0	10.7	5.0	8.7	黄褐色	中や不良	横溝線		
32	69	840	南区(旧)	SO26	粘土土器	手づくね鉢	160	8	5.7	4.4		にがみ	黒	中や不良	赤土		
32	70	840	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	10					にがみ	黒	中や不良			
32	71	845	南区(旧)	SO26	粘土土器	甕	30	反			13.3	灰黄褐色	中や	中や不良	全部接合部厚7.0cm		
32	72	854	南区(旧)	SO33	粘土土器	高坪	30	反			14.0	にがみ	黒	中や不良	全部接合部厚4.6cm		
32	73	856	南区(旧)	SO32	粘土土器	甕	10	反			8.0	にがみ	黒	中や不良			
32	74	856	南区(旧)	SO32	粘土土器	甕	10	反			11.0	にがみ	黒	良	全部		
32	75	828	南区(旧)	SO26	粘土土器	高坪	20	反				にがみ	黒	良			
34	76	440	南区	SO2	須恵土器	片身	30	反	14.0	11.5		灰白	黒				
34	77	440	南区	SO2	土師器	甕	10	反				にがみ	黒	中や不良	把手		
34	78	438	南区	SO3	土師器	甕	10	反			16.0	にがみ	黒	中や不良			
34	79	437	南区	SO4	須恵土器	片身	40	反	13.8			灰白	黒				
34	80	437	南区	SO4	土師器	台付甕	30	反	30.0	27.7		にがみ	中や	中や不良			
34	81	437	南区	SO4	土師器	輪の口	10	反				褐色	中や	中や不良			
34	82	444	南区	SO6	土師器	甕	10	反	20.0		16.8	にがみ	黒	良			
34	83	445	南区	SO8	土師器	甕	10	反	18.0		16.1	にがみ	中や	中や不良			
34	84	447	南区	SO8	土師器	台付甕	10	反	26.3	22.0		にがみ	黒	良			
34	85	443	南区	SO9	土師器	台付甕	10	反	26.3	22.0		にがみ	黒	中や不良			
34	86	443	南区	SO9	土師器	甕	10	反	17.0		13.2	にがみ	中や	中や不良			
34	87	443	南区	SO9	土師器	台付甕	20	反				にがみ	中や	中や不良	全部接合部厚7.4cm		
34	88	446	南区	SO9	土師器	手づくね鉢	30	反	3.8	4.8	2.7	にがみ	黄褐色	黒	良		
34	89	441	南区	SO10	須恵土器	フタス入鉢	20	反	10.0	9.0		灰	黒	良	自然釉産物		
34	90	680	南区	SO11	須恵土器	甕	10	反	20.0			にがみ	黒	良			
34	91	434	南区	SK1	須恵土器	片身	20	反	11.0	8.4		灰	黒	良			
34	92	670	南区	SK16	土師器	甕	20	反				にがみ	黒	良			
34	93	703	南区	SO18	須恵土器	甕	10	反	11.0	10.8		灰	黒	良			
34	94	679	南区	SP19	須恵土器	片身	30	反	11.0	9.2		灰白	黒	良			
34	95	720	南区	SK20	土師器	甕	10	反	17.0		13.4	褐色	黒	良			
34	96	701	南区	SP51	土師器	甕	10	反	25.0			灰褐色	黒	良			
34	97	427	南区(旧)		土師器	甕	80		25.2	28.3	8.3	灰黄褐色	黒	良	在地産		
34	98	73	南区(旧)	古代土	土師器	片身	20	反	11.4	11.0	4.0	灰	黒	良			
34	99	847	南区(旧)	古代土	須恵土器	片身	20	反	11.0	9.3		灰	黒	良			
34	100	847	南区(旧)	古代土	須恵土器	フタス入鉢	20	反	14.0			灰	黒	良			
34	101	858	南区(旧)	古代土	須恵土器	甕	20	反	10.8		8.4	灰	中や	中や不良			
34	102	859	南区(旧)	古代土	須恵土器	甕	20	反	10.0			灰	中や	中や不良			
34	103	841	南区(旧)	古代土	須恵土器	甕	20	反	8.4	7.3		灰白	黒	良			
34	104	429	南区	古代土	須恵土器	鉢	10	反	16.0			灰黄	黒	良			
34	105	847	南区(旧)	古代土	須恵土器	甕	10	反	16.0			灰	黒	良			
34	106	429	南区	古代土	須恵土器	甕	20	反	25.0		21.0	にがみ	中や	中や不良			
34	107	838	南区(旧)	古代土	土師器	甕	10	反	18.0			にがみ	中や	中や不良			
34	108	859	南区(旧)	粘土土層	須恵土器	甕	20	反		9.0		中や	中や不良	横溝線算子、横溝			
35	1	5217	SA	ひ懸土器	粘土土器	甕	10	反	12.5		6.8		灰赤	黒	良		

土器

器名 No.	出土No.	グリップ	遺構	層位	種類	器形 No.	器体 高さ cm	口部 径 cm	口部 厚み cm	底面 径 cm	底面 厚み cm	色別	胎土	焼成	備考							
35	2	742	C4		D層下部	弥生土器	壺	40	反	10.8	8.3	26.8	1.4	5.1	褐色	附	良	在地産				
35	3	506/514	B4		D層下部	弥生土器	壺	30	反	14.6	15.3			8.9	黒褐色	附	良	在地産				
35	4	471/477	B4		D層上部	弥生土器	壺	30	反	14.3	8.4			黄灰	附	良						
35	5	624	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	29	13.0			4.3	灰黄	附	良					
35	6	451	南段(G3)		D層下部	弥生土器	壺	30	反	15.6	5.5				黒褐色	附	良					
35	7	519	B4		D層下部	弥生土器	壺	60	282	14.7	36.8	6.8			褐色	附	良					
35	8	723	B3		D層	弥生土器	壺	10	反	10.4	8.6			6.6	明褐色	附	良					
35	9	381	4区	大溝	V層	弥生土器	壺	30	反	12.7	7.0				にがい焼	附	良					
35	10	586	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	12.2	6.6				灰黄	附	良					
35	11	583	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	14.4	6.1				暗褐色	附	良	在地産				
35	12	588	B4		D層下部	弥生土器	壺	30	反	16.0	6.8				にがい焼	附	良	角石・黄粉含、三河産				
35	13	481	B4		D層上部	弥生土器	壺	10	反	16.6	8.7				灰黄	附	良					
35	14	512	B4		D層下部	弥生土器	壺	30	反	15.8	8				灰白	附	良					
35	15	581	B4		D層下部	弥生土器	壺	30	反	13.0	8.2				灰黄	附	良					
35	16	472/479	B4		D層上部	弥生土器	壺	10	反	16.4	11.2				にがい焼	附	良					
35	17	763	B4		D層下部	弥生土器	壺	20	反	16.8					黒褐色	中・細	良					
35	18	762/765	B4		D層下部	弥生土器	壺	30	反	16.0					褐色	細	やや不良					
35	19	388	1区		D層	弥生土器	壺	10	反	14.2	8.2				にがい焼	附	良					
35	20	536	B4		壺	弥生土器	壺	5	反	11.5	8.8				灰黄	附	やや不良					
35	21	538	B4		D層下部	弥生土器	壺	30	反	11.5	7.2				にがい焼	附	良					
35	22	721	B3		D層下部	弥生土器	壺	10	反	10.0					褐色	附	良					
35	23	505	B4		D層下部	弥生土器	壺	30	反	8.7	4.3				灰黄	附	良					
35	24	477	B4		D層下部	弥生土器	壺	30	反	5.9	5.2				灰黄	附	良					
35	25	540	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	6.2	5.2				黄灰	附	良	在地産				
35	26	580	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	13.3	6.3				灰	附	良					
35	27	366	1区	大溝	V層	弥生土器	壺	30	反	10.4	6.3				にがい焼	中・細	やや不良					
35	28	267	4区	大溝	V層	弥生土器	壺	30	反	10.1	5.3				褐色	附	良					
35	29	417	B4		D層上部	弥生土器	壺	5	反	10.0	7.1				にがい焼	附	良					
35	30	475	B4		D層上部	弥生土器	壺	20	反	7.8	4.0				灰黄	附	良					
35	31	758	B4		D層下部	弥生土器	壺	30	反	7.8	4.8				灰黄	中・細	やや不良					
35	32	539	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	7.8	4.2				褐色	附	良	在地産				
35	33	413	B3		土層	弥生土器	壺	10	反	7.2					にがい焼	附	良	石黄・黄粉含、夜崎・東三河産				
35	34	485	B4		壺	弥生土器	壺	20	反	21.0	12.8				灰黄	附	良	黒色、チャート・石黄灰、在地産				
35	35	541/545	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	13.1	8.1				褐色	附	良	在地産、二次復焼している				
35	36	529/546	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	14.8	10.2				褐色	附	良					
35	37	645	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	15.3	5.8						中・細	良				
35	38	646	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	13.4	8.0				黄灰	附	良					
35	39	765	B4		D層下部	弥生土器	壺	20	反	11.0	7.4				灰黄	中・細	良					
35	40	787	B4		D層下部	弥生土器	壺	20	反	10.4	7.2				褐色	中・細	良					
35	41	614	B3		壺	弥生土器	壺	10	反	10.0					にがい焼	附	良					
35	42	763	B4		D層下部	弥生土器	壺	20	反	10.0	7.4				褐色	中・細	良					
35	43	797	B2		D層上部	弥生土器	壺	40	反	21.5	12.0				にがい黄褐色	附	不良					
35	44	518	B4		D層下部	弥生土器	壺	40	反	12.0	6.9				4.1	褐色	附	良	埴輪・甕・小鉢、在地産			
35	45	759	B4		D層上部	弥生土器	壺	20	反	7.4	4.6						中・細	良				
35	46	554	B4		D層下部	弥生土器	壺	20	反	5.3	4.3				黄灰	附	良	在地産				
35	47	467	B5		D層上部	弥生土器	壺	20	反	7.0					黒褐色	中・細	良					
35	48	586	B4		壺	弥生土器	壺	30	反	6.8					にがい焼	中・細	良					
35	49	585	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	6.2	3.8				3.8	にがい焼	中・細	良				
35	50	279	4区	大溝	V層	弥生土器	壺	20	反	7.2						にがい焼	細	良				
35	51	535	B4		D層下部	弥生土器	壺	90						3.7	2.6	褐色	中・細	良				
35	52	482	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	4.2					2.8	黄灰	附	良				
35	53	500/503	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	6.5	4.3					褐色	附	良	チャート、埴輪群、在地産			
35	54	380	1区	大溝	弥生土器	壺	30	反	10.4							褐色	中・細	良				
35	55	415	4区	大溝	V層	弥生土器	壺	30	反	6.2					2.8	褐色	附	良				
35	56	791	B2		D層上部	弥生土器	壺	30	反	8.0	5.4					灰黄	附	良				
35	57	590	B4		D層下部	弥生土器	壺	20	反	8.8	4.5					3.4	灰黄	附	良	在地産		
35	58	746	A3		D層	弥生土器	壺	10	反	15.0						10.0	にがい焼	附	良			
35	59	390	1区	大溝	V層	弥生土器	壺	10	反	21.0							にがい焼	附	良			
35	60	523/526	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	25.2							褐色	附	良	在地産		
35	61	644	B4		D層下部	弥生土器	壺	30	反	16.5	8.8						褐色	附	良			
35	62	484/585	B4		D層上部	弥生土器	壺	10	反	20.0	11.4						11.4	灰黄	附	良		
35	63	484	B4		D層上部	弥生土器	壺	10	反	14.8	6.0						6.0	褐色	附	良		
35	64	451	B3		D層	弥生土器	壺	10	反	10.3	4.9						4.9	附	良			
35	65	481	B4		D層下部	弥生土器	壺	20	反	10.2							褐色	附	良			
35	66	629	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	6.4	3.8						6.4	附	良			
35	67	523	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	7.2	4.0						にがい黄褐色	附	良			
35	68	1区	北段(G3)		D層下部	弥生土器	壺	10	反	5.8							にがい黄褐色	中・細	やや良			
35	69	804	北段(G3)		壺	弥生土器	壺	20	反	6.0							褐色	附	良			
35	70	501	B4		D層下部	弥生土器	壺	30	反	11.8	5.2						褐色	附	良	在地産		
35	71	514	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反	12.8							にがい焼	附	良			
35	72	476	A4		D層上部	弥生土器	壺	10	反	27.2	16.0						灰黄	附	良	チャート・石黄灰、三河産		
35	73	475	B4		D層上部	弥生土器	壺	10	反	26.4							灰	中・細	良			
35	74	535/538	1-4区	大溝	弥生土器	壺	30	反	27.4								27.4	中・細	良			
35	75	717	北段(G3)		D層下部	弥生土器	壺	20	反	22.0								にがい焼	中・細	やや不良		
35	76	746	A3		D層下部	弥生土器	壺	10	反	24.2								褐色	附	良	三河産、花崗岩質	
35	77	585	B4		D層下部	弥生土器	壺	10	反									にがい焼	附	良		
35	78	746	A3		D層	弥生土器	壺	10	反									明赤褐色	附	良		
35	79	484	B4		D層下部	弥生土器	壺	30	反	7.8	3.5							褐色	附	良		
35	80	558	B4		壺	弥生土器	壺	10	反									にがい焼	附	良		
35	81	580	B4		壺	弥生土器	壺	10	反	13.0								灰黄	附	良		
35	82	268	4区	大溝	V層	弥生土器	壺	10	反	10.4								にがい焼	中・細	良	埴輪群含、花崗岩中心	
35	83	747	C4		D層下部	弥生土器	壺	40	反						4.8		褐色	附	良	埴輪群使用、黄灰・埴輪群含、東三河産		
35	84	742	C4		D層	弥生土器	壺	40	反	18.4					8.0		褐色	附	良			
35	85	479	B4		D層	弥生土器	壺	40	反	13.3							にがい焼	附	良			
35	86	489	B4		D層下部	弥生土器	壺	20	反	20.0								褐色	附	良	在地産	
35	87	732	北段(G3)		壺	弥生土器	壺	20	反									黄灰	附	良		
35	88	473	B4		D層上部	弥生土器	壺	10	反								5.8	灰黄	附	良		
35	89	529	B4		D層下部	弥生土器	壺	30	反								10.0	灰黄	附	良		
35	90	267/268	4区	大溝	V層	弥生土器	壺	10	反									灰	附	良		
35	91	721	B3		D層下部	弥生土器	壺	10	反									15.2	灰黄	附	良	

土器

器名	No.	出土No.	グロブ	遺構	層位	種類	器種	器高 cm	口径 cm	口縁 高 cm	器底 厚 cm	器底 径 cm	色 澤	胎 土	焼 成	備考	
38	92	593	04			弥生土器	甕	30	底				灰黒	粗	良		
38	92	786	04			弥生土器	甕	10	底	53.8			灰黒	粗	良		
38	94	604	04			弥生土器	甕	10	底				灰黒	粗	良		
38	95	583	04			弥生土器	甕	30	底	17.0			焼灰	粗	良		
38	96	568	04			弥生土器	甕	20	底			6.0	濃青	粗	良		
38	97	474	04			弥生土器	甕	10	底				灰黒	粗	良		
38	98	511	04			弥生土器	甕	20	底			7.2	灰黒	粗	良		
38	99	787	04			弥生土器	甕	20	底			6.0	黒	中・粗	良		
38	100	763	04			弥生土器	甕	20	底			4.7	焼灰	粗	良		
38	101	540	04			弥生土器	甕	10	底			7.0	にぶい黄緑	粗	良		
38	102	769	04			弥生土器	甕	20	底			7.6	黒	中・粗	良		
39	102	541	04			弥生土器	甕	20	底				黒	粗	不良		
39	104	253	4区	大溝	成層	弥生土器	甕	10					灰黄緑	粗	良		
39	105	406	3区	大溝	成層	弥生土器	甕	10					にぶい黄緑	粗	良		
39	107	295	4区	大溝	V層	弥生土器	甕	10					にぶい緑	粗	良		
39	108	523	04			弥生土器	甕	10					にぶい緑	粗	良		
39	109	763	04			弥生土器	甕	10					にぶい黄緑	粗	良		
39	110	185	3区	大溝	成層	弥生土器	甕	10					青	粗	良		
39	111	—	—			弥生土器	甕	10					焼灰	粗	良		
39	112	640	04			弥生土器	甕	10					黒	粗	良		
39	113	362	4区	大溝	成層	弥生土器	甕	10					灰黄緑	粗	良		
39	114	640	04			弥生土器	甕	10					灰黄緑	粗	良		
39	115	789	04			弥生土器	甕	10					焼	粗	良		
39	116	574	04			弥生土器	甕	10					にぶい緑	粗	良		
39	117	779	04			弥生土器	甕	10					灰黒	中・粗	良		
39	118	616-626	A4-04			弥生土器	甕	10					灰黒	粗	良		
39	119	394	4区	大溝	成層	弥生土器	甕	10					焼灰	粗	良		
39	120	780	04			弥生土器	甕	10					灰黒	粗	良		
39	121	479	04			弥生土器	甕	10					にぶい黄緑	粗	良		
39	122	339	4区	大溝	成層	弥生土器	甕	10					灰黒	中・粗	良		
39	123	339	4区	大溝	成層	弥生土器	甕	10					灰黄緑	粗	良		
39	124	629	04			弥生土器	甕	10					灰黒	粗	良		
39	125	480	04			弥生土器	甕	10					灰黄緑	粗	良		
39	126	479	04			弥生土器	甕	10					にぶい緑	粗	良		
39	127	557	04			弥生土器	甕	10					焼	粗	良		
39	128	645	04			弥生土器	甕	10					焼灰	粗	良		
39	129	542	04			弥生土器	甕	10					灰黄緑	粗	良		
39	130	585	04			弥生土器	甕	10					灰黒	粗	良		
39	131	—	—			弥生土器	甕	10					灰黒	粗	良		
39	132	564	04			弥生土器	甕	10					黒	粗	良		
39	133	—	—			弥生土器	甕	10					焼灰	粗	良		
39	134	483	04			弥生土器	甕	10					灰黄緑	粗	良		
39	135	517	04			弥生土器	甕	10					灰黄緑	粗	良		
39	136	786	04			弥生土器	甕	10					オリーブ黒	粗	良		
40	137	565	04			弥生土器	甕	10					灰黄緑	粗	良	底部残、輸入品、継ぎ目多量	
40	138	786	04			弥生土器	甕	30	底	36.0			焼灰	中・粗	良		
40	139	767	04			弥生土器	甕	30	底	36.7			にぶい黄緑	粗	良		
40	140	472	04			弥生土器	甕	10	底	41.4	41.4	35	灰黒	粗	良		
40	141	625	04			弥生土器	甕	20	底	28.0			灰黒	粗	良		
40	142	543-546	04			弥生土器	甕	10	底	38.0			灰黄緑	中・粗	良		
40	142	523	04			弥生土器	甕	10	底	38.0			灰黄緑	粗	良		
40	144	630	04			弥生土器	甕	20	底	32.8		26.3	灰黒	粗	良		
40	145	—	—			弥生土器	甕	10	底	34.0			不明	不明	不明	チャート・石灰、在地産	
40	146	815	近郊(13)			弥生土器	甕	30	底	25.8	29.2	21.5	7.4	焼灰	粗	良	
40	147	742	C4			弥生土器	甕	20	底	22.1			灰黒	粗	良		
40	148	743	北沢(102)			弥生土器	甕	20	底	18.0	18.2		灰	粗	良		
41	149	780	04			弥生土器	甕	20	底	18.0			にぶい黄緑	粗	良		
41	150	642	04			弥生土器	甕	30	底	31.0			にぶい緑	粗	良		
41	151	534	04			弥生土器	甕	30	底	32.0			灰黒	粗	良		
41	152	541	04			弥生土器	甕	20	底	28.0		25.8	焼灰	粗	良	継ぎ目多、在地産?	
41	153	622	04			弥生土器	甕	20	底	30.0	30.0		灰	粗	良		
41	154	574	04			弥生土器	甕	10	底	34.4			灰黄緑	中・粗	良		
41	155	676	A4			弥生土器	甕	20	底	28.0			にぶい緑	粗	良	在地産	
41	156	758	04			弥生土器	甕	20	底	30.0			にぶい緑	粗	中・不良		
41	157	139	2区	大溝	成層	弥生土器	甕	30	底	25.0	24.0	22.4	にぶい緑	粗	良	石灰・黄緑・チャート含	
41	158	570-576	04			弥生土器	甕	30	底	32.4		26.7	焼灰	粗	良		
41	159	597	04			弥生土器	甕	30	底	43.0	43.0	41.8	にぶい緑	粗	良		
42	160	536	04			甕	甕	20	底	28.0	26.0	23.2	灰黒	粗	良		
42	161	589	04			弥生土器	甕	30	底	25.4		22.9	灰黒	粗	良		
42	162	746	C4			弥生土器	甕	20	底	39.0			灰黄緑	中・粗	良		
42	163	480	04			弥生土器	甕	10	底	24.0		27.4	灰黒	粗	良		
42	164	539	04			弥生土器	甕	10	底	20.0		17.7	焼灰	粗	良		
42	165	564	04			弥生土器	甕	10	底	21.0	20.0		灰黒	粗	良		
42	166	523	04			弥生土器	甕	20	底	30.0		15.4	灰黄緑	粗	良		
42	167	801	82			弥生土器	甕	20	底	18.0			灰	粗	不良		
42	168	503	04			弥生土器	甕	40	底	22.2	21.2	19.3	にぶい黄緑	粗	良	三河型ナ子器	
42	169	530	04			弥生土器	甕	30	底	27.4		18.4	焼灰	粗	良	三河型ナ子器	
42	170	482	04			弥生土器	甕	20	底	21.0	20.0		灰黄緑	粗	良		
42	171	556	04			弥生土器	甕	20	底	14.4		12.8	灰黄緑	中・粗	良		
42	172	278	4区	大溝	V層	弥生土器	甕	30	底	16.0			灰黄緑	粗	良		
42	173	467	05			弥生土器	甕	20	底	13.4			にぶい緑	粗	不良		
42	174	819	A3			弥生土器	甕	20	底			7.0	灰黒	中・粗	良	平産	
42	175	742	C4			弥生土器	甕	20	底				にぶい黄緑	中・粗	良	平産	
42	176	646	04			弥生土器	甕	10	底			8.4	灰黄	粗	平産		
42	177	769	04			弥生土器	甕	20	底			9.0	灰黄緑	粗	平産		
42	178	758	04			弥生土器	甕	20	底			7.0	焼灰	粗	不良		
42	179	63	C4			弥生土器	台付甕	30	底			8.8	灰黄緑	粗	良	台部接合部厚5.2mm	
42	180	543	04			弥生土器	台付甕	10	底			12.2	濃青	粗	良	台部接合部厚5.2mm、三河型台付甕、在地産	
42	181	280	4区	大溝	V層	弥生土器	台付甕	10	底			8.8	焼灰	粗	良	台部接合部厚5.4mm	

土器

器名 No.	数量	グッド	通称	部位	種類	部数	製作 年代	器体 長さ cm	口部 径 cm	器体 厚み cm	器体 高さ cm	色澤	胎土	構成	備考	
42	142	416	A4	口部上縁	粘土土器	台付蓋	20	反			8.5	濃褐色	密	不良	右部破合部厚5.4cm	
42	143	450	C3	口部	粘土土器	台付蓋	5	反			9.7	褐色	密	良	右部破合部厚4.5cm	
42	144	518-519	B4	口部下部	粘土土器	台付蓋	80	22.8	20.9		18.7	黒褐色	密	良		
42	145	561-564	B4	口部下部	粘土土器	台付蓋	40	反	11.4	14.8		にぶい褐色	密	良	チャート主、黄褐色少し	
42	146	482	B4	口部上縁	粘土土器	蓋	20	反	22.8		18.5	赤褐色	密	良		
42	147	339	4区	底面	粘土土器	蓋	20	反	22.8		18.4	濃褐色	密	良		
42	148	577	B4	底面	粘土土器	蓋	20	反	20.0			にぶい褐色	中や粗	良	口部へう割目、凹線文系可算	
42	149	614	B3	底面	粘土土器	蓋	10	反	17.8			灰褐色	密	良		
42	150	543	B4	口部下部	粘土土器	蓋	10	反	15.2			黒褐色	密	良		
42	151	502	B4	口部下部	粘土土器	台付蓋	10	反			9.2	灰褐色	きわめて粗	良	右部破合部厚3.0cm	
42	152	480	B4	口部上縁	粘土土器	台付蓋	10	反			10.3	濃褐色	密	良	右部破合部厚5.8cm	
42	153	一紙		口部下部	粘土土器	台付蓋	10	反			8.6	にぶい黄褐色	密	良	左部破	
42	154	527	B4	口部下部	粘土土器	台付蓋	10	反			10.5	にぶい黄褐色	密	良	右部破合部厚5.9cm	
42	155	354	4区	底面	粘土土器	台付蓋	10	反			8.8	濃褐色	密	良	右部破合部厚5.6cm	
42	156	546	B4	口部下部	粘土土器	台付蓋	10	反			8.4	濃褐色	中や粗	中や粗	右部破合部厚4.9cm	
42	157	651	B4	口部下部	粘土土器	台付蓋	10	反			10.2	濃褐色	密	良	右部破合部厚4.8cm	
42	158	768	B4	口部下部	粘土土器	台付蓋	10	反			11.0	灰褐色	密	良	右部破合部厚5.4cm	
42	159	544	B4	口部下部	粘土土器	台付蓋	10	反			7.4	灰褐色	密	良	右部破合部厚3.2cm	
42	160	520	B4	口部下部	粘土土器	台付蓋	10	反			8.8	濃褐色	密	良	右部破合部厚5.2cm	
42	161	761	B5	口部下部	粘土土器	台付蓋	10	反			8.0	にぶい黄褐色	密	良	右部破合部厚4.7cm	
42	162	508	B4	口部下部	粘土土器	台付蓋	10	反			8.0	明褐色	密	良	右部破合部厚4.6cm	
42	163	559	B4	口部下部	粘土土器	台付蓋	10	反			7.4	濃褐色	密	良		
42	164	558	B4	口部下部	粘土土器	台付蓋	10	反			5.9	にぶい黄褐色	密	良	右部破合部厚4.3cm	
42	165	646	B4	口部下部	粘土土器	台付蓋	10	反			8.8	濃褐色	密	良	右部破合部厚5.6cm	
42	166	619	A3	口部下部	粘土土器	台付蓋	30	反			7.8	褐色	中や粗	良	右部破合部厚5.8cm	
42	167	604	C3	底面	粘土土器	台付蓋	20	反			5.5	灰褐色	良	良	右部破合部厚5.6cm	
42	168	616	A4	口部下部	粘土土器	台付蓋	10	反			4.8	濃褐色	中や粗	中や粗	右部破合部厚4.3cm	
42	169	256	4区	大溝	V層	粘土土器	台付蓋	10	反		4.0	明褐色	密	良		
42	170	477	B4	口部下部	粘土土器	蓋	10					灰褐色	密	中や粗	中や粗	
42	171	517	B4	口部下部	粘土土器	蓋	10					灰褐色	密	良		
42	172	604	C3	底面	粘土土器	蓋	10					明褐色	密	中や粗	中や粗	
42	173	255	4区	大溝	V層	粘土土器	蓋	10				褐色	密	良		
42	174	472	B4	口部下部	粘土土器	蓋	10					灰褐色	密	良		
42	175	742	C4	口部	粘土土器	蓋	10					褐色	密	良		
42	176	216	4区	大溝	V層	粘土土器	蓋	10				灰褐色	中や粗	中や粗		
42	177	742	C4	口部	粘土土器	蓋	10					褐色	中や粗	良		
42	178	765	B4	口部下部	粘土土器	蓋	10					にぶい褐色	密	良		
42	179	742	C4	口部	粘土土器	蓋	10					褐色	中や粗	良		
42	180	740	C4	口部	粘土土器	蓋	10					褐色	中や粗	良		
42	181	565	B4	口部下部	粘土土器	蓋	10					灰褐色	密	良		
42	182	748	C4	口部下部	粘土土器	蓋	10					灰褐色	中や粗	良		
42	183	721	B3	口部下部	粘土土器	蓋	10					褐色	密	良		
42	184	516	B4	口部下部	粘土土器	蓋	10					褐色	中や粗	中や粗		
42	185	426	4区	大溝	底面	粘土土器	蓋	10				灰褐色	中や粗	良		
42	186	786	B4	口部下部	粘土土器	蓋	10					褐色	中や粗	良		
42	187	346	1区	大溝	底面	粘土土器	蓋	10				灰褐色	密	良		
42	188	758	B4	口部下部	粘土土器	蓋	10					灰褐色	密	良		
42	189	584	B4	口部下部	粘土土器	蓋	10					褐色	密	良		
42	190	742	C4	口部	粘土土器	蓋	10					灰褐色	密	良		
42	191	463	B5	口部上縁	粘土土器	蓋	10					灰褐色	密	良		
42	192	801	B2	口部下部	粘土土器	蓋	10					灰褐色	密	中や粗	中や粗	
42	193	742	C4	口部	粘土土器	蓋	10					褐色	密	良		
42	194	646	B4	口部下部	粘土土器	蓋	10					灰褐色	密	良		
42	195	530	4区	大溝	底面	粘土土器	蓋	10				にぶい黄褐色	中や粗	良		
42	196	339	4区	大溝	底面	粘土土器	蓋	10				灰褐色	中や粗	良		
42	197	646	B4	口部下部	粘土土器	高坪	20	反	21.8			褐色	不明	不明		
42	198	521	B4	口部下部	粘土土器	高坪	20	反	21.4			灰褐色	密	良	三河産	
42	199	361	4区	大溝	V層	粘土土器	高坪	10	反		8.4	にぶい黄褐色	密	良	右部破合部厚5.4cm	
42	200	744	A3	口部下部	粘土土器	高坪	10	反			9.4	濃褐色	密	良	右部破合部厚4.6cm	
42	201	一紙		口部下部	粘土土器	高坪	10					にぶい黄褐色	密	良		
42	202	201-311	北庄(302)	口部下部	粘土土器	高坪	40	反			17.0	にぶい黄褐色	密	良	右部破合部厚5.4cm	
42	203	183	3区	大溝	口部上縁	鉢	10	反	34.7			黒	中や粗	良		
42	204	524	B4	口部下部	粘土土器	鉢	5	反	20.0			赤褐色	不明	不明	赤部、貼付文	
42	205	517	B4	口部下部	粘土土器	鉢	10	反	20.8	19.8		濃褐色	密	良		
42	206	517	B4	口部下部	粘土土器	片口鉢	10	反	14.0			灰褐色	密	良	赤部	
42	207	588	B4	口部下部	粘土土器	鉢	30	反	17	16.8		灰褐色	密	良		
42	208	338-339	4区	大溝	底面	鉢	30	反	13.0			灰褐色	密	良		
42	209	269	4区	大溝	底面	鉢	30	反	12.4			灰褐色	密	良		
42	210	804	C3	底面	粘土土器	鉢	30	反	12.6	11.9		褐色	中や粗	良		
42	211	316	4区	大溝	V層	粘土土器	鉢	10	反	12	9.9		灰褐色	密	良	
42	212	541	B4	口部下部	粘土土器	鉢	10					灰褐色	密	良		
42	213	531	B4	口部下部	粘土土器	鉢	10					黒	密	良		
42	214	336	4区	大溝	底面	粘土土器	鉢	10				灰褐色	中や粗	良	全面赤部	
42	215	712	(緑土中)	口部	粘土土器	手くわ鉢	20	反	7.8	8.2	4.6	褐色	密	良		
42	216	726	B3	口部下部	粘土土器	台盤状土製品	40	反	8	4.7	8.0	灰褐色	密	良		
42	217	316	4区	大溝	V層	粘土土器	台盤状土製品	40	反			にぶい黄褐色	密	良		
42	218	588	B4	口部下部	粘土土器	台盤状土製品	30	反				灰褐色	密	良	上縁厚6.0cm	
42	219	481	B4	口部下部	粘土土器	台盤状土製品	30	反				灰褐色	中や粗	良		
42	220	487	明成	口部上縁	粘土土器	台盤状土製品	30	反				灰褐色	密	中や粗	中や粗	
42	221	812	C3	底面	粘土土器	台盤状土製品	20	反				褐色	密	良		
42	222	471	B4	口部上縁	粘土土器	台盤状土製品	30	反	7.8	5.7	7.8	にぶい黄褐色	密	良		
42	223	680	B2	口部	粘土土器	台盤状土製品	30	反			6.1	褐色	密	良		
42	224	694	B4	口部下部	粘土土器	台盤状土製品	50	反	9	4.0	7.8	褐色	密	良		
42	225	680	北庄(302)	口部	粘土土器	蓋鉢	10	反	9	4.0	7.8	褐色	密	良		
42	226	685	北庄(303)	口部	粘土土器	蓋鉢	10					にぶい黄褐色	密	良		

木製品

品名	規格	製造地	通称・単位	年代	用途	種類	寸法			備考	備考	備考	備考
							長さ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)				
45	1	342	大洲1区	7c	地下用	基礎	4.8	8.8	1.1	〇	ツバサ板にサカヤキ	柱目	柱目
45	2	346	大洲4区	7c	地下用	基礎	25.0	15.2	5.5	〇	ニレ科ケヤキ属サカヤキ	半蔵板木材	柱目
45	3	391	大洲5区	7c	地下用	基礎	23.3	2.7	0.4	〇	〇	〇	柱目
45	4	329	大洲1区	7c	地下用	基礎	12.7	6.4	1.8	〇	ナスビ型	フナ科コナラ属コナラ属スギノ葉	柱目に近い
45	5	482	04	7c	地下用	基礎	11.9	4.4	2.5	〇	〇	フナ科コナラ属コナラ属スギノ葉	柱目
45	6	331	大洲4区	7c	地下用	基礎	11.9	4.0	3.0	〇	下地部	榎材	柱目
45	7	740	大洲1区	7c	地下用	基礎	11.0	4.4	2.8	〇	〇	△広葉樹	△広葉樹
45	8	343	大洲5区	7c	地下用	基礎	12.0	0.5	3.8	〇	有孔	△広葉樹	半蔵板木材
46	9	802	北沢(1)	05~0c	側面	基礎	34.6	6.8	4.2	〇	マツ科カラマツ属カラマツ	△広葉樹	△広葉樹
46	10	327	大洲4区	7c	地下用	基礎	14.8	6.8	2.0	〇	〇	〇	柱目
46	11	783	02	7c	側面	基礎	8.7	2.7	4.3	〇	〇	〇	柱目
46	12	355	大洲1区	7c	地下用	基礎	33.2	2.8	1.2	〇	〇	〇	柱目
46	13	332	大洲4区	7c	地下用	基礎	20.0	13.5	1.3	〇	〇	〇	柱目
46	14	351	大洲4区	7c	地下用	基礎	69.5	11.4	2.2	〇	〇	〇	柱目
46	15	406	大洲4区	7c	地下用	基礎	41.4	2.6	2.5	〇	〇	〇	柱目
46	16	302	大洲4区	7c	地下用	基礎	27.7	2.7	2.0	〇	〇	〇	柱目
46	17	340	大洲1区	7c	地下用	基礎	16.4	1.4	0.5	〇	〇	〇	柱目
46	18	793	北沢(1)	7c	〇上	加工木材	18.4	3.0	1.8	〇	〇	〇	柱目
46	19	92	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	33.9	6.5	1.5	〇	〇	〇	柱目
46	20	100	大洲5区	0c後~0c前	地下用	基礎	21.0	3.3	1.1	〇	〇	〇	柱目
46	21	189	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	12.3	9.9	2.7	〇	〇	〇	柱目
46	22	229	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	11.3	4.0	1.7	〇	〇	〇	柱目
46	23	190	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	40.9	5.9	4.8	〇	〇	〇	柱目
46	24	265	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	38.0	9.5	1.5	〇	〇	〇	柱目
46	25	359	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	12.3	9.9	2.7	〇	〇	〇	柱目
46	26	106	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	33.9	3.1	2.9	〇	〇	〇	柱目
46	27	177	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	10.8	2.0	0.6	〇	〇	〇	柱目
46	28	248	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	6.9	2.5	2.2	〇	〇	〇	柱目
46	29	240	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	18.4	13.2	0.7	〇	〇	〇	柱目
46	30	167	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	19.7	7.8	0.8	〇	〇	〇	柱目
46	31	244	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	15.5	8.2	0.9	〇	〇	〇	柱目
46	32	247	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	48.7	21.1	1.2	〇	〇	〇	柱目
46	33	221	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	21.8	10.0	0.3	〇	〇	〇	柱目
46	34	182	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	69.4	14.0	15.2	〇	〇	〇	柱目
46	35	215	大洲4区	10世紀	地下用	基礎	22.8	4.3	3.5	〇	〇	〇	柱目
46	36	132	大洲4区	12~13c	地下用	基礎	22.2	1.8	0.8	〇	〇	〇	柱目
46	37	141	大洲4区	12~13c	地下用	基礎	24.5	4.8	2.3	〇	〇	〇	柱目
46	38	139	大洲4区	12~13c	地下用	基礎	18.7	4.4	1.8	〇	〇	〇	柱目
46	39	117	大洲4区	12~13c	地下用	基礎	3.5	2.9	0.3	〇	〇	〇	柱目
46	40	184	大洲4区	10世紀	地下用	基礎	30.2	4.5	0.8	〇	〇	〇	柱目
46	41	146	大洲4区	12~13c	地下用	基礎	14.9	5.2	0.4	〇	〇	〇	柱目
46	42	113	大洲4区	10世紀	地下用	基礎	18.0	3.5	0.8	〇	〇	〇	柱目
46	43	193	大洲4区	10世紀	地下用	基礎	37.2	11.4	2.8	〇	〇	〇	柱目
46	44	133	大洲4区	12~13c	地下用	基礎	22.7	2.5	2.0	〇	〇	〇	柱目
46	45	185	大洲4区	10世紀	地下用	基礎	34.1	12.9	12.0	〇	〇	〇	柱目
46	46	74	04	0c後~0c前	地下用	基礎	23.2	14.8	3.5	〇	〇	〇	柱目
46	47	247	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	18.0	10.5	2.8	〇	〇	〇	柱目
46	48	590	04	0c後~0c前	地下用	基礎	37.2	2.4	3.0	〇	〇	〇	柱目
46	49	407	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	13.5	8.8	2.9	〇	〇	〇	柱目
46	50	778	04	0c後~0c前	地下用	基礎	18.3	8.9	0.8	〇	〇	〇	柱目
46	51	724	03	0c後~0c前	地下用	基礎	17.2	10.8	2.1	〇	〇	〇	柱目
46	52	631	04	0c後~0c前	地下用	基礎	48.7	6.8	1.7	〇	〇	〇	柱目
46	53	550	04	0c後~0c前	地下用	基礎	17.0	5.4	2.7	〇	〇	〇	柱目
46	54	525	04	0c後~0c前	地下用	基礎	17.1	17.3	4.1	〇	〇	〇	柱目
46	55	547	04	0c後~0c前	地下用	基礎	32.3	18.4	2.5	〇	〇	〇	柱目
46	56	555	04	0c後~0c前	地下用	基礎	40.8	20.8	2.8	〇	〇	〇	柱目
46	57	784	04	0c後~0c前	地下用	基礎	30.2	18.8	2.8	〇	〇	〇	柱目
46	58	771	04	0c後~0c前	地下用	基礎	26.5	20.1	3.7	〇	〇	〇	柱目
46	59	549	04	0c後~0c前	地下用	基礎	86.1	25.9	7.5	〇	〇	〇	柱目
46	60	775	04	0c後~0c前	地下用	基礎	44.0	20.8	4.8	〇	〇	〇	柱目
46	61	784	04	0c後~0c前	地下用	基礎	43.8	17.4	6.0	〇	〇	〇	柱目
46	62	587	04	0c後~0c前	地下用	基礎	28.8	18.6	6.5	〇	〇	〇	柱目
46	63	589	04	0c後~0c前	地下用	基礎	36.5	23.0	4.5	〇	〇	〇	柱目
46	64	573	04	0c後~0c前	地下用	基礎	34.0	8.2	2.5	〇	〇	〇	柱目
46	65	522	04	0c後~0c前	地下用	基礎	24.4	13.0	2.5	〇	〇	〇	柱目
46	66	596	04	0c後~0c前	地下用	基礎	48.3	7.4	6.2	〇	〇	〇	柱目
46	67	488	04	0c後~0c前	地下用	基礎	26.3	5.0	2.1	〇	〇	〇	柱目
46	68	641	04	0c後~0c前	地下用	基礎	15.3	4.3	4.3	〇	〇	〇	柱目
46	69	628	04	0c後~0c前	地下用	基礎	21.4	6.5	5.8	〇	〇	〇	柱目
46	70	487	04	0c後~0c前	地下用	基礎	12.8	10.5	5.5	〇	〇	〇	柱目
46	71	568	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	118.3	38.1	4.5	〇	〇	〇	柱目
46	72	782	04	0c後~0c前	地下用	基礎	80.9	2.0	1.8	〇	〇	〇	柱目
46	73	634	04	0c後~0c前	地下用	基礎	57.0	3.5	1.9	〇	〇	〇	柱目
46	74	623	04	0c後~0c前	地下用	基礎	16.7	3.9	2.8	〇	〇	〇	柱目
46	75	582	04	0c後~0c前	地下用	基礎	25.8	4.2	2.3	〇	〇	〇	柱目
46	76	704	04	0c後~0c前	地下用	基礎	13.1	4.1	2.9	〇	〇	〇	柱目
46	77	632	04	0c後~0c前	地下用	基礎	15.5	5.1	2.7	〇	〇	〇	柱目
46	78	777	04	0c後~0c前	地下用	基礎	18.0	5.4	1.0	〇	〇	〇	柱目
46	79	637	04	0c後~0c前	地下用	基礎	23.5	2.3	1.8	〇	〇	〇	柱目
46	80	134	04	0c後~0c前	地下用	基礎	28.0	15.0	2.3	〇	〇	〇	柱目
46	81	608	04	0c後~0c前	地下用	基礎	50.3	6.8	4.2	〇	〇	〇	柱目
46	82	751	04	0c後~0c前	地下用	基礎	71.3	18.8	7.8	〇	〇	〇	柱目
46	83	606	04	0c後~0c前	地下用	基礎	29.4	13.0	6.2	〇	〇	〇	柱目
46	84	750	04	0c後~0c前	地下用	基礎	27.8	7.8	4.8	〇	〇	〇	柱目
46	85	808	北沢(1)	0c後~0c前	地下用	基礎	179.6	14.7	11.5	〇	〇	〇	柱目
46	86	808-2	北沢(1)	0c後~0c前	地下用	基礎	53.9	14.3	8.5	〇	〇	〇	柱目
46	87	818	北沢(1)	0c後~0c前	地下用	基礎	138.0	1.0	5.5	〇	〇	〇	柱目
46	88	393	大洲4区	0c後~0c前	地下用	基礎	120.0	20.0	4.0	〇	〇	〇	柱目

木製品

国名	品名	取上地	通称・産地・地区	年代	層位	種類	寸法			備考	備考	材	木地
							長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)				
59	89	807	北沢(10)	弥生前期	D層上	漆木	450.0	9.5	9.7	弥生前期		△ヒノキ	古神材
59	90	780	84	弥生中期	D7層	柱礎	39.8	19.8	13.8	弥生中期		△広葉樹*	古神材
59	91	815	A4	弥生中期	D7層	柱礎	18.4	17.6	15.5	弥生中期の遺物		△広葉樹	古神材
60	82	773	84	弥生中期	D7層	有孔板	105.5	10.8	2.5	鉄銹板か再加工品		△ヒノキ	板目
60	93	529	84	弥生中期	D7層	有孔板	99.3	14.3	2.6			△ヒノキ	板目
60	94	548	84	弥生中期	D7層	有孔板	80.0	5.5	1.8			△ヒノキ	板目
61	95	602	84	弥生中期	D7層	有孔板	30.2	8.7	1.5			△ヒノキ	板目
61	96	603	84	弥生中期	D7層	有孔板	54.5	5.0	2.2			△ヒノキ	古神材
61	97	612	84	弥生中期	D7層	有孔板	24.2	18.0	3.0	コブ		△ヒノキ	板目
61	98	606	84	弥生中期	D7層	有孔板	16.8	4.2	1.2			△ヒノキ	板目
61	99	630	84	弥生中期	D7層	出納板	20.0	10.6	1.3			△ヒノキ	板目
61	100	524	84	弥生中期	D7層	有孔板	58.6	3.1	2.5	矢筈加工		△ヒノキ	板目
61	101	789	84	弥生中期	D7層	有孔板	22.8	2.8	2.1	板材		△ヒノキ	古神材
61	102	770	84	弥生中期	D7層	有孔板	20.8	2.8	2.4	下平建端		△ヒノキ	板目
62	103	510	84	弥生中期	D7層	有孔板	85.2	4.0	2.7			△ヒノキ	板目
62	104	617	84	弥生中期	D7層	有孔板	72.5	3.0	2.8			△ヒノキ	板目
62	105	639	84	弥生中期	D7層	有孔板	58.3	5.4	2.3	角縁		△ヒノキ	板目
62	106	611	84	弥生中期	D7層	有孔板	57.0	3.6	1.4	在倉庫*		△ヒノキ	板目
62	107	581	84	弥生中期	D7層	有孔板	68.5	2.5	2.5	板材		△ヒノキ	古神材
62	108	643	84	弥生中期	D7層	有孔板	11.4	2.7	2.8			△ヒノキ	古神材
62	109	604	84	弥生中期	D7層	板	6.6	2.5	1.3	遺棄品		△ヒノキ	板目
62	110	506	84	弥生中期	D7層	矢筈加工	76.8	2.3	1.5	遺棄品		△ヒノキ	古神材
63	111	637	84	弥生中期	D7層	矢筈加工	16.7	2.4	1.6			△広葉樹	みかん肌
63	112	638	84	弥生中期	D7層	矢筈加工	12.8	4.3	3.5			△ヒノキ	板目
63	113	633	84	弥生中期	D7層	加工板	28.6	6.3	2.6			△ヒノキ	板目
63	114	785	84	弥生中期	D7層	板	87.2	6.2	5.8	一連コブ		△ヒノキ	古神材
68	3	227	大溝4区	8世紀後半	IV下層	刀子納	8.8	1.8	1.4	○ 金葉樹に詳細		フツシ科多量本ジキ	古神材

材 種に△があるものは、正式な鑑定によるものではない。

石器

国名	品名	取上地	通称	層位	種類	年代	長さ (cm)	幅・厚さ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備考
64	1	713	5020	(遺人品)	石器	弥生中期後葉	3.4	1.9	0.8		チャーム	教育
64	2	333	大溝4区	地下層	磨製石斧	弥生中期後葉	7.8	6.1	3.8	305	燧石	刃部 太安粒方石
64	3	663	大溝3区	地下層	磨製石斧	弥生中期後葉	12.3	5.6	3.4	265	燧石	
64	4	275	大溝4区	V層	磨製石斧	弥生中期後葉	7.8	5.2	3.7	170	燧石	基部 太安粒方石
64	5	518	大溝4区	地下層	磨製石斧	弥生中期後葉	3.4	3.7	2.3	238	燧石	刃部 太安粒方石 被熱痕
64	6	646	84	弥生中期	磨製石斧	弥生中期後葉	5.8	2.7	3.0	220	燧石	杖状片方石
64	7	282	大溝4区	地上層	磨製石斧	弥生中期後葉	7.8	3.2	3.1	98	燧石	杖状片方石
64	8	664	5K3	(遺人品)	磨製石斧	弥生中期後葉	4.3	2.2	1.5	14.4	燧石	杖状片方石
64	9	276	大溝4区	地上層	磨製石斧	弥生中期後葉	5.6	3.0	1.1	36.4	燧石	棒状片方石
64	10	583	84	弥生中期	磨製石斧	弥生中期後葉	4.7	3.7	1.1	33	燧石	棒状片方石
64	11	780	32	石器	石斧	弥生中期後葉	6.1	4.0	1.4	56	砂岩	
65	12	715	C4	D7層	磨石	弥生中期後葉	8.5	4.4	3.8	250	砂岩	
65	13	640	84	D7層	磨石(磨石)	弥生中期後葉	15.0	5.5	4.9	900	砂岩	
65	14	781	84	D7層	磨石(磨石)	弥生中期後葉	7.8	6.2	2.8	165	チャーム	表面に被熱痕
65	15	588	84	D7層	石器	弥生中期後葉	15.1	14.4	4.8	1142	凝灰質砂岩	
65	16	618	84	D7層	分石	弥生中期後葉	25.8	16.1	4.9	2825	砂岩	表面下半部に被熱痕
65	17	563	84	D7層	分石	弥生中期後葉	8.0	8.4	3.2	240	凝灰質	
65	18	619	84	D7層	石器	弥生中期後葉	6.2	5.9	2.3	129	凝灰質(正石?)	
65	19	781	北沢	弥生前期	磨石	7世紀	7.7	5.4	1.5	101.3	凝灰質	
65	20	553	大溝1区	地下層	磨石	7世紀	11.7	7.0	2.8	300	砂岩	
65	21	681	5P21		磨石	7世紀	10.1	3.8	3.4	180	砂岩	

金属器

国名	品名	取上地	通称・グロブ	年代	通称名・グロブ	層位	長さ (cm)	中 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	備考
66	1	227	刀子(木納付)	8世紀後半～9世紀前半	大溝4区	IV下層	19.3	1.8	0.4	44	
66	2	136	鉄線	10世紀前半	大溝3区	IV上層	12.5	2.2	0.2	15.9	
66	3	490	鉄線	7世紀	84	南側倉下層	8.5	3.4	0.3	12.2	
66	4	194	鉄線	8世紀後半～9世紀前半	大溝2区	IV下層	15.8	1.3	0.6	14.0	
66	5	533	銅線	弥生後期	84	南側	4.1	1.30	0.4	4.9	
66	6	70	青銅連環	江戸	85	旧義土層	2.45	2.45	0.1	2.2	

↑年代は出土遺物の年代

文字資料(墨書土器)

国名	品名	取上地	通称	年代	通称名・グロブ	層位	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	備考
67	1	233	主倉川前	8世紀前半	大溝4区	V層	漢書	16.7	4.1			
67	2	240	山	8世紀後半	大溝4区	IV下層	漢書	14.8	3.3			
67	3	214	有	10世紀前半	大溝4区	IV上層	漢書	15.9	4.4			
67	4	188	又々	9世紀後半～10世紀前半	大溝2区	IV下層	漢書	16.4	4.9			
67	5	114	南乃	10世紀前半	大溝3区	IV下層	漢書	15.5	4.9			
67	6	186	南乃	10世紀	大溝3区	IV下層	漢書	14.0	3.7			
67	7	137-49	9	12世紀後半～13世紀前半	大溝4区	IV下層	漢書	—	—			

↑年代は遺物の年代

文字資料(木簡)

国名	品名	取上地	通称	年代	通称名・グロブ	層位	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	備考
47	19	32	鎌倉遺跡	8世紀～9世紀	大溝3区	IV下層	木簡	木簡	10.5	6.0	1.5	ヒノキ

版 圖

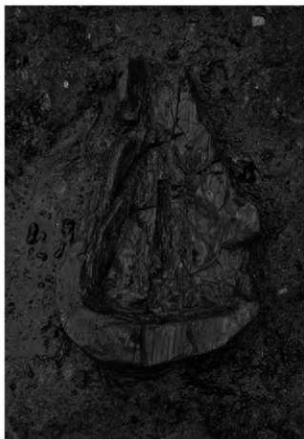


1 大溝Ⅶ層 完掘状況（北東から）



2 大溝Ⅶ層 東壁土層断面（北西から）

図版 2



1 VII層 木製壺鏡出土状況（北東から）(W2)



2 VII層 横櫛出土状況（北東から）(W1)



3 VII層 銅鑑出土状況（北から）(M5)



4 大溝V層 完掘状況（北東から）



1 V層 集石遺構検出状況（南西から）



2 V層 墨書土器「主政川前」出土状況（南から）(73)



3 IV層 木簡出土状況（南から）(W19)



4 IV層 墨書土器「山」出土状況（南西から）(85)



5 IV層 木簡出土状況（西から）(W19)



6 IV層 刀子出土状況（北から）(M1)

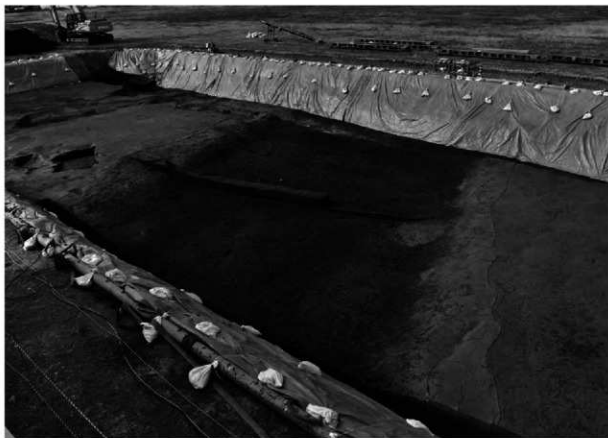


7 IV層 墨書土器「朋万」出土状況（西から）(95)

図版 4



1 大溝Ⅲ層 完掘状況（北から）



2 大溝Ⅲ層完掘状況（北東から）



1 大溝Ⅲ層 張出遺構検出状況（南東から）



2 D下層完掘状況（南から）

図版 6



1 東壁北半土層断面（南西から）



2 D下層 中期弥生土器高坏出土状況（北から）(23)



3 D下層 木製高杯出土状況（北から）(W80)



4 D下層 又鍬未成品出土状況（南から）(W67)



5 D下層 木鎌出土状況（東から）(W64)



1 南微高地 古代面完掘状況（南東から）



2 南微高地 弥生面完掘状況（南から）

図版 8



1 南拉張区 完掘状況（北東から）



2 G1坑 完掘状況（南から）



3 G2坑 完掘状況（南から）



4 G3坑 完掘状況（西から）



1 南比張区 SD26 後期弥生土器検出状況（北から）



2 南比張区 SD26 後期弥生土器検出状況（西から）



1 木簡 (M19)

裏



表



2 木簡 (M19) 墨書部赤外線写真



3 墨書土器 (73) 墨書部赤外線写真



73 (B1)



85 (B2)



93 (B3)



92 (B4)



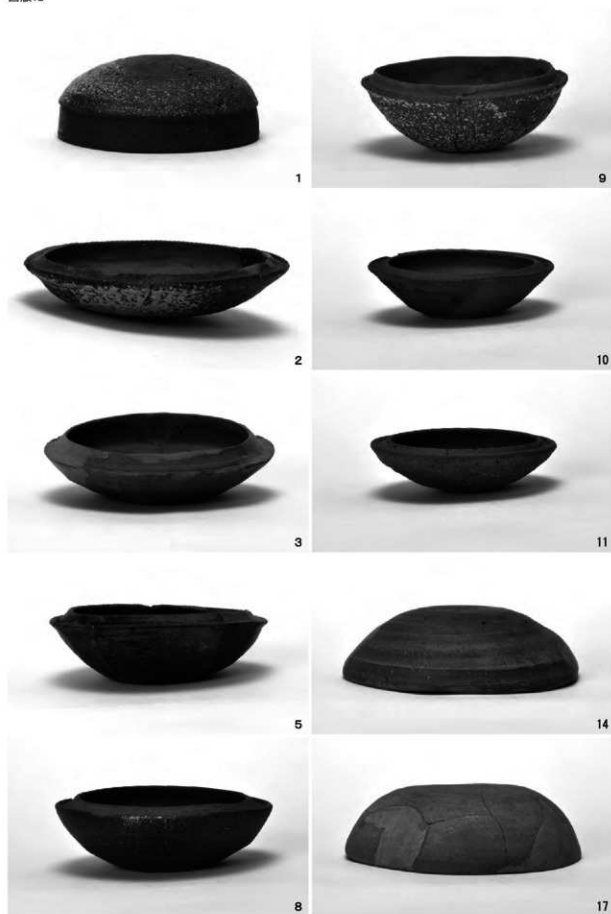
94 (B5)



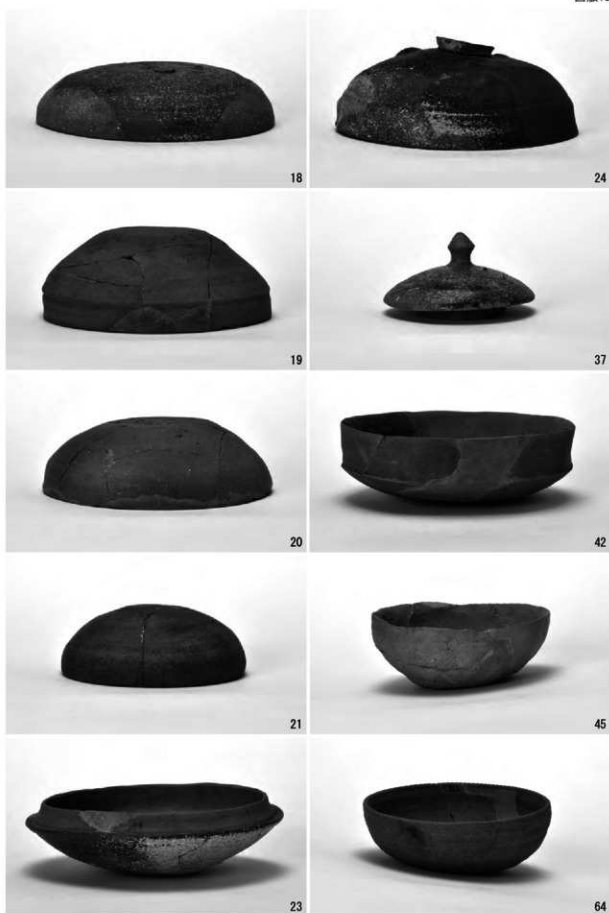
95 (B6)

墨書土器（墨書部分）

图版12



古代土器（1）



古代土器（2）

图版14



73



93



85



94



87



95



89



99



92



103



106

古代土器（3）



27



48



31



79



36



35

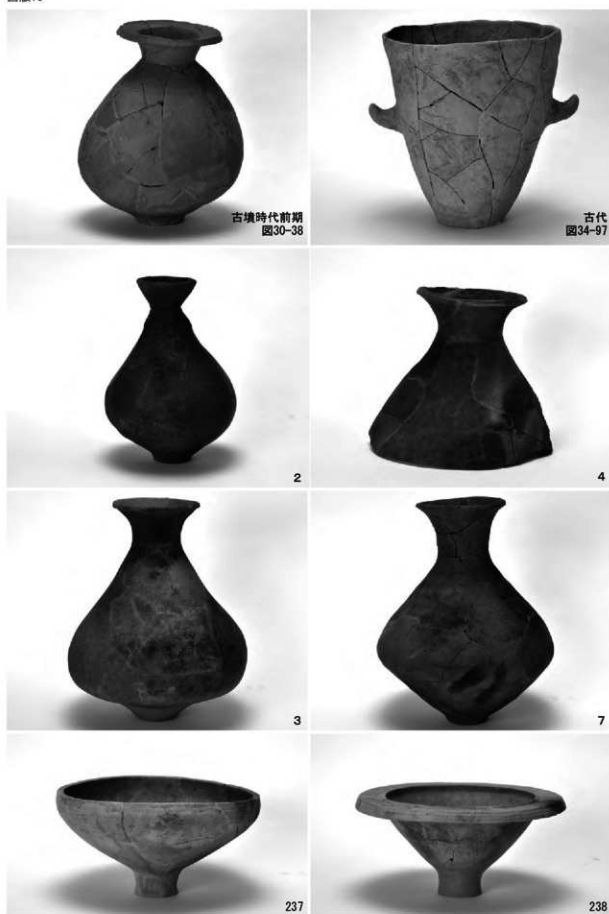


39

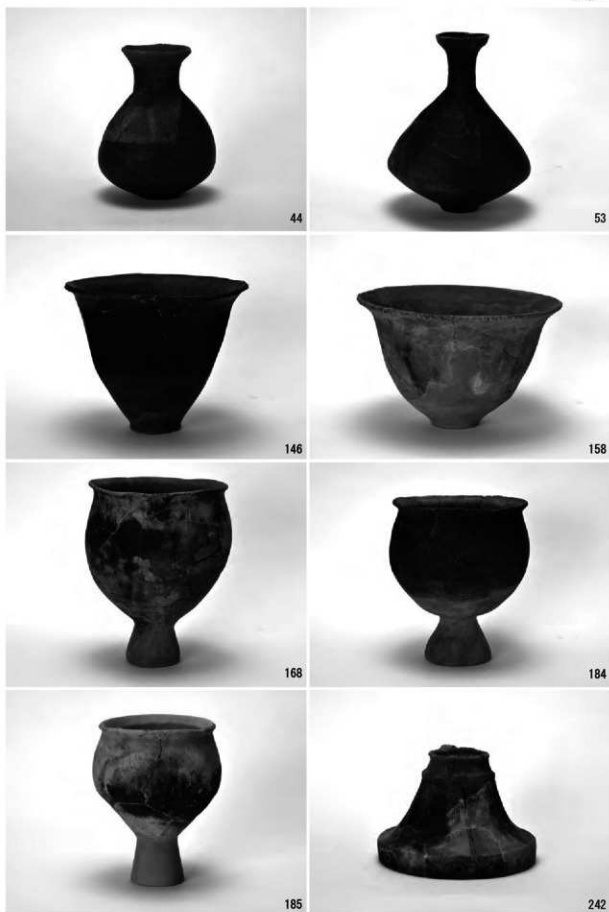


古墳時代中期
図30-51

圖版16



中期弥生土器（1）



中期弥生土器（2）

图版18



SD26出土土器



40



52



53



54

SD26 出土後期弥生土器 (1)



57



58



59



51



67



68

図版20



伊場大溝Ⅵ層・Ⅳ下層出土木製品



外面

2



内面

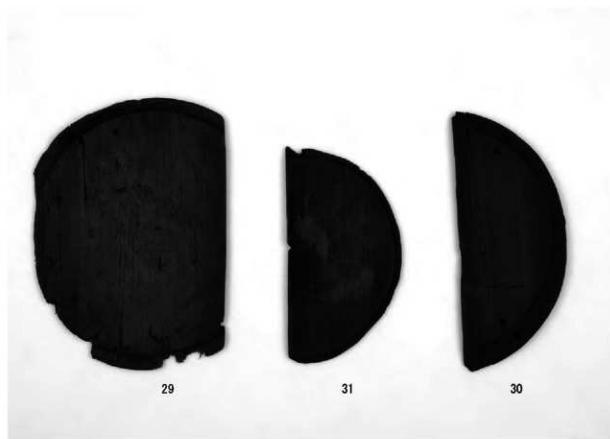
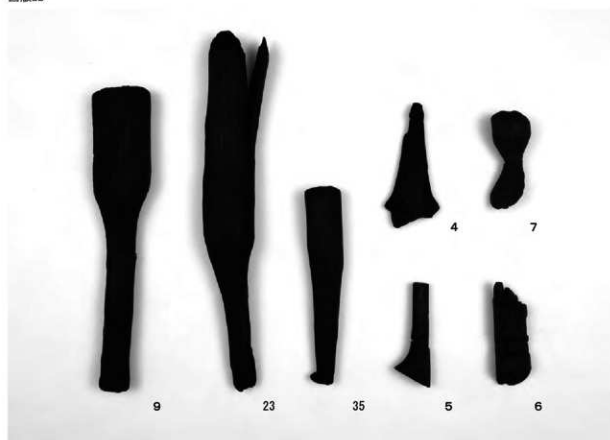
2

木製品（1）

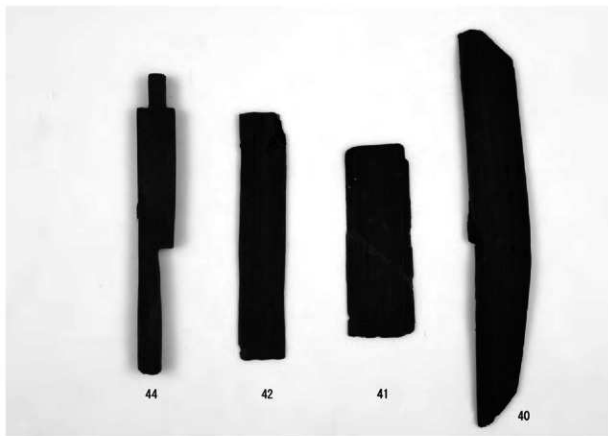
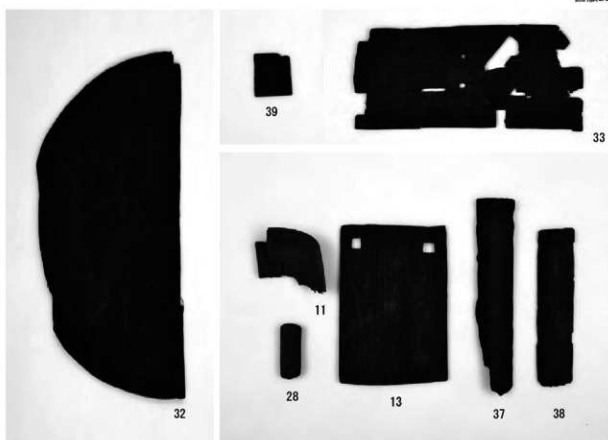


木製品（2）

図版22

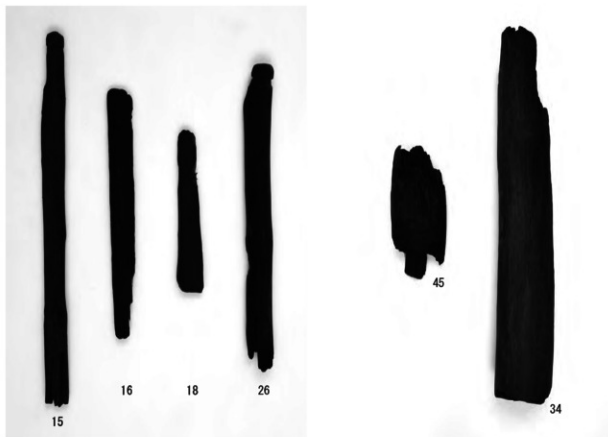
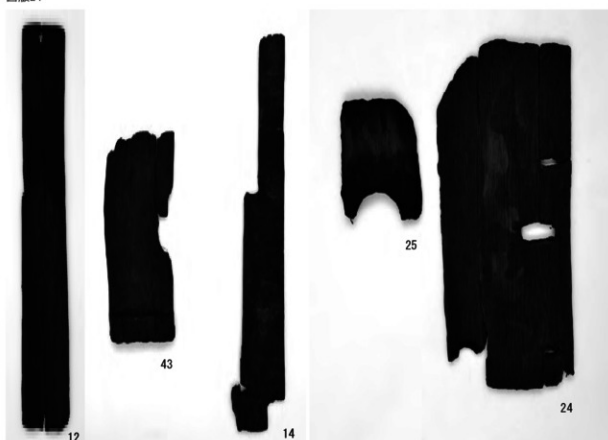


木製品 (3)



木製品（4）

図版24



木製品 (5)



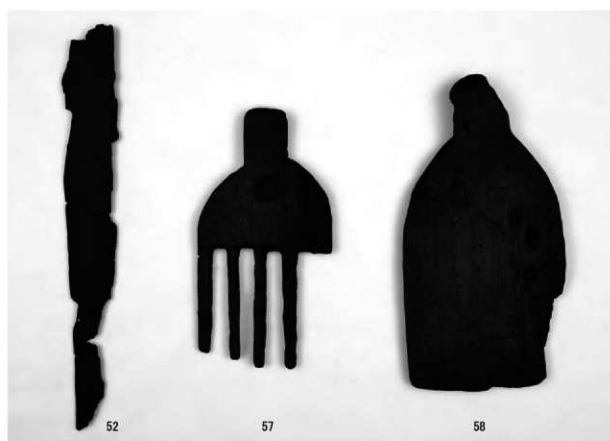
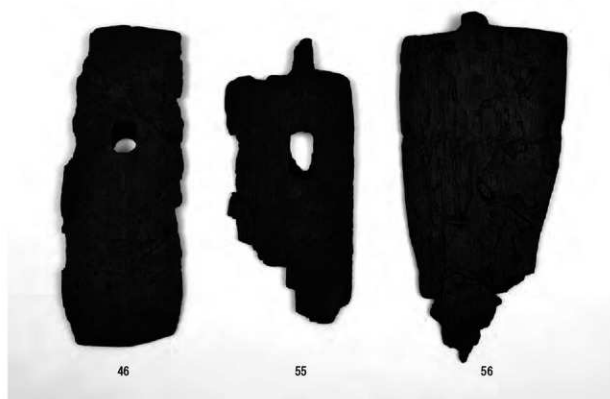
弥生時代木製品(1)



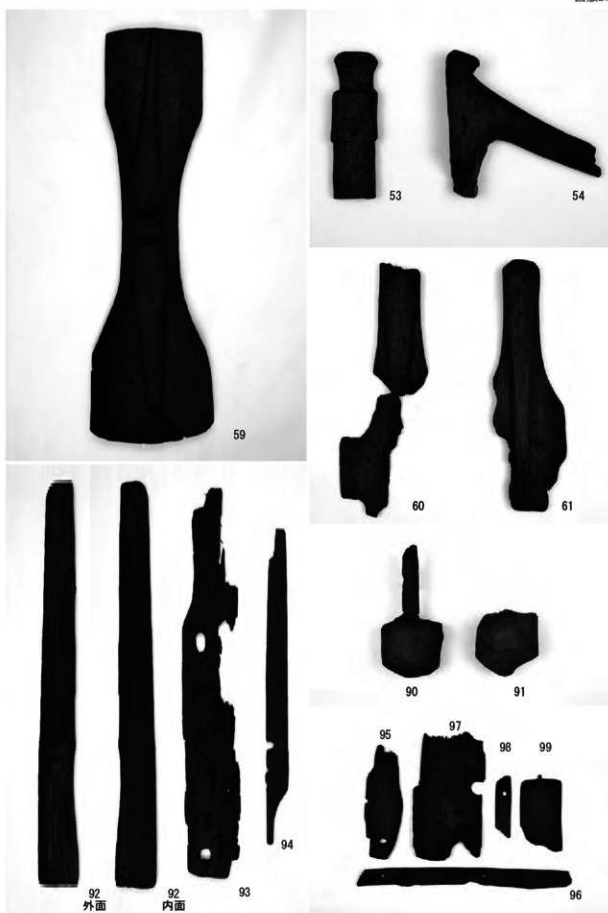
弥生時代木製品(2)

木製品(6)

図版26

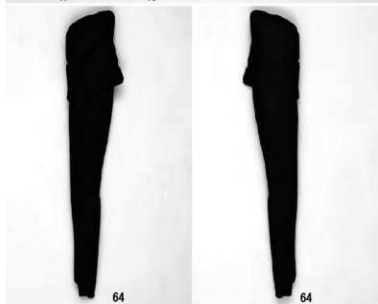
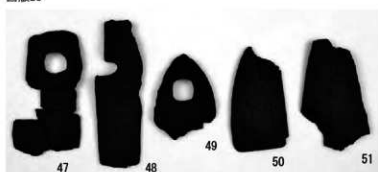


木製品（7）



木製品（8）

图版28





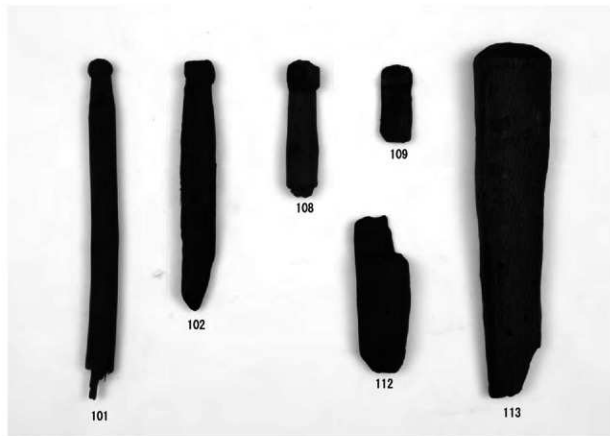
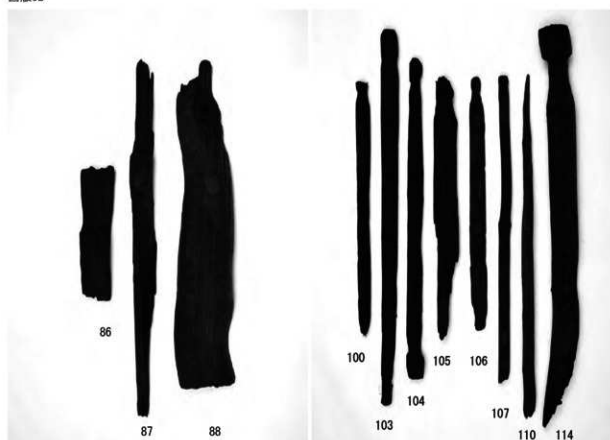
図版30



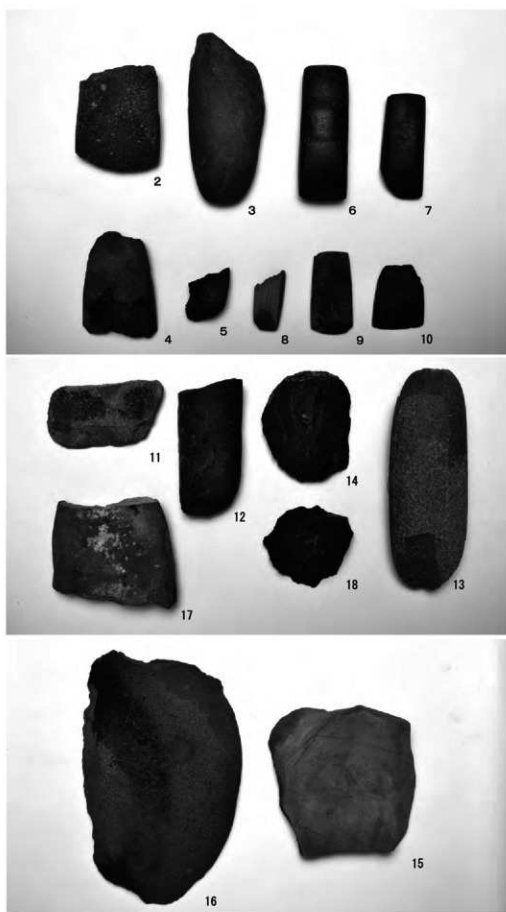
木製品 (11)



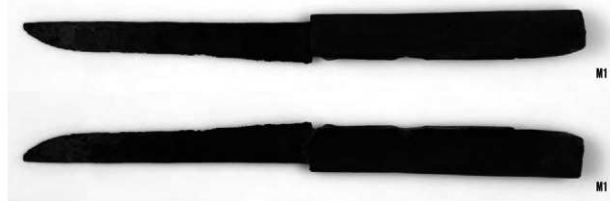
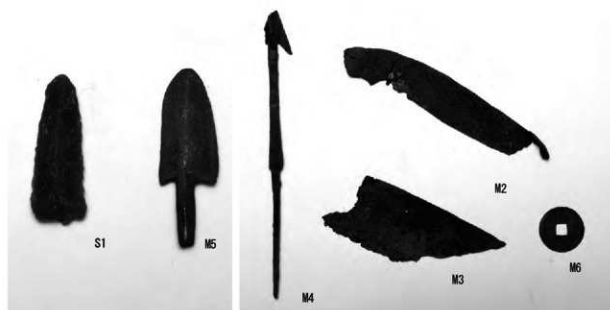
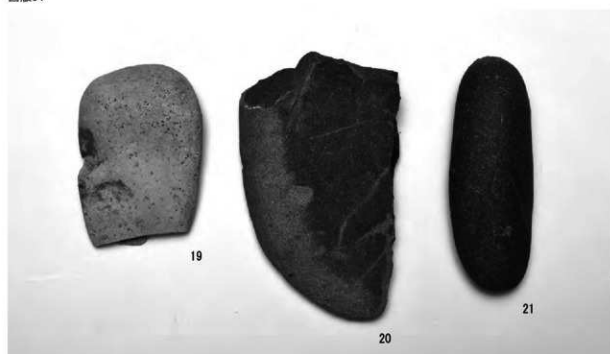
図版32



木製品 (13)



図版34



石製品・金属器

報告書抄録

書名（ふりがな）		梶子遺跡23次（かじこいせき23じ）						
編著者名		鈴木敏則、平井美典、小口友平、樋田泰之（編）、渡邊晃宏、鈴木京太郎						
編集・発行機関		浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課 〒430-8652 浜松市中区元城町103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (050) 3730-1391						
発行年月日		2020年3月27日						
みづの 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道庁番号					
かじこいせき 梶子遺跡	静岡県 浜松市 中区 西伊場町	22131	1-04-11	34度 41分 55秒	137度 42分 17秒	2018年11月26日 ～ 2020年3月27日	890㎡	宅地開発工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
梶子遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代		方形周溝墓 土坑・溝・小穴 大溝（埋没河川）		弥生土器 須恵器 土師器 灰釉陶器 山茶碗 石製品 木製品 金属器	伊場大溝（埋没河川）から木 ノ点、墨書土器7点など奈 良時代～鎌倉時代の大量の 遺物が出土。 伊場大溝形成前の堆積層か ら弥生時代中期後葉～後期 前半の土器、木製品、石製 品が出土。	
要約	弥生時代中期後葉の遺物包含層が調査区北側の埋没地において確認され、多くの弥生土器、木製品、石製品が発見された。当期の集落が近存すると考えられる。木製品は、木農具、狩猟漁具、容器類など豊富に出土した。木製品には鋸歯の未成品が多く、加工用の石斧も出土していることから、周辺で加工されていたことがうかがえる。また、木製高杯も注目される。弥生時代後期の遺構では、多くの弥生土器に伴う方形周溝墓1基が検出された。遺物では、弥生時代後期の銅剣が1点出土している。幅約14m、深さ約1.4mの伊場大溝においては、奈良時代の堆積層から、「筆墨納帳」とある木簡（文書箱の蓋）、「主政川前」・「山」などと記された墨書土器が発見され、数箇郡家城が、西に大きく広がっていたことが明らかとなった。このほか、大溝からは木製鏡、櫛、刀子、鉄銚、鎌などの木製品や金属器が発見された。 平安時代の遺物では、灰釉陶器に「有」、「朋万」、「又々」などの吉祥句を記した墨書土器が出土した。							

梶子遺跡 23 次

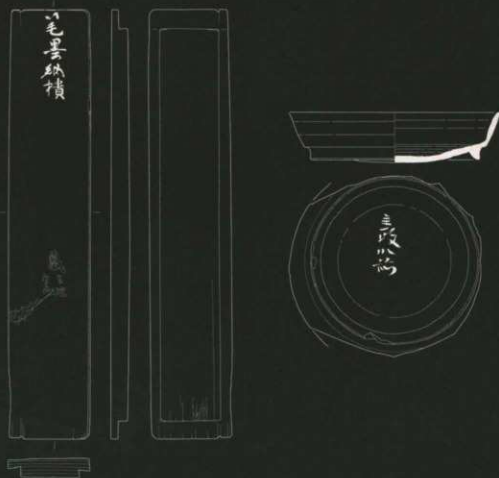
2020 年 3 月 27 日発行

編集・発行機関 浜松市教育委員会
(浜松市市民部文化財課が補助執行)
印刷 西濃印刷株式会社

Kajiko Site

The 23th Excavation Report

A Report of Archaeological Investigations
In Western Shizuoka, Japan



March, 2020

Hamamatsu Municipal Board of Education